

Oracle® Collaboration Suite

インストールおよび構成ガイド

リリース 2 (9.0.4.1) for HP-UX PA-RISC (64-bit) ,
Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)

部品番号 : B13936-01

2004 年 6 月

Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド, リリース 2 (9.0.4.1) for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)

部品番号 : B13936-01

原本名 : Oracle Collaboration Suite Installation and Configuration Guide, Release 2 (9.0.4.1) for hp-ux PA-RISC (64-bit), Linux x86, and Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)

原本部品番号 : B10874-03

原著者 : Don Gosselin, Janelle Simmons, Richard Strohm

原協力者 : Rajesh Bansal, Atilla Bodis, Steve Carbone, Will Chin, Jeremy Chone, Tanya Correia, Edsel delos Reyes, Saheli Dey, Vikas Dhamija, Craig Foch, Barbara Heninger, Eunhei Jang, Mark Kennedy, Cynthia Kibbe, George Kotsovolos, Ken Kwok, Charles Liuson, Stephanie MacLean, Matthew McKerley, Stefano Montero, Elizabeth Morgan, Bhupen Patel, Nagarajan Ragunathan, Shubha Rangarajan, Daniel Shih, Helen Slattery, Robb Surridge, Kenneth Tang, Jennifer Waywell, David Wood

Copyright © 2002, 2004, Oracle Corporation. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとし、著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることが使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

はじめに	xix
対象読者	xx
このマニュアルの構成	xx
関連ドキュメント	xxii
表記規則	xxiii

1 インストールの概要

Oracle Collaboration Suite CD パックの内容	1-2
Oracle9iAS Infrastructure のインストール	1-2
Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール	1-3
Oracle Collaboration Suite のインストール	1-3
Oracle Collaboration Suite Client	1-6
Oracle Cluster Manager	1-7
Oracle Voicemail & Fax	1-7
Oracle Collaboration Suite のドキュメント	1-7
インストール・ガイド	1-7
一般的なインストール手順	1-8
Oracle Calendar のインストール	1-9
Oracle Collaboration Suite の一部としての Oracle Calendar のインストール	1-9
スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール	1-10
Oracle Email のインストール	1-10
Oracle Files のインストール	1-11
Oracle Web Conferencing のインストール	1-11
Oracle Ultra Search のインストール	1-12
Oracle Voicemail & Fax のインストール	1-12

Oracle9iAS Wireless のインストール	1-12
最新情報	1-13

2 インストールの準備

ハードウェア要件	2-2
ランダム・アクセス・メモリーの確認	2-4
スワップ領域の確認	2-4
その他の Oracle Web Conferencing のハードウェア要件	2-5
オペレーティング・システムのバージョン	2-6
オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージ	2-7
オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージのダウンロード・サイト	2-8
インストールされたパッチの確認	2-8
Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用の必須の Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) パッチ	2-9
Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須の Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) パッチ	2-9
Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用の必須の HP-UX PA-RISC (64-bit) パッチ	2-10
Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須の HP-UX PA-RISC (64-bit) パッチ	2-11
Real Application Clusters をサポートするためのオペレーティング・システム要件	2-11
JRE パッチ	2-12
オペレーティング・システム・パッケージおよびフォント・パッケージ (Solaris のみ)	2-12
追加のオペレーティング・システム要件	2-13
その他の Oracle Web Conferencing のソフトウェア要件	2-13
多言語サポート	2-14
Oracle Calendar での多言語サポートの制限	2-14
オンライン・ドキュメントの要件	2-15
ポートの割当て	2-15
認証ソフトウェア	2-16
リリース・ノート	2-16
環境に対するインストール前のタスク	2-16
環境変数の設定	2-17
DISPLAY	2-17
HP-UX システムでの必須シンボリック・リンクの作成	2-18
ホスト名ファイルの構成	2-19
その他のホスト名ファイルの構成 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))	2-19

UNIX のアカウントおよびグループの作成	2-20
Oracle Universal Installer インベントリ用の UNIX グループ名	2-20
Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウント	2-21
権限が付与されたグループの UNIX グループ名	2-21
Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の Real Application Clusters	2-22
Real Application Clusters をインストールする場合に root ユーザーとして実行する手順	2-22
Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)、HP-UX PA-RISC (64-bit) または Linux x86 に Real Application Clusters をインストールする場合に root ユーザーと して実行する追加手順	2-24
Real Application Clusters をインストールする場合に oracle ユーザーとして 実行する手順	2-26
Linux x86 への Real Application Clusters のインストール	2-27
Oracle9iAS Infrastructure に対するカーネル・パラメータの構成	2-28
カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))	2-28
カーネル・パラメータ設定 (HP-UX PA-RISC (64-bit))	2-30
カーネル・パラメータ設定 (Linux x86)	2-32
Oracle Collaboration Suite に対するカーネル・パラメータの構成	2-35
カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))	2-35
カーネル・パラメータ設定 (HP-UX PA-RISC (64-bit))	2-37
カーネル・パラメータ設定 (Linux x86)	2-39
Oracle Collaboration Suite Information Storage に対するカーネル・パラメータの構成	2-42
カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))	2-42
カーネル・パラメータ設定 (HP-UX PA-RISC (64-bit))	2-44
カーネル・パラメータ設定 (Linux x86)	2-46
単一コンピュータへの Oracle Collaboration Suite のインストール	2-49

3 Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) へのアップグレード

Oracle インストールのバックアップ	3-3
Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) での多言語サポートの有効化	3-3
Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード	3-6
Oracle Collaboration Suite レベルでの Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード	3-6
Oracle9iAS Infrastructure での Oracle Email のアップグレード	3-9
Oracle9iAS Infrastructure での Oracle9iAS Wireless のアップグレード	3-11
Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのアップグレード	3-11
Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のアップグレード	3-12
Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier のインストール	3-12
アップグレード前のタスク	3-13

Oracle Calendar アップグレード前のタスク	3-13
Oracle Email アップグレード前のタスク	3-14
Oracle Ultra Search アップグレード前のタスク	3-14
Oracle Voicemail & Fax アップグレード前のタスク	3-15
Oracle9iAS Wireless アップグレード前のタスク	3-15
Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant	3-16
ocsua.xml ファイル	3-17
ocsua.properties ファイル	3-17
Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant の実行	3-18
アップグレード後のタスク	3-25
Oracle Calendar の共存	3-26
Oracle Email アップグレード後のタスク	3-30
Oracle Files アップグレード後のタスク	3-31
Oracle Workflow パラメータの更新	3-32
手動による IFS_TEXT 索引の同期化	3-32
Oracle Ultra Search アップグレード後のタスク	3-32
Oracle Web Agent パッケージのアップグレード後のタスク	3-33
Oracle Voicemail & Fax のアップグレード	3-34
Oracle9iAS Wireless のアップグレード	3-35
Oracle Collaboration Suite Web Client のアップグレード	3-36
webclient.properties ファイル内のポート番号の再設定	3-37
コンポーネントの URL の構成	3-38
コマンドラインからの Web Client Configuration Assistant の実行	3-39
Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のインスタンスの削除	3-39
Oracle Collaboration Suite への CorporateTime Server 5.4 のアップグレード	3-40
Oracle Calendar スタンドアロン外部から Oracle Collaboration Suite へのアップグレード	3-41
共存を伴うアップグレード	3-41
共存を伴わないアップグレード	3-42
Oracle Calendar スタンドアロン内部から Oracle Collaboration Suite へのアップグレード	3-43
Oracle Collaboration Suite 以外の Infrastructure のアップグレード	3-44

4 Oracle Collaboration Suite の配置方法

Oracle9iAS Infrastructure の配置	4-2
Oracle Collaboration Suite Information Storage の配置	4-2
Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の配置	4-3
Oracle Calendar の配置	4-4

Oracle Email の配置	4-6
Oracle Files の配置	4-6
要件の確認および配置タイプの選択	4-6
Oracle Ultra Search の配置	4-7
十分な RAM	4-8
十分なディスク領域	4-8
ソフトウェア要件	4-9
パフォーマンスの要因およびサイズ指定のガイドライン	4-9
Oracle Voicemail & Fax の配置	4-10
Oracle Web Conferencing の配置	4-11
Oracle9iAS Wireless の配置	4-12
Oracle9iAS Wireless の高可用性	4-12
配置についての推奨項目および考慮事項	4-15
Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の削除	4-16

5 インストールの開始

CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール	5-2
CD-ROM のマウント (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))	5-2
Volume Management ソフトウェアを使用した CD-ROM のマウント (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))	5-3
CD-ROM の手動マウント (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))	5-4
CD-ROM のマウント (HP-UX PA-RISC (64-bit))	5-5
CD-ROM のマウント (Linux x86)	5-6
自動マウント・ソフトウェアを使用した CD-ROM のマウント (Linux x86)	5-6
CD-ROM の手動マウント (Linux x86)	5-7
ハード・ドライブからの Oracle コンポーネントのインストール	5-8
Oracle Universal Installer の概要	5-9
Oracle Universal Installer 前提条件の確認	5-9
oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル	5-10
Oracle Universal Installer を使用した追加コンポーネントのインストール	5-11
Oracle Universal Installer の起動	5-12

6 Oracle Collaboration Suite のインストール

Oracle9iAS Infrastructure のインストール	6-2
Oracle9iAS Infrastructure その他のドキュメント	6-4
Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのインストール	6-4

既存の Oracle ホームへのデータベースのインストール	6-5
Oracle Internet Directory への Oracle Collaboration Suite Information Storage の登録	6-6
Oracle Net Configuration Assistant の実行	6-6
Database Configuration Assistant の実行	6-7
Oracle Internet Directory の構成の確認	6-8
Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール	6-8
Oracle Web Conferencing Document Conversion Server および Voice Conversion Server の インストール	6-14
Oracle Collaboration Suite の統合 Web クライアントのインストール	6-14
コマンドラインを使用した Web クライアント・インストーラの起動	6-15
Middle-Tier での mod_osso を伴った HTTP の手動設定	6-16
設定の確認	6-17
mod_osso を伴った https の設定	6-18
その他のドキュメント	6-19

7 Oracle Voicemail & Fax のインストールおよび構成

インストール前のチェックリスト	7-2
インストール要件	7-2
Oracle Voicemail & Fax Telephony Server のインストール	7-3
Oracle9iAS コアのインストール	7-3
Oracle Voicemail & Fax コードのインストール	7-4
Oracle Voicemail & Fax の Information Store データベース・アカウント	7-5
中間層での Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant の実行	7-6
Oracle9iAS コアのサイレント・インストール	7-7
Oracle Voicemail & Fax Telephony Server の追加インストール	7-7
Oracle Collaboration Suite への Information Storage データベースの追加インストール	7-8

8 サイレント・インストールおよび非対話型インストール

非対話型インストールの概要	8-2
サイレント・インストール	8-2
非対話型インストール	8-3
インストール要件	8-3
サイレント・インストールおよび非対話型インストール用のファイルの作成	8-3
oraInst.loc ファイルの作成	8-4
emtab ファイルの作成	8-4
oratab ファイルの作成	8-4

レスポンス・ファイルの選択	8-5
レスポンス・ファイルの編集	8-6
レスポンス・ファイルの指定	8-6
root.sh スクリプトの実行	8-7
root.sh およびサイレント・インストール	8-7
Oracle HTTP Server	8-8
異なるポート上での Oracle HTTP Server の使用	8-8
root.sh および非対話型インストール	8-8
エラー処理	8-9
削除	8-9
非対話型モードでの Configuration Assistant の使用	8-9
レスポンス・ファイルのエラー処理	8-10

9 Oracle Collaboration Suite コンポーネントの削除

削除の概要	9-2
Oracle コンポーネントの削除の準備	9-2
Oracle コンポーネントの削除	9-3

10 Oracle Calendar の構成

Oracle Calendar Configuration Assistant の手動実行	10-2
Oracle Calendar Server の構成	10-3
ポート値の確認	10-4
Oracle Calendar Administrator を開く	10-4
リソース承認の設定	10-4
ワイヤレス機能の有効化	10-5
LD_LIBRARY_PATH および SHLIB_PATH の処理	10-5
Oracle Calendar アプリケーション・システムの起動および構成	10-6
Oracle Calendar アプリケーション・システムのステータスの確認	10-6
Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成	10-6
Oracle Calendar リソース・キットのインストール	10-7
Oracle Calendar の複数インスタンスでの orclguest アカウントのプロビジョニング	10-8
Oracle Calendar の電子メール配信の構成	10-8
Oracle Calendar および Oracle Email が同じホスト上に存在する場合のイベント通知の構成	10-9
sendmail.cf ファイルの編集	10-9
Unified Messaging インバウンド SMTP サービスの再初期化	10-10

Oracle Calendar および Oracle Email が個別のホスト上に存在する場合のイベント通知の構成	10-11
メール・ドメイン名の設定	10-12

11 Oracle Email の構成

構成前のチェックリスト	11-2
Information Store データベース上の Java および Oracle Text オプションの確認	11-2
Oracle9iAS Infrastructure および Application Server の確認および起動	11-3
Oracle Internet Directory へのデータベースの登録	11-3
Oracle Net Configuration Assistant の実行	11-3
Database Configuration Assistant の実行	11-4
Information Storage データベースのデータベース init.ora パラメータの設定	11-4
Information Storage 表領域およびスキーマの作成	11-5
Oracle Email の構成	11-5
Oracle Email Information Storage データベースの構成	11-6
umbackend コンポーネントのインストール	11-8
umbackend の SQL スクリプトのロード	11-9
Oracle Email Middle-Tier の構成	11-9
管理ツールの使用	11-10
Oracle Enterprise Manager	11-10
Oracle Email Webmail クライアント	11-11
Oracle Email の起動、停止および再初期化	11-12
Information Store 用の Oracle Net Listener の確認および起動	11-12
Middle-Tier 用のリスナーの確認および起動	11-12
Oracle Email システムの起動	11-13
Oracle Email システムの停止	11-14
Oracle Email システムの再初期化	11-14
パブリック・ユーザーの作成	11-14
Oracle Email の手動構成	11-15
Webmail クライアントの手動構成	11-15
Oracle Email Information Storage データベースの手動構成	11-15
Oracle Email Middle-Tier の手動構成	11-18

12 Oracle Files の構成

Oracle Files 構成プロセスの概要	12-2
プロトコルの推奨構成	12-2
Oracle Files の構成前のタスク	12-4
Oracle Files での Oracle Database 10g の使用	12-6
カスタム表領域の作成（推奨）	12-7
Real Applications Clusters データベースを使用するための Oracle Files の設定（オプション） ...	12-9
Oracle Files の構成	12-10
新しい Oracle Files ドメインの作成	12-11
既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定	12-30
Oracle Files の非対話型構成	12-34
Oracle Files ランタイムの設定	12-35
すべての必要なプロセスの起動	12-35
Oracle Files のサブスクライバの作成	12-37
Oracle Internet Directory でのユーザーの作成	12-39
プロトコル・サーバーへのアクセス	12-40
基本操作の検証	12-41
構成後の追加タスク	12-42
ネット・サービス名の構成	12-42
Oracle Files と Oracle Workflow の統合（オプション）	12-43
Oracle Workflow の構成	12-44
Oracle Workflow と Oracle Files スキーマの統合	12-46
Oracle Workflow スキーマの追加言語の有効化（オプション）	12-49
Real Application Clusters データベースとともに Oracle Files を使用するための 構成後の手順（オプション）	12-51
Oracle Files Web UI への「Portal へ戻る」リンクの追加（必須）	12-51
Oracle Internet Directory の問合せ返送制限の編集（オプション）	12-52
Oracle Files および検索ポートレットの登録（必須）	12-53

13 検索機能の構成

デフォルトの Oracle Ultra Search インスタンス	13-2
Oracle Ultra Search データベース・ユーザーの作成	13-2
Oracle Ultra Search クローラの構成	13-3
Web ソースの作成	13-4
スケジュールの作成	13-5
Oracle Ultra Search クローラのスケジュール	13-5

Oracle Ultra Search プロパティの設定	13-6
電子メールを検索可能に設定	13-6
電子メールの索引付け	13-7
HouseKeeping プロセスの構成	13-7
OC4J_iFS_files の再起動	13-8
Oracle Ultra Search のテスト	13-9

14 Oracle Web Conferencing の構成

Oracle Web Conferencing 配置の概要	14-2
Web Conferencing プロセスの手動による起動および停止	14-4
Web Conferencing 用 Oracle9iAS コンポーネントの起動および停止	14-4
Oracle Real-Time Collaboration インスタンスの起動および停止	14-5
Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントの構成	14-6

A Java Access Bridge のインストール

JRE 1.3.1 に対する設定	A-2
JRE 1.1.8 に対する設定	A-2
Oracle Universal Installer に対する設定	A-2
インストール済 Oracle コンポーネントの設定	A-3
Java Access Bridge の設定	A-5

B インストール・チェックリスト

Oracle9iAS Infrastructure のインストール・チェックリスト	B-2
Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール・チェックリスト	B-3
Oracle Collaboration Suite のインストール・チェックリスト	B-4
Oracle Files の構成チェックリスト	B-5

C トラブルシューティング

Oracle Collaboration Suite Web Client 構成のトラブルシューティング	C-2
Oracle Files のインストールのトラブルシューティング	C-3
データベース・オブジェクトの作成エラー	C-5
データベースに関連するインストール・エラー・メッセージ	C-5
データベース・リソースが不十分なために発生する Oracle Files サーバー障害	C-5
Oracle Text が正しく動作しているかどうかの判断	C-5

\$ORACLE_HOME/ifs/files/log/domain_name/node_name.log に書き込まれる 「Out of database cursors」メッセージ	C-8
低速なサーバー	C-8
プロトコル・サーバーへの接続不可	C-8
「503 Service Unavailable」メッセージ	C-9
Oracle Files Configuration Assistant と RAC データベースとの Thin ドライバを使用した 接続の確立不可	C-9
Oracle Files Configuration Assistant の「session_max_open_files must be set to 50」 エラー・メッセージ	C-10
UNIX でのイメージの破損	C-10
Real Application Clusters のトラブルシューティング	C-11

D デフォルトのポート番号およびポート範囲

ポート割当ての概要	D-2
コンポーネントのポート番号	D-2
Oracle9iAS Infrastructure のポート使用	D-3
Oracle のポート使用 (コンポーネント別)	D-3
Oracle のポート使用 (ポート番号別)	D-7

E Windows サービス

Windows サービスへのアクセス	E-2
Oracle Collaboration Suite インストール時のサービス	E-2
Oracle Voicemail & Fax インストール時のサービス	E-4

F スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール

システム要件	F-2
共通要件	F-2
Oracle Calendar Server の要件	F-2
Oracle Calendar アプリケーション・システムの要件	F-3
インストール前	F-4
ディレクトリ・サーバーの設定	F-4
Sun ONE Directory Server	F-5
OpenLDAP	F-5
Syntegra Aphelion Directory Server	F-6
Critical Path InJoin Directory Server	F-6

ディレクトリ・サーバーの用語	F-10
Oracle Calendar アプリケーション・システムおよびサーバーの個別インストールの計画	F-10
Oracle Calendar アプリケーション・システムの考慮事項	F-11
インストール	F-11
Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール	F-11
Oracle Calendar Server のみのインストール	F-14
Oracle Calendar アプリケーション・システムのみのインストール	F-14
Oracle Calendar の複数インスタンスのインストール	F-14
Oracle Calendar Configuration Assistant の手動実行	F-15
アップグレード	F-16
Server のアップグレード	F-17
サポートされる自動アップグレード・パス	F-17
サポートされる手動アップグレード・パス	F-17
共存	F-18
サーバーのアップグレード	F-19
Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード	F-20
開始する前に	F-21
Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード	F-21
インストール後の構成	F-22
Web サーバーの構成	F-22
ディレクトリ・サーバーの構成	F-23
Sun ONE Directory Server	F-23
OpenLDAP	F-23
Syntegra Aphelion Directory Server	F-23
Critical Path InJoin Directory Server	F-24
Oracle Calendar Server の構成	F-24
Oracle Calendar Server の起動および停止	F-25
ポート値の確認	F-25
Oracle Calendar Administrator を開いて構成	F-25
リソース承認の設定	F-26
LD_LIBRARY_PATH および SHLIB_PATH の処理	F-27
セキュリティ・メカニズムの処理	F-27
Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成	F-27
Oracle Calendar アプリケーション・システムのステータスの確認	F-27
Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成	F-28
Oracle Calendar の電子メール配信の構成	F-29
Oracle Calendar Deinstallation	F-29

一般的な問題と対処方法	F-30
Server の問題	F-30
インストール	F-30
再インストール	F-30
共存およびアップグレード	F-30
代理	F-32
その他	F-32
Oracle Calendar アプリケーション・システムの問題	F-33
インストール	F-33
アップグレード	F-33

G Oracle Collaboration Suite のクライアントのインストール

Oracle Connector for Outlook	G-2
Oracle Connector for Outlook のシステム要件	G-2
Oracle Connector for Outlook のインストール前の要件	G-4
Oracle Connector for Outlook のインストール	G-4
Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール	G-4
Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成ファイル・ パラメータ	G-5
Microsoft Outlook のアップグレード	G-14
Oracle Connector for Outlook の削除	G-14
Oracle Calendar Desktop Client for Windows	G-15
Oracle Calendar Desktop Client for Windows のシステム要件	G-15
Oracle Calendar Desktop Client for Windows のインストール	G-16
Oracle Calendar Desktop Client for Windows のサイレント・インストール	G-16
サイレント・インストールの実行	G-16
Oracle Calendar 環境設定ファイルのカスタマイズ	G-18
Oracle Calendar Desktop Client for Windows の削除	G-18
Oracle Calendar Desktop Client for Linux	G-18
Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のシステム要件	G-19
Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のインストール	G-19
Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のサイレント・インストール	G-20
Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 の削除	G-20
Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh	G-20
Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のシステム要件	G-20
Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のインストール	G-21

Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh の削除	G-22
Oracle Calendar Desktop Client for Solaris	G-24
Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) の システム要件	G-24
Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) の インストール	G-25
Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) の削除	G-25
Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) の サイレント・インストール	G-25
Oracle Calendar Sync for Palm for Windows	G-26
Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のシステム要件	G-26
Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のインストール	G-27
Oracle Calendar Sync for Palm for Windows の削除	G-27
Oracle Calendar Sync for Pocket PC	G-27
Oracle Calendar Sync for Pocket PC のシステム要件	G-28
Oracle Calendar Sync for Pocket PC のインストール	G-29
Oracle Calendar Sync for Pocket PC の削除	G-30
Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh	G-30
Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件	G-30
以前のバージョンへのインストールの準備	G-31
Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストール	G-32
Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストールのトラブルシューティング	G-33
Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh の削除	G-34
Oracle FileSync	G-34
Oracle FileSync for Windows のインストール	G-34
Oracle FileSync for Windows の削除	G-35

用語集

索引

表目次

2-1	Oracle Collaboration Suite ハードウェア要件	2-2
2-2	スワップ領域の確認	2-4
2-3	T1 を使用した音声会議のサイズ指定に関する推奨事項	2-5
2-4	E1 を使用した音声会議のサイズ指定に関する推奨事項	2-5
2-5	オペレーティング・システムのバージョンおよび要件	2-6
2-6	オペレーティング・システムのパッチのダウンロード・サイト	2-8
2-7	インストールされたパッチを確認するコマンド	2-8
2-8	Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite	2-9
2-9	Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用のパッチおよび パッケージ	2-10
2-10	Real Application Clusters 用のパッチおよびパッケージ	2-11
2-11	JRE パッチ	2-12
2-12	Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) に必要なオペレーティング・ システム・パッケージおよびフォント・パッケージ	2-12
2-13	追加のオペレーティング・システム要件	2-13
2-14	オンライン・ドキュメントの要件	2-15
2-15	環境変数の設定および解除	2-17
2-16	環境変数 DISPLAY のコマンド	2-18
2-17	Oracle アカウントのプロパティ	2-21
2-18	OSOPER および OSDBA グループの権限	2-22
2-19	Cluster Membership Monitor が実行されていることを確認するためのコマンド	2-26
2-20	カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))	2-29
2-21	カーネル・パラメータ設定 (HP-UX PA-RISC (64-bit))	2-30
2-22	カーネル・パラメータ設定 (Linux x86)	2-34
2-23	カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))	2-36
2-24	カーネル・パラメータ設定 (HP-UX PA-RISC (64-bit))	2-37
2-25	カーネル・パラメータ設定 (Linux x86)	2-41
2-26	カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))	2-43
2-27	カーネル・パラメータ設定 (HP-UX PA-RISC (64-bit))	2-44
2-28	カーネル・パラメータ設定 (Linux x86)	2-48
3-1	Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) でサポートされている言語	3-5
3-2	Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に対する必須 Oracle Files 情報	3-19
3-3	Oracle Files が Oracle Workflow と統合される場合の Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に対する必須 Oracle Files 情報	3-19
3-4	Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に対する必須 Oracle Ultra Search 情報	3-20
3-5	ファイルおよびターゲット・ディレクトリのアップグレード	3-44
4-1	小企業、中企業および大企業のパフォーマンスの要因	4-9
4-2	小企業、中企業および大企業向けのサイズ指定のガイドライン	4-10
5-1	Oracle Universal Installer の前提条件の自動確認	5-9
5-2	oraInst.loc の場所	5-11
8-1	oratab、emtab および oraInst.loc ファイルの場所	8-3
8-2	レスポンス・ファイル	8-5
12-1	Oracle Files のオプションの構成前のタスク	12-4

12-2	Oracle Files の構成および実行に関する重要情報	12-5
12-3	必須データベース・パラメータ	12-6
12-4	Oracle Files のカスタム表領域定義	12-8
12-5	Configuration Assistant のオプション	12-10
12-6	予想される基本機能	12-41
12-7	Oracle Workflow Configuration Assistant のオプション	12-44
12-8	ifswfsetup.properties ファイルの値	12-47
12-9	言語コード	12-50
14-1	タスクのチェックリスト	14-6
A-1	サブディレクトリへのファイルのコピー	A-4
B-1	Oracle9iAS Infrastructure のインストール情報	B-2
B-2	Information Storage のインストール情報	B-3
B-3	Oracle Collaboration Suite のインストール情報	B-4
B-4	Oracle Files の構成情報	B-5
D-1	Oracle のポート使用（コンポーネント別）	D-3
D-2	Oracle のポート使用（ポート番号別）	D-7
E-1	Oracle Collaboration Suite の Windows サービス	E-2
E-2	Oracle Voicemail & Fax の Windows サービス	E-4
F-1	Calendar Server/ ディレクトリ・サーバーの用語	F-10
G-1	Oracle Connector for Outlook のシステム要件	G-2
G-2	Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ	G-6
G-3	Oracle Calendar Desktop Client for Windows のシステム要件	G-15
G-4	Oracle Calendar Desktop Client for Linux のシステム要件	G-19
G-5	Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のシステム要件	G-20
G-6	Oracle Calendar Desktop Client for Solaris のシステム要件	G-24
G-7	Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のシステム要件	G-26
G-8	Oracle Calendar Sync for Pocket PC	G-28
G-9	Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件	G-30

図目次

4-1	Oracle Calendar の配置	4-5
12-1	「ドメイン操作」画面	12-11
12-2	「データベースの選択」画面	12-12
12-3	「スキーマ名」画面	12-14
12-4	「表領域」画面	12-15
12-5	「キャラクタ・セットおよび言語」画面	12-16
12-6	「デフォルトのポート番号」画面	12-17
12-7	「Web サイト情報」画面	12-19
12-8	「SMTP 情報」画面	12-21
12-9	「管理者情報」画面	12-22
12-10	「ユーザー」画面	12-23
12-11	Oracle Internet Directory の「ログイン」画面	12-24
12-12	「ローカル・マシンの設定」画面	12-25
12-13	「ドメインのコンポーネント」画面	12-26
12-14	「ノード構成」画面	12-27
12-15	「HTTP ノードの設定」画面	12-29
14-1	Oracle Real-Time Collaboration の基本コンポーネント	14-2
14-2	Oracle Real-Time Collaboration の配置例	14-3

はじめに

このマニュアルでは、Oracle Collaboration Suite の概要、インストール前のタスク、インストールおよびインストール後のタスクについて説明します。

ここでは、次の項目について説明します。

- [対象読者](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)

対象読者

このマニュアルは、Oracle Collaboration Suite をインストールまたは構成するすべてのユーザーを対象としています。

このマニュアルを使用する前に、次のいずれかのプラットフォームについて理解しておく必要があります。

- Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)
- HP-UX PA-RISC (64-bit)
- Linux Intel

このマニュアルの構成

このマニュアルの構成は次のとおりです。

第1章「インストールの概要」

この章では、Oracle Collaboration Suite のインストールおよび構成の概要を示し、Oracle Collaboration Suite の各インストールの機能および目的について説明します。

第2章「インストールの準備」

この章では、Oracle Collaboration Suite の各インストールを計画する方法について説明します。

第3章「Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) へのアップグレード」

この章では、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) およびそのコンポーネントへのアップグレード方法について説明します。

第4章「Oracle Collaboration Suite の配置方法」

この章では、特定の Oracle Collaboration Suite コンポーネントをアップグレードおよびダウングレードする方法、およびそれらのコンポーネント間で発生する可能性がある競合について説明します。また、既存の Oracle9i データベースを Oracle Collaboration Suite コンポーネントとともに使用する場合のデータベースのチューニングについても説明します。

第5章「インストールの開始」

この章では、インストールを開始する手順（CD-ROM のマウント、Oracle Universal Installer の起動など）について説明します。

第 6 章「Oracle Collaboration Suite のインストール」

この章では、Oracle9iAS Infrastructure、Oracle Collaboration Suite Information Storage および Oracle Collaboration Suite をインストールする方法について説明します。

第 7 章「Oracle Voicemail & Fax のインストールおよび構成」

この章では、Oracle Collaboration Suite の Oracle Voicemail & Fax コンポーネントをインストールおよび構成する方法について説明します。

第 8 章「サイレント・インストールおよび非対話型インストール」

この章では、Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールを実行する方法について説明します。

第 9 章「Oracle Collaboration Suite コンポーネントの削除」

この章では、Oracle Collaboration Suite コンポーネントを削除する方法について説明します。

第 10 章「Oracle Calendar の構成」

この章では、Oracle Calendar を構成する方法について説明します。

第 11 章「Oracle Email の構成」

この章では、Oracle Email を構成する方法について説明します。

第 12 章「Oracle Files の構成」

この章では、Oracle Files を構成する方法について説明します。

第 13 章「検索機能の構成」

この章では、Oracle Collaboration Suite の検索機能を構成する方法について説明します。

第 14 章「Oracle Web Conferencing の構成」

この章では、Oracle Web Conferencing を構成する方法について説明します。

付録 A「Java Access Bridge のインストール」

この付録では、Java Access Bridge のインストールに必要な手順を説明します。

付録 B「インストール・チェックリスト」

この付録では、Oracle Collaboration Suite の各インストール用のチェックリストを示します。

付録 C 「トラブルシューティング」

この付録では、一般的なインストールの問題および解決策を示します。

付録 D 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」

この付録では、Oracle Collaboration Suite コンポーネントが使用するポートを示します。

付録 E 「Windows サービス」

この付録では、Oracle Collaboration Suite for Windows がインストール中に作成するサービスを示します。

付録 F 「スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール」

この付録では、Oracle Calendar のコンポーネントをスタンドアロンでインストールするための要件および手順について説明します。

付録 G 「Oracle Collaboration Suite のクライアントのインストール」

この付録では、Oracle Collaboration Suite Client CD-ROM のコンポーネントのシステム要件、インストール手順および削除手順について説明します。

用語集

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

- Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ライブラリ リリース 2 (9.0.4.1)
- Oracle9i Application Server ドキュメント・ライブラリ
- Oracle9i データベース・ドキュメント・ライブラリ
- Oracle9iAS Portal ドキュメント・ライブラリ

リリース・ノート、インストール関連ドキュメント、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連ドキュメントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。登録は、次の Web サイトから無償で行えます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得している場合は、次の URL で OTN-J Web サイトのドキュメントのセクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

この項では、このマニュアルの本文およびコード例で使用される表記規則について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [本文の表記規則](#)
- [コード例の表記規則](#)
- [Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則](#)

本文の表記規則

本文では、特定の項目が一目でわかるように、次の表記規則を使用します。次の表に、その規則と使用例を示します。

規則	意味	例
太字	太字は、本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。	この句を指定すると、 索引構成表 が作成されます。
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システム指定の要素を示します。このような要素には、パラメータ、権限、データ型、Recovery Manager キーワード、SQL キーワード、SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージおよびメソッドがあります。また、システム指定の列名、データベース・オブジェクト、データベース構造、ユーザー名およびロールも含まれます。	NUMBER 列に対してのみ、この句を指定できます。 BACKUP コマンドを使用して、データベースのバックアップを作成できます。 USER_TABLES データ・ディクショナリ・ビュー内の TABLE_NAME 列を問い合わせます。 DBMS_STATS.GENERATE_STATS プロシージャを使用します。

規則	意味	例
固定幅フォントの小文字	<p>固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル・プログラム、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザーが指定する要素のサンプルを示します。このような要素には、コンピュータ名およびデータベース名、ネット・サービス名および接続識別子があります。また、ユーザーが指定するデータベース・オブジェクトとデータベース構造、列名、パッケージとクラス、ユーザー名とロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値も含まれます。</p> <p>注意：プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせて使用するものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。</p>	<p>sqlplus と入力して、SQL*Plus をオープンします。</p> <p>パスワードは、orapwd ファイルで指定します。</p> <p>/disk1/oracle/dbs ディレクトリ内のデータ・ファイルおよび制御ファイルのバックアップを作成します。</p> <p>hr.departments 表には、department_id、department_name および location_id 列があります。</p> <p>QUERY_REWRITE_ENABLED 初期化パラメータを true に設定します。</p> <p>oe ユーザーとして接続します。</p> <p>JRepUtil クラスが次のメソッドを実装します。</p>
固定幅フォントの小文字のイタリック	固定幅フォントの小文字のイタリックは、ブレースホルダまたは変数を示します。	<p>parallel_clause を指定できます。</p> <p>old_release.SQL を実行します。ここで、old_release とはアップグレード前にインストールしたリリースを示します。</p>

コード例の表記規則

コード例は、SQL、PL/SQL、SQL*Plus または他のコマンドライン文の例です。次のように、固定幅フォントで表示され、通常のテキストと区別されます。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表に、コード例で使用される印刷表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。	DECIMAL (digits [, precision])
{ }	中カッコは、項目をまとめるために使用します。	{ENABLE DISABLE}
	縦線は、選択項目が 2 つあることを示します。	{ENABLE DISABLE} [COMPRESS NOCOMPRESS]

規則	意味	例
...	省略記号は、コードの一部を繰り返すことができることを示します。 省略記号は、コードの例または本文が省略されていることを示す場合もあります。	CREATE TABLE ... AS subquery; SELECT col1, col2, ... , coln FROM employees;
その他の記号	大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の記号は、記載されているとおりに入力する必要があります。	acctbal NUMBER(11,2); acct CONSTANT NUMBER(4) := 3;
イタリック体	イタリック体は、特定の値を指定する必要があるプレースホルダや変数を示します。	CONNECT SYSTEM/system_password DB_NAME = database_name
大文字	大文字は、システム指定の要素を示します。これらの要素は、ユーザー定義の要素と区別するために大文字で示されます。大カッコ内にかぎり、表示されているとおりの順序および綴りで入力します。ただし、大 / 小文字が区別されないため、小文字でも入力できます。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; SELECT * FROM USER TABLES; DROP TABLE hr.employees;
小文字	小文字は、ユーザー指定のプログラム要素を示します。たとえば、表名、列名またはファイル名などです。 注意： プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせるものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; sqlplus hr/hr CREATE USER mjones IDENTIFIED BY ty3MU9;

Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則

次の表に、Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
ファイル名およびディレクトリ名	ファイル名およびディレクトリ名は大 / 小文字が区別されません。特殊文字の左山カッコ (<)、右山カッコ (>)、コロン (:)、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、縦線 () およびハイフン (-) は使用できません。円記号 (¥) は、引用符で囲まれている場合でも、要素のセパレータとして処理されます。Windows では、ファイル名が ¥¥ で始まる場合、汎用命名規則が使用されていると解釈されます。	c:¥winnt"¥"system32 は C:¥WINNT¥SYSTEM32 と同じです。

規則	意味	例
Windows コマンド・プロンプト	Windows コマンド・プロンプトには、カレント・ディレクトリが表示されます。コマンド・プロンプトのエスケープ文字はカレット (^) です。プロンプトは作業中のサブディレクトリを示します。このマニュアルではコマンド・プロンプトと呼びます。	C:¥oracle¥oradata>
特殊文字	Windows コマンド・プロンプトで二重引用符 (") のエスケープ文字として円記号 (¥) が必要な場合があります。丸カッコおよび一重引用符 (') にはエスケープ文字は必要ありません。エスケープ文字および特殊文字の詳細は、Windows オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。	C:¥>exp HR/HR TABLES=employees QUERY=¥"WHERE job_id='SA_REP' and salary<8000¥"
HOME_NAME	Oracle ホームの名前を表します。ホーム名には、英数字で 16 文字まで使用できます。ホーム名に使用可能な特殊文字は、アンダースコアのみです。	C:¥> net start OracleHOME_NAMETNSListener
ORACLE_HOME および ORACLE_BASE	Oracle8i 8.1.3 より前のリリースでは、Oracle コンポーネントをインストールすると、すべてのサブディレクトリが最上位の ORACLE_HOME の直下に置かれました。Windows NT のデフォルトは、C:¥orant でした。 このリリースは、Optimal Flexible Architecture (OFA) のガイドラインに準拠しています。ORACLE_HOME ディレクトリ下に配置されないサブディレクトリもあります。最上位のディレクトリは、ORACLE_BASE と呼ばれ、デフォルトでは C:¥oracle¥product¥10.1.0 です。他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータに最新リリースの Oracle をインストールした場合、Oracle ホーム・ディレクトリは、デフォルトで C:¥oracle¥product¥10.1.0¥db_n に設定されます。n は最新の Oracle ホームの番号です。Oracle ホーム・ディレクトリは、ORACLE_BASE の直下に配置されます。 このマニュアルに示すディレクトリ・パスの例は、すべて OFA の表記規則に準拠しています。	ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥rdbms¥admin ディレクトリへ移動します。

第 I 部

Oracle Collaboration Suite インストール前の要件

第 I 部には、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) をインストールする前に確認しておく必要がある、概要の説明およびインストール前の要件が含まれています。

第 I 部は、次の章で構成されています。

- [第 1 章「インストールの概要」](#)
- [第 2 章「インストールの準備」](#)

インストールの概要

この章では、Oracle Collaboration Suite CD パックの内容についての概要を示し、3つの Oracle Collaboration Suite の配置方法について説明します。インストールを実行する前にこの章を読んでおくことをお勧めします。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Collaboration Suite CD パックの内容](#)
- [インストール・ガイド](#)
- [最新情報](#)

Oracle Collaboration Suite CD パックの内容

Oracle Collaboration Suite CD パックには、次の CD-ROM セットが含まれています。

- [Oracle9iAS Infrastructure のインストール](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール](#)
- [Oracle Collaboration Suite のインストール](#)
- [Oracle Collaboration Suite Client](#)
- [Oracle Cluster Manager](#)
- [Oracle Voicemail & Fax](#)
- [Oracle Collaboration Suite のドキュメント](#)

次の項では、これらの CD-ROM セットについて説明します。

Oracle9iAS Infrastructure のインストール

Oracle Collaboration Suite とともにインストールされるすべての Middle-Tier アプリケーション（Oracle Files、Oracle Calendar など）を使用するには、Oracle9iAS Infrastructure のインストールが前提条件となります。最初に Oracle9iAS Infrastructure をインストールする必要があります。

注意： Oracle Collaboration Suite CD パックに含まれている Oracle9iAS Infrastructure を使用するか、または Oracle Collaboration Suite が動作するようにアップグレードされている場合は、既存の Oracle9iAS Infrastructure を使用します。詳細は、3-6 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード](#)」を参照してください。

Oracle9iAS Infrastructure は、次のコンポーネントで構成されます。

- [Oracle9iAS Metadata Repository](#)
Oracle Collaboration Suite インスタンスの実行に必要なメタデータおよびスキーマを含む事前作成済データベースです。このリポジトリは、Oracle9iAS Infrastructure のインストールするたびにインストールおよび構成されます。
- [Oracle Internet Directory](#)
分散したユーザーおよびネットワーク・リソースに関する情報を共有可能にするディレクトリ・サービスです。Oracle Internet Directory は、[Lightweight Directory Access Protocol \(LDAP\) バージョン 3](#) を実装します。

- Oracle9iAS Single Sign-On

複数のアカウントおよび Oracle Collaboration Suite アプリケーションへのアクセスを可能にする、企業規模のユーザー認証プロセスです。

- Oracle Management Server

Oracle Enterprise Manager コンソールを使用して、システム管理タスクを処理し、ネットワーク間のこれらのタスクの分散を管理します。Oracle Enterprise Manager コンソールおよびその 3 層アーキテクチャを Oracle Enterprise Manager Web Site と併用すると、Oracle Collaboration Suite のみでなく、Oracle 環境全体を管理できます。

- J2EE and Web Cache

J2EE and Web Cache をインストールすると、**Oracle HTTP Server** および **Oracle9iAS Containers for J2EE** が構成されます。これらのコンポーネントは、Oracle9iAS Infrastructure によって内部的に使用されます。

注意： J2EE and Web Cache の Infrastructure インストールを使用したカスタマ・アプリケーションの配置はサポートされていません。

Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール

Oracle Collaboration Suite Information Storage には、Middle-Tier アプリケーションでの使用のために事前構成済の Oracle9i リリース 2 (9.2) の初期データベース (1-3 ページの「[Oracle Collaboration Suite のインストール](#)」を参照) が含まれます。Oracle9iAS Infrastructure をインストールした後、Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールします。

Oracle Collaboration Suite のインストール

Oracle Collaboration Suite をインストールすると、企業規模通信、コンテンツ管理およびコンテキスト管理のための統合ソリューションが提供されます。これによって、デスクトップ・コンピュータ、ノート型コンピュータ、携帯情報端末 (PDA)、FAX、電話および Web クライアントのユーザーが共同作業を行い、日常の業務を遂行できます。

Oracle Collaboration Suite をインストールするには、次の操作を実行しておく必要があります。

- Oracle9iAS Infrastructure のインストール
- ネットワーク上での Oracle9iAS Infrastructure の Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On コンポーネントの構成 (個別のコンピュータ上で構成することをお勧めします。)
- Oracle Email、Oracle Files および Oracle Web Conferencing 用に構成済のデータベースを含む、Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール

Oracle Collaboration Suite は、次の Middle-Tier コンポーネントで構成されます。

■ Oracle Calendar

デスクトップ・クライアント、Web およびすべてのモバイル機器を介した予定調整、スケジュールリングおよび個人情報管理（PIM）機能を提供します。スケーラブルなカレンダー・アーキテクチャによって、企業全体での高度なグループ・カレンダーの使用およびリソース・スケジュールリングが可能になります。

■ Oracle Email

信頼性が高くスケーラブルで安全なメッセージ・システムです。整理統合されたメール・ストアを使用することによって管理し、ハードウェアおよびソフトウェアのコストを削減します。Oracle Email は、Oracle9i データベースを電子メール用の単一のメッセージ・ストアとして使用し、様々な種類の情報のアクセス、格納および管理に Oracle のメリットを利用します。Oracle9i の事前構成済のデータベースが、Oracle Collaboration Suite Information Storage CD-ROM に用意されています。

注意： Oracle Email には、Oracle Calendar、Oracle Calendar Sync および Oracle Connector for Outlook が含まれています。

■ Oracle Files

スケーラブルで信頼性の高い統合ファイル・サーバーを介した共同作業およびファイルの共有をサポートする、コンテンツ管理アプリケーションです。高度な Web ベースのユーザー・インタフェースおよび業界標準プロトコルを提供します。これによって、ユーザーはワークスペース内または企業内の他のユーザーと様々な種類のファイルを簡単に共有できます。Oracle Files は、Oracle9i データベースを使用してコンテンツを格納します。Oracle9i の事前構成済のデータベースが、Oracle Collaboration Suite Information Storage CD-ROM に用意されています。

■ Oracle Web Conferencing

あらゆる企業でオンラインの共同作業が可能になります。顧客、従業員、チームおよびパートナーが、E-Business のコンテンツ、取引および総合的ビジネス・フローによるコンテキスト内で、オンラインで会合を持つことができます。

■ Oracle Ultra Search

企業向け検索エンジンを提供します。この検索エンジンによって、企業ユーザーは、イントラネットまたはエクストラネット内の有用な情報を検索できます。Oracle Ultra Search は、Web ページ、Oracle9i データベースなどのデータ・ソースの統合検索を行うための検索機能を提供します。

- Oracle Voicemail & Fax

Oracle Voicemail & Fax は、信頼性が高く、高スケーラブルなボイスメールおよび FAX のシステムです。このシステムによって、ボイスメール・メッセージおよび FAX メッセージの格納および取出しを集中管理し、安全に実行できます。このシステムでは、ボイスメール・メッセージおよび FAX メッセージに Oracle Collaboration Suite Information Storage を使用します。

- Oracle9iAS Wireless

社外にいる従業員による、社内情報へのあらゆる場所、あらゆるデバイスからの完全なアクセスを可能にします。

注意： Oracle9iAS Wireless には、インストール後に構成の必要のある組込みアプリケーションが含まれています。まず基礎となる Oracle9iAS Wireless スタック、次にアプリケーションを、使用前に構成する必要があります。これらのアプリケーションおよびその他の Oracle9iAS Wireless コンポーネントの構成方法の詳細は、『Oracle9iAS Wireless 管理者ガイド』を参照してください。

- Oracle Collaboration Suite Web Client

Oracle Collaboration Suite は、ブラウザを搭載したコンピュータ用の統合 Web クライアントを提供します。これは、基礎となる Oracle9iAS Infrastructure を使用して、安全なシングル・サインオン環境を提供し、メッセージ（電子メール、ボイスメールおよび FAX）、カレンダーおよびディレクトリ情報、および Oracle Files に格納されたコンテンツにアクセスするために使用できます。

- Oracle9iAS Portal

Oracle Collaboration Suite に付属しているポर्टレットのインストール、構成および管理を可能にします。

注意： Oracle9iAS Portal は、Web データベース・アプリケーションおよびコンテンツ駆動型の Web サイトを構築、配置および監視するための完全なソリューションです。Oracle9iAS Portal を使用すると、簡単に使用可能な HTML ベースのインタフェースを介して、データベース・オブジェクトを作成および表示できます。Oracle9iAS Portal のライセンス供与については、オラクル社担当者に問い合せてください。

すべての Middle-Tier アプリケーションが、Oracle Collaboration Suite をインストールするたびにインストールされます。Oracle Collaboration Suite のインストール中に、Oracle Calendar、Oracle Email、Oracle Files、Oracle Web Conferencing および Oracle9iAS Portal を構成できます。オプションで、これらのアプリケーションをインストール後に構成することもできます。

Oracle Collaboration Suite Client

Oracle Collaboration Suite Client は、次のコンポーネントで構成されます。

Oracle Calendar Desktop Client:

- Oracle Connector for Outlook 9.0.4.1
- Oracle Calendar Desktop Client for Windows リリース 9.0.4.1
- Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh OS9 and OSX リリース 9.0.4
- Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 リリース 9.0.4
- Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) リリース 9.0.4.1

Oracle Calendar Synch クライアント:

- Oracle Calendar Sync for Palm for Windows リリース 9.0.4.1
- Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh OS9 and OSX リリース 9.0.4
- Oracle Calendar Sync for Pocket PC for Windows リリース 9.0.4.1

開発者パッケージ:

- Oracle Calendar SDK 9.0.4.1 (HP)
- Oracle Calendar SDK 9.0.4.1 (Linux)
- Oracle Calendar SDK 9.0.4.1 (Solaris)
- Oracle Calendar SDK 9.0.4.1 (Windows)
- Oracle Calendar SDK 9.0.4 (Macintosh)
- Oracle Calendar Web Services リリース 9.0.4

その他:

- Oracle Email の esmigration.zip
- Oracle Files の FileSync.exe

Oracle Cluster Manager

Oracle Cluster Manager リリース 9.2.0.3 は、Real Application Clusters のコンポーネントで、Oracle Collaboration Suite for Linux リリース 2 (9.0.4.1) に付属しています。Oracle Cluster Manager は、クラスタ・メンバーシップ・サービス、クラスタの包括的な表示、ノードの監視およびクラスタの再構成を提供します。また、クラスタ間のノードおよびインスタンスのステータスを保持して Oracle インスタンスの一貫性のある表示を提供し、インスタンス間の通信を可能にします。

Oracle Voicemail & Fax

この CD-ROM は、Windows 2000 に Oracle Voicemail & Fax をインストールします。

関連項目： 構成方法は、[第 7 章「Oracle Voicemail & Fax のインストールおよび構成」](#)を参照してください。

Oracle Collaboration Suite のドキュメント

この CD-ROM には、Oracle Collaboration Suite のドキュメント・ライブラリが含まれています。このドキュメントは、CD-ROM から参照するか、またはハードディスク・ドライブにコピーできます。

関連項目： 『Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ガイド』

インストール・ガイド

この項では、Oracle Collaboration Suite のインストールおよび構成に必要な手順の概要を示します。

関連項目： Oracle Collaboration Suite へのアップグレードの詳細は、[第 3 章「Oracle Collaboration Suite リリース 2 \(9.0.4.1\) へのアップグレード」](#)を参照してください。

この項の内容は次のとおりです。

- [一般的なインストール手順](#)
- [Oracle Calendar のインストール](#)
- [Oracle Email のインストール](#)
- [Oracle Files のインストール](#)
- [Oracle Web Conferencing のインストール](#)

- [Oracle Ultra Search のインストール](#)
- [Oracle Voicemail & Fax のインストール](#)
- [Oracle9iAS Wireless のインストール](#)

注意： インストール・プロセス中または構成プロセス中に問題が発生した場合は、[付録 C「トラブルシューティング」](#)を参照してください。

一般的なインストール手順

Oracle Collaboration Suite のインストールの一般的な手順は、次のとおりです。

1. [第 2 章「インストールの準備」](#)で説明するインストール計画の要件を満たします。

Oracle Web Conferencing をインストールする場合は、Document Conversion Server および Voice Conversion Server のハードウェア要件およびソフトウェア要件について、『Oracle Web Conferencing サイジング・ガイド』を一読してください。

Voice Conversion Server は、音声会議システムにダイヤルし、アナログ音声をデジタル形式に変換して流す Oracle Web Conferencing コンポーネントのグループです。Document Conversion Server は、ドキュメント・プレゼンテーション・モードで表示できるように Microsoft Office ドキュメントを HTML に変換する Oracle Web Conferencing コンポーネントのグループです。

『Oracle Web Conferencing サイジング・ガイド』を読んだ後に、2-5 ページの「[その他の Oracle Web Conferencing のハードウェア要件](#)」に示す手順に従って、Voice Conversion Server のハードウェアを設定します。前提条件のソフトウェアを、Voice Conversion Server および Document Conversion Server が存在するシステムにインストールします。

2. [第 4 章「Oracle Collaboration Suite の配置方法」](#)を読んで、配置方法を計画します。
3. [付録 B「インストール・チェックリスト」](#)のインストール・チェックリストを出力し、確認を完了します。
4. [第 5 章「インストールの開始」](#)で説明するインストール手順を完了します。
5. 6-2 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure のインストール](#)」の説明に従って、Oracle9iAS Infrastructure をインストールします。
6. 6-4 ページの「[Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのインストール](#)」の説明に従って、Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースをインストールします。
7. 6-8 ページの「[Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール](#)」で説明するインストール手順に従って、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールします。

8. [第 III 部「Oracle Collaboration Suite コンポーネントの構成」](#)のコンポーネントの構成に関する章で説明する手順に従って、インストールされた Oracle Collaboration Suite コンポーネントを構成します。

Middle-Tier のインストール・プロセスの際、構成する Oracle Collaboration Suite のコンポーネントを選択できます。Oracle Collaboration Suite の個々のコンポーネントごとに固有のインストール要件および構成要件があります。これらの要件については、次の各項で説明します。

Oracle Calendar のインストール

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Collaboration Suite の一部としての Oracle Calendar のインストール](#)
- [スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール](#)

Oracle Collaboration Suite の一部としての Oracle Calendar のインストール

Oracle Collaboration Suite の一部として Oracle Calendar をインストールする手順は、次のとおりです。

1. 『Oracle Calendar 管理者ガイド』の次の各項を参照します。
 - サイズの要件、インストール前のチェックリストおよび配置の詳細は、第 3 章「Oracle Calendar の配置」を参照してください。
 - カーネル・パラメータ要件の詳細は、付録 B「Calendar カーネル・パラメータの調整」を参照してください。
2. インストールおよび構成の問題は、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノート of Oracle Calendar の章を参照します。
3. 以前のバージョンからアップグレードする場合は、[第 3 章「Oracle Collaboration Suite リリース 2 \(9.0.4.1\) へのアップグレード」](#)を参照します。
4. 1-8 ページの「一般的なインストール手順」の手順 1～7 に従います。
5. [第 10 章「Oracle Calendar の構成」](#)で説明する構成手順に従います。
6. Oracle Connector for Outlook、Oracle Calendar desktop client または Oracle Calendar Sync client をインストールするには、[付録 G「Oracle Collaboration Suite のクライアントのインストール」](#)を参照します。
7. Oracle Calendar コンポーネントの構成手順およびメンテナンス手順の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照します。構成パラメータおよびコマンドライン管理ユーティリティの詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照します。

スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール

Oracle CorporateTime から Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4) へのアップグレードの手順は、次のとおりです。

1. 『Oracle Calendar 管理者ガイド』の次の各項を参照します。
 - サイズの要件、インストール前のチェックリストおよび配置の詳細は、第 3 章「Oracle Calendar の配置」を参照してください。
 - カーネル・パラメータ要件の詳細は、付録 B「Calendar カーネル・パラメータの調整」を参照してください。
2. インストールおよび構成の問題は、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノート of Oracle Calendar の章を参照します。
3. Oracle CorporateTime から Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4) へアップグレードするには、付録 F「スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール」で説明する手順に従います。
4. Oracle Connector for Outlook、Oracle Calendar desktop client または Oracle Calendar Sync client をインストールするには、付録 G「Oracle Collaboration Suite のクライアントのインストール」を参照します。
5. Oracle Calendar コンポーネントの構成手順およびメンテナンス手順の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照します。構成パラメータおよびコマンドライン管理ユーティリティの詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照します。

Oracle Email のインストール

Oracle Email のインストール手順は、次のとおりです。

1. インストールおよび構成の問題は、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノート of Oracle Email の章を参照します。
2. 1-8 ページの「一般的なインストール手順」の手順 1 ～ 7 に従います。
3. 第 11 章「Oracle Email の構成」に示す手順に従って、Oracle Email を構成します。
4. Oracle Email の管理およびメンテナンスの詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』を参照します。

Oracle Files のインストール

Oracle Files のインストール手順は、次のとおりです。

1. 『Oracle Files プランニング・ガイド』を参照して、サイズの要件およびハードウェア情報を確認します。
2. インストールおよび構成の問題は、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノートの Oracle Files の章を参照します。
3. 1-8 ページの「[一般的なインストール手順](#)」の手順 1 ～ 7 に従います。
4. [第 12 章「Oracle Files の構成」](#) に示す手順に従って、Oracle Files を構成します。

関連項目： Oracle Files の構成の問題を解決するには、C-3 ページの「[Oracle Files のインストールのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

5. Oracle FileSync をインストールする場合は、G-34 ページの「[Oracle FileSync](#)」に示す手順に従います。
6. Oracle Files の管理およびメンテナンスの詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照します。

Oracle Web Conferencing のインストール

Oracle Web Conferencing のインストール手順は、次のとおりです。

1. 最新のインストールおよび構成の問題は、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノート of Oracle Web Conferencing の章を参照します。
2. [第 4 章「Oracle Collaboration Suite の配置方法」](#) を参照します。
3. 1-8 ページの「[一般的なインストール手順](#)」の手順 1 ～ 7 に従います。
4. [第 14 章「Oracle Web Conferencing の構成」](#) に示す手順に従って、Oracle Web Conferencing を構成します。
5. 次の事柄に関する情報は、『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』を参照します。
 - このマニュアルで説明されていない配置の例
 - 高度なカスタマイズ
 - システムの監視
 - レポートの実行
 - サイトの作成および管理

Oracle Ultra Search のインストール

Oracle Ultra Search のインストール手順は、次のとおりです。

1. 4-7 ページの「[Oracle Ultra Search の配置](#)」を参照して、サイズの要件およびハードウェア情報を確認します。
2. 1-8 ページの「[一般的なインストール手順](#)」の手順 1 ～ 7 に従います。
3. [第 13 章「検索機能の構成」](#)に示す手順に従って、Oracle Ultra Search を構成します。
4. Oracle Ultra Search インスタンスの管理およびメンテナンスの詳細は、『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』を参照します。

Oracle Voicemail & Fax のインストール

この項では、Oracle Voicemail & Fax のインストール手順を説明します。

注意： Oracle Voicemail & Fax をインストールする前に、Oracle Email をインストールして構成する必要があります。

Oracle Voicemail & Fax をインストールするには、次のようにします。

1. インストールおよび構成の問題は、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノートの Oracle Voicemail & Fax の章を参照します。
2. 1-10 ページの Oracle Email の説明に従って、「[Oracle Email のインストール](#)」をインストールおよび構成します（完了していない場合）。
3. [第 7 章「Oracle Voicemail & Fax のインストールおよび構成」](#)の説明に従って、Oracle Voicemail & Fax をインストールおよび構成します。
4. Oracle Voicemail & Fax の管理およびメンテナンスの詳細は、『Oracle Voicemail & Fax 管理者ガイド』を参照します。

Oracle9iAS Wireless のインストール

Oracle9iAS Wireless のインストール手順は、次のとおりです。

1. 1-8 ページの「[一般的なインストール手順](#)」の手順 1 ～ 7 に従います。
2. Oracle9iAS Wireless インスタンスの構成および管理の詳細は、『Oracle9iAS Wireless 管理者ガイド』を参照します。

最新情報

Oracle Collaboration Suite リリース 2 のパッチ・セット 1 (9.0.4.2.0) が提供されています。このパッチ・セットには、多数の重要なバグ修正や新機能が含まれています。パッチセットは、Oracle internet Support Center (OiSC) のサイト <http://support.oracle.co.jp/> より取得可能です。

このパッチに含まれている新機能およびバグ修正の詳細は、Oracle Collaboration Suite リリース 2 のパッチ・セット 1 (9.0.4.2.0) の Readme を参照してください。

インストールの準備

この章では、各 Oracle Collaboration Suite 製品のインストールを計画する方法を説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [ハードウェア要件](#)
- [その他の Oracle Web Conferencing のハードウェア要件](#)
- [オペレーティング・システムのバージョン](#)
- [オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージ](#)
- [その他の Oracle Web Conferencing のソフトウェア要件](#)
- [多言語サポート](#)
- [オンライン・ドキュメントの要件](#)
- [ポートの割当て](#)
- [認証ソフトウェア](#)
- [リリース・ノート](#)
- [環境に対するインストール前のタスク](#)
- [単一コンピュータへの Oracle Collaboration Suite のインストール](#)

ハードウェア要件

この項の内容は次のとおりです。

- [ランダム・アクセス・メモリーの確認](#)
- [スワップ領域の確認](#)

表 2-1 に、各 Oracle Collaboration Suite 製品のインストールに対するハードウェアの最低要件を示します。

表 2-1 Oracle Collaboration Suite ハードウェア要件¹

要件	値
Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) CPU ²	SPARC プロセッサ
HP-UX PA-RISC (64-bit) CPU ²	HP-UX 11.0 用 HP 9000 Series HP-UX プロセッサ (64 ビット) HP-UX 11.11 用 HP 9000 Series HP-UX プロセッサ (64 ビット)
Linux x86 CPU ²	Pentium II 233MHz 以上 (32 ビット)
モニター	256 色カラー表示機能
/var/tmp ディレクトリ領域	Oracle Collaboration Suite: 33MB Oracle9iAS Infrastructure: 7MB Oracle Collaboration Suite Information Storage: 34MB
スワップ領域	2GB
メモリー (最低要件)	Oracle Collaboration Suite: 512MB Oracle9iAS Infrastructure: 512MB Oracle Collaboration Suite Information Storage: 512MB 注意: アプリケーションのタイプおよびシステム上のユーザー数に応じて、追加のメモリーを割り当ててください。 HP-UX PA-RISC (64-bit) に Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールするには、追加のメモリーが必要です。Hyper Messaging Protocol (HMP) を実装したクラスタに Oracle Real Application Clusters をインストールする場合は、HMP を使用する Oracle シャドウ・プロセスごとに 0.3MB の追加メモリーが必要です。

表 2-1 Oracle Collaboration Suite ハードウェア要件¹ (続き)

要件	値
ディスク領域 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))	Oracle Collaboration Suite: 1.84GB Oracle9iAS Infrastructure: 3.96GB Oracle Collaboration Suite Information Storage: 4.25GB 注意: インストール・ログ・ファイルに、Information Storage データベースに必要なディスク領域が 2.38GB と出力されますが、このファイルでは、データベースの作成に必要な領域が考慮されていません。また、そのデータベースに対して配置される Middle-Tier アプリケーションに必要な領域も考慮されていません。
ディスク領域 (HP-UX PA-RISC (64-bit))	Oracle Collaboration Suite: 4.8GB Oracle9iAS Infrastructure: 5.9GB Oracle Collaboration Suite Information Storage: 4.3GB
ディスク領域 (Linux x86)	Oracle Collaboration Suite: 2.5GB Oracle9iAS Infrastructure: 4.2GB Oracle Collaboration Suite Information Storage: 3.8GB

¹ Oracle Files のハードウェアおよびサイズの要件の詳細は、『Oracle Files プランニング・ガイド』を参照してください。

² Oracle Text で Oracle Files のドキュメントまたは Oracle Email の電子メール・メッセージの索引付けをする場合は、Oracle Collaboration Suite Information Store が実行されているコンピュータに CPU を増設することをお薦めします。

注意: オペレーティング・システムに関係なく、ディスク領域は単一のディスクに用意する必要があります。Oracle Collaboration Suite は、複数のディスクにまたがったインストールをサポートしません。

注意: HP-UX PA-RISC (64-bit) 上の Oracle Real Application Clusters 環境で、クラスタの相互接続に HP 社の Hyper Messaging Protocol (HMP) を使用するには、HP 社独自の HyperFabric スイッチ (製品番号 A6384a、ファイバベースの HyperFabric2 スイッチ) に加えて、アダプタ・カード A6386a および A7525a ファイバ・ケーブルが必要です。

注意： アップグレードを実行すると、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant によって Oracle Email の新しい表領域が 4 つ作成されます。これらの追加表領域についての領域要件は、3-14 ページの「[Oracle Email アップグレード前のタスク](#)」を参照してください。

ランダム・アクセス・メモリーの確認

次のコマンドを使用して、Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) にインストールされたランダム・アクセス・メモリーの容量を確認します。

```
prompt> /usr/sbin/prtconf | grep "Memory size"
```

次のコマンドを使用して、HP-UX PA-RISC (64-bit) にインストールされたランダム・アクセス・メモリーの容量を確認します。

```
prompt> grep MemTotal /proc/meminfo
```

次のコマンドを使用して、Linux x86 にインストールされたランダム・アクセス・メモリーの容量を確認します。

```
prompt> /usr/sbin/dmmsg | grep "Physical"
```

スワップ領域の確認

[表 2-2](#) に、現在システム上に構成されているスワップ領域の容量を確認するコマンドを示します。プラットフォームに応じて、[表 2-2](#) に示すいずれかのコマンドを入力します。

表 2-2 スワップ領域の確認

プラットフォーム	コマンド
Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)	prompt> /usr/sbin/swap -l
HP-UX PA-RISC (64-bit)	prompt> /usr/sbin/swapinfo -a
Linux x86	prompt> /sbin/swapon -s

入力したコマンドの出力に示された BLOCKS 列の値を 2 で割ります。

その他の Oracle Web Conferencing のハードウェア要件

Oracle Web Conferencing のハードウェアのサイズについて、いくつかの考慮事項があります。これらの考慮事項の詳細は、『Oracle Web Conferencing サイジング・ガイド』を参照してください。この項では、会議での音声データのストリーミングまたは会議で記録された音声データの再生をサポートするために Oracle Web Conferencing で使用される Voice Conversion Server に必要なハードウェアについて説明します。

Voice Conversion Server は、SP4 以降の Microsoft Windows 2000 Server が搭載され、次の基本ハードウェア構成を備えたマシンにインストールする必要があります。

- インテル 2.4GHz プロセッサ
- 512MB SDRAM
- 20GB ディスク

また、専用のテレフォニ・ハードウェアが必要になります。T1 または E1 トランク、およびトランクをサポートするためのメディア処理基板 (Intel/Dialogic 製品) が必要です。

Oracle Web Conferencing がサポートする T1/E1 プロトコルは、robbed-bit/CAS (Channel Associated Signaling) です。次の表に、同時に実行される音声会議の数、トランク回線のタイプと数および Voice Conversion Server の数に応じた、ハードウェアおよびサイズ指定に関する推奨事項を示します。

表 2-3 T1 を使用した音声会議のサイズ指定に関する推奨事項

同時に行われる音声 会議数	T1 回線数	Voice Server 数	Voice Server ごとに必要な Dialogic ハード ウェア
12	1	1	D/240JCT-T1
24	1	1	D/480JCT-T1
48	2	1	2 x D/480JCT-T1
96	4	2	2 x D/480JCT-T1
192	8	4	2 x D/480JCT-T1

表 2-4 E1 を使用した音声会議のサイズ指定に関する推奨事項

同時に行われる音声 会議数	T1 回線数	Voice Server 数	Voice Server ごとに必要な Dialogic ハード ウェア
15	1	1	D/300JCT-E1
30	1	1	D/300JCT-E1
60	2	1	2 x D/600JCT-E1
120	4	2	2 x D/600JCT-E1
240	8	4	2 x D/600JCT-E1

関連項目： 使用しているシステムのサイズの要件に固有の情報は、『Oracle Web Conferencing サイジング・ガイド』を参照してください。

オペレーティング・システムのバージョン

表 2-5 に、各プラットフォームに必要なオペレーティング・システムのバージョン、および現行のオペレーティング・システムのバージョンを確認するコマンドを示します。

表 2-5 オペレーティング・システムのバージョンおよび要件

プラットフォーム	オペレーティング・システム要件	コマンド
Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)	■ Solaris 8	prompt> uname -a
HP-UX PA-RISC (64-bit)	■ HP-UX 11.0 PA-RISC (64-bit) ■ HP-UX 11.11 PA-RISC (64-bit) ■ JDK 1.3.1 ¹ ■ /usr/ccs/bin ディレクトリに実行ファイル make、ar、ld、nm および cc が存在している必要があります。	prompt> uname -a
Linux x86	■ Red Hat Advanced Server 2.1。カーネル 2.4.9-e.12 が必要です。 ■ glibc 2.2.4-26。 ■ binutils-2.11.90.0.8-13。 ■ XFree86 Development 3.3.3.1 以上。 ■ Open Motif 2.1.30。 ■ JDK 1.3.1 (今回のリリースに付属)。	prompt> uname -a prompt> rpm -q glibc prompt> rpm -q binutils

¹ JDK 使用の前提条件となるすべてのパッチもインストールする必要があります。これらのパッチは、HP 社の Web サイトから入手可能です。

オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージ

オペレーティング・システムによっては、パッチおよびパッケージのインストールが必要な場合があります。次の表に示すいくつかのパッチには、あわせてインストールする必要がある依存パッチが存在します。詳細は、パッチおよびパッケージに付属の `readme` ファイルを参照してください。特定のパッチまたはパッケージをダウンロードする場合は、依存性を確認し、必要に応じて依存パッチまたは依存パッケージをダウンロードします。

注意： オペレーティング・システムには、`sendmail` プログラムが含まれている必要があります

この項の内容は次のとおりです。

- [オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージのダウンロード・サイト](#)
- [インストールされたパッチの確認](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用の必須の Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\) パッチ](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須の Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\) パッチ](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用の必須の HP-UX PA-RISC \(64-bit\) パッチ](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須の HP-UX PA-RISC \(64-bit\) パッチ](#)
- [Real Application Clusters をサポートするためのオペレーティング・システム要件](#)
- [JRE パッチ](#)
- [オペレーティング・システム・パッケージおよびフォント・パッケージ \(Solaris のみ\)](#)
- [追加のオペレーティング・システム要件](#)

オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージのダウンロード・サイト

表 2-6 に、各プラットフォーム用のオペレーティング・システムのパッチのダウンロード・サイトを示します。

表 2-6 オペレーティング・システムのパッチのダウンロード・サイト

プラットフォーム	ダウンロード・サイト
Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)	次のサイトからパッチをダウンロードします。 http://sunsolve.sun.com/
HP-UX PA-RISC (64-bit)	次のサイトからパッチ・バンドルをダウンロードします。 http://www.software.hp.com/SUPPORT_PLUS 次のサイトから個別のパッチをダウンロードします。 http://itresourcecenter.hp.com
Linux x86	パッチのダウンロードについては、Linux ベンダーに問い合わせてください。

インストールされたパッチの確認

表 2-7 に、各プラットフォームに特定のパッチがインストールされているかどうかを確認するコマンドを示します。

表 2-7 インストールされたパッチを確認するコマンド

プラットフォーム	コマンド
Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)	<code>prompt> showrev -p grep six_digit_patch_number</code>
HP-UX PA-RISC (64-bit)	<code>prompt> /usr/sbin/swlist -l patch</code>
Linux x86	<code>prompt> rpm -qa</code>

Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用の必須の Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) パッチ

表 2-8 に、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite をインストールするために、Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) にインストールする必要があるオペレーティング・システムのパッチを示します。

表 2-8 Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite

オペレーティング・システム	パッチ
Solaris 8	<ul style="list-style-type: none">■ 最新の推奨パッチ・クラスタ■ Xsun パッチ : 108652-37 以上■ CDE dtwm パッチ : 108921-13 以上■ Motif 2.1 パッチ : 108940-37 以上■ Portal および Wireless のパッチ : 112138-01 以上

Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須の Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) パッチ

Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールするために、Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) にインストールする必要があるオペレーティング・システムのパッチはありません。

Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用の必須の HP-UX PA-RISC (64-bit) パッチ

Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite をインストールするために、次のオペレーティング・システムのパッチを HP-UX PA-RISC (64-bit) にインストールします。

表 2-9 Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用のパッチおよびパッケージ

オペレーティング・システム	パッケージおよびパッチ
HP-UX 11.0 PA-RISC (64-bit)	<ul style="list-style-type: none">Sept 2002 QPK1100PHKL_27813
HP-UX 11.11 PA-RISC (64-bit)	<ul style="list-style-type: none">GOLDQPK11iPHCO_24402PHCO_24777PHCO_25452PHKL_23006PHKL_23154PHKL_23176PHKL_24255PHKL_24569PHKL_24751PHKL_25389PHKL_25729PHKL_25840PHKL_25842PHNE_22727PHNE_24910PHNE_25485PHSS_23441PHSS_24045

Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須の HP-UX PA-RISC (64-bit) パッチ

Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールするために、[表 2-9](#) に示すオペレーティング・システムのパッチを HP-UX PA-RISC (64-bit) にインストールします。

Real Application Clusters をサポートするためのオペレーティング・システム要件

[表 2-10](#) に、Real Application Clusters をサポートするために必要なオペレーティング・システムのパッケージおよびパッチを示します。

表 2-10 Real Application Clusters 用のパッチおよびパッケージ

プラットフォーム	パッケージおよびパッチ
Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)	racpatch
HP-UX 11.0 PA-RISC (64-bit)	<ul style="list-style-type: none">■ MC/ServiceGuard A.11.13 OPS Edition■ Real Application Clusters 環境で Oracle インスタンスのインスタンス間通信に lowfat プロトコルが使用されている場合は、PHNE_26177 が必要です。lowfat プロトコルは、Hyperfabric インターコネクトと呼ばれる特別なハードウェアに実装された、待機時間が短く高帯域幅のプロトコルです。詳細は、PHNE_26177 に付属のドキュメントを参照してください。■ PHSS_25915
HP-UX 11.11 PA-RISC (64-bit)	<ul style="list-style-type: none">■ MC/ServiceGuard A.11.09 OPS Edition■ PHSS_26338
Linux x86	なし

注意： Sun Cluster の場合、racpatch をインストールしてください (2-24 ページの「追加の root ユーザー情報 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))」を参照)。

JRE パッチ

表 2-11 に、必須または推奨の JRE パッチを示します。

表 2-11 JRE パッチ

プラットフォーム	パッチ	必須または推奨
Solaris 8	なし	なし
HP-UX PA-RISC (64-bit)	PHCO_23792	推奨
	PHCO_24148	推奨
	PHKL_25475	推奨
	PHNE_23456	推奨
	PHNE_24034	推奨
	PHSS_24303	推奨
Linux x86	なし	なし

オペレーティング・システム・パッケージおよびフォント・パッケージ
(Solaris のみ)

表 2-12 に、Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) に必要なオペレーティング・システム・パッケージおよびフォント・パッケージを示します。

表 2-12 Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) に必要なオペレーティング・システム・パッケージおよびフォント・パッケージ

パッケージ・タイプ	必要なパッケージ
オペレーティング・システム	SUNWarc、SUNWbtool、SUNWhea、SUNWlibm、SUNWlibms、SUNWsprot および SUNWtoo
Java 用のフォント・パッケージ	すべてのロケールで SUNWilof および SUNWxwfnt が必要です。ユーザーのロケールで使用されているフォント・スタイルをサポートするには、追加のフォント・パッケージを入手する必要がある場合があります。Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) のフォント・パッケージのリストについては、 http://java.sun.com/j2se/1.3/font-requirements.html を参照してください。

オペレーティング・システムのパッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> pkginfo -p package_name
```

ここで、*package_name* は、確認するパッケージの名前です。

追加のオペレーティング・システム要件

表 2-13 に、すべてのプラットフォームに必要な追加のソフトウェアを示します。

表 2-13 追加のオペレーティング・システム要件

ソフトウェア	要件
X サーバーおよびウィンドウ・マネージャ	<p>UNIX オペレーティング・システムでサポートされている X サーバーおよびウィンドウ・マネージャを使用します。</p> <p>Hummingbird Exceed の場合、システム固有のウィンドウ・マネージャを使用します。</p> <p>WRQ Reflections の場合、リモート・ウィンドウ・マネージャを使用可能にします。</p> <p>X Window System がローカル・システムで適切に動作しているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。</p> <pre>prompt> xclock</pre> <p>モニターに時計が表示されます。</p>
必要な実行可能ファイル	実行可能ファイル <code>make</code> 、 <code>ar</code> 、 <code>ld</code> および <code>nm</code> が存在している必要があります。

その他の Oracle Web Conferencing のソフトウェア要件

Oracle Web Conferencing は、会議中に Microsoft Office ドキュメントを共有できるように、Document Conversion Server を使用してこれらのドキュメントを HTML またはその他の互換形式に変換します。このサーバーは、Middle-Tier とは異なるコンピュータに存在する必要があります。そのコンピュータには、Microsoft Windows NT および、Microsoft Office 2000 または Microsoft Office XP が必要です。

Oracle Web Conferencing は、会議での音声のストリーミングまたは会議で記録された音声データの再生のサポートで、Voice Conversion Server も使用します。このサーバーには、SP4 以降の Microsoft Windows 2000 Server および SP1 以降の Intel Dialogic システム・ソフトウェア 5.1.1 が必要です。

関連項目： 必要なハードウェアおよびソフトウェアの詳細は、『Oracle Web Conferencing サイジング・ガイド』を参照してください。

関連項目： Voice Conversion Server のハードウェア要件は、2-5 ページの「[その他の Oracle Web Conferencing のハードウェア要件](#)」を参照してください。

多言語サポート

Oracle Collaboration Suite のユーザー・インタフェースは、アラビア語、ポルトガル語（ブラジル）、デンマーク語、オランダ語、英語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、ギリシア語、イタリア語、日本語、韓国語、ノルウェー語、ポルトガル語、中国語（簡体字）、スペイン語、スウェーデン語、中国語（繁体字）およびトルコ語で使用できます。

Oracle Calendar での多言語サポートの制限

Oracle Calendar Server の管理ツールのインタフェースは英語ですが、Oracle Collaboration Suite でサポートされている全言語でのデータ入力をサポートしています。

Oracle Calendar のクライアントは、次のクライアント以外は英語でのみ使用可能です。

- **Oracle Connector for Outlook:** Oracle Collaboration Suite でサポートされるすべての言語（アラビア語を除く）
- **Oracle Calendar Web Client:** Oracle Collaboration Suite でサポートされるすべての言語（アラビア語を除く）
- **Oracle Calendar Desktop Client for Windows:** 英語、フランス語、ドイツ語および日本語
- **Oracle Calendar Sync for Palm for Windows:** 英語、フランス語、ドイツ語および日本語
- **Oracle Calendar Sync for Pocket PC for Windows:** 英語、フランス語、ドイツ語および日本語

オンライン・ドキュメントの要件

Web ブラウザまたは Portable Document Format (PDF) ビューアを使用して、Oracle Collaboration Suite のドキュメントをオンラインで表示できます。

表 2-14 に、Oracle Collaboration Suite のオンライン・ドキュメントを表示するための要件を示します。

表 2-14 オンライン・ドキュメントの要件

要件	項目
オンライン・リーダー	次のいずれかのソフトウェアが必要です。 HTML ■ Netscape Navigator 4.7 以上 ■ Microsoft Internet Explorer 5.0 以上 PDF ■ Acrobat Reader 4.0 以上 ■ Acrobat Reader+Search 4.0 以上 ■ Acrobat Exchange 4.0 以上 ■ PDFViewer Web ブラウザ・プラグイン 1.0 以上
ライブラリ全体の HTML の検索およびナビゲーション	アクティブなインターネット接続
ディスク領域	37.5MB

関連項目：『Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ガイド』

ポートの割当て

インストール後、Oracle Universal Installer は、Oracle Collaboration Suite コンポーネントのインストール中に割り当てられたポートを示す portlist.ini という名前のファイルを作成します。インストール・プロセスで、ポートの競合が自動的に検出され、そのコンポーネントに割り当てられた範囲で代替ポートが選択されます。このファイルは、次の場所にあります。

```
$ORACLE_HOME/install/portlist.ini
```

関連項目： 付録 D「デフォルトのポート番号およびポート範囲」

認証ソフトウェア

多くの Oracle Collaboration Suite コンポーネントに、Web ブラウザが必要です。すべての Oracle Collaboration Suite のインストールで、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle9i データベースが必要です。

リリース・ノート

Oracle 社では、Oracle Collaboration Suite をインストールする前に、各 Oracle Collaboration Suite インストール用の CD-ROM の doc ディレクトリおよび Oracle Technology Network Japan で入手可能な Oracle Collaboration Suite のリリース・ノートを読んでおくことをお勧めします。Oracle Collaboration Suite ドキュメントの詳細は、『Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ガイド』を参照してください。このマニュアルの公開時には記載されていない最新情報およびドキュメントについては、次の Oracle Technology Network Japan を参照してください。

<http://otn.oracle.co.jp/>

環境に対するインストール前のタスク

この項の内容は次のとおりです。

- [環境変数の設定](#)
- [HP-UX システムでの必須シンボリック・リンクの作成](#)
- [ホスト名ファイルの構成](#)
- [UNIX のアカウントおよびグループの作成](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の Real Application Clusters](#)
- [Linux x86 への Real Application Clusters のインストール](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure に対するカーネル・パラメータの構成](#)
- [Oracle Collaboration Suite に対するカーネル・パラメータの構成](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage に対するカーネル・パラメータの構成](#)

環境変数の設定

表 2-15 に、環境変数を設定および解除する方法を示します。

表 2-15 環境変数の設定および解除

タスク	C シェル	Bourne/Korn シェル
環境変数の設定	prompt> setenv VARIABLE value	prompt> VARIABLE=value;export VARIABLE
環境変数の解除	prompt> unsetenv VARIABLE	prompt> unset VARIABLE

注意： 環境変数 LD_LIBRARY_PATH、ORACLE_HOME、SHLIB_PATH、TMP、TMPDIR および TNS_ADMIN を設定する必要はありません。

DISPLAY

Oracle Universal Installer を起動する前に、環境変数 DISPLAY を設定し、Oracle Universal Installer を表示する X サーバーを参照します。環境変数 DISPLAY の形式は次のとおりです。

hostname:display_number.screen_number

Oracle Collaboration Suite では Oracle Universal Installer、Web アプリケーションおよび管理ツール用のグラフィックを適切に作成するには、実行中の X サーバーが必要です。オペレーティング・システムとともにインストールされたフレーム・バッファ用 X サーバーでは、ログインしたまま、フレーム・バッファを常時実行しておく必要があります。この操作を行わない場合は、X Virtual Frame Buffer (XVFB)、Virtual Network Computing (VNC) などの仮想フレーム・バッファを使用する必要があります。

Oracle Universal Installer は、アプリケーションおよび管理ツールのインストール・プロセスで同じ X サーバーを使用するようにこのインスタンスを構成します。この X サーバーを常時実行させるか、またはインストールの完了後に常時実行している他の X サーバーを使用するように Oracle Collaboration Suite を再構成する必要があります。

関連項目：

- 環境変数 DISPLAY の詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。
- XVFB または他の仮想フレーム・バッファ・ソリューションの取得およびインストールの詳細は、Oracle Technology Network (<http://otn.oracle.com/>) を参照してください。Oracle Technology Network で「frame buffer」を検索します。

リモート・コンピュータからのインストール

環境変数 DISPLAY を設定すると、他のワークステーションから Oracle Universal Installer をリモートで実行できます。Oracle Universal Installer を起動するシステムで、DISPLAY をローカル・ワークステーションのシステム名または IP アドレスに設定します。

注意： PseudoColor カラー・モデルまたは PseudoColor ビジュアルをサポートする PC 用の X エミュレータを使用してインストールを実行できます。PC 用の X エミュレータを PseudoColor ビジュアルを使用するように設定後、Oracle Universal Installer を起動します。カラー・モデルまたはビジュアルの設定を変更する方法については、X エミュレータのドキュメントを参照してください。

Oracle Universal Installer の起動時に「Failed to connect to server」、「Connection refused by server」、「Can't open display」などの Xlib エラーが発生した場合は、ローカル・ワークステーションで表 2-16 に示すコマンドを実行します。

表 2-16 環境変数 DISPLAY のコマンド

シェル・タイプ	Oracle Universal Installer が実行されているサーバーの場合	ワークステーション上のセッションの場合
C シェル	prompt> setenv DISPLAY hostname:0.0	prompt> xhost + server_name
Bourne/Korn シェル	prompt> DISPLAY=hostname:0.0;export DISPLAY	prompt> xhost + server_name

HP-UX システムでの必須シンボリック・リンクの作成

HP-UX にインストールする場合は、インストールを実行する前にシンボリック・リンクを手動で作成する必要があります。

必須リンクを作成するには、次のようにします。

- 1. root ユーザーとしてシステムにログインします。
- 2. /usr/lib ディレクトリに移動します。
- 3. 次のコマンドを入力し、シンボリック・リンクを作成します。

```
# ln -s /usr/lib/libX11.3 libX11.sl
# ln -s /usr/lib/libXIE.2 libXIE.sl
# ln -s /usr/lib/libXext.3 libXext.sl
# ln -s /usr/lib/libXhp11.3 libXhp11.sl
# ln -s /usr/lib/libXi.3 libXi.sl
# ln -s /usr/lib/libXm.4 libXm.sl
# ln -s /usr/lib/libXp.2 libXp.sl
# ln -s /usr/lib/libXt.3 libXt.sl
# ln -s /usr/lib/libXtst.2 libXtst.sl
```

ホスト名ファイルの構成

Oracle Universal Installer では、完全修飾されたホスト名の情報がコンピュータの構成ファイルに含まれている必要があります。完全修飾されたホスト名には、システム名およびドメイン名の両方が含まれます。

リストに示すファイルにホスト名の情報が適切に構成されていない場合は、Oracle Collaboration Suite のインストール中にランタイム・エラーが発生する場合があります。

`/etc/hosts` が次の形式であることを確認します。

```
ip_address fully_qualified_hostname short_hostname aliases
```

次に、適切に構成された `/etc/hosts` ファイルの例を示します。

```
148.87.9.44 oasdocs.us.oracle.com oasdocs oracleinstall
```

インストールを開始する前に `hostname` コマンドによりこの完全修飾されたホスト名が返されていることを確認します。

その他のホスト名ファイルの構成 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) にインストールする場合は、次の追加ファイルに完全修飾されたホスト名を構成する必要があります。

- `/etc/nodename`
- `/etc/inet/hosts`
- `/etc/hostname*`
- `/etc/net/ticlts/hosts`
- `/etc/net/ticots/hosts`
- `/etc/net/ticotsord/hosts`
- `/etc/inet/ipnodes`

注意： ホスト名は、これらの各ファイルに 1 つ以上含まれる場合があります。ホスト名が出現するたびにドメイン情報を追加する必要があります。例外は `/etc/hosts` ファイルおよび `/etc/inet/hosts` ファイルのみです。これらのファイルでは、ドメイン情報を追加する必要があるのは、インターネット・プロトコル (IP) アドレスの直後の 1 回のみです。

UNIX のアカウントおよびグループの作成

インストール・プロセスでは、専用の UNIX アカウントおよび複数の専用のグループが必要です。詳細は、次の項を参照してください。

- [Oracle Universal Installer インベントリ用の UNIX グループ名](#)
- [Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウント](#)
- [権限が付与されたグループの UNIX グループ名](#)

注意： 同じホストに Oracle Collaboration Suite を追加でインストールする場合は、同じオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントを使用する必要があります。

Oracle Universal Installer インベントリ用の UNIX グループ名

admintool または groupadd ユーティリティを使用して、oinstall などのグループ名を作成します。oinstall グループは、Oracle Universal Installer の oraInventory ディレクトリを所有します。インストールを実行する oracle ユーザー・アカウントでは、oinstall グループをプライマリ・グループに設定する必要があります。

注意： UNIX グループ名は 8 文字までです。それを超えると Oracle Calendar Configuration Assistant は失敗します。

これらのユーティリティの詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウント

oracle アカウントは、システムの Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウントです。このアカウントを使用して Oracle Universal Installer を実行する必要があります。

表 2-17 に示すプロパティで oracle アカウントを作成します。

表 2-17 Oracle アカウントのプロパティ

変数	プロパティ
ログイン名	アカウントにアクセスする名前を選択します。このマニュアルでは、この名前を oracle アカウントと呼びます。
グループ識別子	このマニュアルでは、oinstall グループを使用します。
ホーム・ディレクトリ	他のユーザーのホーム・ディレクトリと一貫性のあるホーム・ディレクトリを選択します。
ログイン・シェル	デフォルトのシェルは、C、Bourne または Korn シェルのいずれかです。

注意： oracle アカウントは、Oracle ソフトウェアのインストールおよびメンテナンスにのみ使用します。Oracle Universal Installer と関係のない目的でこのアカウントを使用しないでください。root を oracle アカウントとして使用しないでください。

権限が付与されたグループの UNIX グループ名

Oracle9iAS Infrastructure のインストールおよび Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストールには、権限が付与された次の 2 つのグループが必要です。

- データベース・オペレータ・グループ
- データベース管理者グループ

Oracle Collaboration Suite のインストールでは、これらの権限が付与されたグループは必要ありません。

Oracle のマニュアルでは、これらのグループをそれぞれ OSOPER および OSDBA と呼びます。データベースでは、オペレーティング・システムの認証にこれらのグループが使用されます。この動作は、データベースが停止し、データベースの認証が使用不可の場合に必要です。

これらのグループの権限は、単一の UNIX グループ、または対応する 2 つの UNIX グループのいずれかに付与されます。権限を付与するグループを選択するには、次の 2 つの方法があります。

- Oracle Universal Installer の起動前に oracle アカウントが dba グループのメンバーである場合、dba には OSOPER および OSDBA の両方の権限が付与されます。
- oracle アカウントが dba グループのメンバーでない場合、Oracle Universal Installer は、これらの権限を付与するグループ名を要求します。

表 2-18 に、OSOPER および OSDBA グループの権限を示します。

表 2-18 OSOPER および OSDBA グループの権限

グループ	権限
OSOPER	ユーザーに STARTUP、SHUTDOWN、ALTER DATABASE OPEN/MOUNT、ALTER DATABASE BACKUP、ARCHIVE LOG および RECOVER の実行を許可します。また、RESTRICTED SESSION 権限が含まれます。
OSDBA	ADMIN OPTION および OSOPER ロールを含むすべてのシステム権限が含まれます。CREATE DATABASE および時間ベースのリカバリを許可します。

Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の Real Application Clusters

Real Application Clusters をインストールするには、次のインストール前手順を実行します。

関連項目： Real Application Clusters のインストール前手順の詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』を参照してください。このマニュアルは、次の URL の Oracle Technology Network Japan で入手可能です。

<http://otn.oracle.co.jp/>

Real Application Clusters をインストールする場合に root ユーザーとして実行する手順

1. root ユーザーとしてログインします。
2. クラスタ内のすべてのノードの /etc/group ファイルに OSDBA グループが定義されていることを確認します。単一のデータベースにアクセスする UNIX クラスタのすべてのノードで、OSDBA グループの名前と数、および OSOPER グループ（指定する場合）が同じである必要があります。OSDBA グループのデフォルトの UNIX グループ名は、dba です。

3. クラスタの各ノード上に `oracle` アカウントを作成し、このアカウントを次のとおり設定します。
 - `ORAINVENTORY` グループをプライマリ・グループにします。
 - `dba` グループをセカンダリ・グループにします。
 - Oracle ソフトウェアのインストールおよび更新にのみ使用します。
 - リモート・ディレクトリへの書き込み権限を付与します。
4. Oracle ソフトウェアのディレクトリ構造の最上位として機能するように各ノード上にマウント・ポイント・ディレクトリを作成し、このディレクトリを次のとおり設定します。
 - 各ノード上のマウント・ポイントに第 1 ノードのマウント・ポイントと同じ名前を設定します。
 - `oracle` アカウントに、読取り、書き込みおよび実行権限を付与します。
5. `oracle` アカウントの `.rhosts` ファイル、または `/etc/hosts.equiv` ファイルのいずれかに、**Oracle Universal Installer** を実行するノード上のクラスタに含まれるすべてのノード（ローカル・ノードを含む）に対するエントリを追加し、ユーザー等価関係を設定します。
6. すべてのノード上で `oracle` ユーザーとしてリモート・コマンドを実行し、ユーザー等価関係を確認します。たとえば、次のように入力します。
 - Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) および Linux x86:

```
prompt> rsh another_host pwd
```
 - HP-UX PA-RISC (64-bit) :

```
prompt> remsh another_host pwd
```
7. すべてのノード間で小さいファイルをコピーして、RCP 等価関係を確認します。たとえば、次のように入力します。

```
prompt> rcp /tmp/dummy_file another_host:/tmp/dummy_file
```
8. これは、Oracle Universal Installer によってクラスタのすべての選択されたノード上に Oracle ソフトウェアをインストールするために必要な手順です。

Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)、HP-UX PA-RISC (64-bit) または Linux x86 に Real Application Clusters をインストールする場合に root ユーザーとして実行する追加手順

Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)、HP-UX PA-RISC (64-bit) または Linux x86 に Oracle Real Application Clusters をインストールする場合、root ユーザーとして追加手順を実行する必要があります。ご使用のプラットフォームに該当する項を参照してください。

追加の root ユーザー情報 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

1. Oracle Collaboration Suite Information Storage の CD-ROM セットのディスク 1 に含まれている、Sun Cluster ソフトウェア用の Oracle パッチを適用します。パッチをインストールするには、CD-ROM の `racpatch` ディレクトリに含まれている `README.udlm` ファイルに記載された説明に従ってください。このパッチによって、Oracle Real Application Clusters をインストールする前に必要な Cluster Membership Monitor (CMM) が提供されます。

2. Cluster Management Software を再起動し、CMM を起動します。

- a. 最初のノードに対して次のコマンドを入力します。

```
prompt> cd /opt/SUNWcluster/bin
prompt> scadmin startcluster cluster_name
```

- b. クラスタの他の各ノードに対して次のコマンドを実行します。

```
prompt> cd /opt/SUNWcluster/bin
prompt> scadmin startnode cluster_name
```

関連項目： `scadmin` コマンドの詳細は、Sun Cluster 3.0 のドキュメントを参照してください。

追加の root ユーザー情報 (HP-UX PA-RISC (64-bit))

次のコマンドを入力し、MC/ServiceGuard を起動します。

```
prompt> /usr/sbin/cmrunc1
```

関連項目：

- Oracle Real Application Clusters の構成の詳細は、HP 社の『Configuring OPS Clusters with MC/ServiceGuard OPS Edition』を参照してください。
- Hyper Messaging Protocol (HMP) を使用した Oracle Real Application Clusters のメモリー要件、インストールおよびインストール後に発生するいくつかの問題については、Oracle Technology Network Japan で入手可能な『Oracle9i for HP-UX PA-RISC リリース・ノート, リリース 2 (9.2.0.1.0)』を参照してください。

追加の root ユーザー情報 (Linux x86)

1. CONFIG_WATCHDOG_NOWAYOUT パラメータを Y に設定します。このパラメータは、ほとんどのカーネルで、デフォルトで Y に設定されています。詳細は、Linux x86 の共通ドキュメントを参照してください。

2. 適切なマージンを設定して watchdog モジュールをロードします。

```
insmod softdog soft_margin=10
```

関連項目： soft_margin の値を計算する方法については、Oracle Technology Network Japan で入手可能な『Oracle9i for UNIX Systems 管理者リファレンス, リリース 2 (9.2.0.1.0)』を参照してください。

3. 各ノード上の /etc/hosts ファイルに必要な情報を追加します。次の情報（ローカル・ノードのパブリック IP アドレスのエントリおよびローカル・ノードを含む各ノードのプライベート IP アドレスのエントリ）が示されている必要があります。

```
public_IP_address local_hotname_with_domain local_hostname_alias
private_IP_address cluster_node_private_hostname
private_IP_address cluster_node1_private_hostname
private_IP_address cluster_node2_private_hostname
.....
```

4. 共有ストレージに 4MB の RAW パーティションを作成します。このパーティションは、Oracle Cluster Manager によって quorum パーティションとして使用されます。クラスターの各サーバー上のこのパーティションを、/dev/raw1 などの同じデバイスにバインドします。

Real Application Clusters をインストールする場合に oracle ユーザーとして実行する手順

1. oracle アカウントとしてログインします。
- HP-UX PA-RISC (64-bit) でインストール前の手順を実行する場合は、次のコマンドを入力し、MC/ServiceGuard が実行されていることを確認します。
- prompt> /usr/sbin/cmviewcl
2. Cluster Membership Monitor (CMM) が実行されていることを確認します。表 2-19 に、各プラットフォームに対する適切なコマンドを示します。

表 2-19 Cluster Membership Monitor が実行されていることを確認するためのコマンド

プラットフォーム	コマンド
Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)	<div>prompt> ps -ef grep clustd</div> <div><ul style="list-style-type: none">■ プロセス・リストに clustd プログラムが表示された場合は、clustd が実行されています。■ プロセス・リストに clustd プログラムが表示されない場合は、Cluster Membership Monitor を再起動します。</div>
HP-UX PA-RISC (64-bit)	<div>prompt> /usr/sbin/cmviewcl</div>
Linux x86	<div>prompt> ps -efl egrep 'watchdogd oracm'</div> <div><ul style="list-style-type: none">■ プロセス・リストにすべての watchdogd および oracm プログラムが表示された場合は、Oracle Cluster Management Software が実行されています。■ プロセス・リストに watchdogd および oracm プログラムが表示されない場合は、Oracle Cluster Management Software を再起動します。</div>

3. クラスタの各ノードへのリモート・ログイン (rlogin) を実行し、oracle アカウントのユーザー等価関係を確認します。
- パスワードを入力するよう要求された場合、oracle アカウントにはユーザー等価関係が存在しません。クラスタに含まれるすべてのノード上の oracle ユーザーに同じ属性が付与されていることを確認します。Oracle Universal Installer では、rcp コマンドを使用して、ユーザー等価関係が存在しないリモート・ディレクトリに Oracle 製品をコピーすることはできません。
- ユーザー等価関係を設定していない場合は、2-22 ページの「[Real Application Clusters をインストールする場合に root ユーザーとして実行する手順](#)」に示す手順 6 を実行する必要があります。

4. データベース・サーバー構成の情報リポジトリとして、1つ以上の共有構成ファイルを作成します。プラットフォームで Cluster File System がサポートされている場合、この手順はスキップします。

Server Management (SRVM) 構成に 100MB 以上の共有 RAW デバイスを作成します。Oracle Universal Installer の「共有構成ファイル名」ページで、この共有ファイルの名前を入力するよう要求されます。または、環境変数 SRVM_SHARED_CONFIG を、Oracle Universal Installer によって構成ファイルの取出しが可能な共有 RAW デバイスのフルパス名に設定します。

関連項目： 共有構成ファイルの設定の詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』を参照してください。

Linux x86 への Real Application Clusters のインストール

Real Application Clusters をインストールする前に、Oracle Cluster Manager をインストールする必要があります。Real Application Clusters は、Oracle Cluster Manager がインストールされているのと同じ \$ORACLE_HOME にインストールします。

Oracle Cluster Manager をインストールするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Collaboration Suite Information Storage の CD のディスク 1 にある cluster_manager サブディレクトリに移動します。
2. Oracle Universal Installer を起動します。
3. Oracle Real Application Clusters オプションのインストール先の Oracle ホーム・ディレクトリを入力します。
4. 「インストールする製品の選択」画面から製品名「**Oracle Cluster Manager**」を選択します。
5. 「Private Node Names Information」画面でプライベート・ノード名のリストを入力します。
6. 「Public Node Names Information」画面でパブリック・ノード名のリストを入力します。

これによって、ノードに Oracle Cluster Manager がインストールされます。インストールが完了すると、インストールで選択されたクラスタのすべてのノード上で、root ユーザーとして cmstart.sh スクリプトを実行するかどうかを確認する画面が表示されます。このスクリプトの実行後、すべてのノード上で Oracle Cluster Manager が起動されます。

Oracle Cluster Manager のインストール後、Oracle Universal Installer を再起動し、必要に応じて、他の Oracle コンポーネントをインストールします。

関連項目： Oracle Cluster Manager を起動および構成する方法の詳細は、『Oracle9i for UNIX Systems 管理者リファレンス, リリース 2 (9.2.0.1.0)』を参照してください。

Oracle9iAS Infrastructure に対するカーネル・パラメータの構成

Oracle9iAS Metadata Repository のインストールでは、システムのカーネル・パラメータを構成する必要があります。この要件を満たすことは、本番環境で特に重要です。カーネル・パラメータの設定を再確認し、Oracle9iAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory の要件を満たしていることを確認します。これらの要件を満たしていない場合、インストール中のエラーまたはインストール後の操作エラーが発生する場合があります。

カーネルの設定を変更した場合、カーネルの変更を有効にするにはシステムを再起動する必要があります。

ご使用のプラットフォームに該当するカーネル・パラメータの表を参照してください。

- [カーネル・パラメータ設定 \(Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\)\)](#)
- [カーネル・パラメータ設定 \(HP-UX PA-RISC \(64-bit\)\)](#)
- [カーネル・パラメータ設定 \(Linux x86\)](#)

カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) の場合、ipcs コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリおよびセマフォ・セグメント、およびそれらの識別番号と所有者のリストを取得します。

バックアップ・コピーの作成後、vi などのテキスト・エディタを使用して、/etc/system ファイルのカーネル・パラメータ設定を変更します。すでに他のプログラム用のカーネルを Oracle9i で必要なレベル以上に変更している場合は、その設定を変更しないでください。レベルが低すぎる場合は、表に示すレベル以上になるように変更します。設定を変更した場合は、/etc/system ファイルを保存し、システムを再起動します。

例 2-1 /etc/system への設定例 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

```
set shmsys:shminfo_shmmax=4294967295
set shmsys:shminfo_shmmin=1
set shmsys:shminfo_shmmni=100
set shmsys:shminfo_shmseg=10

set semsys:seminfo_semmni=100
set semsys:seminfo_semmns=256
set semsys:seminfo_semsl=256
set semsys:seminfo_semmu=4096

set rlim_fd_max=1024
set rlim_fd_cur=1024
```


表 2-20 に、カーネルおよびデフォルト設定を示します。

表 2-20 カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

カーネル	設定	定義
rlim_fd_cur	1024	各プロセス用のオープン・ファイルの数。
rlim_fd_max	4117	各プロセス用のオープン・ファイルの最大数。
semnmi	554	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
semnms	1024	システム上のセマフォの最大数。この設定値は、初回のインストールにのみ適用される最小推奨値です。 semnms パラメータは、各 Oracle データベースの initsid.ora PROCESSES パラメータの値を合計し、その値にこのパラメータの最大値の 2 倍を加え、さらに各データベースごとに 10 を加えた値に設定する必要があります。
semmsl	256	初回のインストールにのみ適用される最小推奨値。 semmsl パラメータは、システム上に存在するすべての Oracle データベースの initsid.ora PROCESSES パラメータの最大値に 10 を加えた値に設定する必要があります。
semopm	12	1 回の semop のコールに対するシステム V セマフォ操作の最大数。このパラメータは、semop のシステム・コールに対して指定される sops 配列内の sembufs の数を参照します。
semume	42	任意の 1 つのプロセスで使用可能なシステム V セマフォの UNDO 構造体の最大数。
semvmx	32767	セマフォの最大値。
semaem	16384	UNDO 構造体内のセマフォの値に設定可能な最大値。
shmmax	4294967295	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。 (4294967295=4GB)
shmmn	1	単一の共有メモリー・セグメントの最小許容サイズ。
shmmni	117	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
shmseg	17	1 つのプロセスで追加可能な共有メモリー・セグメントの最大数。
msgmni	3774	メッセージ・キュー識別子の最大数。

表 2-20 カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)) (続き)

カーネル	設定	定義
msgmax	4096	最大メッセージ・サイズ。
msgmnb	360000	メッセージ・キューの最大バイト数。
msgtql	2500	メッセージ・ヘッダーの最大数。

カーネル・パラメータ設定 (HP-UX PA-RISC (64-bit))

HP-UX PA-RISC (64-bit) の場合、System Administrator's Menu (SAM) を使用して、アプリケーションに必要な HP-UX PA-RISC (64-bit) カーネルを構成できます。表 2-21 に示すパラメータは、HP-UX PA-RISC (64-bit) 上で Oracle Collaboration Suite の一般的なインスタンスを実行する一般ユーザーのための推奨値です。アプリケーションの要件および作業中のシステムの種類に応じて値を変更する必要がある場合があります。表 2-21 を参照し、システムの共有メモリーおよびセマフォのカーネル・パラメータが Oracle Collaboration Suite 用に正しく設定されているかどうかを確認します。ipcs コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリーとセマフォ・セグメント、およびそれらの識別番号と所有者のリストを取得します。

表 2-21 に示すパラメータは、HP-UX PA-RISC (64-bit) 上で Oracle Collaboration Suite を実行する場合の推奨値です。

表 2-21 に、カーネルおよびデフォルト設定を示します。

表 2-21 カーネル・パラメータ設定 (HP-UX PA-RISC (64-bit))

カーネル	パラメータ設定	定義
ksi_alloc_max	(nproc * 8)	割当て可能なキュー信号のシステム全体での制限。
max_thread_proc	256	各プロセスに使用可能なカーネル・スレッドの最大数。アプリケーションの要求に応じて、値を増やす必要がある場合があります。デフォルト値または小さい値に設定すると、特定のアプリケーションでメモリー不足エラーが発生する場合があります。
maxdsiz	1073741824 bytes	32 ビット・システムでの最大データ・セグメント・サイズ (バイト)。この値の設定値が小さすぎると、プロセスでメモリー不足が発生する場合があります。
maxdsiz_64	2147483648 bytes	64 ビット・システムでの最大データ・セグメント・サイズ (バイト)。この値の設定値が小さすぎると、プロセスでメモリー不足が発生する場合があります。

表 2-21 カーネル・パラメータ設定（HP-UX PA-RISC（64-bit））（続き）

カーネル	パラメータ設定	定義
maxssiz	134217728 bytes	32 ビット・システムでの最大スタック・セグメント・サイズ（バイト）。
maxssiz_64BIT	1073741824	64 ビット・システムでの最大スタック・セグメント・サイズ（バイト）。
maxswapchunks	16384	スワップ・チャンクの最大数。ここで、swchunk はスワップ・チャンク・サイズ（1KB ブロック）です。swchunk は、デフォルトで 2048 です。システム上に構成可能なスワップ領域の最大容量を指定します。
maxuprc	3686	ユーザー・プロセスの最大数。
msgmap	6598	メッセージ・マップ・エントリの最大数。
msgmni	6846	メッセージ・キュー識別子の数。
msgseg	32767	メッセージに使用可能なセグメントの数。
msgtql	6596	メッセージ・ヘッダーの数。
ncallout	(nproc + 16)	保留中のタイムアウトの最大数。
ncsize	((8 * nproc + 2048) + vx_ncsize)	i ノードに必要なディレクトリ名検索キャッシュ（DNLC）領域。vx_ncsize は、デフォルトで 1024 です。
nfile	1634888	オープン・ファイルの最大数。
nflocks	4096	システム上で使用可能なファイル・ロックの最大数。
ninode	(8 * nproc + 2048)	オープン i ノードの最大数。
nkthread	10034	システムによってサポートされるカーネル・スレッドの最大数。
nproc	4195	プロセスの最大数。
semmap	4098	セマフォ・マップ・エントリの最大数。
semmni	4138	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
semmns	8360	システム上のセマフォの最大数。semmns のデフォルト値は 128 ですが、ほとんどの場合、Oracle Collaboration Suite ソフトウェアには小さすぎます。

表 2-21 カーネル・パラメータ設定（HP-UX PA-RISC（64-bit））（続き）

カーネル	パラメータ設定	定義
semnu	4092	セマフォの UNDO 構造体の数。
semvmx	32768	セマフォの最大値。
shmmax	4294967295	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。shmmax は、共有メモリー・セグメントに SGA 全体を保持することが可能な値を設定する必要があります。設定値が小さい場合、複数の共有メモリー・セグメントが作成され、パフォーマンスが低下する場合があります。
shmmni	530	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
shmseg	32	1 つのプロセスで追加可能な共有メモリー・セグメントの最大数。
vps_ceiling	64	システムで選択されたページ・サイズの最大値（KB）。
maxfiles	2048	プロセスごとの弱いファイル制限。
maxfiles_lim	3861	プロセスごとの強いファイル制限。
msgmax	32767	最大メッセージ・サイズ。
msgmnb	65535	メッセージ・キューの最大バイト数。
msgssz	159	メッセージ・セグメント・サイズ。
semume	42	プロセスごとのセマフォの UNDO エントリ数。

カーネル・パラメータ設定（Linux x86）

Linux x86 の場合、ipcs コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリーとセマフォ・セグメント、およびこれらの識別番号と所有者のリストを取得します。/proc ファイル・システムを使用して、カーネル・パラメータを変更できます。/proc ファイル・システムを使用してカーネル・パラメータを変更するには、次の手順を実行します。

- 1. root ユーザーとしてログインします。
- 2. /proc/sys/kernel ディレクトリに移動します。

3. `cat` または `more` ユーティリティを使用して、`sem` ファイルの現行のセマフォ・パラメータ値を確認します。たとえば、`cat` ユーティリティを使用して、次のコマンドを入力します。

```
prompt> cat sem
```

`semmsl`、`semmns`、`semopm` および `semmni` パラメータの値が、それぞれ次の例に示すように出力されます。

```
250 32000 32 128
```

4. 次のコマンド構文を使用して、パラメータ値を変更します。

```
prompt> echo semmsl_value semmns_value semopm_value semmni_value > sem
```

前述の例に示す入力順序で、パラメータ変数をシステムの値に置き換えます。次に例を示します。

```
prompt> echo 250 32000 100 142 > sem
```

5. `cat` または `more` ユーティリティを使用して、現行の共有メモリー・パラメータを再確認します。たとえば、`cat` ユーティリティを使用して、次のコマンドを入力します。

```
prompt> cat shared_memory_parameter
```

前述の例で、変数 `shared_memory_parameter` は、`shmmax` または `shmmni` パラメータのいずれかになります。パラメータ名は、小文字で入力する必要があります。

6. `echo` ユーティリティを使用して、共有メモリー・パラメータを変更します。次に例を示します。

`shmmax` パラメータを変更する場合：

```
prompt> echo 4294967295 > shmmax
```

`shmmni` パラメータを変更する場合：

```
prompt> echo 4096 > shmmni
```

`shmall` パラメータを変更する場合：

```
prompt> echo 3279547 > shmall
```

7. システムの起動中にこれらの値を初期化するスクリプトを作成し、システムの初期化ファイルにこのスクリプトを含めます。

関連項目： スクリプト・ファイルおよび初期化ファイルの詳細は、システム・ベンダーのドキュメントを参照してください。

8. 次のコマンドを使用して、ファイル処理を設定します。

```
prompt> echo 65536 > /proc/sys/fs/file-max
prompt> ulimit -n 65536
```

9. ソケットを /proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range に設定します。

```
prompt> echo 10000 65000 > /proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range
```

10. ulimit -u を使用して、プロセスを設定します。これによって、各ユーザーのプロセス数を取得できます。次に例を示します。

```
ulimit -u 16384
```

表 2-22 に、Linux x86 上で Oracle Collaboration Suite を実行するために必要な最小値を示します。

表 2-22 カーネル・パラメータ設定 (Linux x86)

カーネル	パラメータ設定	定義
semnmi	142	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
semms	32000	システム上のセマフォの最大数。この設定値は、初回のインストールにのみ適用される最小推奨値です。semms パラメータは、各 Oracle データベースの initsid.ora PROCESSES パラメータの値を合計し、その値にこのパラメータの最大値の 2 倍を加え、さらに各データベースごとに 10 を加えた値に設定する必要があります。
semopm	100	1 回の semop のコールに対する操作の最大数。
semmsl	250	初回のインストールにのみ適用される、各 ID に対するセマフォの最小推奨数。semmsl パラメータは、システム上に存在するすべての Oracle データベースの initsid.ora PROCESSES パラメータの最大値に 10 を加えた値に設定する必要があります。
shmmax	4294967295	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。SMP カーネルの場合は、2GB です。推奨サイズは、RAM の半分のサイズです。
shmmni	4096	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
shmall	3279547	使用可能な共有メモリーの合計。
msgmni	2878	メッセージ・キュー識別子の数。

表 2-22 カーネル・パラメータ設定 (Linux x86) (続き)

カーネル	パラメータ設定	定義
msgmax	8192	最大メッセージ・サイズ。
msgmnb ¹	65535	メッセージ・キューの最大バイト数。
file-max	327679	最大ファイル数。

Oracle Collaboration Suite に対するカーネル・パラメータの構成

Oracle Collaboration Suite のインストールでは、システムのカーネル・パラメータを構成する必要があります。この要件を満たすことは、本番環境で特に重要です。カーネル・パラメータの設定を再確認し、Oracle Collaboration Suite の要件を満たしていることを確認します。これらの要件を満たしていない場合、インストール中のエラーまたはインストール後の操作エラーが発生する場合があります。

カーネル・パラメータの設定を変更した場合、カーネルの変更を有効にするにはシステムを再起動する必要があります。

ご使用のプラットフォームに該当するカーネル・パラメータの表を参照してください。

- [カーネル・パラメータ設定 \(Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\)\)](#)
- [カーネル・パラメータ設定 \(HP-UX PA-RISC \(64-bit\)\)](#)
- [カーネル・パラメータ設定 \(Linux x86\)](#)

カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) の場合、`ipcs` コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリおよびセマフォ・セグメント、およびそれらの識別番号と所有者のリストを取得します。

バックアップ・コピーの作成後、`vi` などのテキスト・エディタを使用して、`/etc/system` ファイルのカーネル・パラメータ設定を変更します。すでに他のプログラム用のカーネルを Oracle9i で必要なレベル以上に変更している場合は、その設定を変更しないでください。レベルが低すぎる場合は、表に示すレベル以上になるように変更します。設定を変更した場合は、`/etc/system` ファイルを保存し、システムを再起動します。

例 2-2 `/etc/system` への設定例 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

```
set shmsys:shminfo_shmmax=4294967295
set shmsys:shminfo_shmmin=1
set shmsys:shminfo_shmmni=100
set shmsys:shminfo_shmseg=10

set semsys:seminfo_semmni=100
```

```
set semsys:seminfo_semms=256
set semsys:seminfo_semmsl=256
set semsys:seminfo_semnu=4096

set rlim_fd_max=1024
set rlim_fd_cur=1024
```

表 2-23 に、カーネル・パラメータおよび最小推奨値を示します。

表 2-23 カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

カーネル	設定	定義
rlim_fd_cur	1024	各プロセス用のオープン・ファイルの数。
rlim_fd_max	4117	各プロセス用のオープン・ファイルの最大数。
semnmi	554	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
semms	1024	システム上のセマフォの最大数。この設定値は、初回のインストールにのみ適用される最小推奨値です。 semms パラメータは、各 Oracle データベースの <code>initsid.ora PROCESSES</code> パラメータの値を合計し、その値にこのパラメータの最大値の 2 倍を加え、さらに各データベースごとに 10 を加えた値に設定する必要があります。
semmsl	256	初回のインストールにのみ適用される最小推奨値。 semmsl パラメータは、システム上に存在するすべての Oracle データベースの <code>initsid.ora PROCESSES</code> パラメータの最大値に 10 を加えた値に設定する必要があります。
shmmax	4294967295	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。4GB = 4294967295 バイトです。
shmmni	1	単一の共有メモリー・セグメントの最小許容サイズ。
shmmin	117	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
shmseg	17	1 つのプロセスで追加可能な共有メモリー・セグメントの最大数。
msgmni	3774	メッセージ・キュー識別子の最大数。
msgmax	4096	最大メッセージ・サイズ。
msgmnb	360000	メッセージ・キューの最大バイト数。
msgtql	2500	メッセージ・ヘッダーの最大数。

カーネル・パラメータ設定（HP-UX PA-RISC（64-bit））

HP-UX PA-RISC（64-bit）の場合、System Administrator's Menu（SAM）を使用して、アプリケーションに必要な HP-UX PA-RISC（64-bit）カーネルを構成できます。表 2-24 に示すパラメータは、HP-UX PA-RISC（64-bit）上で Oracle Collaboration Suite の一般的なインスタンスを実行する一般ユーザーのための推奨値です。アプリケーションの要件および作業中のシステムの種類に応じて値を変更する必要がある場合があります。表 2-24 を参照し、システムの共有メモリーおよびセマフォのカーネル・パラメータが Oracle Collaboration Suite 用に正しく設定されているかどうかを確認します。ipcs コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリーとセマフォ・セグメント、およびそれらの識別番号と所有者のリストを取得します。

表 2-24 に示すパラメータは、HP-UX PA-RISC（64-bit）上で Oracle Collaboration Suite を実行する場合の推奨最小値です。

表 2-24 カーネル・パラメータ設定（HP-UX PA-RISC（64-bit））

カーネル	パラメータ設定	定義
ksi_alloc_max	(nproc * 8)	割当て可能なキュー信号のシステム全体での制限。
max_thread_proc	256	各プロセスに使用可能なカーネル・スレッドの最大数。アプリケーションの要求に応じて、値を増やす必要がある場合があります。デフォルト値または小さい値に設定すると、特定のアプリケーションでメモリー不足エラーが発生する場合があります。
maxdsiz	1073741824 bytes	32 ビット・システムでの最大データ・セグメント・サイズ（バイト）。この値の設定値が小さすぎると、プロセスでメモリー不足が発生する場合があります。
maxdsiz_64	2147483648 bytes	64 ビット・システムでの最大データ・セグメント・サイズ（バイト）。この値の設定値が小さすぎると、プロセスでメモリー不足が発生する場合があります。
maxssiz	134217728 bytes	32 ビット・システムでの最大スタック・セグメント・サイズ（バイト）。
maxssiz_64BIT	1073741824	64 ビット・システムでの最大スタック・セグメント・サイズ（バイト）。
maxswapchunks	16384	スワップ・チャンクの最大数。ここで、swchunk はスワップ・チャンク・サイズ（1KB ブロック）です。swchunk は、デフォルトで 2048 です。システム上に構成可能なスワップ領域の最大容量を指定します。

表 2-24 カーネル・パラメータ設定 (HP-UX PA-RISC (64-bit)) (続き)

カーネル	パラメータ設定	定義
maxuprc	3686	ユーザー・プロセスの最大数。
msgmap	6598	メッセージ・マップ・エントリの最大数。
msgmni	6846	メッセージ・キュー識別子の数。
msgseg	32767	メッセージに使用可能なセグメントの数。
msgtql	6596	メッセージ・ヘッダーの数。
ncallout	(nproc + 16)	保留中のタイムアウトの最大数。
ncsize	((8 * nproc + 2048) + vx_ncsize)	i ノードに必要なディレクトリ名検索キャッシュ (DNLC) 領域。vx_ncsize は、デフォルトで 1024 です。
nfile	1634888	オープン・ファイルの最大数。
nflocks	4096	システム上で使用可能なファイル・ロックの最大数。
ninode	(8 * nproc + 2048)	オープン i ノードの最大数。
nkthread	10034	システムによってサポートされるカーネル・スレッドの最大数。
nproc	4195	プロセスの最大数。
semmap	4098	セマフォ・マップ・エントリの最大数。
semnmi	4138	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
semnms	8360	システム上のセマフォの最大数。semnms のデフォルト値は 128 ですが、ほとんどの場合、Oracle Collaboration Suite ソフトウェアには小さすぎます。
semnmu	4092	セマフォの UNDO 構造体の数。
semvmx	32768	セマフォの最大値。
shmmax	4294967295	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。shmmax は、共有メモリー・セグメントに SGA 全体を保持することが可能な値を設定する必要があります。設定値が小さい場合、複数の共有メモリー・セグメントが作成され、パフォーマンスが低下する場合があります。

表 2-24 カーネル・パラメータ設定（HP-UX PA-RISC（64-bit））（続き）

カーネル	パラメータ設定	定義
shmmni	530	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
shmseg	32	1つのプロセスで追加可能な共有メモリー・セグメントの最大数。
vps_ceiling	64	システムで選択されたページ・サイズの最大値（KB）。
maxfiles	2048	プロセスごとの弱いファイル制限。
maxfiles_lim	3861	プロセスごとの強いファイル制限。
msgmax	32767	最大メッセージ・サイズ。
msgmnb	65535	メッセージ・キューの最大バイト数。
msgssz	159	メッセージ・セグメント・サイズ。
semume	42	プロセスごとのセマフォの UNDO エントリ数。

カーネル・パラメータ設定（Linux x86）

Linux x86 の場合、ipcs コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリーとセマフォ・セグメント、およびこれらの識別番号と所有者のリストを取得します。/proc ファイル・システムを使用して、カーネル・パラメータを変更できます。/proc ファイル・システムを使用してカーネル・パラメータを変更するには、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. /proc/sys/kernel ディレクトリに移動します。
3. cat または more ユーティリティを使用して、sem ファイルの現行のセマフォ・パラメータ値を確認します。たとえば、cat ユーティリティを使用して、次のコマンドを入力します。

```
prompt> cat sem
```

semmsl、semnms、semopm および semmni パラメータの値が、それぞれ次の例に示すように出力されます。

```
250 32000 32 128
```

4. 次のコマンド構文を使用して、パラメータ値を変更します。

```
prompt> echo semmsl_value semmns_value semopm_value semmni_value > sem
```

前述の例に示す入力順序で、パラメータ変数をシステムの値に置き換えます。次に例を示します。

```
prompt> echo 250 32000 100 142 > sem
```

5. cat または more ユーティリティを使用して、現行の共有メモリー・パラメータを再確認します。たとえば、cat ユーティリティを使用して、次のコマンドを入力します。

```
prompt> cat shared_memory_parameter
```

前述の例で、変数 `shared_memory_parameter` は、`shmmax` または `shmmni` パラメータのいずれかになります。パラメータ名は、小文字で入力する必要があります。

6. echo ユーティリティを使用して、共有メモリー・パラメータを変更します。次に例を示します。

shmmax パラメータを変更する場合：

```
prompt> echo 4294967295 > shmmax
```

shmmni パラメータを変更する場合：

```
prompt> echo 4096 > shmmni
```

shmall パラメータを変更する場合：

```
prompt> echo 3279547 > shmall
```

7. システムの起動中にこれらの値を初期化するスクリプトを作成し、システムの初期化ファイルにこのスクリプトを含めます。

関連項目： スクリプト・ファイルおよび初期化ファイルの詳細は、システム・ベンダーのドキュメントを参照してください。

8. 次のコマンドを使用して、ファイル処理を設定します。

```
prompt> echo 65536 > /proc/sys/fs/file-max
```

```
prompt> ulimit -n 65536
```

9. ソケットを /proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range に設定します。

```
prompt> echo 10000 65000 > /proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range
```

10. `ulimit -u` を使用して、プロセスを設定します。これによって、各ユーザーのプロセス数を取得できます。次に例を示します。

```
ulimit -u 16384
```

表 2-25 に、Linux x86 上で Oracle Collaboration Suite を実行するために必要な最小値を示します。

表 2-25 カーネル・パラメータ設定 (Linux x86)

カーネル	パラメータ設定	定義
<code>semnmi</code>	142	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
<code>semmns</code>	32000	システム上のセマフォの最大数。この設定値は、初回のインストールにのみ適用される最小推奨値です。 <code>semmns</code> パラメータは、各 Oracle データベースの <code>initSID.ora</code> <code>PROCESSES</code> パラメータの値を合計し、その値にこのパラメータの最大値の 2 倍を加え、さらに各データベースごとに 10 を加えた値に設定する必要があります。
<code>semopm</code>	100	1 回の <code>semop</code> のコールに対する操作の最大数。
<code>semmsl</code>	250	初回のインストールにのみ適用される、各 ID に対するセマフォの最小推奨数。 <code>semmsl</code> パラメータは、システム上に存在するすべての Oracle データベースの <code>initSID.ora</code> <code>PROCESSES</code> パラメータの最大値に 10 を加えた値に設定する必要があります。
<code>shmmax</code>	4294967295	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。 <code>SMP</code> カーネルの場合は、2GB です。推奨サイズは、RAM の半分のサイズです。
<code>shmmni</code>	4096	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
<code>shmall</code>	3279547	使用可能な共有メモリーの合計。
<code>msgmni</code>	2878	メッセージ・キュー識別子の数。
<code>msgmax</code>	8192	最大メッセージ・サイズ。
<code>msgmnb</code>	65535	メッセージ・キューの最大バイト数。
<code>file-max</code>	327679	最大ファイル数。

Oracle Collaboration Suite Information Storage に対するカーネル・パラメータの構成

Oracle Collaboration Suite Information Storage は、プロセス間通信のために、共有メモリー、スワップ・メモリー、セマフォなどの UNIX リソースを広範囲にわたって使用します。パラメータの設定が Oracle Collaboration Suite Information Storage に対して不十分な場合は、インストールおよびインスタンスの起動中に問題が発生します。

メモリーに格納可能なデータの量が多いほど、データベースの動作が速くなります。また、メモリー内にデータを保持すると、UNIX カーネルによりディスクの I/O アクティビティが減少します。

カーネル・パラメータの設定を再確認し、Oracle Collaboration Suite Information Storage の要件を満たしていることを確認します。要件を満たしていない場合は、インストール中にエラーが発生するか、またはインストール後に操作エラーが発生する場合があります。Oracle Collaboration Suite Information Storage の一般的な環境に対して推奨されるカーネル・パラメータ要件を次に示します。

カーネル・パラメータを、アプリケーションの要件を満たすレベルにチューニング済の場合は、継続してそれらの値を使用します。カーネル設定を変更する場合は、カーネルの変更を有効にするためにシステムを再起動する必要があります。

ご使用のプラットフォームに該当するカーネル・パラメータの表を参照してください。

- [カーネル・パラメータ設定 \(Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\)\)](#)
- [カーネル・パラメータ設定 \(HP-UX PA-RISC \(64-bit\)\)](#)
- [カーネル・パラメータ設定 \(Linux x86\)](#)

カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) の場合、`ipcs` コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリーおよびセマフォ・セグメント、およびそれらの識別番号と所有者のリストを取得します。

バックアップ・コピーの作成後、`vi` などのテキスト・エディタを使用して、`/etc/system` ファイルのカーネル・パラメータ設定を変更します。すでに他のプログラム用のカーネルを Oracle Collaboration Suite Information Storage で必要なレベル以上に変更している場合は、その設定を変更しないでください。レベルが低すぎる場合は、表に示すレベル以上になるように変更します。設定を変更した場合は、`/etc/system` ファイルを保存し、システムを再起動します。

例 2-3 /etc/system への設定例 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

```
set shmsys:shminfo_shmmax=4294967295
set shmsys:shminfo_shmmin=1
set shmsys:shminfo_shmmni=100
set shmsys:shminfo_shmseg=10

set semsys:seminfo_semni=100
set semsys:seminfo_semms=256
set semsys:seminfo_semmsl=256
set semsys:seminfo_semmnu=4096

set rlim_fd_max=1024
set rlim_fd_cur=1024
```

表 2-26 に、Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) で Oracle Collaboration Suite Information Storage を実行するために必要な最小値を示します。

表 2-26 カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

カーネル	パラメータ設定	定義
rlim_fd_cur	1024	各プロセス用のオープン・ファイルの数。
rlim_fd_max	1024	各プロセス用のオープン・ファイルの最大数。
semni	100	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
semms	1024	システム上のセマフォの最大数。この設定値は、初回のインストールにのみ適用される最小推奨値です。 semms パラメータは、各 Oracle データベースの initsid.ora PROCESSES パラメータの値を合計し、その値にこのパラメータの最大値の 2 倍を加え、さらに各データベースごとに 10 を加えた値に設定する必要があります。
semmsl	256	初回のインストールにのみ適用される最小推奨値。semmsl パラメータは、システム上に存在するすべての Oracle データベースの initsid.ora PROCESSES パラメータの最大値に 10 を加えた値に設定する必要があります。
shmmax	4294967295	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。 4GB = 4294967295 バイトです。
shmmin	1	単一の共有メモリー・セグメントの最小許容サイズ。

表 2-26 カーネル・パラメータ設定 (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)) (続き)

カーネル	パラメータ設定	定義
shmmni	100	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
shmseg	10	1 つのプロセスで追加可能な共有メモリー・セグメントの最大数。

カーネル・パラメータ設定 (HP-UX PA-RISC (64-bit))

HP-UX PA-RISC (64-bit) の場合、System Administrator's Menu (SAM) を使用して、アプリケーションに必要な HP-UX PA-RISC (64-bit) カーネルを構成できます。表 2-27 に示すパラメータは、HP-UX PA-RISC (64-bit) 上で Oracle Collaboration Suite Information Storage の一般的な単一のインスタンスを実行する一般ユーザーのための推奨値です。アプリケーションの要件および作業中のシステムの種類に基づいて値を変更する必要がある場合があります。次の表を参照して、システムの共有メモリーおよびセマフォのカーネル・パラメータが Oracle Collaboration Suite Information Storage 用に正しく設定されているかどうかを確認します。ipcs コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリーとセマフォ・セグメント、およびそれらの識別番号と所有者のリストを取得します。

表 2-27 に示すパラメータ設定は、HP-UX PA-RISC (64-bit) 上で Oracle Collaboration Suite Information Storage を実行する場合の推奨値です。

表 2-27 カーネル・パラメータ設定 (HP-UX PA-RISC (64-bit))

カーネル	パラメータ設定	定義
ksi_alloc_max	(nproc * 8)	割当て可能なキュー信号のシステム全体での制限。
max_thread_proc	256	各プロセスに使用可能なカーネル・スレッドの最大数。アプリケーションの要求に応じて、値を増やす必要がある場合があります。デフォルト値または小さい値に設定すると、特定のアプリケーションでメモリー不足エラーが発生する場合があります。
maxdsiz	1073741824 bytes	32 ビット・システムでの最大データ・セグメント・サイズ (バイト)。この値の設定値が小さすぎると、プロセスでメモリー不足が発生する場合があります。
maxdsiz_64	2147483648 bytes	64 ビット・システムでの最大データ・セグメント・サイズ (バイト)。この値の設定値が小さすぎると、プロセスでメモリー不足が発生する場合があります。

表 2-27 カーネル・パラメータ設定（HP-UX PA-RISC（64-bit））（続き）

カーネル	パラメータ設定	定義
maxssiz	134217728 bytes	32 ビット・システムでの最大スタック・セグメント・サイズ（バイト）。
maxssiz_64bit	1073741824 bytes	64 ビット・システムでの最大スタック・セグメント・サイズ（バイト）。
maxswapchunk	16384	スワップ・チャンクの最大数。ここで、swchunk はスワップ・チャンク・サイズ（1KB ブロック）です。swchunk は、デフォルトで 2048 です。システム上に構成可能なスワップ領域の最大容量を指定します。
maxuprc	$(nproc * 9) / 10$	ユーザー・プロセスの最大数。
msgmap	$(msgtql + 2)$	メッセージ・マップ・エントリの最大数。
msgmni	nproc	メッセージ・キュー識別子の数。
msgseg	32767	メッセージに使用可能なセグメントの数。
msgtql	nproc	メッセージ・ヘッダーの数。
ncallout	$(nproc + 16)$	保留中のタイムアウトの最大数。
ncsize	$((8 * nproc + 2048) + vx_ncsize)$	i ノードに必要なディレクトリ名検索キャッシュ（DNLC）領域。 vx_ncsize は、デフォルトで 1024 です。
nfile	$(15 * nproc + 2048)$	オープン・ファイルの最大数。
nflock	4096	システム上で使用可能なファイル・ロックの最大数。
ninode	$(8 * nproc + 2048)$	オープン i ノードの最大数。
nkthread	$((nproc * 7) / 4) + 16$	システムによってサポートされるカーネル・スレッドの最大数。
nproc	4096	プロセスの最大数。
semmap	$(semnmi + 2)$	セマフォ・マップ・エントリの最大数。
semnmi	4138	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
semnms	8360	システム上のセマフォの最大数。semnms のデフォルト値は 128 ですが、ほとんどの場合、Oracle Collaboration Suite Information Storage には小さすぎます。

表 2-27 カーネル・パラメータ設定（HP-UX PA-RISC（64-bit））（続き）

カーネル	パラメータ設定	定義
semmnu	(nproc - 4)	セマフォの UNDO 構造体の数。
semmvx	32768	セマフォの最大値。
shmmax	4294967295	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。 shmmax は、共有メモリー・セグメントに SGA 全体を保持することが可能な値を設定する必要があります。設定値が小さい場合、複数の共有メモリー・セグメントが作成され、パフォーマンスが低下する場合があります。
shmmni	530	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
shmseg	32	1 つのプロセスで追加可能な共有メモリー・セグメントの最大数。
vps_ceiling	64	システムで選択されたページ・サイズの最大値 (KB)。

カーネル・パラメータ設定（Linux x86）

Linux x86 の場合、ipcs コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリー・セグメントとセマフォ・セット、およびこれらの識別番号と所有者のリストを取得します。

/proc ファイル・システムを使用してカーネル・パラメータを変更するには、次の手順を実行します。

- 1. root ユーザーとしてログインします。
- 2. /proc/sys/kernel ディレクトリに移動します。
- 3. cat または more ユーティリティを使用して、sem ファイルの現行のセマフォ・パラメータ値を確認します。たとえば、cat ユーティリティを使用して、次のコマンドを入力します。

```
prompt> cat sem
```

semmsl、semmns、semopm および semmni パラメータの値が、それぞれ次の例に示すように出力されます。

```
250 32000 32 128
```

4. 次のコマンド構文を使用して、パラメータ値を変更します。

```
prompt> echo semmsl_value semmns_value semopm_value semmni_value > sem
```

前述の例に示す入力順序で、パラメータ変数をシステムの値に置き換えます。次に例を示します。

```
prompt> echo 1000 32000 100 150 > sem
```

5. cat または more ユーティリティを使用して、現行の共有メモリー・パラメータを再確認します。たとえば、cat ユーティリティを使用して、次のコマンドを入力します。

```
prompt> cat shared_memory_parameter
```

前述の例で、変数 `shared_memory_parameter` は、`shmmax` または `shmmni` パラメータのいずれかになります。パラメータ名は、小文字で入力する必要があります。

6. echo ユーティリティを使用して、共有メモリー・パラメータを変更します。たとえば、`shmmax` パラメータを変更するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> echo 4294967295 > shmmax
```

7. echo ユーティリティを使用して、共有メモリー・パラメータを変更します。たとえば、`shmmni` パラメータを変更するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> echo 4096 > shmmni
```

8. echo ユーティリティを使用して、共有メモリー・パラメータを変更します。たとえば、`shmall` パラメータを変更するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> echo 2097152 > shmall
```

9. システムの起動中にこれらの値を初期化するスクリプトを作成し、システムの `init` ファイルにこのスクリプトを含めます。

関連項目： スクリプト・ファイルおよび `init` ファイルの詳細は、システム・ベンダーのドキュメントを参照してください。

10. `ulimit -n` および `/proc/sys/fs/file-max` を使用して、ファイル処理を設定します。

```
prompt> echo 65536 > /proc/sys/fs/file-max
prompt> ulimit -n 65536
```

11. ソケットを `/proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range` に設定します。

```
prompt> echo 1024 65000 > /proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range
```

12. ulimit -u を使用して、プロセスの制限を設定します。これによって、各ユーザーのプロセス数を取得できます。

```
ulimit -u 16384
```

表 2-28 に、Linux x86 上で Oracle Collaboration Suite Information Storage を実行するために必要な最小値を示します。

表 2-28 カーネル・パラメータ設定 (Linux x86)

カーネル	パラメータ設定	定義
semnmi	142	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
semmns	32000	システム上のセマフォの最大数。この設定値は、初回のインストールにのみ適用される最小推奨値です。 semmns パラメータは、各 Oracle データベースの <code>initsid.ora</code> PROCESSES パラメータの値を合計し、その値にこのパラメータの最大値の 2 倍を加え、さらに各データベースごとに 10 を加えた値に設定する必要があります。
semopm	100	1 回の <code>semop</code> のコールに対する操作の最大数。
semmsl	250	初回のインストールにのみ適用される最小推奨値。
shmmax	4294967295	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。SMP カーネルの場合は、2GB です。推奨サイズは、RAM の半分のサイズです。
shmmni	4096	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
shmall	3279547	使用可能な共有メモリーの合計。
msgmni	2878	メッセージ・キュー識別子の数。
msgmax	8192	最大メッセージ・サイズ。
msgmnb	65535	メッセージ・キューの最大バイト数。
file-max	327679	最大ファイル数。

単一コンピュータへの Oracle Collaboration Suite のインストール

より高いパフォーマンスを得るために、Oracle9iAS Infrastructure、Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースおよび Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をそれぞれ別のコンピュータにインストールすることをお薦めしていますが、Oracle Collaboration Suite を 1 台のコンピュータにインストールすることも可能です。単一コンピュータ・インストールの DVD は、Linux および Windows プラットフォーム用の CD パックに含まれています。その他のプラットフォームの場合は、CD パックの CD-ROM セットを使用して単一コンピュータ・インストールを実行できます。

関連項目：

<http://otn.oracle.com/software/products/cs/files/README.html>

Windows での単一コンピュータ・インストールについては、前述のファイルを参照してください。

http://otn.oracle.com/software/products/cs/files/readme_linux.html

Linux での単一コンピュータ・インストールについては、前述のファイルを参照してください。

注意： Oracle Web Conferencing Document Conversion Server および Voice Conversion Server は、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier とは別のコンピュータにインストールする必要があります。また、Oracle Web Conferencing Document Conversion Server および Voice Conversion Server は、それぞれ別のコンピュータにインストールすることをお薦めします。Oracle Web Conferencing Document Conversion Server および Voice Conversion Server はどちらも、Windows プラットフォーム上にインストールする必要があります。

関連項目： Oracle Web Conferencing Document Conversion Server および Voice Conversion Server のインストールの詳細は、『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』を参照してください。

第 II 部

Oracle Collaboration Suite インストールの手順

第 II 部では、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) をインストールするための詳細な手順について説明します。

第 II 部は、次の章で構成されています。

- [第 3 章「Oracle Collaboration Suite リリース 2 \(9.0.4.1\) へのアップグレード」](#)
- [第 4 章「Oracle Collaboration Suite の配置方法」](#)
- [第 5 章「インストールの開始」](#)
- [第 6 章「Oracle Collaboration Suite のインストール」](#)
- [第 7 章「Oracle Voicemail & Fax のインストールおよび構成」](#)
- [第 8 章「サイレント・インストールおよび非対話型インストール」](#)
- [第 9 章「Oracle Collaboration Suite コンポーネントの削除」](#)

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) へのアップグレード

この章では、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の既存のインストールおよび関連のコンポーネントを Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) にアップグレードするための手順について説明します。

アップグレードを正常に実行するための一連のイベントを次に示します。

1. 重要な情報のバックアップ
2. グローバリゼーション要件
3. Infrastructure のアップグレード
4. Information Store のアップグレード
5. Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier のインストール
6. アップグレード前のタスクの実行
7. Middle-Tier のアップグレード
8. アップグレード後のタスクの実行

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle インストールのバックアップ](#)
- [Oracle Collaboration Suite リリース 2 \(9.0.4.1\) での多言語サポートの有効化](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのアップグレード](#)
- [Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のアップグレード](#)
- [アップグレード後のタスク](#)
- [Oracle Collaboration Suite への CorporateTime Server 5.4 のアップグレード](#)
- [Oracle Calendar スタンドアロン外部から Oracle Collaboration Suite へのアップグレード](#)
- [Oracle Calendar スタンドアロン内部から Oracle Collaboration Suite へのアップグレード](#)
- [Oracle Collaboration Suite 以外の Infrastructure のアップグレード](#)

Oracle インストールのバックアップ

注意： ソフトウェアをアップグレードする前に、\$ORACLE_HOME のソフトウェア、データベース・ファイルおよび Oracle インベントリをバックアップしておくことをお勧めします。

関連項目： Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) のドキュメントを参照してください。次の URL の Oracle Technology Network で入手可能です。

<http://otn.oracle.co.jp/>

Oracle インストールをバックアップします。

1. Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Information Storage データベースをバックアップします。
2. Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Infrastructure をバックアップします。
3. Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier をバックアップします。
4. 8-3 ページの表 8-1 に示す該当のプラットフォームのディレクトリをバックアップします。
5. ユーザー unison としてログインし、/users/unison ディレクトリをバックアップして、Oracle Calendar をバックアップします。
6. oraInventory ディレクトリに存在する Oracle Universal Installer インベントリをバックアップします。
 - a. oraInventory サブディレクトリおよびその内容すべてを別のディレクトリにコピーします。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) での多言語サポートの有効化

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) では、表 3-1 に示すとおり、リリース 1 (9.0.3) の言語に加えてさらに 9 言語の翻訳をサポートしています。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) で多言語サポートを有効にするには、アップグレード・プロセスを実行する前に、リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier から ptlasst.csh スクリプトを実行します。このスクリプトは、次のディレクトリにあります。

注意：

- このスクリプトは、有効にする言語ごとに実行する必要があります。
 - すでに有効になっている言語は有効にできません。有効にしようとすると、Oracle9iAS Single Sign-On および Oracle9iAS Portal のリポジトリが破損します。リリース 1 (9.0.3) の 9 言語すべてを有効にしている場合は、再度それらの言語を有効にしないでください。通常、一般的なリリース 1 (9.0.3) のインストールでは、英語のみ、または 9 言語すべてが有効になっています。
-

```
$ORACLE_HOME/ora9ias/assistants/opca/
```

ptlasst.csh ファイルを次のように使用します。

```
$ORACLE_HOME/ora9ias/assistants/opca/ptlasst.csh -mode LANGUAGE -s portal -sp  
portal -o orasso -op orasso -c myhost.domain.com:1521:mySID -lang lang  
-available -silent- verbose -sso_c myhost.domain.com:1521:mySID
```

-available: ユーザー翻訳に使用可能な言語を判別します。

-c: ターゲット・データベースへの接続文字列。形式は、*hostname:port:SID* のようにする必要があります。

-o: Oracle9iAS Single Sign-On のスキーマ名。デフォルトは *orasso* です。

-op: Oracle9iAS Single Sign-On のパスワード。デフォルトは *orasso* です。

-lang: インストールする言語の言語コード。表 3-1 に各種言語とそのコードを示します。

-silent: Oracle9iAS Portal Configuration Assistant をサイレント・モードで実行します。デフォルトは TRUE です。

-sp: Oracle9iAS Portal スキーマのパスワード。デフォルトは *portal* です。

-sso_c: Oracle9iAS Single Sign-On がインストールされているターゲット・データベースへの接続文字列。形式は、*hostname:port:SID* のようにする必要があります。

-verbose: 詳細なロギング・モードを有効にします。ログ・ファイルにエラーがある場合でも、Oracle9iAS Portal Configuration Assistant のインストールは続行されます。このパラメータが設定されていない場合、ロギング情報は簡単なものになり、ORA-、PLS- または SP2 エラーが発生した場合、Oracle9iAS Portal Configuration Assistant はインストールを強制終了します。デフォルトは TRUE です。

次の識別名を使用して、Oracle Internet Directory から Oracle9iAS Portal および Oracle9iAS Single Sign-On のランダム化されたパスワードを取得できます。

```
OrclResourceName=PORTAL,orclReferenceName=sid.myhost.domain.com,cn=IAS
Infrastructure Databases,cn=IAS,cn=Products,cn=OracleContext
```

```
OrclResourceName=ORASSO,orclReferenceName=sid.myhost.domain.com,cn=IAS
Infrastructure Databases,cn=IAS,cn=Products,cn=OracleContext
```

表 3-1 に、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) によってサポートされている 18 の言語およびその言語コードを示します。

表 3-1 Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) でサポートされている言語

言語	コード	リリース 1 (9.0.3) でのサポート
アラビア語	ar	なし
ポルトガル語 (ブラジル)	ptb	あり
デンマーク語	dk	なし
オランダ語	nl	なし
フィンランド語	sf	なし
フランス語	f	あり
ドイツ語	d	あり
ギリシア語	el	なし
イタリア語	i	あり
日本語	ja	あり
韓国語	ko	あり
ノルウェー語	n	なし
ポルトガル語	pt	なし
中国語 (簡体字)	zhs	あり
スペイン語	e	あり
スウェーデン語	s	なし
中国語 (繁体字)	zht	あり
トルコ語	tr	なし

関連項目：『Oracle9iAS グローバリゼーション・サポート・ガイド』

Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード

Oracle Collaboration Suite レベルでの Oracle9iAS Infrastructure のアップグレードに加えて、Infrastructure は Oracle Email および Oracle9iAS Wireless のコンポーネント・レベルでもアップグレードする必要があります。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Collaboration Suite レベルでの Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure での Oracle Email のアップグレード](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure での Oracle9iAS Wireless のアップグレード](#)

Oracle Collaboration Suite レベルでの Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード

Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1、Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 または Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Infrastructure を Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.3 にアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.3 パッチ 3038037 を Infrastructure に適用します。
2. 次の表に示すファイルを、Oracle9iAS Infrastructure リリース 2 (9.0.4.1) のインストール用 CD-ROM の *CDROM_ROOT/tools/upgrade* ディレクトリから、アップグレードする Infrastructure の Oracle ホーム・ディレクトリ内の指定されたターゲット・ディレクトリにコピーします。

ファイル	ターゲット・ディレクトリ
modDirectiveMS.xsd	\$ORACLE_HOME/dcm/config/plugins/apache
mod_fastcgi.so	\$ORACLE_HOME/Apache/Apache/libexec
mod_osso.so	\$ORACLE_HOME/Apache/Apache/libexec
opca.jar	\$ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/WEB-INF/lib
portalsMI.jar	\$ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/WEB-INF/lib
repository.jar	\$ORACLE_HOME/jlib

3. Oracle9iAS Portal のパッチ 2513540 を適用します。

Oracle9iAS Portal パッチ 2513540 をオラクル社カスタマ・サポート・センターより取得してください。

次の手順に従って、このパッチを適用します。

- a. ファイルの内容を一時ディレクトリに解凍します。このファイルには次のファイルが含まれています。

- secapi.pks
- secapi.pkb
- secapip.pks
- secapip.pkb
- secoid.pks
- secoid.pkb
- secoid.pkb
- secrmoid.sql
- recompile.sql
- ssooidd.sql

- b. パッチを適用するためのシステム停止時間をスケジュールします (Infrastructure のリポジトリ・データベースを除くすべての Infrastructure プロセスを停止します)。これは、パッチの適用中にどのユーザーにも Oracle9iAS Portal にアクセスさせないためです。

- c. 次の例のように、SQL*Plus を使用して Oracle9iAS Portal スキーマの所有者としてログインします。

```
sqlplus portal/portal_schema_password
```

- d. SQL*Plus シェルで、次のコマンドを実行します。

```
set define off
```

- e. 次の順序でファイルをコンパイルします。

- @secapi.pks
- @secapip.pks
- @secoid.pks
- @secapi.pkb

- @secapip.pkb
- @secoid.pkb
- @secoidd.pkb

- f. 前述のファイルのコンパイルにより、一部の依存スキーマ・オブジェクトが無効になります。次のスクリプトを使用して、これらのオブジェクトを再コンパイルします。

注意： このスクリプトの実行には、数分かかります。

@recompile.sql

- g. 手順 b で停止したすべての Infrastructure プロセスを再起動します。
4. Oracle Delegated Administration Services を使用して、orclguest ユーザーを作成します。

注意： デフォルトのサブスクライバに新規ユーザーを作成するには、十分な権限が必要です。

- a. ユーザーを作成する権限を持ったユーザーとして Oracle Delegated Administration Services にログインします。
- b. 「ディレクトリ」タブをクリックします。
- c. 「検索結果」セクションで、「作成」をクリックします。
- d. 構成によって、「ユーザーの作成」ページで入力を要求される値は異なります。この場合、**ユーザー名**の値は orclguest である必要があります。必要に応じて、他の値を入力します。すべての必須フィールドが入力されていることを確認します。
- e. 「送信」をクリックします。
5. Oracle Directory Manager を使用して次の手順を完了し、orclguest ユーザーのプロビジョニングを完了します。
 - a. デフォルトのレルムの DN を検索します。

Oracle Directory Manager を使用し、cn=orcladmin としてログインします。「エントリ管理」セクションで、cn=common,cn=products,cn=oraclecontext エントリへ移動します。orcldefaultsubscriber 属性の値はデフォルトのレルムの DN です。

- b. orclquest ユーザー・エントリの DN を検索します。

Oracle Directory Manager を使用し、デフォルトのレルムの DN の下にある `cn=common,cn=products,cn=oraclecontext,default_realm_DN` エントリへ移動します。orclcommonusersearchbase 属性の値はユーザー検索ベースの DN です。

この DN へ移動します。orclquest ユーザー・エントリは、この DN の下のサブツリー（ほとんどの場合、ユーザー検索ベースより 1 つ下のレベル）に存在します。このユーザーの完全な DN を書きとめます。

- c. orclquest ユーザーのデフォルトのプロファイル・グループを OCS_PORTAL_USERS に設定します。

orclquest ユーザーのエントリで、orclquest ユーザーの DN の「プロパティの表示」から「すべて」を選択します。orcldefaultprofilegroup 属性に値 `cn=ocs_portal_users,cn=groups,default_realm_DN` を移入します。`default_realm_DN` を手順 a で取得した DN に置き換えます。

- d. orclquest を OCS_PORTAL_USERS グループに追加します。

Oracle Directory Manager を使用して、`cn=ocs_portal_users,cn=groups,default_realm_DN` エントリへ移動します。手順 b で取得した orclquest の DN を `uniquemember` 属性に追加します。この属性の既存の値は削除しないでください。`ocs_portal_users` エントリの DN を書きとめます。

注意： 新規ユーザーを作成する際、Oracle Collaboration Suite ホーム・ページはデフォルトでは設定されません。

関連項目： Oracle Collaboration Suite ホーム・ページの設定方法の詳細は、C-2 ページの「[Oracle Collaboration Suite Web Client 構成のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Oracle9iAS Infrastructure での Oracle Email のアップグレード

Oracle9iAS Infrastructure で Oracle Email をアップグレードするには、次のようにします。

1. 電子メールの管理者がベース・ユーザーの電子メール属性を変更できるように、ACL を変更します。
 - a. oidadmin を実行し、`cn=orcladmin` として接続します。
 - b. `cn=Common,cn=Products,cn=OracleContext` エントリへ移動します。
 - c. 共通のコンテナから `orclsubscribersearchbase` 属性の値を取得します。

- d. \$ORACLE_HOME/oes/bin ディレクトリにある emailaci.ldif をバックアップし、次のテキストを使用して再作成します。

注意： orclaci: で始まり (write) で終わる行は、1 行として入力する必要があります。

```
dn: %SUBSCRIBER_SEARCHBASE%
changetype: modify
add: orclaci
orclaci: access to attr=(mail) by group="cn=EmailAdminsGroup,
cn=EEmailServerContainer,cn=Products,cn=OracleContext" (write)
```

- e. emailaci.ldif スクリプトの %SUBSCRIBER_SEARCHBASE% を、手順 c で取得した orclsubscribersearchbase の値に置き換えます。
- f. 次のように入力して、emailaci.ldif をロードします。

```
ldapmodify -v -a -Dcn=orcladmin -w orcladmin_password -h ldap_host -p
ldap_port -f emailaci.ldif
```

2. targetdn 属性を索引付けします。これによって、Oracle Email に必要な属性を検索できます。
 - a. Oracle9iAS Infrastructure の Oracle Internet Directory がインストールされているコンピュータにログインします。
 - b. Oracle Internet Directory サーバーを停止します。
 - c. 次のように入力して、targetdn に対し、catalog.sh を実行します。

```
$ORACLE_HOME/ldap/bin/catalog.sh -connect infrastructure_connectstr -add
-attr targetdn
```

項目の意味は次のとおりです。

infrastructure_connectstr は、Oracle9i Application Server Infrastructure データベースの接続文字列です。

- d. Oracle Internet Directory サーバーを再起動します。

Oracle9iAS Infrastructure での Oracle9iAS Wireless のアップグレード

Oracle Collaboration Suite Metadata Repository 内の Oracle9iAS Wireless スキーマは、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier のインストール時に、既存の Metadata Repository に対して自動的にアップグレードされます。Oracle Collaboration Suite Infrastructure に関しては、追加のアップグレード手順を実行する必要はありません。

関連項目： Oracle9iAS Wireless のアップグレード手順の詳細は、3-35 ページの「[Oracle9iAS Wireless のアップグレード](#)」を参照してください。

Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのアップグレード

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Oracle Email および Oracle Files Information Store はどちらも Oracle9i リリース 2 (9.2.0.3) にアップグレードする必要があります。

Information Storage データベースを Oracle9i リリース 2 (9.2.0.3) にアップグレードするには、Oracle9i Database Release 2 Patch Set 9.2.0.3 を Oracle internet Support Center (OiSC) のサイトよりダウンロードしてください。

<http://support.oracle.co.jp/>

Oracle Collaboration Suite Information Store をアップグレードする場合は、LDAP PL/SQL API 用のカタログがこのデータベースにロードされていることを確認する必要があります。

カタログの存在を確認するには、データベース層で SYS ユーザーとして次の SQL*Plus コマンドを実行します。

```
DESC DBMS_LDAP
```

このパッケージが存在しない場合は、データベース層で SYS ユーザーとして catldap.sql スクリプトを実行します。このスクリプトは、\$ORACLE_HOME/rdbms/admin にあります。これによって、データベースにカタログが作成されます。

注意： catldap.sql は、データベースの Oracle ホームで実行してください。このスクリプトは、Middle-Tier または Infrastructure の Oracle ホームからは実行しないでください。

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のアップグレード

この項では、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をリリース 1 (9.0.3) からリリース 2 (9.0.4.1) にアップグレードする方法を説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Collaboration Suite リリース 2 \(9.0.4.1\) の Middle-Tier のインストール](#)
- [アップグレード前のタスク](#)
- [Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant](#)

重要： 多言語サポートを有効にするには、この項のアップグレード・タスクを実行する前に、3-3 ページの「[Oracle Collaboration Suite リリース 2 \(9.0.4.1\) での多言語サポートの有効化](#)」の手順を実行する必要があります。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier のインストール

Middle-Tier をアップグレードする前に、次の手順に従って、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier がインストールされているのと同じコンピュータ上の別の \$ORACLE_HOME にリリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier をインストールする必要があります。

1. リリース 1 (9.0.3) のプロセスをすべて停止します。
2. 次の例外を除いて、6-8 ページの「[Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール](#)」で説明する Middle-Tier のインストール手順に従います。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) のインストール時に、Oracle Universal Installer で「**Oracle Files**」チェックボックスのチェックを外し、Oracle Files Configuration Assistant が自動的に起動しないようにします。

Oracle Files Configuration Assistant が起動した場合は、「**取消**」をクリックして終了します。

注意：

- Middle-Tier の構成フェーズで、Web Client のインストールは正常に終了しませんが、手動で構成するしかないものを構成するためにこの手順は必要です。
 - Upgrade Assistant では、リリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier のインストール時にリリース 1 (9.0.3) およびリリース 2 (9.0.4.1) のインベントリ・ディレクトリが同じである必要があります。
-
-

関連項目： 使用しているプラットフォーム用の oraInst.loc ファイルを探すには、5-11 ページの表 5-2 を参照してください。

アップグレード前のタスク

この項では、アップグレード・プロセスを開始する前に実行する必要のあるアップグレード前のタスクについて説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar アップグレード前のタスク](#)
- [Oracle Email アップグレード前のタスク](#)
- [Oracle Ultra Search アップグレード前のタスク](#)
- [Oracle Voicemail & Fax アップグレード前のタスク](#)
- [Oracle9iAS Wireless アップグレード前のタスク](#)

Oracle Calendar アップグレード前のタスク

Oracle Calendar をアップグレードする前に、次の手順を Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) システム上で実行する必要があります。

1. \$ORACLE_HOME/ocal/upgrade から、root として ocalPreUpg.sh を実行します。これにより、Oracle Calendar リリース 5.x の所有権が変更されます。
2. Oracle Collaboration Suite をインストールしたユーザーとして再びログインし、次のアップグレード前のタスクを実行します。

注意：

- 開始する前に、以前のバージョンを後で復元する場合のためにデータをバックアップすることをお勧めします。詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の第 15 章「ノードのメンテナンス」を参照してください。
 - Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4.1) のインストール時に、デフォルトのノードが作成されます。このノードは、古いインストールのデータをアップグレードすると削除されます。このノードに重要なデータが格納されている場合は、アップグレード前にこのデータをバックアップする必要があります。
-
-

Oracle Email アップグレード前のタスク

Oracle Email をアップグレードする前に、次の手順を実行する必要があります。

- パッチ 2868153 を Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の \$ORACLE_HOME に適用し、共有フォルダの既存の権限をリリース 2 (9.0.4.1) で必要な形式にアップグレードします。
- Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) および Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の両方のインストールが含まれる複数の Middle-Tier を実行する場合、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) にパッチ 2979341 を適用する必要があります。Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) のクライアントが作成した共有フォルダに Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) がアクセスするためには、このパッチが必要です。

注意： 必要なパッチに関する情報は、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

- Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant によって、SYSTEM 表領域のデータ・ファイルと同じディレクトリ（デフォルトでは \$ORACLE_HOME/dbfs）に追加のデータ・ファイルが作成されます。したがって、コンピュータに新しいデータ・ファイルを実行するために十分な領域（85MB）があることを確認する必要があります。

新しい表領域名、データ・ファイル名およびその初期サイズは、次のとおりです。

- ESLMMR 表領域: eslmmr.dbf (50MB)
- ESNEWS 表領域: esnews.dbf (10MB)
- ESTEMP 表領域: estemp.dbf (5MB)
- ESORATEXT 表領域: esoratext.dbf (20MB)

Oracle Ultra Search アップグレード前のタスク

Oracle Ultra Search をアップグレードする前に、次の手順を実行する必要があります。

- Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Oracle Ultra Search 管理ツールにログインし、すべての Oracle Ultra Search インスタンスで、すべてのクローラ同期スケジュールを停止および無効にします。Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) へのアップグレード後に、すべてのクローラ同期スケジュールを有効にできます。

- Oracle Net Configuration Assistant を使用して、Oracle Collaboration Suite Infrastructure データベースのネットワーク・サービス名を設定します。

関連項目： Oracle Net Configuration Assistant の使用方法の詳細は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

- アップグレード中に障害が発生した場合に備え、データベース・ホストの \$ORACLE_HOME/ultrasearch ディレクトリ内の全ファイルをバックアップします。

Oracle Voicemail & Fax アップグレード前のタスク

Oracle Voicemail & Fax をアップグレードする前に、次の手順を実行する必要があります。

- Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier の AQMWI (Advanced Queue Message Waiting Indicator) プロセスを停止します。
- アップグレード中に障害が発生した場合に備え、Oracle Internet Directory 内の次のツリーをバックアップします。

```
cn=midtier_hostname, cn=computers, cn=oraclecontext
cn=telephony_server_host_name, cn=computers, cn=oraclecontext
cn=umountain, cn=products, cn=oraclecontext
```

- \$ORACLE_HOME/sysman/emd/ ディレクトリ内の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の targets.xml ファイルをバックアップします。
- Windows 2000 のシステム上で、実行中の Oracle Voicemail & Fax リリース 1 (9.0.3) のプロセスをすべて停止します。また、すべての既存の Oracle Voicemail & Fax リリース 1 (9.0.3) を (rmid、rmiregistry および UM で始まるすべてのサービスを含む) 削除します。

Windows 2000 のシステム上で、Oracle Voicemail & Fax コンテナ部分を sc_vsto.cfg ファイルから削除し、CT サーバーを再起動します。

関連項目： sc_vsto.cfg ファイルの構成の詳細は、7-8 ページの「[Oracle Collaboration Suite への Information Storage データベースの追加インストール](#)」を参照してください。

Oracle9iAS Wireless アップグレード前のタスク

複数の Oracle Collaboration Suite Wireless Middle-Tier をアップグレードする場合、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant を起動する前に、次の手順を実行する必要があります。

1. ファーム内のすべての Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Wireless Middle-Tier (Oracle9iAS Wireless を実行するよう構成されている Oracle9iAS Middle-Tier を含む) を停止します。

注意： 最初の Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の Wireless Middle-Tier のインストールを実行する前に、Infrastructure 内の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Wireless スキーマを必ずバックアップしてください。最初の Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の Wireless Middle-Tier のインストール時に、このスキーマはアップグレードされます。

2. アップグレードする最初の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Wireless Middle-Tier を選択します。
3. 最初の Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の Wireless Middle-Tier を、前述の手順の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Wireless と同じコンピュータにインストールします。

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant は、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) へのアップグレード・プロセスを自動化するコマンドライン・ツールです。アップグレード・プロセス中に、アップグレードする Oracle Collaboration Suite コンポーネントを選択します。すると、アップグレードする各コンポーネントに対し、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant が個別のプラグインを実行して、アップグレード・プロセスを完了します。

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant は、次のディレクトリ内に存在します。

`$ORACLE_HOME/upgrade`

upgrade ディレクトリには、log および lib という 2 つのディレクトリと、ocsua.xml、ocsua.properties および ocsua.sh というアップグレード・プロセスで使用される 3 つの主要なファイルが含まれています。これらのファイルについては、この項で後述します。

log ディレクトリには、アップグレード・プロセス中に生成されたログ・ファイルが含まれます。lib ディレクトリには、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant フレームワークに必要な .jar ファイルが含まれています。

この項の内容は次のとおりです。

- [ocsua.xml ファイル](#)
- [ocsua.properties ファイル](#)
- [Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant の実行](#)

ocsua.xml ファイル

ocsua.xml ファイルには、コンポーネントのプラグインおよびユーザー入力が必要な変数がリスト表示されています。Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant フレームワークは、このファイルを読み取ることにより、個別のコンポーネントのアップグレードを実行するプラグインを読み取ります。このファイルは変更しないでください。

ocsua.properties ファイル

ocsua.properties ファイルには、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant フレームワークで使用するオプションのプロパティが含まれています。このファイルに含まれていないプロパティの場合、アップグレード・プロセスは Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant フレームワークに必要な Java クラス内のデフォルト値を使用します。ocsua.properties の内容は次のとおりです。

```
#
# Global properties
#
# These properties apply to all components of Upgrade Assistant.
#
# Default global log level is NOTIFICATION
log.level=NOTIFICATION
#
# Utilities component
#
# Default log level for CopyFile class is NOTIFICATION
CopyFile.log.level=NOTIFICATION
#
# Component plug-in specific properties
#
#   For log level, the property name is plugin-name as a prefix
#   with ".log.level". Plug-ins can define any names for
#   other properties as long as they are prefixed with the
#   plug-in name
#
# Example: setting Ultra Search plug-in log level to TRACE to override default
#           log level of NOTIFICATION
#UltraSearch.log.level=TRACE
```

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant の実行

注意：

- すべての Oracle Collaboration Suite コンポーネントは同時にアップグレードする必要があります。
 - アップグレードする Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のディレクトリが同時にアクティブな Oracle Enterprise Manager ディレクトリである場合、Oracle Enterprise Manager ディレクトリは新規の Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) のディレクトリに変更されます。アクティブな Oracle Enterprise Manager ディレクトリが Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のホーム・ディレクトリと異なる場合は、変更されません。
 - `ocsua.sh` スクリプトは、一度に 1 つの Information Store をアップグレードするため、複数の Information Store の場合はそれぞれに対して実行する必要があります。
 - Middle-Tier のアップグレードによって、システムの他の Middle-Tier が停止することはありません。
 - 今回のリリースの Oracle Collaboration Suite では、1 台のコンピュータに複数の Oracle Email Middle-Tier は共存できません。
 - 既存の Oracle9i データベースから Oracle Ultra Search をアップグレードする場合は、『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』の「インストール後の作業とアップグレードに関する情報」を参照してください。
 - Upgrade Assistant を実行する前に、TNS 接続文字列を設定する必要があります。TNS 接続文字列の形式は、`$ORACLE_HOME/network/admin/tnsnames.ora` ファイルの形式と同じである必要があります。
 - Web Client Configuration Assistant を起動する前に、Oracle9iAS Portal Middle-Tier を手動でインストールまたはアップグレードし、構成しておく必要があります。3-36 ページの「[Oracle Collaboration Suite Web Client のアップグレード](#)」を参照。
-

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant は、自動的に次の手順を実行します。

- アップグレードする Oracle Collaboration Suite のソース・ディレクトリの存在およびリリース番号を検証します。
- アップグレードを選択したコンポーネントに基づき、実行するプラグインを識別します。

- アップグレードする各コンポーネントに対し、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のソース・ディレクトリ内の更新する構成ファイルを識別します。
- アップグレードするコンポーネントの共通およびプラグイン固有の変数の値を入力するよう要求します。

表 3-2 に、Oracle Files の Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に指定する必要がある情報を示します。

表 3-2 Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に対する必須 Oracle Files 情報

情報	説明
ホスト	既存の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Oracle Files スキーマが存在するデータベース・ホスト
ポート	データベース・リスナー・ポート
SID	データベース・サービス名

表 3-3 に、既存の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Oracle Files スキーマが Oracle Workflow と統合される場合に Oracle Files の Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に指定する必要がある情報を示します。

注意： スキーマ・アップグレード・プロセスは、最初の間層に対してのみ実行する必要があり、追加の間層に対して実行する必要はありません。

表 3-3 Oracle Files が Oracle Workflow と統合される場合の Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に対する必須 Oracle Files 情報

情報	説明
Oracle Files スキーマ	Oracle Workflow スキーマと統合される Oracle Files スキーマの名前
Oracle Files スキーマのパスワード	Oracle Files スキーマのパスワード
Oracle Workflow スキーマ	Oracle Files スキーマと統合される Oracle Workflow スキーマの名前
Oracle Workflow スキーマのパスワード	Oracle Workflow スキーマのパスワード

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Oracle Files スキーマのアップグレード時にエラーが発生した場合、次のログ・ファイルで詳細を確認します。

```
$ORACLE_HOME/upgrade/log/FilesUpgrade.log
```

表 3-4 に、Oracle Ultra Search の Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に指定する必要がある情報を示します。

表 3-4 Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に対する必須 Oracle Ultra Search 情報

情報	説明
SYS パスワード	データベースの SYS パスワード
WKSYS パスワード	データベースの WKSYS パスワード
TNS 接続文字列	データベースの TNS 接続文字列

- 各コンポーネントについて、アップグレードが必要なファイルのサマリーを表示します。
- 実行する必要があるアップグレード前のタスクのリストと、必要な場合は警告を表示します。

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant を実行するには、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier で次の手順を実行します。

1. \$ORACLE_HOME/upgrade ディレクトリに移動します。
2. ocsua.sh スクリプトを実行し、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant を起動し、アップグレード・プロセスを開始します。ocsua.sh ファイルを次のように使用します。

```
bash-2.05$ ocsua.sh -help
ocsua -sourcehome sourcehome [-config input XML] [-all]
Upgrade configuration files to the Oracle Collaboration Suite
Release 2 (9.0.4.1)
Oracle home:
    -sourcehome      $ORACLE_HOME for Oracle Collaboration Suite
                     Release 1 (9.0.3)
    -config          Input XML file that lists all the plug-ins
    [-all]           Run all the component plug-ins without prompt
```

ocsua.sh ファイルを実行して初めてアップグレードを実行する場合、アップグレード・プロセスは、Oracle Collaboration Suite で必要な Oracle9iAS コンポーネントを自動的にアップグレードします。これらのコンポーネントには、Oracle9iAS Portal、Oracle9iAS Web Cache および Oracle Enterprise Manager が含まれます。

ocsua.sh スクリプトの例

例 3-1 は、サンプルのアップグレード・セッションのログのコピーです。入力および出力の両方を示します。

例 3-1 ocsua.sh スクリプト

```
bash-2.05$ ocsua.sh -sourcehome /home/ias903
Validating Oracle homes
-----

These are the components that can be upgraded
1. Oracle9iAS Portal
2. Oracle Ultra Search
3. Oracle9iAS Wireless
4. Oracle Calendar Server
5. Oracle Calendar Application System
6. Oracle Email
7. Oracle Email Store
8. Oracle Voicemail & Fax
9. Oracle Files
Enter component numbers and/or ranges(example:1-3,5) [all]:
-----

Validating component plug-ins
-----

Examining "Oracle9iAS Portal"
Upgrade items found:
Oracle_Collaboration_Suite_Release_1_ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.csh
-----

Examining "Oracle Ultra Search"
Upgrade items found:
Oracle_Collaboration_Suite_Release_1_ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/config
/data-sources.xml
-----

Examining "Oracle9iAS Wireless"
Upgrade items found:
Oracle_Collaboration_Suite_Release_1_ORACLE_HOME/wireless/server/classes/oracle
/panama/marconi/marconi.config
Oracle9iAS Wireless Repository
```

```
-----
Examining "Oracle Calendar Server"
Upgrade items found:
Oracle Calendar Server configuration files
Oracle Calendar Server database files
Oracle Calendar Server Oracle Internet Directory entries
Oracle Calendar Server administrator administration files
-----
Examining "Oracle Calendar Application System"
Upgrade items found:
Oracle Calendar applications configuration file
Oracle Calendar Web Client files
-----
Examining "Oracle Email"
Upgrade items found:
Oracle Email Oracle Internet Directory entries
Webmail configuration
listener.ora
oc4j.properties
-----
Examining "Oracle Email Store"
Upgrade items found:
Oracle Email Store
-----
Examining "Oracle Voicemail & Fax"
Upgrade items found:
Oracle Voicemail & Fax Oracle Internet Directory product tree
Oracle Voicemail & Fax mid-tier Oracle Internet Directory entry
-----
Examining "Oracle Files"
Upgrade items found:
Oracle Files Schema
-----
Validate pre-upgrade requirements:
The destination Oracle home has not been modified since it was installed.

The source and destination instances of Oracle Collaboration Suite are not
running.
The Enterprise Manager Web site is not running.
The source Oracle home is based on Oracle9iAS 9.0.2.0.1 version with interim
patches.

[Oracle Ultra Search] A tnsnames.ora file has been created in the destination
Oracle home and contains an entry for the Oracle9iAS Metadata Repository
containing the Oracle Ultra Search schema.
```

```
[Oracle Calendar Server] The ocalPreUpg.sh script has been run in the
destination Oracle home.
Have you verified all pre-upgrade requirements? [No] Y
-----
Specify the TNS connect string for the Oracle9iAS Metadata Repository used by
Oracle Ultra Search, as well as passwords for the following users:
TNS Connect: TNS_connect_string
SYS Password: password
WKSYS Password: password
-----
Specify connection information (host:port:SID) and associated passwords
for the Oracle Email Store to be upgraded:
Oracle Email Store Connect: host_name:port_number:SID
SYS Password: password
ESMail Password: password
CTXSYS Password: password
-----
Specify connection information for the Oracle Files Store to be upgraded:
Host: database_host_name
Port: port_number
SID: service_name
-----
Specify the Oracle Files schema and password in the Oracle Files Store to be
upgraded:
Oracle Files Schema: IFSSYS
Oracle Files Schema Password: password
-----
If Oracle Workflow was integrated with Oracle Files in the source installation,
specify the Oracle Workflow schema and password. If Oracle Workflow was not
integrated with Oracle Files, leave both fields blank:
Oracle Workflow Schema: OWF_MGR
Oracle Workflow Schema Password: password
-----
Upgrading "Oracle Portal"
Executing the script
Oracle_Collaboration_Suite_Release_1_ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.csh to
upgrade Oracle Portal
Script terminated with exit value 0
Upgrade finished with status: Success.
-----
Upgrading "Oracle Ultra Search"
Upgrading the metadata schema (this will take approximately 5 to 10 minutes)
The schema upgrade log file is XXXXX
Finished upgrading metadata schema
Getting JDBC connection
```

```
Loading Java stored packages (this will take approximately about 3 to 5 minutes)
Finished loading Java stored packages
Creating the file materialization table
Upgrading database files (this will take approximately about 15 to 30 seconds)
Processing XXXXX
Finished upgrading database files
Dropping the file materialization table
Upgrading mid-tier configuration files...
Processing XXXXX
Finished upgrading mid-tier configuration files
Upgrade finished with status: Success.
-----
Upgrading "Oracle9iAS Wireless"
Copying Oracle9iAS Wireless customization files.
Upgrading Oracle9iAS Wireless repository.
Upgrade finished with status: Success.
-----
Upgrading "Oracle Calendar Server"
Upgrading configuration files.
Upgrading database files.....
Upgrading Oracle Internet Directory entries...
Upgrading administration files.
Upgrade finished with status: Success.
-----
Upgrading "Oracle Calendar application system"
Upgrading configuration files
Upgrading Web Client files
Upgrade finished with status: Success.
-----
Upgrading "Oracle Email"
Upgrading Oracle Internet Directory entries...
Upgrading configuration files\205
Upgrading Oracle Webmail configuration files\205
Upgrading listener.ora...
Upgrading oc4j.properties...
Upgrade finished with status: Success.
-----
Upgrading "Oracle Email Store"
Upgrading database content. (this will take approximately 20 minutes)
Upgrade finished with status: Success.
-----
Upgrading "Oracle Voicemail & Fax"
Upgrading product tree in Oracle Internet Directory.
Upgrading process tree in Oracle Internet Directory.
Upgrade finished with status: Success.
```



```
-----  
Upgrading "Oracle Files"  
Upgrading the Oracle Files schema (this will take roughly approximately 15 to  
20 minutes)  
Upgrade finished with status: Success.  
  
-----  
>>>>>>>>>> The upgrade completed successfully <<<<<<<<<<<<<<  
You must now complete the following post-upgrade tasks:  
[Oracle Files] Run the following script manually to complete the Oracle Files  
upgrade:  
  
Oracle_Collaboration_Suite_Release_1_ORACLE_HOME/ifs/files/bin/ifsc  
[Oracle9iAS Web Cache] The following files may need to be upgraded manually if  
they were customized in the old Oracle home:  
  
Oracle_Collaboration_Suite_Release_2_ORACLE_HOME/XXX  
Oracle_Collaboration_Suite_Release_2_ORACLE_HOME/XXX  
[Oracle Enterprise Manager] The Oracle_Collaboration_Suite_Release_2_ORACLE_  
HOME/sysman/emd/targets.xml file may  
contain duplicate target entries from both the old Oracle home and the new  
Oracle home. If you want to remove the old targets, edit this file.  
  
-----  
Log files containing details of the upgrade process can be found in the  
following location:  
  
Oracle_Collaboration_Suite_Release_2_ORACLE_HOME/upgrade/log  
A transcript of this upgrade session can be found at:  
  
Oracle Collaboration Suite Release 2 ORACLE HOME/log/ocsua.log
```

この項の内容は次のとおりです。

この項の内容は次のとおりです。

- Oracle Calendar の共存
- Oracle Email アップグレード後のタスク
- Oracle Files アップグレード後のタスク
- Oracle Ultra Search アップグレード後のタスク
- Oracle Web Agent パッケージのアップグレード後のタスク
- Oracle Voicemail & Fax のアップグレード
- Oracle9iAS Wireless のアップグレード
- Oracle Collaboration Suite Web Client のアップグレード
- Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のインスタンスの削除

Oracle Calendar の共存

現行の Oracle Calendar インストールをリリース 2 (9.0.4.1) にアップグレードする大規模な組織では、共存が役立ちます。異なるバージョンのノードとサーバーを接続して同時に実行する機能は、アップグレードの実行に必要なダウン時間の短縮に役立ちます。

注意： Oracle Calendar Server リリース 5.5 および Oracle Calendar Server リリース 9.0.4 の共存は、Calendar Server の統一（同じバージョンの）ネットワークを持つための移行手順としてみなされることに注意する必要があります。2 つのバージョンを混在して長期間、または永続的に使用しないでください。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Server のパラメータ](#)
- [共存の制限](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード](#)

Oracle Calendar Server のパラメータ

共存を行うには、まず、Oracle Calendar Server リリース 9.0.4 の `$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini` に次のパラメータを追加する必要があります。

セクション: **[ENG]**

パラメータ: **coexist_cwsbasicauth**

値: **TRUE**

セクション: **[ACE_PLUGINS_SERVER]**

パラメータ: **cs-standard_coexistence**

値: **TRUE**

重要： セキュリティ上の理由から、すべての Calendar Server をリリース 9.0.4 にアップグレードした後、すぐに `$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini` から前述のパラメータを削除する必要があります。

次のパラメータは、ここに示すデフォルト値にリセットされます。Oracle Calendar Server リリース 5.x のインストールで別の値を使用していた場合は、アップグレードの完了後に目的の値にリセットします。

パラメータ: **resourceemailmap**

値: **"O"**

パラメータ: **usermailmap**

値: **"O"**

パラメータ: **usersmcprefmap**

値: **"OU3"**

パラメータ: **usermobiletypemap**

値: **"N"**

パラメータ: **usermobilemap**

値: **"R"**

パラメータ: **itemuidmap**

値: **"P"**

共存の制限

異なるバージョンの 2 つのサーバーが共存している場合、次の制限事項があります。

- Web Services リリース 9.0.4 を使用するには、すべての接続されたサーバーがリリース 9.0.4 にアップグレードされている必要があります。
- イベント・カレンダーは共存の場合はサポートされていません。
- 16 文字以上のパスワードは、リリース 5.5 の Calendar Server またはリリース 9.0.4 より前の Oracle Calendar Client ではサポートされていません。したがって、16 文字以上のパスワードを使用しているユーザーは、以前のクライアントにはログインできません。
- リリース 5.x の Oracle Calendar Server の管理にはリリース 9.0.4 ユーティリティを使用しないでください。この例外は、ユーザーを移動する場合のみです。どちらも旧サーバー・ノード (5.x) にある 2 つのノード間でユーザーを移動する場合でも、moveuser ユーティリティは最新サーバーのリリース (9.0.4) から実行する必要があります。
- リリース 9.0.4 の Oracle Calendar Server の管理にはリリース 5.x ユーティリティを使用しないでください。
- ノード・ネットワークを作成する必要がある場合は、nodes.ini および uninode コマンドの使用はネットワーク内の最新リリース (9.0.4) のサーバーで行う必要があります。

- 共存により、旧 Oracle Calendar Server (5.x) で意味不明なエラー・メッセージが表示されることがあります。これは、旧サーバーが新規サーバーで導入された機能を理解できないことが原因です。
- マッピング・パラメータは、共存およびアップグレード用にリリース 9.0.4 の Server の `unison.ini` に追加されています。リリース 5.x の Server は、EMAIL には O、UID には P をマッピングします。ただし、リリース 9.0.4 の Server は、このマッピングを必要としなくなりました。リリース 9.0.4 の Server に追加されたパラメータは、マッピングに影響しません。

新規パラメータは次のとおりです。

[ENG]

```
usermailmap = O
itemuidmap = P
resourcemailmap = O
usersmscprefmap = OU3
usermobiletypemap = N
usermobilemap = R
```

- `Unidbfix -c` は、Oracle Calendar リリース 9.0.4 のユーザーによって Oracle Connector for Outlook リリース 9.0.4 を使用してイベントが作成され、Oracle Calendar リリース 5.4 のユーザーによって Windows Native Client リリース 9.0.4 を使用してそのイベントが受け入れられる、または受け入れられない場合に、Oracle Calendar リリース 9.0.4 の Server について "重要度の低い非一貫性" をレポートすることがあります。このような非一貫性は、データベースの整合性に影響しません。
- 以前のバージョンの Oracle Calendar のユーザーは、リソース・スケジューリングの使用時に電子メール・メッセージを生成しません。
- Oracle Connector for Outlook を使用している Oracle Calendar リリース 9.0.4 と 5.4 のユーザーが混在している場合、添付ファイルの名称が `Mime-Encoded-attachment.txt` に変わることがあります。添付ファイルは、読み取り可能なままです。
- Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh (リリース 5.2.3) のユーザーは、リリース 9.0.4 のスタンドアロン・インストールに接続している際に、オフライン・ファイルをダウンロードできない場合があります。
- 現行のバージョンの Oracle Calendar Client は、Oracle Calendar Server リリース 9.0.4 とともに使用できます。これには、次のバージョンのクライアントも含まれます。
 - Oracle Calendar Desktop Client for Windows リリース 6.0.5
 - Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh リリース 5.2.3
 - Oracle Calendar Desktop Client for Linux/Solaris リリース 5.0.2
 - Oracle Connector for Outlook リリース 3.3 以降

これらのバージョンのクライアントを使用することが最適です。旧バージョンのクライアントを使用している場合は、テストを実行する前にアップグレードしてください。最新版のクライアントに関する情報は、オラクル社カスタマ・サポート・センターへお問い合わせください。

- Oracle Collaboration Suite Web Client リリース 1 (9.0.3) の Oracle Calendar のポートレットは、Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4.1) とは互換性がありません。この問題を回避するには、6-8 ページの「[Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール](#)」で説明するとおり、両方のコンポーネントをリリース 2 (9.0.4.1) にアップグレードします。

既に Oracle Calendar がアップグレードされており、Oracle Collaboration Suite Web Client がまだアップグレードされていない場合は、3-36 ページの「[Oracle Collaboration Suite Web Client のアップグレード](#)」を参照してください。

Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード

Upgrade Assistant は、次のキーのみ移行します。特記していないかぎり、これらは `ocwc.conf` に移行されます。パラメータを変更しなくてもインストールは稼働しますが、希望のロック・アンド・フィールドを実現するには、パラメータを変更する必要がある場合があります。パラメータの編集の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

```
[system]
connection
```

```
[servers]
(All keys migrated to "connection" section of ocas.conf. If the old installation
was a masternode, 'mnode' will be the only entry.)
```

```
[ACE_PLUGINS_CLIENT]
(All keys into ocas.conf)
```

```
[admin]
sso_user_env_key
```

```
[modules]
hide_eventcal
hide_global
hide_taskview
hide_managegroups
hide_suggesttime
hide_show_unconfirmed
hide_updateall
enable_designate
hide_viewpub
```

```
[file_attachment]
```

```
download_enable
upload_enable

[taskview]
quickCreateStartTime
quickCreateEndTime
showQCCompletion

[calendar_view]
default_view
default_dayview_mode
default_weekview_mode

hide_dayview_toggle
hide_weekview_toggle
pdv_notes_top_task_bottom
default_color_mgt_by

[cookies]
domain

[sched]
showicalvcal (becomes same key in "modules" section in ocwc.conf).
```

Oracle Email アップグレード後のタスク

3-18 ページの「[Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant の実行](#)」で説明するとおり、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant を実行すると、Oracle Email Information Storage データベースはアップグレードされます。

さらに、必須ファイルおよびライブラリをリリース 2 (9.0.4.1) の Information Storage データベースにインストールするために、次の手順を実行します。

1. umbackend.tar ファイルをアプリケーション・サーバー上の \$ORACLE_HOME/oes ディレクトリから Information Storage データベース上の \$ORACLE_HOME ディレクトリにコピーします。
2. umbackend.tar ファイルを解凍します。

```
tar xvf umbackend.tar
```

3. 次のコマンドを実行して Oracle Universal Installer を起動します。

```
cd backend/Disk1  
./runInstaller
```

画面のプロンプトに従って、Oracle Email のバックエンド・インストールを完了します。

Oracle Files アップグレード後のタスク

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant の終了後に、次の手順を実行します。

1. 次の場所から ifsca を実行して、Oracle Files Configuration Assistant を再起動します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/bin
```

2. 「ドメイン操作」画面で、「**既存の Oracle Files ドメインを使用するように設定**」を選択します。
3. 「スキーマ名」画面で、アップグレード済 Oracle Files スキーマを選択します。
4. 「次へ」をクリックし、Oracle Files Configuration Assistant の残りの画面に従います。

関連項目： これらの画面の詳細は、12-30 ページの「[既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定](#)」を参照してください。

5. 「サマリー」画面で、「**構成**」をクリックします。

進捗ウィンドウが表示されます。エラーが発生した場合、次のログ・ファイルで詳細を確認します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/log/FilesConfig.log
```

プロセスが完了すると、構成が正常に終了したことを示すメッセージが表示されます。「OK」をクリックしてメッセージを閉じます。Oracle Files と Oracle Enterprise Manager Web Site が自動的に統合されます。

注意： ifsca スクリプトは、すべての Middle-Tier で実行する必要があります。

Oracle Workflow パラメータの更新

アップグレードする Oracle Files スキーマが Oracle Workflow と統合されている場合は、次の項で説明する構成後の手順を実行します。

- 12-42 ページの「[ネット・サービス名の構成](#)」
- 12-43 ページの「[Oracle Files と Oracle Workflow の統合（オプション）](#)」

注意： Oracle Workflow の既存の構成パラメータを変更する場合を除き、12-42 ページの「[ネット・サービス名の構成](#)」で説明する手順を実行する必要はありません。

手動による IFS_TEXT 索引の同期化

既存の Oracle Files ドメインをアップグレードした後、既存の IFS_TEXT 索引を手動で同期化する必要があります。詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』の付録 A「Oracle Text のリファレンス」を参照してください。

Oracle Ultra Search アップグレード後のタスク

次の各項で、一般的なエラーのリカバリ手順を説明します。

- 中間層構成ファイルのアップグレード中にエラーが発生しました。
- データベース・ファイル: [<file_name>](#) をアップグレードできませんでした
- メタデータ・スキーマのアップグレード中にエラーが発生しました。
- Java ストアド・パッケージのロードとデータベース・ファイルの更新中にエラーが発生しました。

中間層構成ファイルのアップグレード中にエラーが発生しました。

次の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のディレクトリで data-sources.xml 構成ファイルが使用可能であるか確認します。

`$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/config`

data-sources.xml ファイルが使用可能であることを確認した後、Oracle Ultra Search アップグレード・プラグインを再実行します。

データベース・ファイル: [<file_name>](#) をアップグレードできませんでした

データベース・ファイル・システム内の `$ORACLE_HOME/ultrashsearch` ディレクトリに対し、書き込み権限があることを確認します。その後、Oracle Ultra Search アップグレード・プラグインを再実行します。

メタデータ・スキーマのアップグレード中にエラーが発生しました。

スキーマのアップグレード・ログ・ファイルでエラーの詳細を確認します。問題を解決した後、Oracle Ultra Search アップグレード・プラグインを再実行します。

Java ストアド・パッケージのロードとデータベース・ファイルの更新中にエラーが発生しました。

ファイル `$ORACLE_HOME/ultrasearch/lib/ultrasearch_db.jar` が存在していることを確認します。その後、Oracle Ultra Search アップグレード・プラグインを再実行します。

Oracle Web Agent パッケージのアップグレード後のタスク

Oracle9iAS には、バージョン 9.0.4.0.0 の Oracle9iAS Web Agent パッケージ（OWA パッケージ）が同梱されています。OHS mod_plsql を介してアクセスする PL/SQL アプリケーションは、OWA パッケージを使用するため、手動でアップグレードする必要があります。

次のいずれかの条件に該当する場合は、このアップグレード後のタスクを実行する必要があります。

- Oracle9iAS Portal で Oracle データベースを使用している。
- Oracle9iAS Infrastructure で Oracle データベースを使用している。
- Oracle データベースに、OHS mod_plsql を介してアクセスするカスタム PL/SQL プロシージャが定義されている。

前述のいずれかの条件に該当する場合は、次の手順を実行します。

1. `owaload.sql` ファイルが格納されているディレクトリに移動します。
`$ORACLE_HOME/Apache/modplsql/owa`
2. SQL*Plus を使用して、Oracle データベースに SYS ユーザーとしてログインします。
3. SQL プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
SQL> @owaload.sql log_file
```

ここで、`log_file` は、OWA パッケージをロードするためのコマンドからの出力を格納する一時ファイルの名前です。

4. ログ・ファイルでエラーを確認します。
5. 無効となったパッケージは、手動で再コンパイルします。通常、この操作を行うには、SYS ユーザーとして `$OH/rdbms/admin/utl1rp.sql` スクリプトを実行します。

OWA パッケージをインストールすると、すべての依存オブジェクトが無効になります。これらのパッケージは、最初のアクセス時に自動的に再コンパイルされますが、再インストール後に手動で再コンパイルすることをお勧めします。

注意： 次の問合せを実行して、OWA パッケージの既存のバージョンを確認できます。

```
select owa_util.get_version from dual
```

データベース内の既存の OWA パッケージのバージョンは、`owaload.sql` スクリプトによって確認されます。次のいずれかの条件に該当する場合は、OWA パッケージの新しいバージョンがスクリプトによってインストールされます。

- OWA パッケージが存在しない。
- 古い OWA パッケージが検出された。

前述のいずれの条件にも該当しない場合は、データベースに最新または新しいバージョンの OWA パッケージがインストールされているため、スクリプトによる処理は必要ありません。

`owaload.sql` スクリプトによる結果は、ログ・ファイルにレポートされます。

Oracle Voicemail & Fax のアップグレード

Oracle Voicemail & Fax のアップグレードは、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant から実行されません。

Oracle Voicemail & Fax をアップグレードするには、次のようにします。

1. Oracle Voicemail & Fax リリース 2 (9.0.4.1) を Windows 2000 Telephony Server にインストールします。

注意： Oracle Voicemail & Fax リリース 1 (9.0.3) 用の CT Media 2.1 または 2.1.1 をインストールした場合は、Oracle Voicemail & Fax をインストールする前に、最新バージョンの `Timed` を `NTLMAuthentication.dll` とともに `Program Files¥Dialogic¥CT Media¥Client` ディレクトリにダウンロードする必要があります。

2. 次のコマンドを実行して Oracle Voicemail & Fax をアップグレードします。

```
%ORACLE_HOME%¥um¥scripts¥UpgradeTelephonyServerfromV1.bat host_name  
903_ORACLE_HOME 9041_ORACLE_HOME
```

Oracle9iAS Wireless のアップグレード

Oracle9iAS Wireless のアップグレードは、2 つのタスクから構成されます。まず、ランタイム・カスタマイズ・クラスおよび構成ファイルを、新規の ORACLE_HOME にコピーする必要があります。次に、既存のプロセスおよびその構成を、新規 Middle-Tier に移動する必要があります。

Oracle9iAS Wireless をアップグレードするには、次のようにします。

1. Oracle9iAS Wireless を実行するよう構成されている Oracle9iAS Middle-Tier を含め、ファーム内のすべての Oracle9iAS Wireless リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier を停止します。
2. アップグレードする最初の Oracle9iAS Wireless リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier を選択します。
3. 最初の Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier を、手順 2 の Oracle9iAS Wireless Middle-Tier と同じコンピュータにインストールします。インストール時に、Oracle9iAS Wireless Configuration Assistant は、Oracle9iAS Metadata Repository 内の Oracle9iAS Wireless スキーマをアップグレードします (3-36 ページの「Oracle9iAS Wireless のアップグレード項目」を参照)。

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant は、次のことを行います。

- a. ランタイム・カスタマイズ・クラス (リスナー・フックおよびカスタマイズされたフォルダ・レンダラなど) およびスイート・レベルの構成ファイルを \$ORACLE_HOME_1 から \$ORACLE_HOME_2 にコピーします (3-36 ページの「Oracle9iAS Wireless のアップグレード項目」を参照)。
- b. Oracle9iAS Wireless スタンドアロン・プロセスのプロセス構成情報を、Oracle9iAS Wireless リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier から Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier にコピーし、リリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier を構成します。

この時点で、すべての Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier を再起動し、停止時間を削減できます。

Oracle9iAS Wireless スタンドアロン・プロセスの構成情報は、Oracle9iAS Metadata Repository 内の Oracle9iAS Wireless スキーマに格納されます。リリース 1 (9.0.3) からリリース 2 (9.0.4.1) へのアップグレードの際、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant は、Oracle9iAS Wireless スキーマに追加エントリを作成することによって、リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier のプロセス構成情報をリリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier にコピーします。

最初の Middle-Tier のインストール時に Oracle9iAS Wireless スキーマ・アップグレードを行う際、Oracle9iAS Wireless Configuration Assistant は、各プロセス・タイプ用のデフォルトのスタンドアロン・プロセスを事前に移入します。Oracle9iAS Wireless Upgrade Assistant がリリース 1 (9.0.3) のプロセス情報をリリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier にコピーする際、冗長なプロセスをリリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier で検出すると、これを削除します。さらに、Oracle9iAS Wireless Upgrade Assistant は各プロセスに一意のプロセス名を付けます。

Oracle9iAS Wireless のアップグレード項目

Oracle9iAS Wireless のアップグレード・プロセスの最初のフェーズで、次のファイルが変更されます。

- ORACLE_HOME_2/wireless/server/classes/*.class
- ORACLE_HOME_2/wireless/server/classes/*.properties
- ORACLE_HOME_2/wireless/server/classes/marconi.config

Oracle Collaboration Suite Web Client のアップグレード

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール時に、Oracle Universal Installer を使用して、インストールおよび構成する Web Client を選択できます。

関連項目： 6-8 ページの「[Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール](#)」

ただし、アップグレードでは Web Client Configuration Assistant は正常に機能しません。この項では、コマンドラインから Web Client Configuration Assistant を起動する方法を説明します。

Web Client Configuration Assistant を起動する前に、Oracle9iAS Portal Middle-Tier を手動でインストールまたはアップグレードし、構成しておく必要があります。

この項の内容は次のとおりです。

- [webclient.properties](#) ファイル内のポート番号の再設定
- [コンポーネントの URL の構成](#)
- [コマンドラインからの Web Client Configuration Assistant の実行](#)

Oracle Universal Installer による Web Client のインストール時に、アプリケーションのホスト名およびポート番号を指定した場合は、[コンポーネントの URL の構成](#)をスキップします。

webclient.properties ファイル内のポート番号の再設定

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) にアップグレードする場合は、新しい Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を新しい Oracle ホームにインストールします。新しくインストールを行うと、httpd.conf ファイルなどの特定のファイル内の様々なアプリケーションのポート番号指定が一時的に変更されますが、Web Client Configuration Assistant によって、元の値に再設定されます。

ただし、Web Client Configuration Assistant は、webclient.properties ファイル内の次のコンポーネントのポート番号は再設定しません。

- Oracle Calendar
- Oracle Email
- Oracle Files
- Oracle Web Conferencing
- Oracle9iAS Wireless & Voice

したがって、次の各エントリ・ポイントに関連付けられた URL に正しいポート番号を入力して、webclient.properties ファイル内のポート番号を手動で再設定する必要があります。このファイルは、`version_2_ORACLE_HOME/webclient/classes/oracle/collabsuite/webclient/resources` ディレクトリにあります。

- mail.help.url
- files.help.url
- calendar.help.url
- imeeting.help.url
- search.help.url
- wireless.help.url
- mail
- calendar
- files
- search
- wireless
- portal
- imeeting
- mail.provider
- files.provider

- search.provider
- wireless.provider
- webclient.provider
- imeeting.provider
- calendar.provider

コンポーネントの URL の構成

この項では、Oracle Email、Oracle Files、Oracle Calendar などのコンポーネントの URL の構成方法について説明します。コンポーネントの URL を構成するには、webclient.properties ファイルを変更します。

webclient.properties ファイルには、Oracle Collaboration Suite の各コンポーネントの 3 つの URL が含まれています。

- ヘルプ・ページの URL
 - アプリケーションのエントリ・ポイント
 - ポートレット・プロバイダの URL
1. \$ORACLE_HOME/webclient/classes/oracle/collabsuite/webclient/resources ディレクトリにある webclient.properties ファイルを開きます。
 2. webclient.properties ファイルで、各構成済コンポーネントのエントリ・ポイントとなる URL を設定します。
 3. 構成対象の各コンポーネントの 3 つの URL すべてで、ホスト名およびポート番号のトークンを置き換えます。

Oracle Calendar をリリース 2 (9.0.4.1) にアップグレードしない場合は、次の手順を実行して、Oracle Calendar リリース 1 (9.0.3) をポートレットとして使用できるようにします。

- a. Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の Middle-Tier の \$ORACLE_HOME/webclient/classes/oracle/collabsuite/webclient/resources ディレクトリから webclient.properties ファイルを開きます。
- b. 次の文を検索します。

```
calendar=http://%CALENDAR_HOST%:%CALENDAR_  
PORT%/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=web
```

この文を次のように変更します。

```
calendar=http://%CALENDAR_HOST%:%CALENDAR_  
PORT%/fcgi-bin/owc/lexacal.fcgi?go=login
```

- c. 次の文を検索します。

```
calendar.provider=http://%WEBCLIENT_HOST%:%WEBCLIENT_
PORT%/webclient-calendar/servlet/soaprouter
```

この文を次のように変更します。

```
calendar.provider= http://%WIRELESS_HOST%:%WIRELESS_
PORT%/marconi/servlet/soaprouter
```

コマンドラインからの Web Client Configuration Assistant の実行

次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/webclient/bin/webclient_installer.sh Oradcle9iAS_Portal_user_name
Oradcle9iAS_Portal_user_password -complete
```

Oracle9iAS Portal スキーマの名前、パスワードおよび接続文字列の情報がわかる場合は、次のように Configuration Assistant を起動することもできます。

```
$ORACLE_HOME/webclient/bin/webclient_installer.sh Oracle9iAS_Portal_user_name
Oracle9iAS_Portal_user_password -complete -s
schema -p password -c connect_string
```

項目の意味は次のとおりです。

- schema: Oracle9iAS Portal の Oracle データベース・アカウント
- password: Oracle9iAS Portal アカウントのパスワード
- connect_string: Oracle9iAS Portal リポジトリがインストールされているデータベース・インスタンスへの接続文字列。host_name:port:SID のように指定します。

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のインスタンスの削除

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) へのアップグレードが正常に終了した後、リリース 1 (9.0.3) のインスタンスを削除できます。

targets.xml ファイルからリリース 1 (9.0.3) ターゲットを削除する前に、次の手順を実行します。

1. 変更を行う前に、targets.xml ファイルのコピーを作成します。
2. targets.xml ファイルに次のヘッダーが含まれていることを確認します。

```
<Targets>
<Target TYPE="host" NAME="hostname.acme.com" VERSION="1.0">
</Targets>
```

3. すべてのリリース 1 (9.0.3) ターゲットを `targets.xml` ファイルから削除します。このファイルは、アクティブな Enterprise Manager デーモンの `$ORACLE_HOME/sysman/emd` ディレクトリにあります。
4. 次のコマンドを Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の `$ORACLE_HOME` から実行します。

```
cd $ORACLE_HOME/dcm/bin
dcmctl destroyInstance -i Release_1_instance_name
```

注意： 次のコマンドを使用してすべてのインスタンスを名前順にリスト出力します。このリストは、削除するインスタンスの特定に使用すると便利です。

```
dcmctl listInstances
```

5. アップグレード前の Middle-Tier を削除します (オプション)。

Oracle Collaboration Suite への CorporateTime Server 5.4 のアップグレード

CorporateTime Server 5.4 内部または外部は、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) にアップグレードできます。これはサポートされるアップグレード・パスですが、プロセスは手動の手順で構成されます。

CorporateTime Server 5.4 を Oracle Collaboration Suite にアップグレードするには、次のようにします。

1. F-17 ページの「[Server のアップグレード](#)」で説明するとおり、CorporateTime Server 5.4 をリリース 2 (9.0.4.1) の Oracle Calendar スタンドアロンにアップグレードします。
2. [第 6 章「Oracle Collaboration Suite のインストール](#)」で説明するとおり、Oracle Collaboration Suite の Infrastructure および Middle-Tier をインストールします。

注意： 3-40 ページの手順 1 で使用した `$ORACLE_HOME` にインストールしないでください。

3. ユーザー情報を新しい Oracle Collaboration Suite Infrastructure の Oracle Internet Directory コンポーネントに移行します。

4. CorporateTime Calendar の属性 (ctCalXitem ID など) を、新しい Oracle Collaboration Suite Infrastructure の Oracle Internet Directory コンポーネントにインポートします。
5. 3-40 ページの手順 1 でアップグレードした Oracle Calendar データベース・ファイルを、新しくインストールした Oracle Collaboration Suite の Oracle Calendar コンポーネントの上にコピーします。

Oracle Calendar スタンドアロン外部から Oracle Collaboration Suite へのアップグレード

この項では、iPlanet Directory Server が使用される Oracle Calendar スタンドアロン・インストールを Oracle Internet Directory が使用される Oracle Collaboration Suite にアップグレードする方法について説明します。次の 2 つのアップグレード例が考えられます。

- **共存を伴うアップグレード** : Oracle Calendar 以外にも iPlanet Directory Server を使用するアプリケーションがある場合は、この方法を使用します。この場合、iPlanet Directory Server を保持し、両方のディレクトリ内のデータを同期させます。
- **共存を伴わないアップグレード** : iPlanet Directory Server を使用するアプリケーションが Oracle Calendar のみの場合は、この方法を使用します。この場合、iPlanet Directory Server は保持しません。

共存を伴うアップグレード

共存を伴うアップグレードでは、iPlanet Directory Server を Oracle Internet Directory サーバーとともに保持および管理することを前提としています。両方のディレクトリ内のユーザー・データの同期を保つには、Oracle Internet Directory の機能のひとつである Oracle Directory Integration Platform (DIP) を使用します。詳細に関しては、オラクル社カスタマ・サポート・センターへお問い合わせください。

一般的な注意事項と前提事項

この手順に関する前提事項と制限事項は次のとおりです。

- リリース 2 (9.0.4.2) の Oracle Calendar スタンドアロンおよびバージョン 5.x の iPlanet Directory Server がインストールされ実行されている。
- 同期は、iPlanet Directory Server から Oracle Internet Directory への一方向のみ。
- 移行完了後は、新規ユーザーの追加は iPlanet Directory Server を使用してのみ可能。

手順 1 Oracle Collaboration Suite のインストール

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2) をインストールし、実行されていることを確認します。

手順 2 iPlanet Directory Server から Oracle Internet Directory へのディレクトリ・エントリの移行

ディレクトリ・エントリは、iPlanet Directory Server から LDIF (LDAP Data Interchange Format) ファイルにエクスポートして変更した後、Oracle Internet Directory にインポートする必要があります。変更操作には、独自データおよび操作属性の削除、Oracle Internet Directory のオブジェクト・クラスの追加などがあります。

また、iPlanet Directory Server のベース・スキーマに変更を加えた場合は、Oracle Internet Directory に対しても同様の変更が必要になる場合もあります。これは、ベース・スキーマに追加された属性が Oracle Internet Directory にもインポートされるかどうかによって決まります。

手順 3 Oracle Internet Directory と iPlanet Directory Server 間の同期サービスの構成

Oracle Internet Directory と iPlanet Directory Server 間の同期サービスは、Oracle Directory Integration Platform (DIP) によって提供されます。同期は、ユーザー・アカウントを使用して行い、同期サービスの構成では、マッピング・ルールの設定、統合プロファイルの作成などを行う必要があります。

手順 4 Calendar データベースの移行

Calendar データベースの移行では、Calendar ノードを Oracle Calendar スタンドアロン・インストールから Oracle Collaboration Suite のインストールに移動した後、この変更が認識されるようにノード・ネットワークを再構成する必要があります。

共存を伴わないアップグレード

共存を伴わないアップグレードでは、アップグレード完了後、ユーザー・アカウントを Oracle Internet Directory を介して管理することを前提としています。詳細に関しては、オラクル社カスタマ・サポート・センターへお問い合わせください。

注意： この手順は、現行の Oracle Calendar スタンドアロン・インストールからリリース 2 (9.0.4.2) の Oracle Calendar スタンドアロンへのアップグレードが完了していることを前提としています。

手順 1 Oracle Collaboration Suite のインストール

Oracle Collaboration Suite をインストールする場合は、現行の Oracle Calendar スタンドアロン・インストールと同じノード・ネットワーク構成（ノードおよびノード ID）を使用します。

手順 2 iPlanet Directory Server から Oracle Internet Directory へのディレクトリ・エントリの移行

ディレクトリ・エントリは、iPlanet Directory Server から LDIF ファイルにエクスポートして変更した後、Oracle Internet Directory にインポートする必要があります。変更操作には、独自データおよび操作属性の削除、Oracle Internet Directory のオブジェクト・クラスの追加などがあります。

また、iPlanet Directory Server のベース・スキーマに変更を加えた場合は、Oracle Internet Directory に対しても同様の変更が必要になる場合もあります。これは、ベース・スキーマに追加された属性が Oracle Internet Directory にもインポートされるかどうかによって決まります。

手順 3 Calendar データベースの移行

Calendar データベースの移行では、Calendar ノードを Oracle Calendar スタンドアロン・インストールから Oracle Collaboration Suite のインストールに移動した後、この変更が認識されるようにノード・ネットワークを再構成する必要があります。

Oracle Calendar スタンドアロン内部から Oracle Collaboration Suite へのアップグレード

この項では、Oracle Calendar スタンドアロン内部から Oracle Collaboration Suite へのアップグレード方法の概要を説明します。詳細に関しては、オラクル社カスタマ・サポート・センターへお問い合わせください。

手順 1 Oracle Collaboration Suite のインストール

Oracle Collaboration Suite をインストールする場合は、現行の Oracle Calendar スタンドアロン・インストールと同じノード・ネットワーク構成（ノードおよびノード ID）を使用します。

手順 2 Oracle Internet Directory へのユーザーおよびリソース・エントリの移行

ユーザーおよびリソース・エントリは、LDIF（LDAP Data Interchange Format）ファイルにエクスポートして変更した後、Oracle Internet Directory にインポートする必要があります。変更操作には、エントリへの Oracle Internet Directory のオブジェクト・クラスの追加などがあります。

手順 3 .ini ファイルの再構成

Oracle Collaboration Suite インストール上の .ini ファイルを更新し、Oracle Calendar スタンドアロン・インストールの設定と一致させます。

手順 4 Calendar データベースの移行

Calendar データベースの移行では、Calendar ノードを Oracle Calendar スタンドアロン・インストールから Oracle Collaboration Suite のインストールに移動した後、この変更が認識されるようにノード・ネットワークを再構成する必要があります。

Oracle Collaboration Suite 以外の Infrastructure のアップグレード

Oracle Collaboration Suite リリース 2 の Middle-Tier を、Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1、Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.3.0 にアップグレードされた Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 などの Oracle Collaboration Suite 以外の Infrastructure にインストールする場合は、次の手順を実行します。

- 1. Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1 または Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 を Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.3.0 にアップグレードします。
- 2. Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.3 パッチ 3038037 を Infrastructure に適用します。
- 3. 次の表に示すファイルを、Oracle9iAS Infrastructure リリース 2 (9.0.4.1) のインストール用 CD-ROM の CDROM_ROOT/tools/upgrade ディレクトリから、アップグレードする Infrastructure の Oracle ホーム・ディレクトリ内の指定されたターゲット・ディレクトリにコピーします。

表 3-5 ファイルおよびターゲット・ディレクトリのアップグレード

ファイル	ターゲット・ディレクトリ
modDirectiveMS.xsd	%ORACLE_HOME%\dcm\config\plugins\apache
opca.jar	%ORACLE_HOME%\sysman\webapps\emd\WEB-INF\lib
portalSMI.jar	%ORACLE_HOME%\sysman\webapps\emd\WEB-INF\lib
repository.jar	%ORACLE_HOME%\jlib
ApacheModuleFastCGI.dll	%ORACLE_HOME%\Apache\Apache\modules
ApacheModuleOSSO.dll	%ORACLE_HOME%\Apache\Apache\modules
FastCGI.dll	%ORACLE_HOME%\Apache\fastcgi
FastCGI.lib	%ORACLE_HOME%\Apache\fastcgi
fcgi.jar	%ORACLE_HOME%\Apache\fastcgi

4. Oracle Delegated Administration Services を使用して、orclguest ユーザーを作成します。

注意： デフォルトのサブスクリイバに新規ユーザーを作成するには、十分な権限が必要です。

- a. ユーザーを作成する権限を持ったユーザーとして Oracle Delegated Administration Services にログインします。
- b. 「ディレクトリ」タブをクリックします。
- c. 「検索結果」セクションで、「作成」をクリックします。
- d. 構成によって、「ユーザーの作成」ページで入力要求される値は異なります。この場合、**ユーザー名**の値は orclguest である必要があります。必要に応じて、他の値を入力します。すべての必須フィールドが入力されていることを確認します。
- e. 「送信」をクリックします。

注意： この Infrastructure に Middle-Tier がインストールされていないことを確認してください。

5. Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースをインストールします。

注意： Information Storage データベースを登録する際は、手順 1 で 9.0.2.3 にアップグレードした Infrastructure の Oracle Internet Directory を指定します。

6. Oracle Collaboration Suite リリース 2 の Middle-Tier をインストールします。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 の Middle-Tier をアップグレード済 Oracle9iAS Infrastructure にインストールする場合は、構成フェーズで Oracle9iAS Wireless Configuration Assistant に障害が発生します。

この障害が発生しないようにするには、次の手順を実行します。

- a. Oracle9iAS Wireless を構成せずに、インストールを完了します。
- b. パッチ 3133419 をダウンロードし、このパッチに従って Oracle9iAS Wireless Configuration Assistant ツールを実行します。

7. Middle-Tier マシンに、Oracle9iAS Portal パッチ 2758529 を適用します。パッチの取得に関しては、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。
8. すべての無効なオブジェクトを再コンパイルします。
9. コマンドラインから Web クライアント・インストーラを再起動します。

```
$ORACLE_HOME/webclient/bin/webclient_installer.sh OID_Administrator password  
-complete
```
10. Oracle Collaboration Suite リリース 2 の Middle-Tier の構成手順を完了します。

Oracle Collaboration Suite の配置方法

この章では、3 つの Oracle Collaboration Suite のインストールの配置方法を説明し、配置についての推奨項目を示します。また、既存の Oracle9i データベースを Oracle Collaboration Suite コンポーネントとともに使用する場合のデータベースのチューニングについても説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle9iAS Infrastructure の配置](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage の配置](#)
- [Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の配置](#)
- [配置についての推奨項目および考慮事項](#)
- [Oracle Collaboration Suite リリース 1 \(9.0.3\) の削除](#)

Oracle9iAS Infrastructure の配置

通常、Oracle9iAS Infrastructure の配置では、1 つ以上の Oracle Management Server がインストールされ、ネットワーク内に 1 つの Oracle9iAS Single Sign-On インスタンスおよび 1 つの Oracle Internet Directory インスタンスが含まれます。

別々のホスト上に Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On を構成する場合、インストール中に表示される「構成オプションの選択」画面で次の手順を実行します。

1. インストール中に、最初のホスト (Host 1) 上に Oracle Internet Directory の構成を選択し、Oracle9iAS Single Sign-On の構成を選択解除します。
2. インストール中に、2 番目のホスト (Host 2) 上に Oracle9iAS Single Sign-On の構成を選択し、Oracle Internet Directory の構成を選択解除します。
3. インストール中に、Host 2 上の Oracle9iAS Single Sign-On の構成が Host 1 上の Oracle Internet Directory の構成を指すように設定します。

Oracle Internet Directory を複数のホストにインストールしてディレクトリ・レプリケーション・ネットワークを構成する場合は、Oracle Internet Directory の 1 つのインスタンスのみで Oracle9iAS Single Sign-On を構成します。Oracle Internet Directory の残りのインスタンスは Oracle9iAS Single Sign-On の構成に関連付けないでください。

関連項目： 次の URL の Oracle Technology Network Japan で入手可能な『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

<http://otn.oracle.co.jp/>

Oracle Collaboration Suite Information Storage の配置

顧客データと相互作用するいくつかの Oracle Collaboration Suite コンポーネントでは、メタデータ・スキーマの格納に Information Storage データベースが使用されます。同じタイプの複数の Oracle Collaboration Suite コンポーネントをインストールする場合、同じ Information Storage データベースまたは異なる Information Storage データベースを使用できます。単一のデータベース・インスタンスで、異なる Oracle Collaboration Suite コンポーネントのメタデータ・スキーマおよびデータを保持できます。

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の配置

すべての Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストールには、Oracle9iAS Infrastructure が必要です。Oracle Collaboration Suite を使用するには、Oracle Collaboration Suite CD パックに含まれる Oracle9iAS Infrastructure を使用するか、または既存の Oracle9iAS Infrastructure リリース 9.0.2.0.0 または 9.0.2.0.1 をアップグレードします。

Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On をネットワーク上にインストールおよび構成している必要があります。また、すべての Middle-Tier アプリケーションに別々の Oracle9iAS Metadata Repository を使用することをお勧めします。既存の Oracle9iAS Infrastructure が存在する場合は、3-6 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード](#)」を参照してください。

すべての Oracle Collaboration Suite Middle-Tier アプリケーションで同じ Oracle9iAS Metadata Repository を共有できますが、通常は、Oracle Internet Directory と同じ Oracle9iAS Metadata Repository は共有しないでください。

Middle-Tier は、ホストごとに 1 つしかインストールできませんが、単一のホストから複数の Oracle Collaboration Suite インスタンスを構成できます。Oracle Email では、単一のホストで構成できるのは一度のみであることに注意してください。ただし、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を Oracle9iAS Infrastructure の Oracle ホームまたは既存の Oracle9iAS Middle-Tier の Oracle ホームにインストールすることはできません。

Oracle Collaboration Suite は、Oracle9iAS Portal および Oracle Ultra Search を含む複数の Middle-Tier アプリケーションで構成されます。Oracle9iAS Portal および Oracle Ultra Search は、次のいずれかに接続できます。

- Oracle9i データベース
- Oracle9iAS Metadata Repository （通常、Oracle Internet Directory とは共有されません。）

Oracle Ultra Search による索引付けは、Oracle9iAS Metadata Repository に自動的に格納されるか、または Oracle9i データベースに格納できます。Oracle Ultra Search による索引付けは、Oracle Internet Directory が使用するリポジトリ以外の Oracle9iAS Metadata Repository に格納します。

Oracle Email コンポーネントは、Oracle Email の受信ボックス内のボイスメールおよび FAX を格納するために、Oracle9i リリース 2 (9.2) のデータベースに接続する必要があります。

Oracle Email、Oracle Files および Oracle Calendar を除くすべての Oracle Collaboration Suite Middle-Tier アプリケーションの情報は、Oracle9iAS Metadata Repository に自動的に格納されます。

注意：

- Oracle Collaboration Suite Middle-Tier は、1 つ以上のホスト上に単一または複数のインスタンスとしてインストールできます。複数の Oracle Collaboration Suite Middle-Tier インスタンスを単一のホスト上にインストールする場合は、Oracle Email または Oracle Calendar を 2 つ以上構成しないでください。
 - 今回のリリースの Oracle Collaboration Suite に対応する Oracle9iAS Middle-Tier のアップグレードはサポートされていません。
-
-

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar の配置](#)
- [Oracle Email の配置](#)
- [Oracle Files の配置](#)
- [Oracle Ultra Search の配置](#)
- [Oracle Voicemail & Fax の配置](#)
- [Oracle Web Conferencing の配置](#)
- [Oracle9iAS Wireless の配置](#)

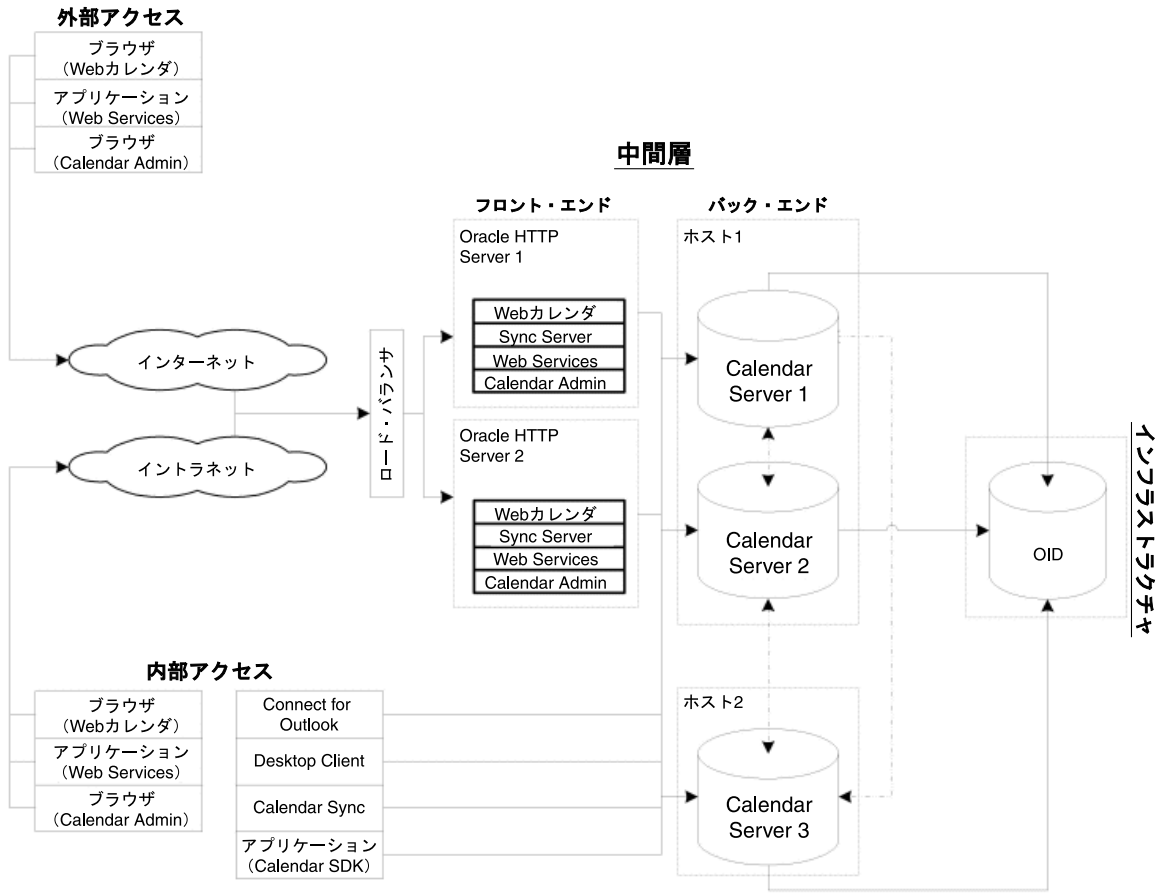
Oracle Calendar の配置

Oracle Calendar をインストールすると、多数のコンポーネントがコンピュータにインストールされます。これらには、Oracle Calendar Server コンポーネント（エンジン、デーモン、ユーティリティなど）および Web コンポーネント（Oracle Calendar Web Client、Oracle Calendar Administrator、Oracle Calendar Sync Server、Oracle Calendar Web Services など）が含まれます。Oracle Calendar Server の複数のインスタンスが同一のコンピュータにインストールされると、一部のコンポーネントの冗長なコピーが存在することになります。

この冗長性を回避するためには、ソフトウェアをフロントエンド・サーバーおよびバックエンド・サーバーの 2 台のコンピュータに分散してインストールします。その際、Web アプリケーションをフロントエンド・サーバーにインストールし、Oracle Calendar Server のコンポーネントをバックエンド・サーバーにインストールします。これにより、Web アプリケーションおよび Oracle HTTP Server インスタンスの複数のコピーの存在が解消され、[図 4-1](#) に示すとおり、フロントエンド・サーバーの数を増すことで、Web サーバーでロード・バランシングを実行できます。

また、この構成を使用すると、バックエンド・サーバーをファイアウォール外に置いて、DMZ を設定することが可能になります。

図 4-1 Oracle Calendar の配置



Oracle Email の配置

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールして Oracle Email を構成する前に、次の考慮事項を確認します。

- 単一のコンピュータに Oracle Email インスタンスを 1 つのみ構成します。
- Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースを使用するか、既存の Oracle9i データベースをチューニングします。

Oracle Files の配置

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールして Oracle Files を構成する前に、次の考慮事項を確認します。

- 4-6 ページの「要件の確認および配置タイプの選択」を参照してください。
- Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースを使用するか、既存の Oracle9i データベースをチューニングします。

関連項目： Oracle Files の配置計画に関する詳細は、『Oracle Files プランニング・ガイド』および『Oracle Files 管理者ガイド』の「Oracle Files の概要」を参照してください。

要件の確認および配置タイプの選択

『Oracle Files プランニング・ガイド』で説明されている Oracle Files のハードウェアおよびサイズの要件に従ってハードウェア・リソースを評価し、適切な配置パスを選択します。

- [本番環境用の複数コンピュータへの Oracle Files の配置](#)
- [単一コンピュータへの Oracle Files の配置](#)

関連項目： [第 2 章「インストールの準備」](#) および『Oracle Files プランニング・ガイド』

本番環境用の複数コンピュータへの Oracle Files の配置

Oracle Files は、Oracle Collaboration Suite によってサポートされる Middle-Tier アプリケーション・サーバー・ソフトウェアとして実行するように設計されています。パフォーマンスを最適化するには、データベースを 1 つのコンピュータ上で実行し、Oracle Files を別のコンピュータ上で実行し、Oracle9iAS Infrastructure を 3 つ目のコンピュータで実行します。

Oracle Files のユーザー資格証明の管理には、Oracle9iAS Infrastructure のコンポーネントである Oracle Internet Directory が必要です。

単一コンピュータへの Oracle Files の配置

コンピュータが『Oracle Files プランニング・ガイド』に示すすべてのハードウェア要件およびソフトウェア要件を満たしている場合、Oracle Files およびそのすべての必須コンポーネントを単一のコンピュータにインストールできます。Oracle Files をインストールおよび配置するには、次のようにします。

1. Oracle ホームに、Oracle9iAS Infrastructure の一部である Oracle Internet Directory をインストールおよび構成します。
2. 異なる Oracle ホームに、Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールおよび構成します。
3. 3 つ目の Oracle ホームに、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールし、Oracle Files を構成します。
4. Oracle Files Configuration Assistant を使用して、[第 12 章「Oracle Files の構成」](#)に示す説明に従って、Oracle Files を構成します。

Oracle Ultra Search の配置

Oracle Ultra Search には Oracle Text が必要です。Oracle Text は、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite Information Storage とともにインストールされます。既存の Oracle9i データベースを使用する場合は、Oracle Text がインストールおよび構成されていることを確認します。

Oracle Ultra Search の索引付け機能を使用する場合は、別の Oracle9iAS Metadata Repository をインストールおよび構成することをお勧めします。Oracle Ultra Search による索引付けは、Oracle9iAS Metadata Repository に自動的に格納されます。Oracle Ultra Search による索引付けは、Oracle Internet Directory が使用するリポジトリ以外の Oracle9iAS Metadata Repository に格納します。

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールして Oracle Ultra Search を構成する前に、次の考慮事項を確認します。

- [十分な RAM](#)
- [十分なディスク領域](#)
- [ソフトウェア要件](#)
- [パフォーマンスの要因およびサイズ指定のガイドライン](#)

十分な RAM

Ultra Search の索引付けエンジンは、Oracle 内で実行します。そのため、大規模な Oracle インストールの実行が可能な容量のメモリーがシステムに搭載されていることが重要です。Oracle インスタンスのシステム・グローバル領域は、50MB 以上である必要があります。

関連項目：『Oracle9i データベース・パフォーマンス・チューニング・ガイドおよびリファレンス』

Ultra Search の Web クローラは、同じホスト上で個別の Java プロセスとして実行されます。Web クローラ専用のメモリーとして 50MB を割り当てます。

Ultra Search の管理ツールは、J2EE 1.2 の標準 Web アプリケーションです。この管理ツールは、Ultra Search のサーバー・コンポーネントとは別のホスト上にインストールして実行できます。このコンポーネントを Ultra Search のサーバー・コンポーネントと同じホスト上で実行することもできますが、スケーラビリティが制限される場合があります。いずれの方法を選択する場合も、J2EE エンジンに十分なメモリーを割り当てます。Oracle9iAS Containers for J2EE と Oracle HTTP Server を併用することをお勧めします。Oracle HTTP Server、および J2EE エンジンを実行する JDK に十分なメモリーを割り当てます。

十分なディスク領域

顧客のニーズは多種多様であるため、特定の容量のディスク領域を推奨することはできません。一般的なガイドラインとして、次の最小要件があります。

- 各リモート・クローラ・ホストに、Ultra Search のサーバー・コンポーネントをインストールするために必要な容量と同量のディスク領域を割り当てます。
- ホスト上の RAM に応じて、できるかぎり大規模な一時表領域を作成します。
- Ultra Search インスタンス・ユーザー用に、索引付けするデータの総量と同じサイズの表領域を作成します。たとえば、クローラおよび索引付けするデータの総量が 10GB であると推定した場合、Ultra Search インスタンス・ユーザー用に 10GB 以上の表領域を作成します。この表領域を Ultra Search インスタンス・ユーザーのデフォルトの表領域として割り当てる必要があります。

注意： Ultra Search インスタンス・ユーザーは、明示的に作成する必要があります。データベース・ユーザーです。クローラおよび索引付けプロセスの一部として収集および処理されるすべてのデータが、このユーザーのスキーマに格納されます。

ソフトウェア要件

Ultra Search Middle-Tier コンポーネントは、Web アプリケーションです。そのため、Web サーバーを実行する必要があります。Oracle HTTP Server と JServ、または Oracle HTTP Server と Oracle9iAS Containers for J2EE を使用することをお勧めします。

パフォーマンスの要因およびサイズ指定のガイドライン

この項では、一般的な小規模、中規模または大規模な組織のリポジトリ間で均一な検索機能を提供するための、Oracle Ultra Search に対するハードウェア要件について説明します。

クロールおよび索引付けのパフォーマンスは、検索するドキュメントの数、ドキュメントの平均サイズ、ドキュメントの種類（これらのドキュメントをシステム固有のフォーマットから INSO に変換する必要がある場合もない場合も）などの要因によって異なります。

注意： クロールおよび索引付けによって収集された実データは、ユーザーのスキーマには格納されません。ただし、データのトークンは格納されます。

問合せのパフォーマンスは、任意の短い時間間隔（たとえば 15 分間）に連続して同時に問合せを実行するユーザーの数によって異なります。また、問合せのパフォーマンスは、データ・セットのサイズおよびコンピュータ・リソース（CPU およびメモリー）によっても異なります。

表 4-1 に、小企業、中企業および大企業の定義を示します。

表 4-1 小企業、中企業および大企業のパフォーマンスの要因

パフォーマンス・ファクタ	小企業	中企業	大企業
企業イントラネット内のドキュメントの数	50000	500000	2500000
ドキュメントの平均サイズ (KB)	50	50	50
同時に検索を実行するユーザー	<10	<10	<10

表 4-2 に、小企業、中企業および大企業のハードウェア構成例を示します。

表 4-2 小企業、中企業および大企業向けのサイズ指定のガイドライン

層	小企業	中企業	大企業
データベース (Oracle9iAS Metadata Repository または Oracle9i リリース 1 (9.0.1) 以降のデー タベース)	2GB の RAM が搭載さ れた SUN Ultra 60 (1 台)	4 つの CPU が搭載され た SUN Enterprise 450 (または同等のサー バー) 2GB の RAM 10 ～ 15GB の空きディ スク領域	16 の CPU が搭載され た HP-UX PA-RISC (64-bit) Superdome 48GB の RAM 500GB の空きディスク
Oracle Collaboration Suite Middle-Tier	10GB の空きディスク 領域	2GB の RAM が搭載さ れた Windows 2000 Server	2GB の RAM が搭載さ れた Windows 2000 Server

注意： 小規模な構成の場合は、データベース層および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の両方が同じコンピュータ上にインストールされます。前述のハードディスク領域の要件には、ソフトウェアのインストールに必要な領域は含まれていません。ハードディスク領域の要件については、2-2 ページの「[ハードウェア要件](#)」を参照してください。

Oracle Voicemail & Fax の配置

Oracle Voicemail & Fax には、電話サービス用の Windows 2000 Computer Telephony (CT) Server が必要です。

関連項目： ハードウェア要件とソフトウェア要件、およびインストールの方法については、『Oracle Voicemail & Fax 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Web Conferencing の配置

Oracle Web Conferencing は、エンド・ユーザー機能を Middle-Tier アプリケーションとして Oracle Collaboration Suite 内に配信します。Oracle Web Conferencing は、Oracle Real-Time Collaboration グループの製品から現在提供されています。

Oracle Web Conferencing の配置を計画するには、次のようにします。

- このマニュアルの Oracle Web Conferencing に関連する項を確認します。
- 『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』を確認します。
- 次の URL にアクセスして、最新の情報、対処方法およびヒントを確認します。

<http://otn.oracle.co.jp/>

Oracle Collaboration Suite は、互換性のあるバージョンの Oracle9iAS Single Sign-On Server を使用し、Oracle Internet Directory と関連付ける必要があります。これらは、Oracle9iAS Infrastructure から使用できます。

Oracle Web Conferencing は、Oracle9i リリース 2 (9.2) 以降のデータベースを使用する必要があります。Middle-Tier のインストール時に、他の Oracle Collaboration Suite コンポーネント (Oracle Files など) のためにすでにインストールした Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースを使用するか、または適切な別のデータベースに接続情報を指定できます。Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースとは異なるデータベースを使用する場合、このマニュアルに示す Oracle Web Conferencing の表領域に関する要件を必ず確認してください。

Oracle Web Conferencing は、リアルタイム・コラボレーションを配信するために処理能力の消費がより高くなります。使用する配置構成によっては、Oracle Web Conferencing がインストールされる \$ORACLE_HOME について、Oracle HTTP Server および mod_osso の構成を再構成する必要があります。そのため、他の Oracle Collaboration Suite コンポーネント製品とは別に、Oracle Web Conferencing を独自の \$ORACLE_HOME にインストールすることをお勧めします。

Oracle Collaboration Suite を実装するために中間層のホストが複数ある場合、Oracle Web Conferencing は、可能な限り処理能力が高いメモリーおよび CPU リソースを Oracle Web Conferencing のみに提供でき、エンド・ユーザーに対して最も広い帯域幅のネットワーク接続を保持するホストに設定します。

Oracle Web Conferencing は、選択した数の中間層に配置できます。各 Oracle Web Conferencing インスタンスは、同じデータベースを使用するすべての Oracle Web Conferencing Middle-Tier と連携するようにデフォルトで構成されます。

Oracle Web Conferencing は、他の Oracle Collaboration Suite のコンポーネントとともに同じ \$ORACLE_HOME にインストールして構成できます。

Oracle Web Conferencing のコア・コンポーネントは、ホストがこのマニュアルおよび Oracle Collaboration Suite コンポーネントの関連ドキュメントに示すすべての要件を満たしている限り、Oracle Collaboration Suite 全体（Infrastructure、Information Store、すべての Middle-Tier の Oracle ホームを含む）が同じホストに存在する場所でも構成できます。

注意： Document Conversion Server および Voice Conversion Server を備えた Oracle Web Conferencing インスタンスには、Microsoft Windows 2000 がインストールされているコンピュータが必要です。このタイプの Oracle Web Conferencing インスタンスによって提供される機能は、配置に Document Conversion Server または Voice Conversion Server が含まれていない場合には使用できません。ただし、Oracle Web Conferencing のコア機能は使用できます。

Oracle9iAS Wireless の配置

Oracle Collaboration Suite の Oracle9iAS Wireless コンポーネントを既存の Oracle9iAS Infrastructure リリース 9.0.2.0.0 または 9.0.2.0.1 に対してインストールする場合、Oracle9iAS Metadata Repository の Oracle9iAS Wireless スキーマは自動的にアップグレードされます。既存の Oracle9iAS Wireless Middle-Tier があり、リリース 9.0.2.6.0 以前で同じ Oracle9iAS Infrastructure を指している場合、Oracle9iAS Wireless 9.0.2.8.0 パッチを各 Oracle9iAS Wireless Middle-Tier に適用します。パッチの取得に関しては、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

Oracle9iAS Wireless Middle-Tier を Oracle Collaboration Suite CD パックからインストールする場合、アップグレードは不要です。

Oracle9iAS Wireless の高可用性

Oracle9iAS Wireless では、Oracle9iAS のクラスタリング・メカニズムを使用してアプリケーションをクラスタ化することはできません。ただし、Oracle9iAS を構成して高可用性の配置を実現することは可能です。

高可用性の配置を実現するには、次の手順を完了します。

注意： ファイルは、変更する前にすべてバックアップします。

1. Oracle9iAS Infrastructure をコンピュータにインストールし、複数の Middle-Tier を別のコンピュータにインストールします。各 Middle-Tier のインストールが Infrastructure を必ず指すようにします。

2. 次のコマンドを使用して、Distributed Configuration Manager およびすべてのプロセスを停止します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl stop
```

3. 次のコマンドを使用して、Oracle Enterprise Manager を停止します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl stop
```

4. 各 Middle-Tier および Infrastructure で、\$ORACLE_HOME/opmn/conf/ons.conf ファイルにその他すべての層に対する IP アドレスのエントリが含まれていることを確認します。含まれていない場合は、整理して、欠落している IP アドレスのエントリを追加します。
5. 各 Middle-Tier で、OC4J_Wireless OC4J インスタンスに対するデフォルトのアイランドに加える必要があるプロセスの数を目的の数まで増やします。この操作は、Oracle Enterprise Manager コンソールから実行するか、または \$ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml ファイルを変更することによって実行できます。

関連項目： OC4J インスタンスとアイランドの詳細および概念は、Oracle9iAS Containers for J2EE のドキュメントを参照してください。

たとえば、opmn.xml を変更する場合、4 つの OC4J プロセスをデフォルトのアイランドで起動する通常のエントリは、次のような形式になります。

```
<oc4j maxRetry="3" instanceName="OC4J_Wireless" gid="OC4J_Wireless"
numProcs="4">
```

6. 各 Middle-Tier の mod_oc4j 構成ファイル（特に \$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/mod_oc4j.conf）で、Oracle9iAS Wireless ランタイムに対するマウント・ポイントのエントリを変更します。2 つの Middle-Tier（次の例では m1 および m2）が使用される場合、次のようにエントリを変更します。

```
Oc4jMount /ptg
instance://m1.c1.mysite.com:OC4J_Wireless,m2.c2.se4637-u-sr006.us.oracle.com
:OC4J_Wireless
```

および

```
Oc4jMount /ptg/*
instance://m1.c1.mysite.com:OC4J_Wireless,m2.c2.se4637-u-sr006.us.oracle.com
:OC 4J_Wireless
```

ここで、c1 および c2 はそれぞれの Oracle9iAS インスタンス名で、次のコマンドを実行することによって特定できます。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl whichInstance
```

これらのエントリは、すべての中間層コンピュータについてまったく同じである必要があります。

7. \$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateConfig を実行して、Distributed Configuration Manager リポジトリを構成ファイルの変更で更新します。

より低速のシステムでは、フォーム ADMN-906005 の Distributed Configuration Manager エラー（タイムアウト）が表示される場合があります。このエラーが発生した場合は、\$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl getReturnStatus コマンドを実行し、コマンドが終了するまで待ちます。これにより、変更が Distributed Configuration Manager リポジトリに反映されていることが確認されます。

8. 次のファイルの <orion-web-app> タグの下に <cluster-config/> タグを追加します。

```
$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_wireless/application-deployments/ptg/ptg-web/orion-web.xml
```

9. 次のコマンドを実行して、Distributed Configuration Manager およびすべてのプロセスを起動します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl start
```

10. 次のコマンドを実行して Oracle Enterprise Manager を起動します。

```
ORACLE_HOME/bin/emctl start
```

11. ハードウェア・ロード・バランサを構成し、Middle-Tier を指すようにします。

現在、高可用性のサポートは、コア・サーバー・ランタイム（デフォルトで URI /ptg/rm にマップ）でのみ使用できます。

関連項目： 詳細は、Oracle9iAS Containers for J2EE のドキュメントを参照してください。

配置についての推奨項目および考慮事項

推奨項目は次のとおりです。

- 3つの Oracle Collaboration Suite を、次の順序で異なる Oracle ホームにインストールします。
 - Oracle9iAS Infrastructure
 - Oracle Collaboration Suite Information Storage
 - Oracle Collaboration Suite
- パフォーマンスを最適化するために、Oracle Collaboration Suite および Oracle9iAS Infrastructure を個別のホスト上にインストールします。
- Oracle Collaboration Suite および Oracle Collaboration Suite Information Storage を個別のホスト上にインストールします。
- 同じホストに追加の Oracle Collaboration Suite アプリケーションをインストールおよび構成する場合は、同じオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントを使用します。

別のホスト上に存在する Oracle9iAS Metadata Repository に接続することによって、広範囲で使用されるコンポーネントのパフォーマンスを最適化できます。コンポーネントを独自のリポジトリに割り当てるには、次の手順を実行します。

1. Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On をサポートする（オプションで Oracle Management Server のサポートも含む）ために、Oracle9iAS Infrastructure をインストールします。
2. Middle-Tier アプリケーションを含む Oracle Collaboration Suite をインストールします。
3. Oracle Internet Directory または Oracle9iAS Single Sign-On を構成せずに、2 番目の Oracle9iAS Infrastructure をインストールします。
4. Oracle Enterprise Manager Web Site で Oracle Collaboration Suite のこのインスタンスを参照し、Oracle9iAS Instance ホーム・ページに移動します。
5. 「Configure Schema」を選択します。

「Configure Schema」ページから、選択されたアプリケーション用のデータベースおよびスキーマを選択できます。

関連項目： このタスクの実行の詳細は、Enterprise Manager Web Site のオンライン・ヘルプの「Configuring the Schema for an Oracle9iAS Component」を参照してください。

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の削除

既存の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) がインストールされているマシンに、アップグレードを実行せずに Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) をインストールすると、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のディレクトリが引き続きアクティブな Oracle Enterprise Manager ディレクトリとなります。後で Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) を削除する場合、まず Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のディレクトリから `emctl` コマンドを実行し、Oracle Enterprise Manager ディレクトリを Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) のディレクトリまたは別のディレクトリに変更する必要があります。

関連項目：

- `emctl` コマンドの使用方法は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。
- Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) へのアップグレードは、3-12 ページの「[Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のアップグレード](#)」を参照してください。

インストールの開始

この章では、Oracle Collaboration Suite の 3 種類のインストールを開始する手順について説明します。インストール・プロセスを正常に実行するには、この章に示す手順に従う必要があります。

この章の内容は次のとおりです。

- [CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール](#)
- [ハード・ドライブからの Oracle コンポーネントのインストール](#)
- [Oracle Universal Installer の概要](#)
- [Oracle Universal Installer の起動](#)

CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール

Oracle Collaboration Suite には、次の製品をインストールするための CD-ROM が含まれています。

- Oracle9iAS Infrastructure
- Oracle Collaboration Suite Information Storage
- Oracle Collaboration Suite
- Oracle Collaboration Suite Client
- Oracle Cluster Manager リリース 9.2.0.3

Oracle の CD-ROM は、ISO 9660 を拡張した Rockridge フォーマットで作成されています。CD-ROM から直接インストールするか、または CD-ROM の内容をコピーしてシステムのハードディスク・ドライブからインストールするかを選択できます。Oracle Universal Installer を起動する前に、インストール方法に応じて必要な手順を完了する必要があります。

CD-ROM の自動マウントがサポートされないオペレーティング・システムの場合は、CD-ROM を手動でマウントする必要があります。CD-ROM をマウントまたはアンマウントするには、root 権限が必要です。CD-ROM は、ドライブから取り出す前にアンマウントする必要があります。

必要に応じて、インストール中に次のマウント手順を参照してください。

- [CD-ROM のマウント \(Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\)\)](#)
- [CD-ROM のマウント \(HP-UX PA-RISC \(64-bit\)\)](#)
- [CD-ROM のマウント \(Linux x86\)](#)

CD-ROM のマウント (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

1 枚目の CD-ROM をマウントしてインストールを開始します。後続のディスクのマウントを求められた場合は、マウントします。次の手順を実行して、CD-ROM をマウントします。

この項の内容は次のとおりです。

- [Volume Management ソフトウェアを使用した CD-ROM のマウント \(Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\)\)](#)
- [CD-ROM の手動マウント \(Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\)\)](#)

Volume Management ソフトウェアを使用した CD-ROM のマウント (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

Volume Management ソフトウェア (Solaris にデフォルトでインストールされています) を使用する場合、CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入すると、`/cdrom/volume_name` ディレクトリに自動的にマウントされます。5-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」に進みます。

Volume Management ソフトウェアがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
$ ps -e | grep vold
```

Volume Management ソフトウェアがインストールされている場合、出力は次のようになります。

```
404 ? 16:03 vold
```

- Volume Management ソフトウェアを実行している場合、CD-ROM は自動的にマウントされます。後続の CD-ROM をアンマウントするには、次のコマンドを使用します。

```
$ cd /  
$ eject
```

これらのコマンドを入力した後、5-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」に進みます。

- 行が返されない場合は、Volume Management ソフトウェアが実行されていないため、CD-ROM を手動でマウントする必要があります。5-4 ページの「[CD-ROM の手動マウント \(Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\)\)](#)」に進みます。

後続の CD-ROM をマウントするには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを使用して、CD-ROM を CD-ROM ドライブから取り出します。

```
$ cd /  
$ eject
```

2. 次の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、Oracle Universal Installer の「インストール」画面で正しいマウント・ポイントを入力します。
3. 「OK」をクリックして続行します。

CD-ROM の手動マウント (Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit))

CD-ROM を手動でマウントするには、次の手順を実行します。

1. 該当する製品の 1 枚目の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインし、必要に応じて、次のコマンドを使用して CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

```
$ su root
# mkdir cdrom_mount_point_directory
```

3. マウント・ポイント・ディレクトリに CD-ROM ドライブをマウントし、次のコマンドを使用して root アカウントを終了します。

```
# mount options device_name cdrom_mount_point_directory
# exit
```

正しい *device_name* が不明な場合は、システム管理者に問い合わせてください。通常、*device_name* は `/dev/dsk/c0t6d0s0` です。次に例を示します。

```
$ su root
# mkdir /cdrom
# mount -r -F hsfs /dev/dsk/c0t6d0s0 /cdrom
# exit
```

現行の作業ディレクトリが CD-ROM 上に存在している場合に Oracle Universal Installer を実行するには、次の手順を実行して 2 枚目の CD-ROM をマウントします。

1. システムのルート・ディレクトリに移動し、次のコマンドを使用して root ユーザーとしてログインします。

```
$ cd /
$ su root
```

2. 次のコマンドを使用して、CD-ROM をアンマウントします。

```
# umount cdrom_mount_point_directory
```

3. CD-ROM を CD-ROM ドライブから取り出します。
 4. 2 枚目の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、次のコマンドを使用してマウントします。
- ```
mount options device_name cdrom_mount_point_directory
```
5. Oracle Universal Installer の「インストール」画面で正しいマウント・ポイントを入力します。
  6. 「OK」をクリックして続行します。

## CD-ROM のマウント (HP-UX PA-RISC (64-bit))

最初に、該当する製品の 1 枚目の CD-ROM をマウントします。後続のディスクのマウントを求められた場合は、マウントします。次の手順を実行して、Oracle の CD-ROM を手動でマウントします。

1. CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインし、CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリが存在しない場合は、次のコマンドを使用して作成します。

```
$ su root
mkdir cdrom_mount_point_directory
```

3. 次のコマンドを使用して、デバイス名を確認します。

```
$ ioscan -fun -C disk
```

出力は次のようになります。

```
disk 10 10/12/5.2.0 sdisk CLAIMED DEVICE TOSHIBA CD-ROM
XM-5701TA /dev/dsk/c4t2d0 /dev/rdisk/c4t2d0
```

4. /etc/pfs\_fstab ファイルに CD-ROM デバイスのエントリが存在しない場合は、追加する必要があります。root ユーザーとして、システム・エディタを使用し、次の形式に従って /etc/pfs\_fstab ファイルに行を追加します。

```
device_file mount_point filesystem_type translation_method
```

前述の形式で、最初のエントリは CD-ROM デバイス、2 番目のエントリはマウント・ポイント、3 番目のエントリはマウントする CD-ROM が ISO 9660 を拡張した Rockridge フォーマットです。

この例での *device\_file* は、/etc/pfs\_fstab です。/etc/pfs\_fstab というパスを持つ CD-ROM デバイスの場合、次のとおり入力します。

```
/dev/dsk/c4t2d0 /SD_CDROM pfs-rrip xlat=unix 1 0
```

5. 次のコマンドを使用して、root ユーザーとしてログインします。

```
$ su root
```

6. 次のコマンドを入力します。

```
nohup /usr/sbin/pfs_mountd &
nohup /usr/sbin/pfsd &
```

7. 次のコマンドを入力して、CD-ROM をマウントします。

```
/usr/sbin/pfs_mount /SD_CDROM
```

8. root アカウントからログアウトします。

```
exit
```

現行の作業ディレクトリが CD-ROM 上に存在している場合に Oracle Universal Installer を実行するには、次の手順を実行して 2 枚目の CD-ROM をマウントします。

1. システムのルート・ディレクトリに移動し、root ユーザーとしてログインします。

```
$ cd /
$ su root
```

2. CD-ROM をアンマウントするには、次のコマンドを使用します。

```
/usr/sbin/pfs_umount /SD_CDROM
```

3. CD-ROM を CD-ROM ドライブから取り出します。

4. 必要な CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、次のコマンドを使用してマウントします。

```
/usr/sbin/pfs_mount /SD_CDROM
```

5. 「インストール」画面で正しいマウント・ポイントを入力します。

6. 「OK」をクリックして続行します。

## CD-ROM のマウント (Linux x86)

最初に、該当する製品の 1 枚目の CD-ROM をマウントします。後続のディスクのマウントを求められた場合は、マウントします。次の手順を実行して、CD-ROM をマウントします。

- [自動マウント・ソフトウェアを使用した CD-ROM のマウント \(Linux x86\)](#)
- [CD-ROM の手動マウント \(Linux x86\)](#)

### 自動マウント・ソフトウェアを使用した CD-ROM のマウント (Linux x86)

自動マウント・ソフトウェアを使用する場合、CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入すると、CD-ROM が自動マウント構成で指定されたディレクトリに自動的にマウントされます。5-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」に進みます。

自動マウント・ソフトウェアがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
$ ps -aux | grep automount
```

自動マウント・ソフトウェアがインストールされている場合、出力は次のようになります。

```
root 628 0.0 0.2 1148 588 ? S 17:32 0:00 /usr/sbin/automount /misc file
/etc/auto.misc
```

前述の出力で、`/etc/auto.misc` エントリは、CD-ROM がマウントされる `/misc` ファイルの下のディレクトリを定義します。

- 自動マウント・ソフトウェアが適切に実行および構成されている場合、CD-ROM は自動的にマウントされます。5-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」に進みます。
- 行が返されない場合は、自動マウント・ソフトウェアが実行されていないため、CD-ROM を手動でマウントする必要があります。「[CD-ROM の手動マウント \(Linux x86\)](#)」に進みます。

後続の CD-ROM をマウントするには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを使用して、CD-ROM を CD-ROM ドライブから取り出します。

```
$ cd /
$ eject
```

2. 次の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、Oracle Universal Installer の「インストール」ダイアログ・ボックスで正しいマウント・ポイントを入力します。
3. 「OK」をクリックして続行します。

## CD-ROM の手動マウント (Linux x86)

Oracle CD-ROM を手動でマウントするには、次の手順を実行します。

1. 1 枚目の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインし、必要に応じて、次のコマンドを使用して CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

```
$ su root
mkdir cdrom_mount_point_directory
```

3. 次のコマンドを使用して、CD-ROM ドライブをマウント・ポイント・ディレクトリにマウントします。

```
mount options device_name cdrom_mount_point_directory
```

4. root アカウントを終了します。
- ```
# exit
```

正しい `device_name` が不明な場合は、システム管理者に問い合わせてください。通常、`device_name` は `/dev/cdrom` です。次に例を示します。

```
$ su root
# mkdir /cdrom
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /cdrom
# exit
```

現行の作業ディレクトリが CD-ROM 上に存在する場合に Oracle Universal Installer を実行するには、次の手順を実行して 2 枚目の CD-ROM をマウントします。

1. システムのルート・ディレクトリに移動し、次のコマンドを使用して root ユーザーとしてログインします。

```
$ cd /
$ su root
```

2. 次のコマンドを使用して、CD-ROM をアンマウントします。

```
# umount cdrom_mount_point_directory
```

3. CD-ROM を CD-ROM ドライブから取り出します。

4. 2 枚目の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、次のコマンドを使用してマウントします。

```
# mount cdrom_mount_point_directory
```

5. Oracle Universal Installer の「インストール」画面で正しいマウント・ポイントを入力します。
6. 「OK」をクリックして続行します。

ハード・ドライブからの Oracle コンポーネントのインストール

各 CD-ROM の内容をシステムのハード・ドライブにコピーすると、インストール中に CD-ROM をマウントおよびアンマウントする必要がなくなります。他のアプリケーションによって使用されていないファイル・システムおよび十分なディスク領域が必要です。

1. システムのハード・ドライブに各 CD-ROM をコピーします。1 枚目の CD-ROM を Disk1 という名前のディレクトリにコピーし、2 枚目の CD-ROM を Disk2 という名前のディレクトリにコピーします（セットに含まれる一連の CD-ROM の数に応じて続けて同じようにコピーします）。
2. Oracle Universal Installer を起動します。Oracle Universal Installer によって各 CD-ROM の内容が自動的に検出されるため、インストール中に CD-ROM の位置の入力は要求されません。

関連項目：

- プラットフォームについてのハードディスク要件については、2-2 ページの「ハードウェア要件」を参照してください。
- CD-ROM のマウントおよびアンマウントについては、5-2 ページの「CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール」を参照してください。

Oracle Universal Installer の概要

Oracle Collaboration Suite では、Oracle Universal Installer を使用して、インストール・プロセスの手順を示します。Oracle Universal Installer の機能は次のとおりです。

- Oracle Collaboration Suite インストール・オプションの説明
- 事前設定された環境変数および構成設定の検出
- インストール中の環境変数および構成の設定
- Oracle Collaboration Suite 製品の削除

この項では、Oracle Universal Installer の次の機能について説明します。

- Oracle Universal Installer 前提条件の確認
- oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル
- Oracle Universal Installer を使用した追加コンポーネントのインストール

Oracle Universal Installer 前提条件の確認

Oracle Universal Installer は、インストール前にコンピュータを自動的にチェックして、システムが動作要件を満たしていることを確認します。表 5-1 に、実行される前提条件の確認を示します。

表 5-1 Oracle Universal Installer の前提条件の自動確認

前提条件の確認	関連項目
Oracle ホームのインストールに十分なディスク領域があるかどうかの確認	2-2 ページの「ハードウェア要件」
十分な /var/tmp 領域および十分なスワップ領域があるかどうかの確認	2-2 ページの「ハードウェア要件」
インストール・ホストに十分な RAM が搭載されているかどうかの確認	2-2 ページの「ハードウェア要件」

表 5-1 Oracle Universal Installer の前提条件の自動確認（続き）

前提条件の確認	関連項目
Middle-Tier および Information Storage のインストールの場合、1 つの Oracle9iAS Infrastructure がインストールされているかどうかの確認	第 1 章「インストールの概要」
/etc/hosts ファイルの確認	2-19 ページの「 ホスト名ファイルの構成 」
パッチが適用されていないリリース 9.0.2.0.0 の Oracle9iAS Infrastructure が検出された場合における Oracle9iAS Infrastructure のインストールの禁止	3-6 ページの「 Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード 」
Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) 2.8、HP-UX PA-RISC (64-bit) および Linux x86 であるかどうかの確認	2-6 ページの「 オペレーティング・システムのバージョン 」
モニターに 256 色カラー表示機能があるかどうかの確認	2-2 ページの「 ハードウェア要件 」
Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)、HP-UX PA-RISC (64-bit) および Linux x86 の正しいカーネル・パッチがインストールされているかどうかの確認	2-4 ページの「 ランダム・アクセス・メモリーの確認 」
CPU の動作要件の確認	2-2 ページの「 ハードウェア要件 」

関連項目： Oracle Collaboration Suite の各インストール用のインストール・チェックリストは、[付録 B「インストール・チェックリスト」](#)を参照してください。

oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル

Oracle Universal Installer をコンピュータ上で初めて実行すると、oraInventory ディレクトリが作成されます。oraInventory ディレクトリには、Oracle Universal Installer でコンピュータ上にインストールされた製品のインベントリ、および他のインストール情報が保存されます。インストール済の Oracle 製品が存在する場合は、すでに oraInventory ディレクトリが存在している可能性があります。

Oracle Universal Installer を所有する UNIX グループには、oraInventory ディレクトリへの書き込み権限が付与されている必要があります。この権限なしで Oracle Universal Installer を実行すると失敗します。詳細は、2-20 ページの「[Oracle Universal Installer インベントリ用の UNIX グループ名](#)」を参照してください。

oraInventory の場所は oraInst.loc というファイルで定義され、表 5-2 に示すとおり、オペレーティング・システムによって異なります。

表 5-2 oraInst.loc の場所

プラットフォーム	oraInst.loc の位置
Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)	/var/opt/oracle/oraInst.loc
HP-UX PA-RISC (64-bit)	/var/opt/oracle/oraInst.loc
Linux x86 Intel	/etc/oraInst.loc

最新のインストールに関するログ・ファイルは次のファイルです。

`/your_base_directory/oraInventory/logs/installActionstodays_date_time.log`

ここで、`your_base_directory` 識別子はインストール・ファイルの場所を示し、`today's_date_time` はインストールの日時を示します。

oraInventory ディレクトリまたはこのディレクトリの内容を削除、または手動で変更しないでください。Oracle Universal Installer で、システム上にインストールした製品を検出できなくなる可能性があります。

注意： `$ORACLE_HOME/install` ディレクトリ内の `make.log` ファイルには、インストール中に実行されたすべてのファイル作成操作が記録されます。また、`make.log` ファイルには、インストール中に発生したすべてのリンク・エラーも記録されます。`make.log` ファイルは削除または変更しないでください。

Oracle Universal Installer を使用した追加コンポーネントのインストール

同じホスト上に続けて Oracle Collaboration Suite または Oracle9iAS Infrastructure をインストールする場合は、次の手順を実行することをお勧めします。

- 第 2 章「インストールの準備」に示すインストール前タスクを再確認します。
- 続けて Oracle Collaboration Suite をインストールする場合は、表 5-2 に示すディレクトリを削除または変更しないでください。
- Oracle Enterprise Manager Web Site を終了します。詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
- インストールの開始時に、事前にインストールされた他のすべての Oracle Collaboration Suite インスタンスが実行されていることを確認します。

- 最初にインストールした Oracle Collaboration Suite の Oracle ホームとは別の Oracle ホームを指定します。
- 続けて Oracle Collaboration Suite をインストールする場合は、同じ oraInventory ディレクトリを使用します。
- [第 4 章「Oracle Collaboration Suite の配置方法」](#)を参照して、Oracle Collaboration Suite コンポーネントが問題なく共存していることを確認します。

関連項目： 5-10 ページの「[oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル](#)」

Oracle Universal Installer の起動

注意： Oracle Universal Installer は、オラクル社が提供する Java Runtime Environment (JRE) を自動的にインストールします。この JRE は、Oracle Universal Installer およびいくつかの Oracle アシスタントを実行するために必要です。JRE を変更する場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターが提供するパッチを使用してください。

Oracle Universal Installer は、Linux x86 および Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) 上に JDK 1.3.1 もインストールします。

HP-UX PA-RISC (64-bit) の場合、Oracle Universal Installer によって、JDK 1.3.1 のダウンロード場所またはインストール場所を入力するよう要求されます。

関連項目： この項で説明するインストール手順中に入力する情報については、Oracle Universal Installer のオンライン・ヘルプを参照してください。

Oracle Universal Installer を起動して、Oracle Collaboration Suite の各インストールを開始するには、次の手順を実行します。

1. [第 2 章「インストールの準備」](#)に示すすべての要件を満たしていることを確認します。
2. [付録 B「インストール・チェックリスト」](#)に示す各インストールのインストール・チェックリストを出力し、確認を完了します。確認する値の多くは、他のインストールおよび構成を完了するためにも必要です。

3. oracle ユーザーとしてログインします。

注意：

- Oracle Universal Installer の起動時に root ユーザーとしてログインしないようにしてください。root ユーザーとしてログインしている場合は、Oracle Collaboration Suite を管理する権限が root ユーザーのみに付与されます。
- Oracle Universal Installer の起動時に `cd_mount_point` を作業ディレクトリとして使用しないでください。使用すると、インストール手順を実行中に 1 枚目の CD-ROM を取り出せなくなり、2 枚目の CD-ROM を挿入できません。
- 同じホスト上に追加の Oracle Collaboration Suite アプリケーションをインストールおよび構成する場合は、同じオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントを使用することをお勧めします。

4. 該当する製品の 1 枚目の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
5. オペレーティング・システムに応じて、5-2 ページの「[CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール](#)」に示すインストール用の CD-ROM をマウントします。
6. 次の表を参照して、インストールする製品に該当する `runInstaller` コマンドを実行します。`$cd_mount_point_directory` 以外のディレクトリからコマンドを実行してください。

インストールする製品	入力コマンド
Oracle9iAS Infrastructure	<code>\$cd_mount_point_directory/ocs_infr_cd1/runInstaller</code>
Oracle Collaboration Suite	<code>\$cd_mount_point_directory/ocs_mt_cd1/runInstaller</code>
Oracle Collaboration Suite Information Storage	<code>\$cd_mount_point_directory/ocs_stor_cd1/runInstaller</code>
Oracle Collaboration Suite Client	<code>\$cd_mount_point_directory/ocs_clients/runInstaller</code>

7. 「ようこそ」画面が表示されます。「次へ」をクリックし、「インベントリ・ディレクトリの指定」画面を表示します。

注意： クラスタ上に Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールした場合、「クラスターノードの選択」画面が表示されます。Oracle ソフトウェアをインストールするノードを選択します。Real Application Clusters ソフトウェアは、Oracle Universal Installer が実行されるノード上にインストールされ、クラスタ内の選択された他のノードにコピーされます。デフォルトでは、常に、ローカル・ノードが選択されます。

クラスタ上に Oracle9iAS Infrastructure または Oracle Collaboration Suite はインストールしないでください。クラスタ上には Oracle Collaboration Suite Information Storage のみをインストールできます。

関連項目： Real Application Clusters のインストールの詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』（Oracle Technology Network Japan で入手可能）を参照してください。

注意： oraInst.loc ファイルが存在する場合、手順 8 ～ 11 は必要ありません。

8. インストールのインベントリのディレクトリ・パスを確認するか、「参照」をクリックしてリセットします。「OK」をクリックし、「UNIX グループ名」画面を表示します。
9. DBA を入力するか、oinstall グループ名を使用し、「次へ」をクリックします。oraInventory ファイルの所有者として指定するグループが不明な場合は、2-20 ページの「Oracle Universal Installer インベントリ用の UNIX グループ名」を参照してください。

関連項目： グループ名の作成方法の詳細は、第 2 章「インストールの準備」の「環境に対するインストール前のタスク」を参照してください。

10. 初めて Oracle をインストールする場合、root として新しいターミナル・ウィンドウを開き、ダイアログ・ボックスで指定されたディレクトリから oraInstRoot.sh を実行するよう、プロンプトが表示されます。
11. oraInstRoot.sh が完了した後、Oracle Universal Installer に戻り、「続行」をクリックして「ファイルの場所の指定」画面を表示します。

12. 「ファイルの場所の指定」画面で、次の手順を実行します。
 - 「ソース」セクションで、デフォルト・パスを使用します。
 - 「インストール先」セクションで、Oracle ホームの**名前**および**フルパス**を入力します。
13. 「次へ」をクリックし、「言語の選択」画面を表示します。
14. Oracle Collaboration Suite のインストールでサポートする言語を、Oracle Collaboration Suite でサポートされている言語のリストから選択します。「次へ」をクリックします。

注意：

- ここで選択した言語により、ユーザーは自分の母国語で Oracle Collaboration Suite にアクセスできるようになります (Oracle Collaboration Suite でサポートされている言語の場合)。
 - サポート言語は、インストール完了後は追加できません。他の言語を追加するには、Oracle Collaboration Suite を完全に再インストールする必要があります。
-

15. 第 6 章「[Oracle Collaboration Suite のインストール](#)」に進みます。

Oracle Collaboration Suite のインストール

この章では、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) のインストール手順を説明します。

関連項目： インストール順序の詳細は、1-7 ページの「[インストール・ガイド](#)」を参照してください。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle9iAS Infrastructure](#) のインストール
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage](#) データベースのインストール
- [Oracle Collaboration Suite Middle-Tier](#) のインストール
- [Oracle Web Conferencing Document Conversion Server](#) および [Voice Conversion Server](#) のインストール
- [Oracle Collaboration Suite](#) の統合 Web クライアントのインストール
- [Middle-Tier](#) での `mod_osso` を伴った HTTP の手動設定
- その他のドキュメント

Oracle9iAS Infrastructure のインストール

この項では、Oracle9iAS Infrastructure をインストールする方法を説明します。

注意： 業界標準の LDAP ポートは、非 SSL では 389、SSL では 636 です。これらのポートが `/etc/services` ファイルに含まれていない場合、Oracle Universal Installer はこれらを Oracle Internet Directory のポートとして使用します。これらのポートが `/etc/services` ファイルに含まれている場合、Oracle Universal Installer は Oracle Internet Directory のポートとして、ポート 4031 から 4039 の使用を連続して試みます。

標準ポート 389 または 636 を使用するには、構成を開始する前に、`/etc/services` ファイルからこれらのポート番号が含まれている行を削除する必要があります。これらの行をコメント・アウトするだけでなく、削除する必要があります。

ポート 389 または 636 で稼働する LDAP サーバーが存在する場合、構成前にサーバーを停止してください。

5-15 ページの手順 14 の「言語の選択」画面で「次へ」をクリックすると、「インストールの要件確認」画面が表示されます。

1. 「次へ」をクリックし、「構成オプションの選択」画面を表示します。
2. 「デフォルト」を選択し、「次へ」をクリックすると、「インスタンス名および `ias_admin` パスワードの作成」画面が表示されます。
3. 「インスタンス名」を選択し、「`ias_admin` パスワード」を選択して確認します。

注意：

- 「インスタンス名」はデータベース・インスタンス名ではなく、Oracle9iAS Infrastructure インスタンスの名前です。
 - ここで選択した「`ias_admin` パスワード」は、Infrastructure の Oracle Internet Directory 管理者パスワードとしても使用します。
-

「次へ」をクリックし、「Guest アカウントのパスワード」画面を表示します。

4. ゲスト・アカウントのパスワードを入力および確認します。
5. 「次へ」をクリックします。DBA グループのメンバーである場合、「サマリー」画面が表示されます。手順 8 に進みます。

DBA グループのメンバーでない場合、「権限付きオペレーティング・システム・グループ」画面が表示されます。

6. 「データベース管理者 (OSDBA) グループ」および「データベース・オペレータ (OSOPER) グループ」の名前を入力します。
7. 「次へ」をクリックし、「サマリー」画面を表示します。
8. 情報を確認し、「インストール」をクリックします。インストールのログ・ファイルの場所が表示されます。

「インストール」をクリックすると、ファイルがコピーおよびリンクされます。この処理には、1 時間以上かかる場合があります。
9. プロンプトが表示されたら、`root.sh` を実行します。これは、別のターミナル・ウィンドウから `root` として実行する必要があります。`root.sh` が完了した後、Oracle Universal Installer に戻り、「OK」をクリックして「Configuration Assistant」画面を表示します。

Oracle9iAS Infrastructure の構成ツールのステータスを確認します。

Oracle Universal Installer は、「構成オプションの選択」画面で選択した各コンポーネントの Configuration Assistant を実行します。

10. 「インストールの終了」画面にインストールのポート番号が表示され、インストールの成功が確認されます。
11. インストール・ログ・ファイルで、インストール・エラーがないかを確認します。インストール・ログ・ファイルは、5-10 ページの「[oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル](#)」で説明するとおり、`oraInventory` ディレクトリに存在します。インストール・ログ・ファイルのデフォルトのディレクトリは、`orInventory_directory/logs` です。

各インストール・ログの書式は、`InstallActionsYYYY-MM-DD_HH-MM-SSAM.log` です。

注意：

- `/tmp` ディレクトリでは、ディレクトリの書式は `OraInstallYYYY-MM-DD_HH-MM-SSAM.log` です。
`installCluster.log` ファイルに、現在実行中のインストール・モジュールが示されます。
 - ポートのリストは、`$ORACLE_HOME/install` ディレクトリ内の `portlist.ini` ファイルに記されています。
-
-

Oracle9iAS Infrastructure その他のドキュメント

インストール後のタスクおよび構成タスクの詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』およびコンポーネント固有のドキュメントを参照してください。

Oracle Collaboration Suite の新規インストールには必要ありませんが、インストールをテストするテスト・ユーザーを作成できます。

関連項目： テスト・ユーザーの作成手順の詳細は、3-6 ページの
「[Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード](#)」を参照してください。

Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのインストール

この項では、Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースをインストールする方法を説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [既存の Oracle ホームへのデータベースのインストール](#)
- [Oracle Internet Directory への Oracle Collaboration Suite Information Storage の登録](#)

Infrastructure がインストール済であることを確認します。

5-15 ページの手順 14 で、「ファイルの場所」画面の「**次へ**」をクリックすると、「データベースの作成」画面が表示されます。次の手順を実行して、Information Storage をインストールします。

1. 「はい」を選択して新しい Oracle9i データベースを作成し、「**次へ**」をクリックすると、「Information Storage の登録」画面が表示されます。
2. 完全修飾のホストの名前、ポート、ユーザー名（デフォルトで Oracle Universal Installer に cn=orcladmin と表示）およびパスワードを入力します。「**次へ**」をクリックし、「データベースの識別」画面を表示します。
3. 「グローバル・データベース名」および「SID」を入力します。必要に応じて、デフォルトの SID を変更します。
4. 「**次へ**」をクリックし、「データベース・ファイルの場所」画面を表示します。
5. デフォルトを使用して「**次へ**」をクリックし、「サマリー」画面を表示します。
6. エントリを確認し、必要に応じて変更します。「**インストール**」をクリックしてエントリを受け入れ、インストール・プロセスを開始します。

注意：「インストール」をクリックすると、ファイルがコピーおよびリンクされます。この処理には、1 時間以上かかる場合があります。

7. プロンプトが表示されたら、別のターミナル・ウィンドウから root アカウントで `root.sh` を実行します。 `root.sh` の実行中、進行画面が表示され、インストールの進行状況が示されます。
8. `root.sh` が完了した後、Oracle Universal Installer に戻り、「次へ」をクリックして「Configuration Assistant」画面を表示します。
9. Database Configuration Assistant によってプロンプトが表示されたら、SYS および SYSTEM アカウントのパスワードを選択し、確認します。「OK」をクリックします。
10. 「インストールの終了」画面が表示されたら、「終了」をクリックします。

既存の Oracle ホームへのデータベースのインストール

同じ Oracle ホームに複数のデータベースをインストールできます。

次のいずれかのソフトウェアの CD-ROM で、初期データベースをインストールするか、または「ソフトウェアのみ」データベース構成オプションを選択します。

- Oracle Collaboration Suite Information Storage
- Oracle9i データベース

重要： 本番環境では、1 つの Oracle ホームに複数のデータベースをインストールしないことをお勧めします。この構成は、評価を目的とした場合にのみお勧めします。

1. ソフトウェアがインストールされた後、Database Configuration Assistant を実行します。

```
$ORACLE_HOME/bin/dbca
```

2. 「データベースの作成」を選択します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. プロンプトに対し、作成するデータベース構成タイプを選択します。
5. Oracle ホームの名前、インスタンス名などの質問に答えます。

Oracle Universal Installer と同じ方法で、データベースが Database Configuration Assistant によって作成されます。

Oracle Internet Directory への Oracle Collaboration Suite Information Storage の登録

次の各項で、Information Storage データベースを Oracle Internet Directory に登録する方法を説明します。

- [Oracle Net Configuration Assistant の実行](#)
- [Database Configuration Assistant の実行](#)
- [Oracle Internet Directory の構成の確認](#)

注意：

- この項は、「Information Storage の登録」画面で「いいえ」を選択した場合のみ該当します。
 - Information Storage がクラスタ・データベースに存在する場合、1 つのデータベース・インスタンスを Oracle Internet Directory に登録します。
 - Oracle Net Configuration Assistant および Database Configuration Assistant の両方を、Oracle ソフトウェアのインストールに使用した Oracle ユーザー・アカウントで実行する必要があります。
-
-

Oracle Net Configuration Assistant の実行

1. Oracle Net Configuration Assistant を起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/netca
```

2. 「ようこそ」画面が表示されます。
3. 「ディレクトリ使用構成」を選択し、「次へ」をクリックします。
4. 使用するディレクトリ・サーバーを選択します。ディレクトリ・サーバーは、Oracle で使用可能なように構成済である必要があります。
5. 「次へ」をクリックします。
6. 使用するディレクトリ・サーバーのタイプとして「**Oracle Internet Directory**」を選択します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. Oracle Internet Directory の[ホスト名](#)、[ポート](#)および SSL ポートを入力します。
9. 「次へ」をクリックします。
10. ディレクトリ・サーバーのデフォルトの Oracle コンテキストとして「**cn=OracleContext**」を選択します。

注意：「cn=OracleContext,subscriber_specific_DN」は選択しないでください。

11. 「次へ」をクリックします。

12. Oracle Net Configuration Assistant の構成の終了に進みます。

これによって、\$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリに Oracle Internet Directory Server およびポート番号を指定する ldap.ora ファイルが作成されます。

13. Oracle Net Configuration Assistant を終了します。

Real Application Clusters の追加構成手順

Oracle Net Manager を使用して、次のいずれかの操作を実行します。

- アドレスがリスト表示されていないクラスタ内のノードのデータベース・エントリにネットワーク・アドレスを追加します。
- クラスタ内の 1 つのノードのネットワーク・アドレスを指定する別のネット・サービス名、およびデータベースのサービス名としての Real Application Clusters グローバル・データベース名を作成します。次に、クラスタ内の他のノードのネット・サービス名にネットワーク・アドレスを追加します。

関連項目： 接続文字列オプションの詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』を参照してください。

Database Configuration Assistant の実行

1. Database Configuration Assistant を起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/dbca
```

2. 「次へ」をクリックします。

3. 「データベース内のデータベース・オプションの構成」を選択します。

4. 「次へ」をクリックします。

5. 構成する Oracle Email データベースの SID を選択します。

6. 「次へ」をクリックします。

注意： SID が表示されない場合は、Solaris の /var/opt/oracle ディレクトリと、HP および Linux の /etc/oratab ディレクトリの oratab ファイルを確認します。

7. 「はい、データベースの登録を取り消します。」 オプションを選択します。
 - a. 「ユーザー DN」 フィールドで **cn=orcladmin** と入力します。
 - b. 「ユーザー DN」 フィールドに入力した名前のパスワードを入力します。
8. 「終了」 をクリックします。

「データベースの再起動」 画面が表示されます。
9. 「はい」 をクリックします。

「サマリー」 画面が表示されます。
10. 「OK」 をクリックします。

「Database Configuration Assistant」 画面にデータベース構成のプロセスが表示されます。
11. 構成の完了後、Database Configuration Assistant を終了します。

Oracle Internet Directory の構成の確認

1. oidadmin を実行します。
2. Oracle Internet Directory にログインし、cn=oraclecontext の下で、6-6 ページの手順 4 で選択した Information Storage の SID を確認します。

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール

この項では、Middle-Tier をインストールするために Oracle Universal Installer によって実行される一連の手順に従い、すべての Oracle Collaboration Suite コンポーネントがインストールされることを前提としています。

この項の内容は次のとおりです。

- [はじめに](#)
- [Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストールの開始](#)
- [Oracle Web Conferencing のインストール](#)
- [Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール](#)
- [Oracle Files の構成](#)
- [Middle-Tier のインストールの完了](#)

はじめに

- Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインスタンスをインストールする前に、ネットワーク上に Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On がインストールおよび構成済であることを確認します。
- このアプリケーション Middle-Tier のインスタンスに Oracle Email または Oracle Files を構成する場合は、ネットワーク上に Oracle9i データベースまたは Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースがインストールおよび構成済であることを確認します。

注意： Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースをインストールした場合は、データベースは自動的に Oracle Internet Directory に登録されます。Oracle9i データベースをインストールした場合は、データベースを手動で Oracle Internet Directory に登録する必要があります。

- Oracle Real-Time Collaboration リポジトリが存在するデータベース・インスタンスのデータベース・ホスト名、データベース・リスナー・ポートおよび SID を取得します。これらの情報を使用して、この Oracle Web Conferencing のこのインスタンスをインストールするホストからデータベースに接続できることを確認します。
- システム権限（ユーザーおよび表領域を作成する権限など）を持ったユーザーのユーザー名およびパスワードを取得します。ユーザーは SYSTEM にデフォルトで設定されます。デフォルトを使用する場合は、SYSTEM のパスワードが必要です。
- Oracle Universal Installer は、使用しているデータベースに既に Oracle Real-Time Collaboration リポジトリがあるかどうかを検出します。リポジトリが検出されなかった場合は、新しいリポジトリが指定されたデータベースに作成されます。その場合、前述のデータベース・ホスト上のディレクトリへのフルパスを入力する必要があります。インストール時に、Oracle Real-Time Collaboration 表領域用のデータ・ファイルがそのディレクトリに作成されます。この場所には 500MB 以上の空き領域が必要です。またデータベースによって書き込むことができる必要もあります。

注意： ここで入力した情報が正しくない場合、インストール障害からリカバリできないため、この Oracle ホームに対してインストール・プロセスをすべてやり直す必要があります。

表領域には、デフォルト値が取得されます。

- データベースに既に Oracle Real-Time Collaboration リポジトリがある場合、およびロックされているスキーマが検出された場合は、RTC スキーマおよび RTC_APP スキーマの新規パスワードを求めるプロンプトが表示されます。スキーマがロックされていない場合は、既存の RTC_APP スキーマのパスワードを求めるプロンプトが表示されます。
- インストーラは、Oracle Real-Time Collaboration コンポーネントで使用するための空きポートを 2400 ～ 2700 の範囲で検索します。空きポートがこの範囲で見つからない場合は、検索範囲を 2400 ～ 49152 に広げ、最初に見つかった利用可能なポートを取得します。この場合、警告が表示されます。

注意： UNIX ユーザー ID が 9 文字以上のユーザーによってインストールされると、Oracle Calendar Server は動作しません。

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストールの開始

Oracle Universal Installer を起動するには、5-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」を参照してください。

5-15 ページの手順 14 の「ファイルの場所」画面で「次へ」を選択すると、「インストールの要件確認」画面が表示されます。次の手順を実行して、アプリケーション Middle-Tier をインストールします。

1. インストールの要件を確認して「次へ」をクリックし、「コンポーネントの構成」画面を表示します。
2. インストールするコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします。「**Oracle Calendar アプリケーション・システム**」を選択しないと、Oracle Calendar Web Client、Sync Server および Web Services はインストールできません。Oracle Calendar は次の場所にインストールされます。

注意：

Oracle Calendar Server のみをインストールするには、次のようにします。

1. 「Oracle Calendar Server」を選択し、「Oracle Calendar アプリケーション・システム」は選択しません。
2. その結果、クライアントのホストおよびポートの入力プロンプトが表示されます。これらの値が不明な場合、一時的に値を入力し、後でサーバーの `unison.ini` ファイルを次のように編集します。

```
[RESOURCE_APPROVAL]
url=http://host_name:port_number/ocas-bin/ocas.fcgi
```

Oracle Calendar アプリケーション・システムのみをインストールするには、次のようにします。

1. 「Oracle Calendar アプリケーション・システム」を選択し、「Oracle Calendar Server」は選択しません。
2. その結果、Oracle Calendar Server のホスト、ポートおよびノード ID の入力を求めるプロンプトのみが表示されます。これらの値が不明な場合、一時的に値を入力し、後でアプリケーション・システムの `ocas.conf` ファイルを正しい値で次のように編集します。

```
[CONNECTION]
nnode=host_name:engine_port,node
```

コンポーネント	場所
Server	<code>\$ORACLE_HOME>/ocal/</code>
Administrator	<code>\$ORACLE_HOME>/ocad/</code>
アプリケーション・システム	<code>\$ORACLE_HOME>/ocas/</code>

3. 「次へ」をクリックし、「既存の Oracle9iAS Single Sign-On」画面を表示します。
4. 既存の Oracle9iAS Single Sign-On インスタンスのホスト名およびポート番号を入力して「次へ」をクリックし、「Oracle Internet Directory」画面を表示します。

5. 既存の Oracle Internet Directory インスタンスの管理者ユーザー名およびパスワードを入力して「次へ」をクリックし、「管理パスワードおよびインスタンス名の指定」画面を表示します。
6. 「インスタンス名」を選択し、「管理用パスワード」を選択して確認します。

注意：

- 「インスタンス名」はデータベース・インスタンス名ではなく、Middle-Tier インスタンス・インストールの名前です。
 - ここで選択した「管理用パスワード」は、Middle-Tier の Oracle Internet Directory 管理者パスワードとしても使用します。
-
-

Oracle Web Conferencing のインストール

7. 「次へ」をクリックし、「Oracle Real-Time Collaboration リポジトリの位置」画面を表示します。すべてのフィールドに必要な情報を入力します。
8. 「次へ」をクリックし、「Oracle Real-Time Collaboration リポジトリの詳細」画面を表示します。入力を求められる情報は、使用しているデータベースによって異なります。

Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースを使用している場合、スキーマのパスワードをリセットします。

9. 情報を入力した後、「次へ」をクリックし、「Oracle Calendar のデフォルトのタイムゾーン」画面を表示します。

Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール

注意： コンピュータのカーネル・パラメータが Oracle Calendar Server の実行には十分でない場合、変更する必要があるパラメータを示す情報ダイアログ・ボックスが開きます。必要な変更を加え、コンピュータを再起動してインストールをやり直します。必要なカーネル・パラメータの計算方法の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の付録 B「Calendar カーネル・パラメータの調整」を参照してください。

10. 新規 Oracle Calendar ユーザーのデフォルトのタイムゾーンを選択します。「次へ」をクリックし、「Oracle Calendar のノード ID」画面を表示します。

11. Oracle Calendar のノードに対して、1 ~ 49999 の間の一意の数値 ID を指定します。「次へ」をクリックし、「Oracle Calendar のマスター・ノード」画面を表示します。
12. Oracle Calendar Server の最初のインストールである場合、「Oracle Calendar のマスター・ノード」画面で「はい」を選択し、現在のインストールをマスター・ノードに指定します。Web Services および Sync Server を動作させるには、ネットワーク上に 1 つのマスター・ノードが必要です。「次へ」をクリックし、「サマリー」画面を表示します。
13. インストールの設定を確認します。変更する必要がある場合は、「戻る」をクリックします。「次へ」をクリックし、「インストール」画面を表示します。
インストールの進行状況がこの画面の進行状況バーに表示されます。
14. プロンプトが表示されたら、`root.sh` を実行します。これは、別のターミナル・ウィンドウから `root` として実行する必要があります。`root.sh` が完了した後、`root` としてログオフし、「OK」をクリックして「Configuration Assistant」画面を表示します。
各コンポーネントの Configuration Assistant が自動的に起動します。Configuration Assistant が失敗した場合は、その原因が画面のウィンドウに表示されます。失敗の原因を修正し、「再試行」をクリックします。
15. Oracle Net Configuration Assistant の「ようこそ」画面が表示されたら、「標準インストールの実行」を選択します。「次へ」をクリックし、「Configuration Assistant」画面を表示します。

Oracle Files の構成

16. 「Oracle Files Configuration Assistant」画面が表示されたら、12-10 ページの「[Oracle Files の構成](#)」に進み、そこで説明されている手順を完了します。

Middle-Tier のインストールの完了

17. Oracle Files Configuration Assistant が完了すると、「Configuration Assistant」画面が表示されます。「次へ」をクリックして、「インストールの終了」画面を表示します。
18. 「インストールの終了」画面に表示された情報を書きとめます。
19. 「終了」をクリックしてインストールを終了します。
20. 次のコマンドを使用して Oracle Enterprise Manager を再起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl stop  
$ORACLE_HOME/bin/emctl start
```

Oracle Web Conferencing Document Conversion Server および Voice Conversion Server のインストール

Document Conversion Server および Voice Conversion Server は、Middle-Tier とは別のコンピュータにインストールする必要があります。両方のサーバーを同じコンピュータにインストールすることも、それぞれ別のコンピュータにインストールすることもできます。

Document Conversion Server および Voice Conversion Server をインストールする前に、これらのコンポーネントがインストールされる各コンピュータに Oracle9i Application Server をインストールする必要があります。次の例外を除いて、Middle-Tier のインストールと同じ手順に従います。

- 「コンポーネントの構成」画面で、「Oracle Web Cache」を選択する必要はありません。
- 「Oracle9iAS Infrastructure の使用」画面で、「いいえ」を選択します。
- 「インスタンス名および ias_admin パスワードの作成」画面で、新規インスタンス名を作成します。このコンポーネントと既存のインスタンスを関連付ける必要はありません。

Middle-Tier のインストールが終了したら、Document Conversion Server および Voice Conversion Server をインストールします。

1. 該当のラジオ ボタンを選択して、Document Conversion Server または Voice Conversion Server をインストールします。この選択により、これらのコンポーネントの一方または両方をインストールできます。「次へ」をクリックします。
2. インストールするコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします。
3. Oracle Real-Time Collaboration リポジトリがあるデータベースのホスト、ポート番号および SID を入力します。また、Oracle Real-Time Collaboration リポジトリ・スキーマの RTC_APP のパスワードを入力します。「次へ」をクリックします。
4. この画面には、コンポーネントのインストールのステータスが表示されます。

Oracle Collaboration Suite の統合 Web クライアントのインストール

Oracle Collaboration Suite は、ブラウザを搭載したコンピュータ用の統合 Web クライアントを提供します。これは、基礎となる Oracle9i Application Server を使用して、安全なシングル・サインオン環境を提供します。この統合 Web クライアントを使用して、メッセージ（電子メール、ボイスメールおよび FAX）、カレンダーおよびディレクトリ情報、Oracle Web Conferencing 機能、および Oracle Files に格納されたコンテンツにアクセスできます。

デフォルトでは、Web クライアントは、Oracle Collaboration Suite をインストールする際、コンポーネントの構成中に自動的に統合されます。インストール時に中に Web クライアントを選択解除した場合は、Web クライアント・インストーラを実行する必要があります。

Web クライアント・インストーラは、次のタスクを実行します。

- Oracle Collaboration Suite ホーム・ページをインストールします。
- インストール済 Oracle Collaboration Suite コンポーネントに Web プロバイダおよびポートレットを追加します。
- Oracle Collaboration Suite ホーム・ページを Oracle Collaboration Suite ユーザーのデフォルト Web ページに設定します。
- Oracle Collaboration Suite ホーム・ページのユーザーにカスタマイズされた権限を付与します。

新規 Oracle Collaboration Suite コンポーネントをインストールするたびに Web クライアント・インストーラを実行することにより、そのコンポーネントを Oracle Collaboration Suite ホーム・ページで使用できます。Web クライアント・インストーラは、次の Oracle Collaboration Suite コンポーネントにのみ使用できます。

- Oracle Calendar
- Oracle Email
- Oracle Files
- Oracle Web Conferencing
- Oracle9iAS Wireless
- Oracle Ultra Search

Web クライアント・インストーラは、次のいずれかの方法で起動します。

- Oracle Universal Installer の使用
- コマンドラインの使用

コマンドラインを使用した Web クライアント・インストーラの起動

Oracle Collaboration Suite をインストールする際、Suite 全体ではなく選択したコンポーネントのみをインストールすることも可能です。後で追加コンポーネントをインストールした場合、そのコンポーネントを Oracle Collaboration Suite ホーム・ページで使用するには、コンポーネントの URL を構成し、Web クライアントのコマンドライン・インストーラを実行する必要があります。

コンポーネントの URL の構成

コンポーネントの URL を構成するには、次のディレクトリ内の `webclient.properties` ファイルを変更します。

```
$ORACLE_HOME/webclient/classes/oracle/collabsuite/webclient/resources
```

webclient.properties には、Oracle Collaboration Suite の各コンポーネントに対する、ヘルプ・ページの URL、アプリケーションの URL およびプロバイダの URL という 3 つの URL が含まれています。インストールしているコンポーネントの 3 つの URL すべてについて、ホスト名およびポート番号にトークンを置き換えます。

Web クライアントのコマンドライン・インストーラの実行

Web クライアントのコマンドライン・インストーラを実行するには、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/webclient/bin/webclient_installer.sh
```

このコマンドにより、新規コンポーネントのプロバイダおよびポートレットが Oracle Collaboration Suite ホーム・ページにインストールされます。

Oracle9iAS Portal スキーマの名前、パスワードおよび接続文字列の詳細がわかる場合は、次のように Configuration Assistant を起動することもできます。

```
$ORACLE_HOME/webclient/bin/webclient_installer.sh -s schema -p password -c connect_string
```

項目の意味は次のとおりです。

- **schema:** Oracle9iAS Portal の Oracle データベース・アカウント。
- **password:** Oracle9iAS Portal アカウントのパスワード。
- **connect_string:** Oracle9iAS Portal リポジトリがインストールされているデータベース・インスタンスへの接続文字列。host_name:port:SID のように指定します。

Middle-Tier での mod_osso を伴った HTTP の手動設定

Oracle Collaboration Suite インストール・プログラムは、デフォルトの Oracle Collaboration Suite Middle-Tier で https を mod_osso とともに使用できるように、自動的にシステムを構成します。ただし、手動でこれを設定する必要がある場合もあります。

この項では、その設定方法の手順を示します。この設定は、Oracle Calendar Administrator を https とともに使用する場合に必要です。また、Middle-Tier の https を必要とする、Oracle9iAS Single Sign-On によって保護されたその他のアプリケーションにも使用できます。

この項の手順では、次の処理が行われます。

- 優先 https ポートに対して別のパートナ・アプリケーションが Middle-Tier に追加されます。このパートナ・アプリケーションは、Oracle9iAS Single Sign-On の URL それぞれに対して、その https ポートを使用します (Oracle9iAS Single Sign-On のポートは Middle-Tier が要求した URL のポートと一致する必要があるため、https にはこれらの手順が必要です)。

- mod_osso_https.conf および MIDTIER_HOST.https-osso.conf という、この設定をサポートするための 2 つの新しい Oracle HTTP Server 構成ファイルが Middle-Tier に作成されます。

開始前に、次の点を確認します。

- SSO_HOST は、Oracle9iAS Single Sign-On Server の完全修飾ホスト名です。
- MIDTIER_HOST は、Middle-Tier の完全修飾ホスト名または IP アドレスです。
- MIDTIER_HTTPS_PORT は、Middle-Tier の https ポートで、通常 4443 です。

この項の内容は次のとおりです。

- [設定の確認](#)
- [mod_osso を伴った https の設定](#)

設定の確認

1. Web ブラウザを使用して、Oracle9iAS Single Sign-On Server のホーム・ページへ移動します (http はポート 7777 上にあると仮定)。

`http://SSO_HOST:7777/pls/orasso`

2. 「ログイン」をクリックし、管理権限でログインします。
3. 「SSO Server 管理」をクリックします。
4. 「パートナ・アプリケーションの管理」をクリックし、次の点を確認します。
 - Oracle9iAS Single Sign-On Server は、Middle-Tier で構成されている https ポートでリスニング中である（および機能している）こと。
 - Middle-Tier の https ポート（「編集」をクリックして設定を表示、Oracle Web Cache を使用している場合は通常 7777）について表示されるパートナ・アプリケーションが 1 つのみであること。
 - Middle-Tier の https ポートのパートナ・アプリケーションでは、次の Oracle9iAS Single Sign-On の URL すべてに対するポート番号が同じであること。
 - ホーム URL
 - 成功 URL
 - ログアウト URL
 - Middle-Tier の http ポート（Oracle Web Cache 使用している場合は通常 4443）について表示されるパートナ・アプリケーションがないこと。

これらの要件のいずれかが満たされていない場合、Oracle9iAS Single Sign-On および Oracle HTTP Server のドキュメントを参照して構成を修正してください。

5. 次のように入力して、Middle-Tier で Oracle HTTP Server をエラーなしで再起動できることを確認します。

```
>dcmdctl restart -ct ohs
```

mod_osso を伴った https の設定

Middle-Tier コンソールから次の手順を進めます。

注意： ORACLE_HOME 環境変数が正しいこと、およびすべてのファイルに対して権限があることを確認します。また、LD_LIBRARY_PATH を \$ORACLE_HOME/lib に設定します (HP では、SHLIB_PATH を \$ORACLE_HOME/lib32 に設定します)。

1. 例 6-1 に示すとおり、**ssl_osso.sh** という名前のテキスト・ファイルを作成します。

例 6-1 ssl_osso.sh スクリプトの内容

```
#!/bin/sh
# This script creates a osso\osso-conf file ($AS_HOST.AS_PROTOCOL-osso.conf)
# AS = Application server or midtier
# Modify following variables before running
AS_PROTOCOL=https
AS_HOST=MIDTIER_HOST
AS_PORT=MIDTIER_HTTPS_PORT
SSO_HOST=SSO_HOST
MODOSSO_FILE=${ORACLE_HOME}/Apache/Apache/conf/mod_osso.conf
MODOSSO_HTTPSFILE=${ORACLE_HOME}/Apache/Apache/conf/mod_osso_https.conf
echo 'Registering mod_osso, please wait...'
cp $MODOSSO_FILE $MODOSSO_HTTPSFILE
# Note: make sure that your Oracle9iAS Single Sign-On server runs on port
# 1521. If not, replace '-port 1521' with correct port number.
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java \
  -jar $ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar \
  -host $SSO_HOST \
  -port 1521 \
  -sid iasdb \
  -site_name $AS_HOST.$AS_PROTOCOL:$AS_PORT \
  -oracle_home_path $ORACLE_HOME \
  -success_url $AS_PROTOCOL://$AS_HOST:$AS_PORT/osso_login_success \
  -logout_url $AS_PROTOCOL://$AS_HOST:$AS_PORT/osso_logout_success \
  -cancel_url $AS_PROTOCOL://$AS_HOST:$AS_PORT/ \
```



```
-home_url $AS_PROTOCOL://$AS_HOST:$AS_PORT/ \
-config_mod_osso TRUE -u root -sso_server_version v1.2 \
-config_file $ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/osso/$AS_HOST.$
{AS_PROTOCOL}-osso.conf
cp $MODOSSO_HTTPSFILE $MODOSSO_FILE
```

2. 次のように入力して、`ssl_osso.sh` スクリプトを実行します。

```
sh ssl_osso.sh
```

3. `mod_osso.conf` ファイルおよび `mod_osso_https.conf` ファイルの `LoadModule osso_module libexec/mod_osso.so` の行をコメント・アウトします。どちらのファイルも `$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/` ディレクトリにあります。
4. `mod_osso_https.conf` で、`OsoConfigFile` ディレクティブを次のように置き換えます（ない場合は、`<IfModule mod_osso.c>` セクションに追加します）。

```
OsoConfigFile conf/osso/MIDTIER_HOST.https-osso.conf
```

5. `httpd.conf` で、次のディレクティブをすべての `LoadModule` ディレクティブ（デフォルトの設定で `fastcgi_module` の直後）のすぐ後に追加します。

```
LoadModule osso_module libexec/mod_osso.so
```

6. `httpd.conf` の `VirtualHost _default_:4444` ディレクティブ（またはポートが異なる場合は `https VirtualHost`）内に、次の行を追加します。

```
include conf/mod_osso_https.conf
```

7. Middle-Tier 上で Oracle HTTP Server を再起動します（`opmnctl` を使用することもできます）。

```
dcnctl stop -ct ohs
dcnctl start -ct ohs
```

その他のドキュメント

Oracle Collaboration Suite Documentation Library CD-ROM は、Oracle Collaboration Suite CD パックに含まれています。CD-ROM に含まれているドキュメントへのアクセスについては、『Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ガイド』を参照してください。

Oracle Voicemail & Fax のインストール および構成

この章では、Oracle Voicemail & Fax システムをインストールする方法について説明します。
この章の内容は次のとおりです。

- [インストール前のチェックリスト](#)
- [インストール要件](#)
- [Oracle Voicemail & Fax Telephony Server のインストール](#)
- [中間層での Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant の実行](#)
- [Oracle Voicemail & Fax Telephony Server の追加インストール](#)
- [Oracle Collaboration Suite への Information Storage データベースの追加インストール](#)

インストール前のチェックリスト

この項では、Oracle Voicemail & Fax をインストールする前に実行する必要があるインストール前のタスクについて説明します。

Oracle Voicemail & Fax をインストールする前に、次のタスクを実行します。

1. CT Media または Intel NetMerge CC Server という名前の Windows サービスを変更し、インストールを実行するユーザーのコンテキストで実行されるようにします。インストールを実行するユーザーは CTMUsers グループに属している必要があります。
2. インストール前に CT Media または NetMerge サーバーを再起動してレベル 5 に上げます。

インストール要件

Oracle Voicemail & Fax のインストールは 2 つのタスクから構成されます。

- Windows 2000 システムへの Oracle Voicemail & Fax Telephony Server のインストール
- 各中間層での Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant の実行

Oracle Voicemail & Fax をインストールする前に、次のものがが必要です。

- Oracle Email が組み込まれた Oracle Collaboration Suite: Oracle Voicemail & Fax がインストールされているシステム以外のシステムにインストールされ、構成および実行されていること
- Windows 2000 Resource Kit
- Intel NetMerge Converged Communication Server または CT Media Server
- S.410 SDK V1.0 for CT Media

Oracle Voicemail & Fax Telephony Server のインストール

Oracle Voicemail & Fax Telephony Server のインストールは、2つの部分からなるプロセスです。プロセスの前半では、Oracle9iAS コアをインストールし、後半では Oracle Voicemail & Fax コードをインストールします。

注意：

- Telephony Server のインストール・プロセスの前後半とも、CTMUser ユーザー・グループおよび管理者グループに属するユーザーが実行する必要があります。
- CT Media または NetMerge サーバーの実行ユーザー名は、インストールを実行しているユーザー名と同じである必要があります。

実行ユーザー名を変更するには、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。サービスを右クリックします。「プロパティ」を選択します。「ログオン」タブをクリックし、「ログオン」オプションを変更します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle9iAS コアのインストール](#)
- [Oracle Voicemail & Fax コードのインストール](#)

Oracle9iAS コアのインストール

この項では、Oracle 9iAS コアを手動でインストールする方法を説明します。オプションとして、Oracle 9iAS コアをサイレント・インストールする方法もあります。詳細は、7-7 ページの「[Oracle9iAS コアのサイレント・インストール](#)」を参照してください。

Oracle9iAS コアをインストールするには、次のようにします。

1. Oracle Voicemail & Fax の CD を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. ¥install¥win32 ディレクトリにある install.bat を実行して、Oracle Universal Installer の「ようこそ」画面を表示します。
3. 「次へ」をクリックして「ファイルの場所」画面を表示します。「インストール先」セクションで、Oracle ホームの名前を入力するか、「名前」フィールドから既存の Oracle ホームを選択します。

4. 「パス」フィールドに Oracle ホームのパスを入力します。
「参照」をクリックして Oracle ホーム・パスを特定することもできます。
5. 「次へ」をクリックして、「Oracle Internet Directory」画面を表示します。
6. ユーザー名およびパスワードを入力します。デフォルト・ユーザー名は、`cn=orcladmin` です。
7. 「次へ」をクリックして、「インスタンス名の作成」画面を表示します。
8. Oracle9iAS インスタンスの名前を「**インスタンス名**」フィールドに入力します。
9. 現在のホストの `ias_admin` パスワードを「**ias_admin パスワード**」フィールドに入力します。
10. 「次へ」をクリックし、「サマリー」画面を表示します。
11. 「インストール」をクリックして、「End of Installation」画面を表示します。
12. 「終了」をクリックして「終了」画面を表示します。
13. 「はい、すぐにシステムを再起動します」を選択し、「OK」をクリックしてシステムを再起動します。
システムの再起動後に、インストールの後半が自動的に開始します。

Oracle Voicemail & Fax コードのインストール

インストールの後半では、次の処理が行われます。

- すべての Oracle Voicemail & Fax ファイルが Telephony Server にコピーされます。
- CTMedia コンテナにプロンプトが追加されます。
- Oracle Voicemail & Fax コンテナを構成するための `sc_vsto.cfg` ファイルが作成されます。
- `rmid`、`rmiregistry` および `UMProcessMgrService` プロセスがインストールされます。
- Oracle Voicemail & Fax Media Services Profile が CT Media Server にロードされます。
`SCR_AppProfile`、`SCR_ASIMap` および `SCR_RoutingRules` に変更が加えられます。

Oracle Voicemail & Fax コードをインストールするには、次のようにします。

1. システムの再起動が完了すると、「メール・ストアの選択」画面が表示されます。
2. 「メール・ストアの選択」リストから **Information Store** を選択します。

3. 「メール・ストアの選択」リストから「<none>」以外の Information Store を選択した場合は、UM パスワードの指定を求められます。デフォルトは welcome です。

それ以外の場合は、「DB ユーザー 'um' のパスワード」フィールドが非アクティブになります。

4. 「次へ」をクリックし、「サマリー」画面を表示します。
5. 「インストール」をクリックして、「End of Installation」画面を表示します。
6. 「終了」をクリックします。

「Oracle Voicemail & Fax の Information Store データベース・アカウント」に進み、推奨手順を実行します。

Oracle Voicemail & Fax の Information Store データベース・アカウント

Oracle Voicemail & Fax をインストールすると、UM ユーザー・アカウントが自動的に作成されます。ボイスメール・プロセスでは、UM アカウントを使用して Information Store にアクセスします。このアカウントには、Message Waiting Indicator (MWI) へのリクエストの配信に使用されるスキーマ・オブジェクトが含まれています。アカウントに付与されるロールおよび権限は、CONNECT、RESOURCE、DBA、EXECUTE ON DBMS_AQ、EXECUTE ON DBMS_AQADM および JAVAUSERPRIV です。インストール時に提供されるデフォルトのパスワードは、welcome です。

プロセスの実行には、JAVAUSERPRIV 権限は必要ありません。そのため、インストール後はこの権限を削除し、システムの安全性を高めることをお勧めします。

注意： 各 Information Store について、次の手順を実行する必要があります。

JAVAUSERPRIV 権限を削除するには、次のようにします。

1. SYSTEM ユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
REVOKE  JAVAUSERPRIV FROM UM;

CALL DBMS_JAVA.revoke_permission('PUBLIC',
    'java.net.SocketPermission', '*', 'read,write');
```

「中間層での Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant の実行」に進み、インストールを続行します。

中間層での Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant の実行

注意： Oracle Collaboration Suite の既存のインストールに Telephony Server を追加でインストールする場合のみ、7-7 ページの「[Oracle Voicemail & Fax Telephony Server の追加インストール](#)」に進みます。

Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant により、次のタスクが実行されます。

- Oracle Voicemail & Fax の中間層プロセス・エントリを Oracle Internet Directory にロードします。
 - Oracle Voicemail & Fax プロセスを管理するために、Enterprise Manager を構成します。
 - UM スキーマを Information Storage データベースにロードします。
1. \$ORACLE_HOME/um/uminfra ディレクトリにある uminfra_install.sh を各中間層システムで実行して、Configuration Assistant の「メール・ストアの選択」画面を表示します。
 2. 「メール・ストアの選択」リストから Information Store を選択します。
「メール・ストアの選択」リストから「<none>」以外の Information Store を選択した場合は、SYSTEM、ES_MAIL および UM のパスワードの指定を求められます。デフォルト値は次のとおりです。
 - **SYSTEM:** manager
 - **ES_MAIL:** es
 - **UM:** welcome

注意： Information Storage データベースの作成時に新しい SYSTEM パスワードを作成し、Oracle Email のインストール時に新しい ES_MAIL および UM パスワードを作成した場合は、これらの新しいパスワードを使用する必要があります。

3. 「次へ」をクリックして、この中間層で管理する Oracle Voicemail & Fax Telephony Server を選択します。
4. 「次へ」をクリックして、「End of Installation」画面を表示します。
5. 「終了」をクリックします。

6. Configuration Assistant を完了したら、Oracle Voicemail & Fax Windows 2000 Telephony Server を再起動します。

関連項目： 構成の詳細は、『Oracle Voicemail & Fax 管理者ガイド』を参照してください。

これで Oracle Voicemail & Fax のインストールは終了です。

Oracle9iAS コアのサイレント・インストール

Oracle9iAS コアのサイレント・インストールを行うことができます。

サイレント・インストールを行うには、次のようにします。

1. %CD_HOME%\Disk1\install\win32\ias_core_top.rsp ファイルを編集します。
ファイル内のコメントは、必須の値に関する説明です。
2. 次のコマンドを入力します。

```
full_path\setup.exe -silent -response full_path\ias_core_top.rsp
```
3. ORACLE_HOME\um\scripts ディレクトリに移動し、findmailstores.bat ファイルを実行します。
4. システムを再起動します。インストールの後半が自動的に開始します。7-4 ページの「Oracle Voicemail & Fax コードのインストール」を参照してください。

Oracle Voicemail & Fax Telephony Server の追加インストール

Telephony Server を追加でインストールするには、次のようにします。

1. 7-3 ページの「Oracle Voicemail & Fax Telephony Server のインストール」で説明する手順に従います。
2. \$ORACLE_HOME/um/uminfra/uminfra_install.sh を各中間層で実行します。
3. Information Store に対して「None」を選択します。
4. この Oracle Enterprise Manager デモン・サーバーによって管理されるボイスメール・サーバーを選択します。

Oracle Collaboration Suite への Information Storage データベースの追加インストール

Information Storage データベースを Oracle Collaboration Suite システムに追加でインストールする際は常に、Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant に戻り、`sc_vsto.cfg` ファイルを更新する必要があります。

Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant に戻ると、次の処理が行われます。

- UM スキーマを Information Storage データベース上に作成します。
- Advanced Queue Message Waiting Indicator プロセスを作成します。

Oracle Voicemail & Fax 用の新規 Information Storage データベースを設定するには、次のようにします。

1. `$ORACLE_HOME/um/uminfra/uminfra_install.sh` を各中間層で実行します。
2. 新しい Information Storage データベースを選択し、必要なパスワードを指定します。
3. ボイスメール・サーバーに対して「None」を選択します。
4. 各 Telephony Server で、`sc_vsto.cfg` ファイルを新しい Information Storage 情報で更新します。

例 7-1 に更新前の `sc_vsto.cfg` ファイルを示します。

例 7-1 `sc_vsto.cfg` ファイル

```
{
  Container_ORCL_VPIM: {
    Container_DLGC_DLLName: "orclcont.dll"
    Container_DLGC_Initialize: "StorageInitialize"
    Container_DLGC_Shutdown: "StorageShutdown"
    Container_DLGC_Parameters: {
      Container_ORCL_ESNode: "v2store.v2store"
      Container_ORCL_DBSet: (
        {
          Container_ORCL_DBName: "v2store.v2store"
          Container_ORCL_PoolMax: 10
          Container_ORCL_PoolMin: 1
          Container_ORCL_DBUserid: "um"
          Container_ORCL_DBPassword:
            "0495022e8cbe976b4e9156aeff710fdb6dfeac30dff5ddd81"
          Container_ORCL_DBConnect:
            "(DESCRIPTION= (ADDRESS_LIST= (ADDRESS= (PROTOCOL=TCP) (HOST=thintest.us.oracle.com) (PORT=1521))) (CONNECT_DATA= (SERVICE_NAME=v2store.v2store)))"
        }
      )
    }
  }
}
```

```

    }

    Container_DLGC_FileStrategy: {
        Container_DLGC_DLLName: "std_sto.dll"
        Container_DLGC_Initialize: "StorageInitialize"
        Container_DLGC_Shutdown: "StorageShutdown"
        Container_DLGC_Parameters: {
            }
        }
    }
}

```

例 7-2 に更新後の sc_vsto.cfg ファイルを示します。

例 7-2 更新後の sc_vsto.cfg ファイル

```

{
  Container_ORCL_VPIM: {
    Container_DLGC_DLLName: "orclcont.dll"
    Container_DLGC_Initialize: "StorageInitialize"
    Container_DLGC_Shutdown: "StorageShutdown"
    Container_DLGC_Parameters: {
      Container_ORCL_ESNode: "v2store.v2store"
      Container_ORCL_DBSet: (
        {
          Container_ORCL_DBName: "v2store.v2store"
          Container_ORCL_PoolMax: 10
          Container_ORCL_PoolMin: 1
          Container_ORCL_DBUserid: "um"
          Container_ORCL_DBPassword:
            "0495022e8cbe976b4e9156aeff710fdb6dfeac30dff5ddd81"
          Container_ORCL_DBConnect:
            "(DESCRIPTION= (ADDRESS_LIST= (ADDRESS= (PROTOCOL=TCP) (HOST=database_host_name)
            (PORT=1521))) (CONNECT_DATA= (SERVICE_NAME=v2store.v2store))) )"
        }
      )
      {
        Container_ORCL_DBName: "2nd_information_storage_database_name"
        Container_ORCL_PoolMax: 10
        Container_ORCL_PoolMin: 1
        Container_ORCL_DBUserid: "um"
        Container_ORCL_DBPassword:
          "xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx"
        Container_ORCL_DBConnect:
          "(DESCRIPTION= (ADDRESS_LIST= (ADDRESS= (PROTOCOL=TCP) (HOST=2nd_database_host_name)
          (PORT=1521))) (CONNECT_DATA= (SERVICE_NAME=2nd_information_storage_database_
          name))) )"
      }
    }
  }
}

```

```

    }

    Container_DLGC_FileStrategy: {
        Container_DLGC_DLLName: "std_sto.dll"
        Container_DLGC_Initialize: "StorageInitialize"
        Container_DLGC_Shutdown: "StorageShutdown"
        Container_DLGC_Parameters: {      }
    }
}

```

前述の例では、パラメータは次のように定義されています。

- **ORCL_DBName:** グローバル・データベース名。Oracle Internet Directory から取得できます。
- **PoolMax、PoolMin:** 値はシステムによって異なります。デフォルト値は、それぞれ 10 および 1 です。
- **DBUserid:** 常に、um です。
- **DBPassword:** um ユーザー・パスワードの暗号化された文字列。このパスワードは、次のプログラムを実行して取得します。

```
%ORACLE_HOME%\um\scripts\encrypt.exe um_password
```

暗号化された文字列が出力され、ユーザーはこれをコピーし、ファイルに貼り付けることができます。

- **DBConnect:** 新規データベースの接続文字列。LDAP から取得できます。

サイレント・インストールおよび 非対話型インストール

この章では、Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールおよび非対話型インストールの手順について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [非対話型インストールの概要](#)
- [インストール要件](#)
- [サイレント・インストールおよび非対話型インストール用のファイルの作成](#)
- [レスポンス・ファイルの選択](#)
- [レスポンス・ファイルの編集](#)
- [レスポンス・ファイルの指定](#)
- [root.sh スクリプトの実行](#)
- [エラー処理](#)
- [削除](#)
- [非対話型モードでの Configuration Assistant の使用](#)

非対話型インストールの概要

Oracle Collaboration Suite には、2 つの非対話型のインストール方法があります。

- [サイレント・インストール](#)
- [非対話型インストール](#)

サイレント・インストール

Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを提供し、`-silent` フラグを指定することによって実行されます。Oracle Universal Installer は、このテキスト・ファイル（レスポンス・ファイルと呼ばれる）に含まれる変数および値を使用して、すべてのユーザー・プロンプトに応答します。ユーザーは、すべてのプロンプトに対する応答をレスポンス・ファイルに含める必要があります。サイレント・インストールでは、グラフィックな出力は表示されません。

Oracle Collaboration Suite を初めてインストールする場合、インストールを開始する前に、3 つのファイルを手動で作成する必要があります。これらのファイルは、インストール中に、Oracle Universal Installer によって使用されます。

- `oraInst.loc`
- `emtab`
- `oratab`

Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールを実行した後で、`root.sh` スクリプトを実行します。`root.sh` スクリプトを実行すると、環境変数の設定が検出され、これによってローカルの `bin` ディレクトリのフルパスを入力できます。

複数のコンピュータ上で同様のインストールを行う場合、Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールを使用します。さらに、コマンドラインを使用して遠隔地から Oracle Collaboration Suite のインストールを実行する場合も、サイレント・インストールを使用します。サイレント・インストールを使用すると、画面が表示されず、ユーザーによる入力是不要であるため、Oracle Collaboration Suite のインストールを監視する必要がなくなります。

関連項目：

- 8-3 ページの「[サイレント・インストールおよび非対話型インストール用のファイルの作成](#)」を参照してください。
- リモート・インストールの詳細は、2-17 ページの「[DISPLAY](#)」を参照してください。

非対話型インストール

Oracle Collaboration Suite の非対話型インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを提供することによって実行されます。`-silent` フラグは指定しません。Oracle Universal Installer は、このテキスト・ファイル（レスポンス・ファイルと呼ばれる）に含まれる変数および値を使用して、一部またはすべてのユーザー・プロンプトに応答します。Oracle Universal Installer から、画面が表示されます。ユーザーがすべてのプロンプトに対する応答を提供していない場合、インストール中に情報の入力が必要になる場合があります。

インストール中に、`root.sh` スクリプトを実行する必要があります。`root.sh` スクリプトを実行すると、環境変数の設定が検出され、これによってローカルの `bin` ディレクトリのフルパスを入力できます。

関連項目： レスポンス・ファイルの実行の詳細は、8-6 ページの「[レスポンス・ファイルの指定](#)」を参照してください。

インストール要件

インストール要件の完全なリストは、[第2章「インストールの準備」](#)を参照してください。

サイレント・インストールおよび非対話型インストール用のファイルの作成

コンピュータ上に `oraInst.loc`、`emtab` および `oratab` ファイルが存在しない場合、Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールを開始する前に、これらのファイルを作成する必要があります。これらのファイルは、サイレント・インストール中に、Oracle Universal Installer によって使用されます。[表 8-1](#) に、各プラットフォームの適切なディレクトリの場所を示します。

表 8-1 oratab、emtab および oraInst.loc ファイルの場所

プラットフォーム	oratab および emtab	oraInst.loc
Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)	<code>/var/opt/oracle/</code>	<code>/var/opt/oracle</code>
HP-UX PA-RISC (64-bit)	<code>/etc</code>	<code>/var/opt/oracle</code>
Linux x86	<code>/etc</code>	<code>/etc</code>

oraInst.loc ファイルの作成

root ユーザーとして、表 8-1 に示す適切なディレクトリに oraInst.loc ファイルを作成します。oracle ユーザー・グループに設定された読取りおよび書込み権限がこのファイルに付与されていることを確認します。oracle ユーザー・グループは、インストールを実行するグループです。oraInst.loc ファイルには、次のテキストが入力されている必要があります。

```
inst_group=oracle_user_group
inventory_loc=$ORACLE_HOME
```

ここで、inventory_loc はインベントリ・ファイルの場所を示し、ORACLE_HOME はディレクトリの絶対パスを示します。たとえば、\$ORACLE_HOME が /private2/oracle/ocs である場合、ファイルの内容は次のとおりです。

```
inst_group=oracle_user_group
inventory_loc=/private2/oracle/ocs
```

注意： inventory_loc が Oracle ホームに存在しない場合、inventory_loc が存在するディレクトリに、oracle_user_group に設定された読取りおよび書込み権限が付与されていることを確認してください。

emtab ファイルの作成

表 8-1 に示す適切なディレクトリに emtab ファイルを作成します。oracle ユーザー・グループに設定された読取りおよび書込み権限がこのファイルに付与されていることを確認します。emtab ファイルには、次のテキストが入力されている必要があります。

```
DEFAULT=$ORACLE_HOME
```

ここで、\$ORACLE_HOME はディレクトリの絶対パスを示します。たとえば、\$ORACLE_HOME が /private2/oracle/ocs である場合、ファイルの内容は次のとおりです。

```
DEFAULT=/private2/oracle/ocs
```

oratab ファイルの作成

表 8-1 に示す適切なディレクトリに oratab ファイルを作成します。このファイルが空で、oracle ユーザー・グループに対する読取りおよび書込み権限が付与されていることを確認します。

レスポンス・ファイルの選択

Oracle Collaboration Suite CD パックには、表 8-2 に示す 3 つのインストール・タイプ用の Oracle Universal Installer レスポンス・ファイルが含まれています。

表 8-2 レスポンス・ファイル

インストール・タイプ	ファイル名
Oracle9iAS Infrastructure	infrastructure.rsp
Oracle Collaboration Suite Information Storage	storage.rsp
このインストールには、Oracle Network Configuration Assistant (netca.rsp) および Database Configuration Assistant (dbca.rsp) のレスポンス・ファイルも含まれています。	
Oracle Collaboration Suite	midtier.rsp
このインストールには、Oracle Files Configuration Assistant のレスポンス・ファイル (silentconfig.properties) も含まれています。	

レスポンス・ファイルは、3 つのインストール・タイプのそれぞれの CD-ROM セットに含まれる最初の CD-ROM のルートに存在する /response ディレクトリに含まれています。サイレント・インストールまたは非対話型インストールの要件を満たすように、レスポンス・ファイルを編集する必要があります。レスポンス・ファイルを使用するには、最初にこのファイルを CD-ROM からシステムにコピーします。

次に例を示します。

1. /response ディレクトリ（たとえば、Oracle9iAS Infrastructure のインストール用 CD-ROM セットの最初の CD-ROM）に移動します。
2. infrastructure.rsp ファイルをシステムのハード・ドライブにコピーします。
prompt> cp infrastructure.rsp private/ocs_infr_cd1/response/infrastructure.rsp

レスポンス・ファイルの編集

テキスト・エディタを使用して、システム固有の情報が含まれるようにレスポンス・ファイルを編集します。レスポンス・ファイルのテキストによって、ユーザーが指定する必要がある情報を識別します。

レスポンス・ファイルには、変数の値を指定する必要があります。レスポンス・ファイルにリストされている各変数には、コメントが関連付けられています。コメントによって、変数タイプを識別します。次に例を示します。

```
string = "Sample Value"
Boolean = True or False
Number = 1000
StringList = {"StringValue 1", "String Value 2"}
```

<Value Required> と表示された値は、サイレント・インストール用に指定する必要があります。

レスポンス・ファイル内の変数値のコメントは、Oracle Collaboration Suite のインストールを開始する前に削除します。

レスポンス・ファイルの指定

レスポンス・ファイルを指定する前に、適切にファイルを構成していることを確認します。詳細は、前述の項を参照してください。

関連項目：

- 8-6 ページの「[レスポンス・ファイルの編集](#)」
- 12-34 ページの「[Oracle Files の非対話型構成](#)」
- 5-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」
- 5-10 ページの「[oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル](#)」

Oracle Universal Installer がインストール時にレスポンス・ファイルを使用するようにするには、Oracle Universal Installer の起動時にパラメータとしてレスポンス・ファイルの場所を指定します。

```
prompt> ./runInstaller -responseFile absolute_path_and_filename
```

非対話型モードでは、2-17 ページの「**DISPLAY**」で説明するとおり、環境変数 `DISPLAY` を設定する必要があります。サイレント・インストール・セッションを完全に実行するには、`-silent` パラメータを使用します。

```
prompt> ./runInstaller -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

非対話型インストールの成功または失敗のログは、`installActions.log` に書き込まれます。サイレント・インストールの成功または失敗のログは、`silentInstall.log` に書き込まれます。ログ・ファイルは、インストール中に `oraInventory` ディレクトリに作成されます。

重要： インストール中に、いくつかの Oracle Collaboration Suite コンポーネントをインストールするために、これらのレスポンス・ファイルは `$ORACLE_HOME` 下のサブディレクトリにコピーされる場合があります。インストールが正常に終了した後、これらのコピーは削除されます。ただし、インストールが失敗した場合、これらのコピーは削除されません。レスポンス・ファイルにパスワードまたはその他の機密情報が含まれる場合は、ファイル・システム上の残りのレスポンス・ファイルのコピーをすべて削除することをお勧めします。

root.sh スクリプトの実行

サイレント・インストールまたは非対話型インストールを実行する場合、Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストール後に、`root.sh` スクリプトを実行する必要があります。

root.sh およびサイレント・インストール

Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストール中は、`root.sh` スクリプトを実行するように求められません。`root.sh` スクリプトは、サイレント・インストール後に実行する必要があります。

`root.sh` スクリプトを実行するには、次の手順を実行します。

1. `root` ユーザーとしてログインします。
2. Oracle ホーム・ディレクトリで `root.sh` スクリプトを実行します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/root.sh
```

ここで、`$ORACLE_HOME` はディレクトリの絶対パスを示します。

3. `root` ユーザーを終了します。

Oracle HTTP Server

サイレント・インストール中、Oracle Universal Installer によって、Oracle HTTP Server の起動が試行されます。ただし、Oracle HTTP Server は、root.sh スクリプトが実行されるまで起動しません。Oracle HTTP Server が起動しないために生成されたエラー・メッセージは、無視してください。

root.sh スクリプトを実行した後で、次のように入力して Oracle HTTP Server を再起動します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin opmnctl stopall  
$ORACLE_HOME/opmn/bin opmnctl startall
```

異なるポート上での Oracle HTTP Server の使用

番号が 1024 より小さいポートで Oracle HTTP Server を使用する場合、root.sh スクリプトを実行しないでください。かわりに、root ユーザーとして次のスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/Apache/Apache/bin/root_sh_append.sh
```

ここで、\$ORACLE_HOME はディレクトリの絶対パスを示します。

root_sh_append.sh スクリプトによって、1024 より小さい番号のポートで Oracle HTTP Server を実行するために必要な権限が設定されます。

root.sh および非対話型インストール

Oracle Collaboration Suite の非対話型インストール中、Oracle Universal Installer によって、root.sh スクリプトを実行するためのプロンプトが表示されます。

root.sh スクリプトを実行するには、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. Oracle ホーム・ディレクトリで root.sh スクリプトを実行します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/root.sh
```

ここで、\$ORACLE_HOME はディレクトリの絶対パスを示します。

3. root ユーザーを終了します。

非対話型インストールの場合、「Finished running generic part of the root.sh script」および「Now product-specific root actions will be performed」と表示された後、root ユーザーを終了し、「インストール」画面に戻ります。

root.sh スクリプトによって、次の項目が検出されます。

- 環境変数 ORACLE_OWNER、ORACLE_HOME および ORACLE_SID の設定。
- ローカルの bin ディレクトリのフルパス。デフォルトを使用するか、またはローカルの異なる bin ディレクトリに変更できます。

エラー処理

サイレント・インストールおよび非対話型インストールの成功または失敗のログは、silentInstall.log ファイルに書き込まれます。このファイルは、oraInventory ディレクトリに作成されます。

変数値のコンテキスト、形式またはタイプが不適切な場合、その値は指定されていないものとして処理されます。セクションの範囲外の変数は無視されます。

不適切または不完全なレスポンス・ファイルを使用してサイレント・インストールまたは非対話型インストールを試行すると、Oracle Universal Installer で、ディスク領域の不足、インストールの失敗などのエラーが発生します。

レスポンス・ファイルを指定せずに非対話型インストールを試行すると、インストールが失敗します。

削除

サイレント・インストールまたは非対話型インストールが失敗した場合、Oracle Collaboration Suite のインストールの試行によって作成されたすべてのファイルを完全に削除する必要があります。

関連項目： [第9章「Oracle Collaboration Suite コンポーネントの削除」](#)

非対話型モードでの Configuration Assistant の使用

非対話型モードで Configuration Assistant を使用するには、次のいずれかの操作を実行します。

- Oracle Universal Installer レスポンス・ファイルを構成し、非対話型 Configuration Assistant を起動します。
- 次のコマンドの形式を使用して、Configuration Assistant をスタンドアロン・モードで実行します。

```
prompt> assistant_name [-silent] -responseFile filename
```

ここで、assistant_name は実行する Configuration Assistant を示し、filename はこの Configuration Assistant 用のレスポンス・ファイルを示します。

Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストールを非対話型モードで実行する場合、インストールの最後に Oracle Net Configuration Assistant によってシステムは構成されません。インストール後、Oracle ホーム・ディレクトリから `netca` コマンドを実行することによって Oracle Net Configuration Assistant を使用した Oracle Net の構成を実行するか、または `netca.rsp` レスポンス・ファイルを使用します。

注意： レスポンス・ファイルを構成せずに非対話型セッションを試行すると、Oracle Universal Installer または Configuration Assistant が失敗します。失敗した非対話型インストールのトラブルシューティングの詳細は、8-10 ページの「[レスポンス・ファイルのエラー処理](#)」を参照してください。

関連項目：

- 12-34 ページの「[Oracle Files の非対話型構成](#)」

レスポンス・ファイルのエラー処理

Oracle Universal Installer または Configuration Assistant は、実行時にレスポンス・ファイルを検証します。検証に失敗した場合、非対話型インストールまたは構成のプロセスが終了します。パラメータ値のコンテキスト、形式またはタイプが不適切な場合、Oracle Universal Installer は、ファイルに値が指定されていないものとして処理します。また、セクションの範囲外の変数は無視されます。

失敗に関する情報は、インストール・セッションのログ・ファイルに記録されます。

関連項目： oraInventory ディレクトリおよびインストール・ログ・ファイルの詳細は、5-10 ページの「[oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル](#)」を参照してください。

Oracle Collaboration Suite コンポーネントの削除

この章では、Oracle Collaboration Suite コンポーネントを削除する方法について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [削除の概要](#)
- [Oracle コンポーネントの削除の準備](#)
- [Oracle コンポーネントの削除](#)

注意：

- 削除プロセスを開始する前に、すべての Oracle サービスおよびプロセスを停止してください。
 - Oracle Universal Installer では、コンポーネントまたは Oracle Collaboration Suite インスタンスを選択してカスタム削除することはできません。削除を開始する前に、削除対象を確認してください。
-

削除の概要

Oracle Universal Installer では、Oracle Collaboration Suite がインストールされている場合、同じリリースの Oracle Collaboration Suite を再インストールすることはできません。同じリリースの Oracle Collaboration Suite を再インストールするには、インストールされている製品を削除した後で、インストールします。

Oracle Collaboration Suite をホストから正常に削除するには、Oracle Collaboration Suite のセカンダリ（後続の）・インストールを削除した後で、プライマリ（最初の）・インストールを削除することをお勧めします。

Oracle Collaboration Suite を削除する前に、Oracle Email を削除する必要があります。

Oracle コンポーネントの削除の準備

1. Middle-Tier を削除する前に、各 Middle-Tier の Oracle ホームから次のスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/oes/bin/removemidtierfromoid.sh
```

このスクリプトによって、電子メール・プロセスのターゲット、プロセス・インスタンスおよびこれらのリファレンスが Oracle Internet Directory から削除されます。

2. Information Storage を削除する必要がある場合、Middle-Tier で SQL*Plus を実行します。SYSTEM として Information Storage データベースに接続し、次のスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/oes/install/sql/dropschema.sql;
```

3. 任意の Oracle ホームから次のコマンドを実行し、Oracle Internet Directory からメール・ストアのエントリを削除します。

```
$ORACLE_HOME/bin/ldapdelete -v -h <oidhost> -p <oidport>  
-Dcn=umadmin,cn=EMailServerContainer,cn=Products,cn=OracleContext -w  
@ <password> "cn=<global_dbname>,cn=mailstores,cn=um_  
system,cn=EMailServerContainer,cn=Products,cn=OracleContext"
```

各変数の意味を次に示します。

```
<oidhost> - Infrastructure OID のホスト名  
<oidport> - Infrastructure OID のポート番号  
<password> - umadmin ユーザーのパスワード  
<global_dbname> - メール・ストア・データベースのグローバル・データベース名
```


4. Oracle Universal Installer を使用して、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier ソフトウェアを削除します。

関連項目： 5-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」

Oracle コンポーネントの削除

1. Oracle Universal Installer を起動します。5-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」を参照してください。
「ようこそ」ウィンドウが表示されます。
2. 「製品の削除」をクリックします。
「インベントリ」ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、Oracle ホームにインストールされているすべてのコンポーネントが表示されます。
3. インストールされているコンポーネントを再確認し、削除する Oracle ホームを選択します。
4. 「削除」をクリックします。
「確認」ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、削除するために選択したすべてのコンポーネントが表示されます。
5. 「確認」ウィンドウを下にスクロールして、削除するために選択されたコンポーネントを確認します。
6. 「はい」をクリックします。
7. 複数の Oracle9iAS Infrastructure がインストールされている場合に Oracle9iAS Infrastructure のセカンダリ・インストールを選択すると、Oracle Universal Installer はこのインストールを削除します。Oracle9iAS Infrastructure のプライマリ・インストールを選択すると、「Oracle9iAS Administration Service」ウィンドウが表示されます。次の操作は、現在ホスト上にインストールされている Oracle9iAS Infrastructure の数によって異なります。
8. 現在、ホスト上に Oracle9iAS Infrastructure が 1 つのみインストールされている場合、「Oracle9iAS Administration Service」ウィンドウに次のように表示されます。

```
"The active Oracle9iAS Administration Service is in $ORACLE_HOME. There are no other Administration Services available."
```
9. 「OK」をクリックして続行します。

10. 現在、ホスト上に Oracle9iAS Infrastructure が複数インストールされている場合、「Oracle9iAS Administration Service」ウィンドウに次のように表示されます。

"The active Oracle9iAS Administration Service is in \$ORACLE_HOME. You may select one of the Administration Services to become the active one."

残っている Oracle9iAS Infrastructure インストールの 1 つを選択します。これがプライマリ・インストールとなり、Oracle9iAS Administration Service の新しい場所になります。

11. 「OK」をクリックして続行します。

注意：

- コンポーネントを削除すると、依存するすべてのコンポーネントおよびファイルも削除されます。
 - Oracle Universal Installer は、削除中にすべてのファイルおよびディレクトリを削除するわけではありません。削除されなかったファイルおよびディレクトリは手動で削除する必要があります。
-
-

第 III 部

Oracle Collaboration Suite コンポーネントの構成

第 III 部では、Oracle Collaboration Suite のコンポーネントの構成を完了するために実行する必要があるインストール後の手順を詳細に示します。

第 III 部は、次の章で構成されています。

- [第 10 章「Oracle Calendar の構成」](#)
- [第 11 章「Oracle Email の構成」](#)
- [第 12 章「Oracle Files の構成」](#)
- [第 13 章「検索機能の構成」](#)
- [第 14 章「Oracle Web Conferencing の構成」](#)

注意： Oracle9iAS Wireless には、インストール後に構成の必要のある組込みアプリケーションが含まれています。まず基礎となる Oracle9iAS Wireless スタック、次にアプリケーションを、使用前に構成する必要があります。これらのアプリケーションおよびその他の Oracle9iAS Wireless コンポーネントの構成方法の詳細は、『Oracle9iAS Wireless 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Calendar の構成

この章では、Oracle Calendar を構成する方法を説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Configuration Assistant の手動実行](#)
- [Oracle Calendar Server の構成](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの起動および構成](#)
- [Oracle Calendar リソース・キットのインストール](#)
- [Oracle Calendar の複数インスタンスでの orclguest アカウントのプロビジョニング](#)
- [Oracle Calendar の電子メール配信の構成](#)

Oracle Calendar Configuration Assistant の手動実行

Oracle Collaboration Suite のインストール・プログラムでは、2 種類の Oracle Calendar Configuration Assistant（ご使用のシステムで動作するように Oracle Calendar を構成するツール）が実行されます。セットアップの問題によってインストール中にエラーが発生した場合（指定したホスト URL を読み取ることができなかった場合など）は、問題を解決した後、Configuration Assistant の一方または両方を手動で実行する必要があります。

Oracle Calendar Configuration Assistant には、次の 2 種類があります。

- **Server:** Oracle Calendar Server を構成します。
- **Group:** Oracle Calendar アプリケーション・システムと Oracle Calendar Server との接続を行います。

Oracle Collaboration Suite のインストール・プロセス終了時にメッセージを調べ、正常に実行されなかった Configuration Assistant を確認します。この情報は、`$ORACLE_HOME/cfgtools` の下のログ・ファイルにもあります。

Configuration Assistant を手動で実行するには、次のようにします。

1. 環境変数 `ORACLE_HOME` を、Oracle Calendar のインストール・ディレクトリに設定します。
2. ライブラリ・パスを次のように設定します。

Linux では、`LD_LIBRARY_PATH` を次のように設定します。

```
$ORACLE_HOME/lib:$ORACLE_HOME/ocal/sbin
```

HP では、`SHLIB_PATH` を次のように設定します。

```
$ORACLE_HOME/lib32:$ORACLE_HOME/ocal/sbin
```

3. 次のログ・ファイルを開きます。

```
$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolsDATE_TIME.log
```
4. 適切な Configuration Assistant のヘッダーを探します。たとえば、Group Configuration Assistant のヘッダーは次のようになります。

```
-----  
Launched configuration assistant 'Calendar Group Configuration Assistant'  
-----
```

5. ヘッダーの下に、インストール時に作成されたコマンドをコピーします。このコマンドは、次のような文字列で始まり、

```
/home/myuser/oracle_home/jre...
```

次のような文字列で終わります。

```
... -epw -DSDS OID -portDAS 5736 -DSmgrdn cn=orcladmin -emgrp -mnme -ePIM  
-eimt -eclient -tzkey MEZ-1MESZ -silent
```

6. コピーしたコマンドラインを実行します。この場合、次のパラメータを置換文字列に置き換えてください。

パラメータ	置換文字列
-epw	-nodepw <ias_admin_password>
-emgrp	-DSmgrp <DSMgrdn_user_password> (-DSmgrdn cn=orcladmin のように、コマンドラインに DSMgrdn ユーザーを指定します。)
-ecsm	-csmid <password_for_new_csm>

Oracle Calendar Server の構成

この項では、Oracle Calendar Server のインストール後、また場合によってはアップグレード後に行う必要のある構成の変更について説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [ポート値の確認](#)
- [Oracle Calendar Administrator を開く](#)
- [リソース承認の設定](#)
- [ワイヤレス機能の有効化](#)
- [LD_LIBRARY_PATH および SHLIB_PATH の処理](#)

ポート値の確認

Oracle Calendar Server で使用されるデフォルト・ポートは次のとおりです。

ポート	機能
5730	Calendar Engine
5731	同期ネットワーク・コネクタ
5732	ディレクトリ・アクセス・サーバー
5734	Calendar Server Manager

これらのポートがすでに使用されている場合は、インストール時に次に使用可能なポートが使用されます。Oracle Calendar Server で使用される値は `unison.ini` で確認してください。

Oracle Calendar Administrator を開く

Oracle Calendar Administrator を使用して、ユーザー、イベント、リソースおよびパブリック予定表を管理し、管理タスクを実行します。デフォルトでは、次の URL で開くことができます。

`https://Web_server_host:https_port/ocad-bin/ocad.cgi?object=nodeadm`

Oracle Calendar Administrator にログインするには、インストール時に選択した Oracle Calendar 管理用パスワードを入力します。このパスワードとともにユーザー名を入力しないでください。

関連項目： Oracle Calendar Administrator の使用方法は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照してください。

リソース承認の設定

リソース承認を使用する場合は、次のように設定する必要があります。

1. NOTIFY-APPROVER を TRUE に設定し、APPROVER-EMAIL を承認者の電子メールに設定して、リソースを作成または変更します。たとえば、ocal/bin では次のようになります。

```
uniuser -resource -add R=Resource_Approval/NOTIFY-APPROVER=TRUE/APPROVER-EMAIL=
approver.email@oracle.com/psw=password -n 4313 -p test1
```


2. リソースに Designate 権限を与えます。たとえば、ocal/bin では次のようになります。

```
uniaccessrights -mod -designate ALL=TRUE -grantee S=Designate/NODE-ID=4313
-grantor R=Resource_Approval -n 4313 -p test1
```

3. unison.ini (ocal/miscにある) に、url パラメータを指定した RESOURCE_APPROVAL セクションがあることも確認します。次に例を示します。

```
[RESOURCE_APPROVAL]
url=http://server:port/ocas-bin/ocas.fcgi
```

4. リソース承認 URL を変更した場合は、Oracle Calendar Server を再起動します。

ワイヤレス機能の有効化

Oracle Calendar Server をワイヤレス対応にし、起動および稼働している有効な Wireless Server を指すようにするには、\$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini を開き、次のパラメータを設定します。

```
[CWS]
smtpmail = TRUE
smsnotifyprogramparam = " -host WIRELESS_HOST -port Calendar_listener_port"
smsnotifyprogram = $ORACLE_HOME/ocal/sbin/sendalert
.
.
.
[NOTIFY]
sms = TRUE
alert_server = "IASW"
```

ファイルを保存し、Oracle Calendar Server を再起動します。

Wireless Server が正しく構成されていることを確認します。詳細は、Wireless Server に付属のドキュメントを参照してください。

LD_LIBRARY_PATH および SHLIB_PATH の処理

たとえば、セキュリティ・メカニズムを構成するために環境変数 LD_LIBRARY_PATH および SHLIB_PATH に追加されている値は、Oracle Calendar Server によりクリアされます。かわりに、OCAL_ADDITIONAL_LIBPATH に値を追加します。

Oracle Calendar アプリケーション・システムの起動および構成

一般に Oracle Calendar アプリケーション・システムは、Web サーバーを起動した際に、デフォルトのインストール設定を使用して正常に起動します。次の項では、アプリケーション・システムのステータスを確認し、必要に応じて構成を変更する方法を説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar アプリケーション・システムのステータスの確認](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成](#)

Oracle Calendar アプリケーション・システムのステータスの確認

アプリケーション・システムおよびそのコンポーネントが稼働しているかどうかを確認するには、`http://server_name:port/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=sys` でシステム・ページを開きます。コンポーネントが稼働していない場合は、システム・ページにそのコンポーネントが表示されません。

適切なアプリケーション・システムでコンポーネントに接続するには、次の URL を使用します。

コンポーネント	URL
Sync Server	<code>http://host:port/ocst-bin/ocas.fcgi</code>
Web Services	<code>http://host:port/ocws-bin/ocas.fcgi</code>
Oracle Calendar Web Client	<code>http://host:port/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=web</code>

Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成

Oracle Calendar アプリケーション・システムおよびそのコンポーネントは、`$ORACLE_HOME/ocas/conf` の下にある次の構成ファイルで制御されます。

- ocas.conf:** クライアント
- ocws.conf:** Web Services
- ocst.conf:** Sync Server
- ocwc.conf:** : Oracle Calendar Web Client
- ocal.conf:** httpd.conf から組み込まれる Web サーバー FastCGI ディレクティブ

環境に応じて、次の構成オプションを検討してください。

- `ocas.fcgi` の複数インスタンスを実行します（インスタンス数は設定と負荷に依存）。この構成オプションは、`ocal.conf` で構成できます。
- インストールとホスト当たり `ochecklet.fcgi` のインスタンスを 1 つ実行する必要があります。この構成オプションも、`ocal.conf` で構成します。
- カスタム URL から Web Client をリダイレクトするには、次の文を `ocal.conf` に追加します。

```
<Location /calendar>
    Redirect permanent /calendar \
        http://<host>:<port>/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=web
</Location>
```

- Sync Server を使用するには、`httpd.conf` または `apache.conf` の `KeepAlive` パラメータを 300 秒に設定するか、またはオフにします。これは、`ocal.conf` の 300 秒のアイドル・タイムアウト値に相当します。
- すべてのホストの `ocas` ファイル内の `linkdb` および `sessiondb` 変数が同じパス（たとえば、同じ NFS マウント）を指していることを確認します。
- 各コンポーネントの `conf` ファイルで、認証、圧縮および暗号化（ACE）値を設定します。すべての製品の AUTH Web 設定は、`ocas.conf` の `[ACE_PLUGINS_CLIENT]` セクションで構成する必要があります。
- 問題が発生した場合は、次の場所でエラー・メッセージを確認します。

```
$ORACLE_HOME/ocas/logs/ocas_log
```

`conf` ファイルに変更を加えた後は、Web サーバーを再起動してください。

Oracle Calendar リソース・キットのインストール

Oracle Calendar リソース・キットは、管理者が、Oracle Calendar アプリケーション・システムに関する情報をエンド・ユーザーに提供するために使用可能なツールです。この情報には、次のクライアントの製品概要、システム要件、インストール手順、よくある質問と回答およびトラブルシューティングが含まれます。

- Oracle Connector for Outlook
- Oracle Calendar Web Client
- Oracle Calendar Desktop Client
- Oracle Calendar Sync
- Oracle Sync Server

Oracle Calendar リソース・キットは、Oracle9iAS Portal に含めることでエンド・ユーザーが使用できるようになります。現在、キットは `ROOT_OF_CD_DISK1/doc/admin/resource_kits` ディレクトリにあります。

Oracle Calendar の複数インスタンスでの orclguest アカウントのプロビジョニング

同じインフラストラクチャに Oracle Calendar のインスタンスを 2 つインストールする場合は、2 番目のインスタンスに対して orclguest アカウントがプロビジョニングされない場合があります。次の手順に従って、2 番目の Calendar インスタンスに対して別のテスト・ユーザー・アカウントを作成してください。

注意： これらの手順は、orclguest がまったく作成されていない場合にも実行する必要があります。

1. 次の URL にある Oracle Delegated Administration Services を使用して Oracle Internet Directory にユーザーを作成します。

`http://Oracle_Internet_Directory_host_name:port_number/oiddas`

2. 次の URL から Oracle Calendar Administrator を使用して、このユーザーにカレンダー・サービスをプロビジョニングします。

`http://Oracle_Calendar_host_name:port_number/ocad-bin/ocad.cgi?object=nodeadm`

関連項目：『Oracle Calendar 管理者ガイド』の第 8 章「カレンダー・ユーザー」

Oracle Calendar の電子メール配信の構成

この項では、Oracle Calendar の電子メール配信の有効化または最適化を行うための構成変更について説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar および Oracle Email が同じホスト上に存在する場合のイベント通知の構成](#)
- [Oracle Calendar および Oracle Email が個別のホスト上に存在する場合のイベント通知の構成](#)
- [メール・ドメイン名の設定](#)

Oracle Calendar および Oracle Email が同じホスト上に存在する場合のイベント通知の構成

Oracle Calendar および Oracle Email (Unified Messaging と呼ばれます) が同じホスト上にインストールされている場合に Oracle Calendar によるイベント通知メッセージの電子メール配信を有効にするには、`sendmail.cf` ファイルに変更を加え、インバウンド SMTP サービスを再初期化する必要があります。

この項の内容は次のとおりです。

- [sendmail.cf ファイルの編集](#)
- [Unified Messaging インバウンド SMTP サービスの再初期化](#)

sendmail.cf ファイルの編集

次に、Oracle Calendar および Oracle Email が同じホスト上にインストールされている場合に `sendmail.cf` ファイルを編集する手順について説明します。`sendmail.cf` ファイルは、Solaris システムでは `/etc/mail` ディレクトリ、Linux システムでは `/etc` ディレクトリにあります。この編集を行うには、`root` としてログインする必要があります。

1. `root` として `sendmail.cf` ファイルを開き、**DH** が含まれている行を探します。
2. 次のように、行の最後に中間層のホスト名を追加します。

```
DHmiddletier_host
```

3. `# short circuit local delivery so forwarded email works` セクション内の次の行をコメントアウトします。

```
R$=L < @ $=w . > $#local $: @ $1 special local names  
R$+ < @ $=w . > $#local $: $1 regular local name
```

- 4. sendmail.cf ファイルで、使用しているキーワード (Msmtp または Mesmtp) の F= パラメータに k フラグを追加します。

キーワード	パラメータ
Msmtp,	P=[IPC], F=mDFMuXk, S=EnvFromSMTP/HdrFromSMTP, R=EnvToSMTP, E=\r\n, L=990, T=DNS/RFC822/SMTP, A=TCP \$h
Mesmtp,	P=[IPC], F=mDFMuXak, S=EnvFromSMTP/HdrFromSMTP, R=EnvToSMTP, E=\r\n, L=990, T=DNS/RFC822/SMTP, A=TCP \$h

- 5. sendmail.cf ファイルを保存して閉じます。

Unified Messaging インバウンド SMTP サービスの再初期化

次に、Oracle Calendar および Oracle Email が同じホスト上にインストールされている場合に Unified Messaging インバウンド SMTP サービスのターゲットを編集および再初期化する手順について説明します。

- 1. 次の URL で、中間層上の Oracle Enterprise Manager にログインします。
http://middletier_host:1810/
- 2. 中間層のホストをクリックして、ターゲット・ページを表示します。
- 3. 「Unified Messaging」をクリックします。
- 4. Unified Messaging インバウンド SMTP をクリックして「プロセス・インスタンス」ページを表示します。
- 5. 「インスタンスの選択」リストで SMTP インスタンスをクリックします。
- 6. 「ルールおよびスパムの管理」セクションで、「受信者リライト規則」フィールドを探し、次の文字列を入力します。

\$*@middletier_host.fully_qualified_domain, \$1@domain

注意： ドメインが複数ある場合は、ドメインごとにルールを入力する必要があります。

- 7. 「適用」をクリックします。

- 8. ページの上部にあるナビゲーション・パスで、**Unified Messaging インバウンド SMTP** をクリックします。
- 9. 「再初期化」をクリックします。
- 10. 「OK」をクリックします。

ほとんどの場合、前述の手順によって電子メール通知が機能します。イベント通知が配信されない場合は、次の追加手順が必要になることもあります。

- 1. ローカル・ホスト・ファイル (/etc/hosts) を更新し、ホスト名の別名を追加します。
- 2. sendmail.cf ファイルで、使用しているキーワード (Msmtp または Mesmtp) の F= パラメータに 0 を追加して、mxlookup を無効にします。

キーワード	パラメータ
Msmtp,	P=[IPC], F=mDFMuXk0, S=EnvFromSMTP/HdrFromSMTP, R=EnvToSMTP, E=\r\n, L=990, T=DNS/RFC822/SMTP, A=TCP \$h
Mesmtp,	P=[IPC], F=mDFMuXk0, S=EnvFromSMTP/HdrFromSMTP, R=EnvToSMTP, E=\r\n, L=990, T=DNS/RFC822/SMTP, A=TCP \$h

- 3. sendmail.cf ファイルを保存して閉じます。

Oracle Calendar および Oracle Email が個別のホスト上に存在する場合のイベント通知の構成

次に、Oracle Email を使用していないユーザーに送信された Oracle Calendar Web Client のイベント通知の配信を最適化する手順を示します。この変更は、Oracle Calendar および Oracle Email が個別のホスト上にインストールされている場合に行う必要があります。この場合、root としてログインして、sendmail.cf ファイルを編集する必要があります。このファイルは、Solaris システムでは /etc/mail ディレクトリ、Linux システムでは /etc ディレクトリにあります。

- 1. root として sendmail.cf ファイルを開きます。

2. 次の変更を行います。

```
# who gets all local email traffic ($R has precedence for unqualified names)
# DH
DHsmtpmidtierhost
```

ここで、smtpmidtierhost は中間層の SMTP サーバーの完全修飾名です。

3. sendmail.cf ファイルを保存して閉じます。

メール・ドメイン名の設定

Oracle Calendar Server から送信された電子メールの送信元が、ドメイン名ではなくサーバー名の場合は、sendmail.cf ファイルに次の変更を加えます。このファイルは、Solaris システムでは /etc/mail ディレクトリ、Linux システムでは /etc ディレクトリにあります。

1. root として sendmail.cf ファイルを開きます。
2. 次の変更を行います。

```
# who I masquerade as (null for no masquerading) (see also $=M)
DMdomainname
```

ここで、domainname は、電子メールの送信元のメール・ドメイン名です。

3. sendmail.cf ファイルを保存して閉じます。

Oracle Email の構成

この章では、管理ツールについて説明し、Oracle Email システムの構成、起動、停止および再初期化の方法を説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [構成前のチェックリスト](#)
- [Oracle Email の構成](#)
- [管理ツールの使用](#)
- [Oracle Email の起動、停止および再初期化](#)
- [Oracle Email の手動構成](#)

構成前のチェックリスト

この項では、Oracle Email を構成する前に実行する必要がある構成前の手順について説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Information Store データベース上の Java および Oracle Text オプションの確認](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure および Application Server の確認および起動](#)
- [Oracle Internet Directory へのデータベースの登録](#)
- [Information Storage データベースのデータベース init.ora パラメータの設定](#)
- [Information Storage 表領域およびスキーマの作成](#)

Information Store データベース上の Java および Oracle Text オプションの確認

Java および Oracle Text オプションは、Oracle Email のインストール時にデフォルトでインストールされます。ただし、データベース・ユーザー CTXSYS がインストール時に存在しない場合、インストールは失敗します。

Java および Oracle Text オプションが Information Storage データベースにインストールされ、構成されていることを確認するには、次の SQL 問合せを sysdba として実行します。

```
SQL> select comp_id, status from dba_registry;
```

Java および Oracle Text オプションが正しくインストールされた場合は、次のような出力が表示されます。

COMP_ID	STATUS
-----	-----
...	
JAVAVM	VALID
...	
CATJAVA	VALID
...	
CONTEXT	VALID

これらのオプションが Information Storage データベースにインストールおよび構成されていない場合は、手動でインストールおよび構成する必要があります。

Oracle9iAS Infrastructure および Application Server の確認および起動

Infrastructure および Application Server が稼働していることを確認します。

```
% ps -ef | grep http
```

Infrastructure および Application Server を起動するには、次のようにします。

```
% $ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall
```

Oracle Internet Directory へのデータベースの登録

注意： この項は、Oracle Collaboration Suite とともにインストールされた Information Storage データベースを使用していない場合にのみ適用されます。Information Storage データベースを Oracle Collaboration Suite Information Storage の CD からインストールした場合は、Oracle Internet Directory にデータベースを登録する必要はありません。

Information Store のインストールには Oracle9i データベースが必要です。データベースを Information Store として構成する前に、そのデータベースを Oracle Internet Directory Infrastructure に登録する必要があります。データベースがまだ Oracle Internet Directory に登録されていない場合は、Oracle Database Configuration Assistant を使用して登録できます。データベースが Oracle Internet Directory に登録された後、Oracle Net Manager を使用して接続識別子を変更できます。

Oracle Internet Directory Infrastructure で Information Store データベースを登録するには、Oracle Net Configuration Assistant および Database Configuration Assistant を使用して次の手順を実行する必要があります。

- [Oracle Net Configuration Assistant の実行](#)
- [Database Configuration Assistant の実行](#)

Oracle Net Configuration Assistant の実行

Oracle Net Configuration Assistant を実行するには、次のようにします。

1. Oracle Net Configuration Assistant を起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/netca
```

2. 「ディレクトリ使用構成」を選択します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. 「使用するディレクトリ・サーバーを選択してください。」を選択します。ディレクトリ・サーバーは、Oracle で使用可能なように構成済である必要があります。

5. 「次へ」をクリックします。
6. 使用するディレクトリ・サーバーとして Oracle Internet Directory を選択します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. Oracle Internet Directory Infrastructure の接続情報を入力します。
9. 「次へ」をクリックします。
10. ディレクトリのデフォルトの Oracle コンテキストとしてルート OracleContext (cn=OracleContext) を選択し、Oracle Net Configuration Assistant 構成を終了します。

Database Configuration Assistant の実行

Database Configuration Assistant を実行するには、次のようにします。

1. Database Configuration Assistant を起動し、Oracle Internet Directory Infrastructure に Information Storage データベースを登録します。
`$ORACLE_HOME/bin/dbca`
2. 「データベース内のデータベース・オプションの構成」を選択します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. Information Store データベース・インスタンスを選択します。
5. 「次へ」をクリックします。
6. 「ディレクトリ・サービス」画面で、「データベースを登録します。」を選択します。
7. ユーザー DN とパスワードを入力して Oracle Internet Directory Infrastructure に接続します。たとえば、acmeadmin と入力します。
8. Database Configuration Assistant 構成を完了します。

Information Storage データベースのデータベース init.ora パラメータの設定

Information Storage データベースのデータベース init.ora パラメータを次の値に設定します。

```
processes=150 or higher
open_cursors=300 or higher
dml_locks=200 or higher
shared_pool_size=32000000 or higher
java_pool_size=40000000 or higher
```

Information Storage 表領域およびスキーマの作成

Oracle Email 構成ウィザードでは、Information Store の表領域とスキーマを作成します。表領域のストレージ・パラメータまたはデータ・ファイルをカスタマイズする場合は、構成ウィザードを実行する前にこれらを作成できます。

Information Store の表領域およびそれらのデフォルト・ストレージ・パラメータの名前は、`$ORACLE_HOME/oes/install/sql/tblspc.sql` スクリプトを参照してください。

旧メッセージの 3 次記憶域に対して予約されている ESTERSTORE という名前の表領域があります。3 次記憶域を有効にするには、インストールの前に別のディスクに ESTERSTORE 表領域をあらかじめ作成します。その後で、Tertiary Store パラメータを有効にしてハウスキューピング・サーバーのインスタンスを作成し、Tertiary Storage Age Threshold パラメータを目的の日数に設定します（デフォルトは 30）。ハウスキューピング・サーバーのインスタンスはメッセージを定期的に自動で移動します。

注意： 表領域を事前に作成する場合は、Oracle Email 構成ウィザードのログに、表領域の作成に失敗したことを示すエラーが表示されます。これらのエラーは無視してかまいません。

関連項目： 3 次記憶域の詳細およびサーバー・プロセスの構成方法は、『Oracle Email 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Email の構成

この項では、umconfig.sh スクリプトで提供されるグラフィカル・インタフェースを使用して、Oracle Email Information Store および Middle-Tier サーバーを構成する方法について説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Email Information Storage データベースの構成](#)
- [Oracle Email Middle-Tier の構成](#)

注意： 構成を開始する前に、Information Store および Middle-Tier の両方をインストールする必要があります。また、Middle-Tier を構成する前に Information Storage データベースを構成する必要があります。

Oracle Email Information Storage データベースの構成

Information Storage データベースの構成では次の処理を行います。

- メール・スキーマの表領域の作成
- メールの表と索引の作成
- メール関連の PL/SQL パッケージのロード
- メール関連のストアド Java プロシージャのロード
- Oracle Internet Directory を使用した Information Storage データベースの構成

Oracle Email Information Storage データベースを構成するには、Middle-Tier サーバーで次の手順を実行します。

1. Oracle Collaboration Suite Middle-Tier にある `umconfig.sh` スクリプトを実行します。
`$ORACLE_HOME/oes/bin/umconfig.sh`

「Unified Messaging の構成」画面が表示されます。
2. 「メール・ストアのデータベース構成」を選択します。
3. 「次へ」をクリックします。「メール・ストアのデータベース構成」画面が表示されます。
4. 次の情報を対応するフィールドに入力します。

フィールド	説明
データベース・ホスト名	データベースが置かれているシステムの名前。
SID	Information Store のシステム識別子。
ポート番号	リスナーがリスニングしているポート番号。
system_password	ホスト・データベースの SYSTEM パスワード。

5. 「次へ」をクリックします。「CTXSYS パスワード」画面が表示されます。CTXSYS パスワードがロックされており、これをリセットする必要がある場合は、パスワードの確認を求められます。CTXSYS パスワードを入力します。デフォルト・パスワードは CTXSYS です。
6. 「次へ」をクリックします。「ES_MAIL のパスワード」画面が表示されます。

7. ES_MAIL のパスワードを入力し、確認します。ES_MAIL のパスワードが入力されていない場合、デフォルトは es です。

注意： Information Store スキーマは ES_MAIL データベース・ユーザーが所有しています。

8. 「次へ」をクリックします。「UMADMIN のパスワード」画面が表示されます。

注意： UMADMIN は、Oracle Email のアプリケーション・サーバーのインストール時に Oracle Internet Directory サーバーで作成された管理者アカウントです。そのアカウントがディレクトリ内の特定の Oracle Email エントリを所有します。インストール後に、管理者は UMADMIN アカウントを使用して管理ツールにログインし、初期 Oracle Email ユーザーを作成する必要があります。その後、システムおよびドメイン管理を他のユーザーに委譲できます。

9. UMADMIN のパスワードを入力し、確認します。パスワードが入力されていない場合は、デフォルト値の welcome が Oracle Internet Directory およびデータベースに UMADMIN パスワードとして格納されます。
10. 「次へ」をクリックします。「Create Unified Messaging Domain」画面が表示されます。
11. ユーザーの電子メール・アドレスに使用するドメイン名を入力します。

注意： ドメイン名の入力を間違え、不正なドメインが作成された場合は、次のコマンドを実行してドメインを訂正してください。

```
$ORACLE_HOME/oes/bin/install_createdomain.sh UM_SYSTEM  
domain_name
```

12. 「次へ」をクリックします。「構成ツール」画面が表示され、Information Store の構成が開始します。

Information Store の構成が完了すると、「End of Installation」画面が表示されます。

13. umconfig.sh によって作成されたログ・ファイルでエラーを確認します。ログ・ファイルは次のディレクトリにあります。

```
$ORACLE_HOME/oes/log/
```

14. 次のディレクトリにあるインストール・ログを調べます。

```
/var/opt/oracle/oraInst.loc/logs
```

15. Oracle Collaboration Suite Information Storage の CD-ROM に含まれている Information Storage データベースを使用していない場合は、後述の手順を実行してください。

- [umbackend コンポーネントのインストール](#)
- [umbackend の SQL スクリプトのロード](#)

umbackend コンポーネントのインストール

注意： Information Storage データベースが Oracle Collaboration Suite Information Storage の CD からインストールされていない状態で、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier および Information Store をインストールする場合は、umbackend.tar ファイルを Oracle Technology Network の Web サイトからダウンロードする必要があります。

umbackend コンポーネントをインストールするには、次のようにします。

1. Oracle Collaboration Suite Middle-Tier および Information Store が同じオペレーティング・システム（またはプラットフォーム）上にインストールされている場合は、umbackend.tar ファイルを Middle-Tier 上の \$ORACLE_HOME/oes ディレクトリから Information Storage データベース上の \$ORACLE_HOME にコピーします。

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier および Information Store が異なるオペレーティング・システム上にインストールされている場合は、Information Store と同じオペレーティング・システムの umbackend.tar をオラクル社カスタマ・サポート・センターより取得してください。

2. umbackend.tar ファイルを解凍します。

```
tar xvf umbackend.tar
```

3. Oracle Universal Installer を起動します。

```
cd backend/Disk1  
./runInstaller
```

4. 画面のプロンプトに従って、Oracle Email のバックエンド・インストールを完了します。

umbackend の SQL スクリプトのロード

umbackend の SQL スクリプトをロードするには、次のようにします。

1. ディレクトリを Information Storage データベースの \$ORACLE_HOME/oes/install/sql に変更します。
2. SQL*Plus を実行し、データベースに sys としてログインします。
3. install_backend_sys.sql スクリプトをロードします。
4. SQL*Plus を実行し、データベースに es_mail ユーザーとしてログインします。
5. install_backend_es_mail.sql スクリプトをロードします。

注意： これらのスクリプトは、Information Store が Oracle Collaboration Suite Information Storage の CD からインストールされていない場合にのみ実行する必要があります。

Oracle Email Middle-Tier の構成

Middle-Tier の構成では次の処理を行います。

- Oracle Internet Directory での Middle-Tier の構成
- Information Storage データベースでの Middle-Tier の構成
- Oracle Email サーバー・インスタンスの作成

Oracle Email Middle-Tier サーバーを構成するには、次のようにします。

1. ポート 25 を使用するアプリケーションを停止します。
2. アプリケーション・サーバーにある umconfig.sh スクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/oes/bin/umconfig.sh
```

「Unified Messaging の構成」画面が表示されます。
3. 「中間層の構成」を選択します。
4. 「次へ」をクリックします。「メール・ストア・データベース」画面が表示されます。
5. この中間層で使用するデータベースのグローバル名をドロップダウン・リストから選択します。

注意： UMADMIN パスワードとドメイン名が Information Store の構成中に指定された場合、次に表示される画面は「プロセスの開始」画面です。それ以外の場合は、UMADMIN パスワードとドメイン名を指定する必要があります。

6. 「次へ」をクリックします。「Create Unified Messaging Domain」画面が表示されます。
7. SMTP およびリスト・サーバー用のローカル・ドメインとして使用するドメインの名前を入力します。このドメインは、ユーザーの電子メール・アドレスに使用されます。
8. 「次へ」をクリックします。「プロセスの開始」画面が表示されます。
9. 構成の完了後に Oracle Email サーバー・プロセスを自動的に起動するには、「はい」を選択します。それ以外の場合は、「いいえ」を選択します。
10. 「次へ」をクリックします。「構成ツール」画面が表示され、Middle-Tier の構成が開始します。

Middle-Tier の構成が完了すると、「End of Installation」画面が表示されます。

11. ログ・ファイルでエラーを確認します。umconfig.sh のログ・ファイルは次のディレクトリにあります。

```
$ORACLE_HOME/oes/log/
```

12. 次のディレクトリにあるインストール・ログを調べます。

```
/var/opt/oracle/oraInst.loc/logs
```

管理ツールの使用

この項では、Oracle Email システムの管理に使用される様々な管理ツールについて説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Enterprise Manager](#)
- [Oracle Email Webmail クライアント](#)

Oracle Enterprise Manager

関連項目： Oracle Enterprise Manager の詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Enterprise Manager は、管理者が Oracle9i データベースおよび Oracle9i Application Server の管理タスクの一部を実行できるようにする Web ベースのツールです。Oracle Enterprise Manager は、Oracle Email サービス・プロセスの管理に使用できます。

Oracle Enterprise Manager を介して、管理者は Oracle Email システムで次のタスクを実行できます。

- 起動
- 停止
- 再初期化
- デフォルト・パラメータの変更

Oracle Enterprise Manager を介して Oracle Email の管理タスクを実行するには、次の URL に移動します。

`http://host_name:1810`

Oracle Email Webmail クライアント

関連項目： ドメインおよびユーザー・プロビジョニングの詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Email Webmail クライアントを使用して、管理者はドメインおよびユーザー・プロビジョニング・タスクを実行できます。Oracle Email Webmail クライアントを介して、管理者は次の処理を行うことができます。

- ユーザーおよび配信リストのドメイン設定の作成および変更
- 電子メール、FAX ユーザー、ボイスメール・ユーザーおよび配信リストの作成、削除、変更および表示
- 配信リストのメンバーの追加および削除
- 特定のユーザーがメンバーとなっているすべての配信リストの表示
- サーバー側フィルタの作成、削除、変更および表示
- リストの作成、削除および変更

Webmail クライアントを使用して Oracle Email の管理タスクを実行するには、次の URL に移動します。

`http://host_name:port_number/um/traffic_cop`

項目の意味は次のとおりです。

- `host_name` は、Middle-Tier がインストールされているホストの名前です。
- `port` は、Oracle Web Cache のポート番号です。

Oracle Email の起動、停止および再初期化

この項では、Oracle Email システムの起動、停止および再初期化の方法について説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Information Store 用の Oracle Net Listener の確認および起動](#)
- [Middle-Tier 用のリスナーの確認および起動](#)
- [Oracle Email システムの起動](#)
- [Oracle Email システムの停止](#)
- [Oracle Email システムの再初期化](#)
- [パブリック・ユーザーの作成](#)

関連項目： 個々のプロセスの起動、停止および再初期化方法の詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』を参照してください。

Information Store 用の Oracle Net Listener の確認および起動

Oracle Net Listener を Information Store データベースで実行して、システムが Oracle Email システムおよびクライアントからのデータベース接続を確立できるようにする必要があります。

リスナーが稼働していることを確認するには、次のようにします。

```
% $ORACLE_HOME/bin/lsnrctl status
```

「リスナーがありません。」という行を含むメッセージがコンピュータから返された場合は、リスナーを起動する必要があります。

リスナーを起動するには、次のようにします。

```
% $ORACLE_HOME/bin/lsnrctl start
```

関連項目： リスナーの起動の追加情報は、『Oracle Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

Middle-Tier 用のリスナーの確認および起動

リスナーが稼働していることを確認するには、次のようにします。

```
% lsnrctl status
```

「リスナーがありません。」という行を含むメッセージがコンピュータから返された場合は、リスナーを起動する必要があります。

リスナーを起動するには、次のようにします。

1. Oracle Net Configuration Assistant または Oracle Net Manager を使用し、プロトコル・アドレスとその他の構成パラメータを指定してリスナーを構成します。

関連項目： リスナー構成情報は、『Oracle Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

2. スーパーユーザー (root) としてログインし、リスナー実行可能ファイル (tnslsnr) とその依存共有ライブラリのファイル所有権およびアクセス権を設定して、これらのファイルをスーパーユーザーのみが変更できるようにします。tnslsnr は、\$ORACLE_HOME/bin ディレクトリにあります。
3. ルート・ディレクトリからこれらのファイルまでのパス名にある個々のディレクトリの権限が、同じ方法で変更されていることを確認します。
4. root としてリスナーを起動します。環境変数 ORACLE_HOME が \$ORACLE_HOME ディレクトリに設定されていることを確認します。オペレーティング・システムのプロンプトで、次のコマンドをオプションのコマンドライン引数とともに入力します。

```
tnslsnr [listener_es] [-user user] [-group group]
```

引数	説明
-user user	Oracle ソフトウェアを所有している UNIX アカунツの数値識別子。
-group group	Oracle 所有者が属する UNIX グループの数値識別子を指定します。

Oracle Email システムの起動

Oracle Email サービスを起動すると、IMAP4 や SMTP などのサービス・タイプを構成するすべてのプロセスが起動します。

Oracle Enterprise Manager を使用し、次の手順を実行して Oracle Email システムを起動します。

1. Oracle9i Application Server ホーム・ページに移動します。
2. 「Unified Messaging」を選択します。
3. 「起動」をクリックします。

Oracle Email システムの停止

Oracle Email システムを停止すると、すべての Oracle Email プロセスの停止要求がオペレーティング・システムに送信されます。管理者が Oracle Email システムを停止する理由の 1 つは、サーバーのハードウェアやソフトウェアのアップグレードなど、システムのメンテナンスを実行するためです。特定の種類のアップグレードの実行中はプロセスを実行できません。

Oracle Enterprise Manager を使用し、次の手順を実行して Oracle Email システムを停止します。

1. Oracle9i Application Server ホーム・ページに移動します。
2. 「Unified Messaging」を選択します。
3. 「停止」をクリックします。

Oracle Email システムの再初期化

Oracle Email プロセスを再初期化すると、Oracle Internet Directory サーバーから動作設定を再ロードするようオペレーティング・システムに通知されます。プロセスの実行は停止しないため、ユーザーは引き続き中断なくサービスの提供を受けます。Oracle Email プロセス・パラメータが変更されるたびに、再初期化して変更を有効にする必要があります。

Oracle Enterprise Manager を使用し、次の手順を実行して Oracle Email プロセスを再初期化します。

1. Oracle9i Application Server ホーム・ページに移動します。
2. 「Unified Messaging」を選択します。
3. 「再起動」をクリックします。

パブリック・ユーザーの作成

Oracle Email を構成した後で、管理者は Oracle Delegated Administration Services を使用して Oracle Internet Directory にパブリック・ユーザー・アカウントを作成する必要があります。このアカウントを作成するには、`http://infrastructure_host:port_number/oiddas` に移動します。

このパブリック・ユーザーは、Webmail クライアント管理ツールを使用して作成される初期ユーザーに対応します。

関連項目： Oracle Delegated Administration Services の使用の詳細は、『Oracle Internet Directory アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

パブリック・ユーザーが作成された後で、`http://host_name:port_number/um/admin/UMAdminLogin.uix` に移動して初期ドメインおよびユーザーを作成します。

関連項目： 初期ドメインおよびユーザーの作成の詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Email の手動構成

この項では、`umconfig.sh` を実行せずに Oracle Email を手動で構成する方法を説明します。この方法は、Information Storage または Middle-Tier Server のコンピューティング資源を追加する必要があるときに特に役立ちます。

この項の内容は次のとおりです。

- [Webmail クライアントの手動構成](#)
- [Oracle Email Information Storage データベースの手動構成](#)
- [Oracle Email Middle-Tier の手動構成](#)

Webmail クライアントの手動構成

Webmail クライアントは、`umconfig.sh` を初めて実行する際に自動的に構成されます。ただし、`umconfig.sh` で提供されるグラフィカル・インタフェースを使用せずに、Oracle Email の構成全体を手動で実行している場合は、次のコマンドを入力して Webmail クライアントを構成します。

```
if [ -f $ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_UM/config/application.xml ] && [ ! -f $ORACLE_
HOME/j2ee/OC4J_UM/config/application.xml.pre_libmod ]
then
    $ORACLE_HOME/um/scripts/webmail_library_mods.sh $ORACLE_HOME
    $ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc type=oc4j gid=OC4J_UM
fi
```

Oracle Email Information Storage データベースの手動構成

`umconfig.sh` で提供されるグラフィカル・インタフェースを使用せずに、コマンドラインを使用して Oracle Email Information Storage データベースを構成する場合は、次のとおりに入力します。

```
%cd $ORACLE_HOME/oes/bin
%install_mailstore.sh connect_str \
%sys_password \
%system_passwd \
%CTXSYS_passwd \
%mail_store_SID \
```

```
%host_name \  
%port_number \  
%installation_name \  
%ORACLE_HOME \  
%es_mail_passwd \  
%umadmin_passwd \  
%oid_flag \  
%domain_name
```

次の表に、変数をリストし、それらの変数で予期される値を説明します。

変数	説明
connect_str	Information Store データベース接続文字列。
sys_password	ホスト・データベースの SYS パスワード。
system_passwd	ホスト・データベースの SYSTEM パスワード。
CTXSYS_passwd	Oracle Text アカountのパスワード。
mail_store_SID	Information Storage データベース SID。
host_name	Information Storage データベースのホスト名。
port_number	Information Storage データベースのポート番号。デフォルト値は 1521 です。
installation_name	インストールの名前。デフォルト値は UM_SYSTEM です。
ORACLE_HOME	Oracle ホームの指定。
es_mail_passwd	ES_MAIL データベース・ユーザーのパスワード。ES_MAIL のパスワードが入力されていない場合、デフォルトは es です。
umadmin_passwd	<p>UMADMIN は、Oracle Email のアプリケーション・サーバーのインストール時に Oracle Internet Directory サーバーで作成された管理者アカウントです。そのアカウントがディレクトリ内の特定の Oracle Email エントリを所有します。インストール後に、管理者は UMADMIN アカountを使用して管理ツールにログインし、初期 Oracle Email ユーザーを作成する必要があります。その後、システムおよびドメイン管理を他のユーザーに委譲できます。</p> <p>パスワードが入力されていない場合は、デフォルト値の welcome が Oracle Internet Directory およびデータベースに UMADMIN パスワードとして格納されます。</p>

変数	説明
<i>oid_flag</i>	<p>Oracle Email エントリが Oracle Internet Directory に作成された場合、値は 1 です。それ以外の場合、値は 0 です。</p> <p>Oracle Internet Directory Infrastructure が Oracle Email に対して構成されているかどうかを判断するには、中間層の ORACLE_HOME から次のコマンドを実行します。</p> <p>UNIX の場合：</p> <pre>rm \$ORACLE_HOME/oes/log/exists.txt java -classpath \$ORACLE_HOME/jlib/esinstall.jar:\$ORACLE_HOME/jlib /repository.jar:\$ORACLE_HOME/jlib/esldap.jar: \$ORACLE_HOME/jlib/jndi.jar:\$ORACLE_HOME/jlib/ldap.jar: \$ORACLE_HOME/jlib/providerutil.jar oracle.mail.install. ESDSInstallQuery \$ORACLE_HOME um_system.</pre> <p>この問合せを実行した後に、\$ORACLE_HOME/oes/log/exists.txt ファイルが存在するかどうかを確認します。存在する場合は <i>oid_flag</i> の値が 1 になり、存在しない場合は値が 0 になります。</p> <p>Windows の場合：</p> <pre>del %ORACLE_HOME%\oes\log\exists.txt java -classpath %ORACLE_HOME%\jlib\esinstall.jar;%ORACLE_HOME%\jlib \repository.jar;%ORACLE_HOME%\jlib\esldap.jar; %ORACLE_HOME%\jlib\jndi.jar;%ORACLE_HOME%\jlib \ldap.jar;%ORACLE_HOME%\jlib\providerutil.jar oracle.mail.install.ESDSInstallQuery %ORACLE_HOME% um_system.</pre> <p>この問合せを実行した後に、%ORACLE_HOME%\oes\log\exists.txt ファイルが存在するかどうかを確認します。ファイルが存在する場合、<i>oid_flag</i> 値は 1 で、存在しない場合は 0 です。</p>
<i>domain_name</i>	<p>最初の Information Store の追加時に作成されるデフォルト・ドメインの名前 (acme.com など)。これが最初の Information Store でない場合、ドメイン名は無視されます。</p> <p>注意：ドメインが存在する必要があります。</p>

注意： デフォルトの INSTALLATION_NAME は、UM_SYSTEM です。

Oracle Email Middle-Tier の手動構成

umconfig.sh で提供されるグラフィカル・インタフェースを使用せずに、コマンドラインを使用して Oracle Email Middle-Tier を構成する場合は、次のとおり入力します。

```
%cd $ORACLE_HOME/oes/bin
%install_middletier.sh connect_string \
%mail_store_SYSTEM_password
%installation_name \
%ORACLE_HOME \
%umadmin_passwd \
%OID_flag \
%global_db_name \
%domain_name \
%start_proc
```

次の表に、変数をリストし、それらの変数で予期される値を説明します。

変数	説明
connect_string	Information Storage データベース接続文字列。
mail_store_SYSTEM_password	Information Storage データベースの SYSTEM パスワード。
installation_name	インストールの名前。デフォルト値は UM_SYSTEM です。
ORACLE_HOME	Oracle ホームの指定。
umadmin_passwd	<p>UMADMIN は、Oracle Email のアプリケーション・サーバーのインストール時に Oracle Internet Directory サーバーで作成された管理者アカウントです。このアカウントがディレクトリ内の特定の Oracle Email エントリを所有します。インストール後に、管理者は UMADMIN アカウントを使用して管理ツールにログインし、初期 Oracle Email ユーザーを作成する必要があります。その後、システムおよびドメイン管理を他のユーザーに委譲できます。</p> <p>パスワードが入力されていない場合は、デフォルト値の welcome が Oracle Internet Directory およびデータベースに UMADMIN パスワードとして格納されます。</p>

変数	説明
<i>oid_flag</i>	<p>Oracle Email エントリが Oracle Internet Directory に作成された場合、値は 1 です。それ以外の場合、値は 0 です。</p> <p>Oracle Internet Directory Infrastructure が Oracle Email に対して構成されているかどうかを判断するには、中間層の ORACLE_HOME から次のコマンドを実行します。</p> <pre>rm \$ORACLE_HOME/oes/log/exists.txt java -classpath \$ORACLE_HOME/jlib/esinstall.jar:\$ORACLE_HOME/jlib /repository.jar:\$ORACLE_HOME/jlib/esldap.jar: \$ORACLE_HOME/jlib/jndi.jar:\$ORACLE_HOME/jlib/ldap.jar: \$ORACLE_HOME/jlib/providerutil.jar oracle.mail.install. ESDSInstallQuery \$ORACLE_HOME um_system.</pre> <p>この問合せを実行した後に、\$ORACLE_HOME/oes/log/exists.txt ファイルが存在するかどうかを確認します。存在する場合は <i>oid_flag</i> の値が 1 になり、存在しない場合は値が 0 になります。</p>
<i>global_db_name</i>	データベースのグローバル名。たとえば、acmedb.foo.acme.com などです。
<i>domain_name</i>	ローカル・ドメイン名。たとえば、acme.com などです。
<i>start_proc</i>	プロシージャを起動するかどうかを指定します。許容値は、0 および 1 です。

Oracle Files の構成

この章では、Oracle Files 構成のプロセスについて説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Files 構成プロセスの概要](#)
- [プロトコルの推奨構成](#)
- [Oracle Files の構成前のタスク](#)
- [Oracle Files の構成](#)
- [Oracle Files の非対話型構成](#)
- [Oracle Files ランタイムの設定](#)
- [構成後の追加タスク](#)

Oracle Files 構成プロセスの概要

Oracle Files を構成して実行するには、次の手順に従う必要があります。

1. Oracle Files Configuration Assistant を実行します。
12-10 ページの「[Oracle Files の構成](#)」を参照してください。
2. Oracle Files のプロセスを起動します。
12-35 ページの「[すべての必要なプロセスの起動](#)」を参照してください。
3. Oracle Files のサブスクライバを作成します。
12-37 ページの「[Oracle Files のサブスクライバの作成](#)」を参照してください。
4. orclquest（または既存の Oracle Internet Directory ユーザー）として Oracle Files にログインします。
12-41 ページの「[基本操作の検証](#)」を参照してください。

構成後のタスクの詳細は、12-35 ページの「[Oracle Files ランタイムの設定](#)」を参照してください。構成後の追加タスクの詳細は、12-42 ページの「[構成後の追加タスク](#)」を参照してください。

プロトコルの推奨構成

この項では、Oracle Files へのアクセスに使用するプロトコルのセキュリティについての考慮事項を説明します。

1. FTP および AFP プロトコルは、暗号化されていないユーザー・パスワードをネットワーク上に送信します。

この動作は、これらの業界標準プロトコルで定義されています。Oracle はこの動作を制御できないため、Oracle ソフトウェアの欠陥ではありません。この動作を受け入れないようにするサイトでは、FTP または AFP パスワードのセキュリティに問題が発生した場合にユーザーの Oracle9iAS Single Sign-On パスワードのセキュリティに問題が発生しないように、a) これらのプロトコルを無効にするか、b) これらのプロトコルに Oracle Files 固有のユーザー・パスワードが使用されるように Oracle Files を構成する必要があります。

Oracle Files 固有のパスワードを設定するには、Oracle Files の「パスワード・ユーザー設定」ページを使用します。詳細は、Oracle Files のオンライン・ヘルプを参照してください。

2. HTTP/DAV プロトコルでは、Basic（非暗号化）認証と Digest（暗号化）認証の両方を使用できます。

Basic 認証は、HTTP/DAV が SSL を使用していないかぎり、暗号化されていないユーザー・パスワードをネットワーク上に送信します。Apache 構成（Oracle Files 構成から別途実行されます）により、HTTP/DAV が SSL を使用するかどうかが決定されます。HTTP/DAV の Basic 認証の使用を考慮するサイトでは、SSL を使用するよう Apache を構成する必要があります。

3. HTTP/DAV、FTP、SMB、AFP、NTFS および NFS プロトコルは、デフォルトではネットワーク・チャネルを暗号化しません。

これらのプロトコルを使用して転送されたファイルは、インターセプトされる可能性があります。この動作は、これらのプロトコルで定義されています。Oracle はこの動作を制御できないため、Oracle ソフトウェアの欠陥ではありません。この動作を受け入れないようにするサイトでは、これらのプロトコルを無効にし、SSL が使用されるように Apache を構成する（HTTP/DAV のみ）必要があります。

4. Oracle9iAS Single Sign-On ではなく Oracle Files の Web ユーザー・インタフェースの HTML 形式を使用して認証を実行した場合は、Apache で SSL が使用されるように構成されていないかぎり、暗号化されていないパスワードがネットワーク上に送信されます。

5. Oracle Enterprise Manager を使用して Oracle Files を管理するには、HTML 形式を使用してユーザーを認証します。Oracle Enterprise Manager を SSL 用に構成していないかぎり、暗号化されていないパスワードがネットワーク上に送信されます。

6. デフォルトでは、JDBC は Oracle Files プロセスと Oracle9i データベース・サーバー間のネットワーク接続を暗号化しません。このため、転送されるパスワードとファイルはインターセプトされる可能性があります。a) Oracle Files を実行している中間層マシン（存在する場合）間のネットワーク接続を保護するか、b) Oracle Advanced Security を使用してこれらの接続を暗号化してください。

7. ユーザー認証に Oracle Internet Directory を使用するよう Oracle Files を構成する場合は、Oracle Files と Oracle Internet Directory 間の接続に SSL を使用するかどうかを管理者が選択する必要があります。SSL が使用されていない場合は、暗号化されていないパスワードが Oracle Files プロセスと Oracle Internet Directory の間のネットワーク接続上で送信されることがあります。a) Oracle Files と Oracle Internet Directory 間のネットワーク接続を保護するか、b) SSL を使用してください。

Oracle Files の構成前のタスク

Oracle Files をインストール・プロセスの一部として構成するように選択すると、Oracle Files Configuration Assistant が自動的に起動され、Oracle Files スキーマに使用される Oracle データベースを識別するプロセスおよびその他の様々な構成タスクが示されます。

Oracle Files を構成する前に、計画している配置に応じて、完了する必要がある構成前のタスクがいくつかあります。これらのタスクのいずれかを実行するには、Oracle Universal Installer で「Oracle Files」チェックボックスのチェックを外して Oracle Files Configuration Assistant の起動を停止するか、Oracle Files Configuration Assistant 起動時に起動を取り消します。

目的の構成前のタスクを実行した後で、Oracle Files Configuration Assistant を実行して Oracle Files を構成できます。Oracle Files Configuration Assistant を実行するには、次の場所から ifscs を実行します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/bin
```

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Files での Oracle Database 10g の使用](#)
- [カスタム表領域の作成（推奨）](#)
- [Real Applications Clusters データベースを使用するための Oracle Files の設定（オプション）](#)

表 12-1 に、推奨およびオプションの構成前のタスクをリストし、そのタスクが Oracle Files の配置に必要なかどうかの判断に役立つ情報を示します。

表 12-1 Oracle Files のオプションの構成前のタスク

オプションの構成前のタスク	目的
Oracle Files での Oracle Database 10g の使用 このタスクの手順は 12-6 ページから開始します。	Oracle Database 10g を使用する場合は、この構成前のタスクを実行する必要があります。 既存の Oracle Files 環境で Oracle Database 10g を使用する場合は、Oracle Collaboration Suite リリース 2 のパッチ・セット 1 (9.0.4.2.0) を適用する必要があります。詳細は、パッチ・セットのドキュメントを参照してください。
カスタム表領域の作成（推奨） このタスクの手順は 12-7 ページから開始します。	本番環境では、システムを構成する様々な表と索引のカスタム表領域を作成することをお薦めします。 カスタム表領域の作成を選択した場合は、Oracle Files を構成する前に作成する必要があります。Oracle Files を構成した後で作成したカスタム表領域は使用できません。

表 12-1 Oracle Files のオプションの構成前のタスク（続き）

オプションの構成前のタスク	目的
Real Applications Clusters データベースを使用するための Oracle Files の設定（オプション） このタスクの手順は 12-9 ページから開始します。	Oracle Files の初期配置で Real Application Clusters データベースを使用することがわかっている場合は、Oracle Files を構成する前にこの構成前のタスクを実行することをお薦めします。

表 12-2 に、Oracle Files の構成および使用法の追加情報を示します。

表 12-2 Oracle Files の構成および実行に関する重要情報

トピック	場所
Oracle Internet Directory でのユーザーの作成	12-39 ページの「 Oracle Internet Directory でのユーザーの作成 」
Oracle Files でのユーザーのプロビジョニング	12-39 ページの「 Oracle Internet Directory でのユーザーの作成 」および『Oracle Files 管理者ガイド』
Oracle Files と Oracle Workflow の統合	12-43 ページの「 Oracle Files と Oracle Workflow の統合（オプション） 」
Oracle Enterprise Manager に関連する Oracle Files 構成タスク	『Oracle Files 管理者ガイド』
Oracle Files のサイト管理者およびサブスクライバ管理者情報	12-37 ページの「 Oracle Files のサブスクライバの作成 」、『Oracle Files 管理者ガイド』および Oracle Files オンライン・ヘルプ
NFS サーバーの構成	『Oracle Files 管理者ガイド』
Oracle FileSync クライアントのインストール	『Oracle Files 管理者ガイド』
その他のクライアント・アクセス・パスおよびソフトウェア	『Oracle Files 管理者ガイド』
「Portal へ戻る」リンクの作成	12-51 ページの「 Oracle Files Web UI への「Portal へ戻る」リンクの追加（必須） 」

Oracle Files での Oracle Database 10g の使用

Oracle Files を新しくインストールし、Information Storage データベースに Oracle Database 10g を使用する場合は、次の手順を実行します。

注意： 既存の Oracle Files 環境で Oracle Database 10g を使用する場合は、Oracle Collaboration Suite リリース 2 のパッチ・セット 1 (9.0.4.2.0) を適用する必要があります。詳細は、パッチ・セットのドキュメントを参照してください。

1. Oracle Database 10g CD パックから Oracle Database 10g をインストールします。
2. Oracle Database 10g サーバーをインストールしたコンピュータで次の環境変数を設定します。
 - 次のパスを含むように LD_LIBRARY_PATH を設定します。
\$ORACLE_HOME/lib
 - 次のパスを含むように PATH を設定します。
\$ORACLE_HOME/ctx/bin
 - HP-UX PA-RISC プラットフォームに、次のパスを含むように SHLIB_PATH を設定します。
\$ORACLE_HOME/lib32:\$ORACLE_HOME/ctx/lib32
3. Oracle Database 10g サーバーをインストールしたコンピュータで、次のデータベース・パラメータが設定されていることを確認します。

表 12-3 必須データベース・パラメータ

パラメータ名	最小値
aq_tm_processes	1
java_pool_size	30MB
job_queue_processes	4
open_cursors	300
processes	100
session_max_open_files	50
shared_pool_size	50MB (52428800 バイト)

表 12-3 に示す値は、これらのパラメータの最小値です。これらの値は、配置に応じて増加する必要がある場合があります。

4. Oracle Database 10g サーバーをインストールしたコンピュータで、データベースおよびデータベース・リスナーを再起動します。
5. Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) の Middle Tier をインストールします。
6. Middle-Tier のインストール時に、構成のために Oracle Files コンポーネントは選択しないでください。

Oracle Files Configuration Assistant が表示された場合は、「取消」をクリックします。

7. Oracle Collaboration Suite リリース 2 のパッチ・セット 1 (9.0.4.2.0) を適用します。
詳細は、パッチ・セットのドキュメントを参照してください。
8. 次の場所から ifscs を実行して、Oracle Files を構成します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/bin
```

構成方法は、12-10 ページの「[Oracle Files の構成](#)」を参照してください。

カスタム表領域の作成（推奨）

Oracle Files 構成中に、すべてのスキーマ・オブジェクトを USERS 表領域とカスタム表領域のどちらに格納するかを選択する必要があります。本番環境では、USERS 表領域は最適ではありません。Oracle Files を構成する前に、システムを構成する様々な表と索引（[表 12-4](#)を参照）のカスタム表領域を作成することをお勧めします。

Oracle Files のカスタム表領域を作成するには、表領域をローカル管理表領域として作成することをお勧めします。

ローカル管理表領域は、ビットマップを使用してすべてのエクステンツ情報を表領域自体で追跡するため、スペース割当てが単純化され、管理が簡単になり、パフォーマンスが向上します。

ローカル管理表領域は Oracle8i 以上で使用可能であり、Oracle9i データベース・サーバーからは、エクステンツ管理のタイプが明示的に指定されているかどうかにかかわらず、ローカル管理は SYSTEM 以外のすべての永続表領域のデフォルトになります。

SQL 構文の例は次のとおりです。

```
CREATE TABLESPACE "tbspname"
  LOGGING
  DATAFILE '/data1/oradata/sidname/tbspname_01.dbf' SIZE 50M EXTENT
  MANAGEMENT LOCAL
```

この例では、EXTENT MANAGEMENT LOCAL 句はデフォルトですが、完全な構文はセグメント、エクステンツおよびその他のサイズ設定パラメータを指定する必要がないことを強調するために示されているため、この句は無関係です。

- ローカル管理カスタム表領域を作成する場合は、デフォルト・オプションをお勧めします。具体的には、ほぼすべての Oracle Files データが LOB として格納されますが、AUTO SEGMENT SPACE MANAGEMENT は LOB をサポートしないため、表領域の自動セグメント領域管理は指定しないでください。
- 実装に適したディスクの記憶域にカスタム表領域を作成します。詳細は、『Oracle9i データベース・パフォーマンス・チューニング・ガイドおよびリファレンス』を参照してください。

表 12-4 に、カスタム表領域の追加情報を示します。この表を使用して、作成するカスタム表領域の名前と詳細をメモできます。

表領域の作成およびローカル管理表領域の詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。

表 12-4 Oracle Files のカスタム表領域定義

表領域	説明（デフォルト・サイズ）	使用するカスタム表領域名
ブライマリ	ドキュメントのメタデータ、ユーザーとグループに関する情報およびその他の Oracle Files オブジェクト・データを格納します。(50MB)	
索引付けされていないメディア	Oracle Text により索引付けされていない、Zip ファイルなどのドキュメントの LOB データを格納します。(50MB)	
索引付けされたメディア	Oracle Text により索引付けされている、テキストや文書処理ファイルなどのドキュメントの LOB データを格納します。(50MB)	
interMedia メディア	Oracle interMedia により索引付けされている、イメージ、オーディオ、ビデオ・ファイルなどのドキュメントの LOB データを格納します。(50MB)	
Oracle Text 索引	Oracle Text トークン表を格納します。(50MB)	
Oracle Text キー・マップ	Oracle Text トークン表に対する索引を格納します。(50MB)	
Oracle Text データ	その他の Oracle Text 表を格納します。(150MB)	

Real Applications Clusters データベースを使用するための Oracle Files の設定 (オプション)

構成前または構成後のいつでも、Real Application Clusters データベースに対して Oracle Files を実行することを選択できます。

ただし、初期 Oracle Files 配置用の Real Application Clusters データベースを指すことがわかっている場合は、次の構成前の手順を実行して、Oracle Files 構成プロセス中に Real Application Clusters データベースを指定できます。完了する必要がある追加の構成後のタスクがあることに注意してください。

重要： Real Application Clusters を使用するには、Oracle Files の構成をターゲット Real Application Clusters 構成の特定のノードに対して実行する必要があります。Oracle Files 構成プロセス中はこのノードでロード・バランシングを無効にする必要があります。

1. Real Application Clusters データベースで次のシステム・パラメータを設定します。
`MAX_COMMIT_PROPAGATION_DELAY=`
2. `JOB_QUEUE_PROCESSES` パラメータの値が 10 以上に設定されていることを確認します。
3. Oracle Files で使用される各 Oracle ホームのロード・バランシングおよび接続フェイルオーバー・オプションについて、TNS エントリを `tnsnames.ora` ファイルに作成します。これらのオプションの TNS エントリの作成の詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters 管理』を参照してください。
4. Oracle Files を構成し、Oracle Files Configuration Assistant の「データベースの選択」画面で Real Application Clusters データベースの名前を指定します。
5. 必要な構成後の手順を実行します。

詳細は、12-51 ページの「[Real Application Clusters データベースとともに Oracle Files を使用するための構成後の手順 \(オプション\)](#)」を参照してください。

Oracle Files の構成

Oracle Files Configuration Assistant は、Oracle Universal Installer によって自動的に起動され、表 12-5 に示す構成オプションを示します。Oracle Files Configuration Assistant は、常に、「Oracle Files CA - ようこそ」画面から開始します。

Oracle Files Configuration Assistant を使用して、各画面で選択を行い、「次へ」をクリックして続行します。後で Oracle Files を構成するには、「取消」をクリックして Configuration Assistant を停止した後、次の場所から ifsca スクリプトを実行して Configuration Assistant を実行します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/bin
```

表 12-5 に、実行できる構成のタイプを説明します。

表 12-5 Configuration Assistant のオプション

構成タイプ	説明	関連項目
新しい Oracle Files ドメインの作成	データベースに新しい Oracle Files スキーマを作成します。コンピュータを ドメイン の中間層として含めるために必要なソフトウェアを構成します (オプション)。	12-11 ページの「新しい Oracle Files ドメインの作成」
既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定	既存のドメインと統合するために、システム上に Oracle Files ソフトウェアを構成します。 次の場合、このオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none">■ 中間層を追加する場合。■ Oracle Files スキーマを Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) へアップグレードする場合。	12-30 ページの「既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定」

Oracle Files Configuration Assistant の処理過程を監視するために、次のファイルに書き込まれるログを表示できます。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/log/FilesConfig.log
```

新しい Oracle Files ドメインの作成

この項では、Oracle Files ドメインのコントローラ・コンピュータを構成する手順を示します。通常、このコンピュータは、構成するドメイン内の最初のコンピュータです。

手順は Oracle Files Configuration Assistant の「ようこそ」画面から開始します。

1. 「次へ」をクリックします。
「ドメイン操作」画面が表示されます。

図 12-1 「ドメイン操作」画面




2. 「新規 Oracle Files ドメインの作成」オプションを選択します。

重要： Oracle Files スキーマを Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) にアップグレードする場合は、「ドメイン操作」画面で「**既存の Oracle Files ドメインを使用するように設定**」を選択し、12-30 ページの「**既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定**」の手順を参照する必要があります。

3. 「次へ」をクリックします。
「データベースの選択」画面が表示されます。

図 12-2 「データベースの選択」画面



Oracle Files CA - ステップ2/16: データベースの選択

Oracle Files ドメイン用にOracleデータベースを選択します。

データベース・ホスト名: acme.us.oracle.com

リスナー・ポート番号: 1521

データベース・サービス名: acme9i

データベース・ユーザーSYSのパスワード: *****

取消 < 戻る(B) 次へ(N) > 構成

4. データベースが実行されているホストの名前、リスナーのポート番号、データベース・サービス名およびデータベースの SYS ユーザー・アカウントのパスワードを入力します。

注意： データベース・サービス名は、リスナー・コンピュータに登録する必要があります。登録するサービスを判断するには、データベース・サーバー上で `lsnrctl status` コマンドを使用します。

5. 「次へ」をクリックします。

「データベース・ログインの検証」メッセージ・ボックスが表示され、CLASSPATH、Oracle9i データベースへのデータベース接続、初期化パラメータ、Oracle JServer のインストールおよびその他の重要な要件が検証されます。

エラーが発生した場合は（たとえば、JServer がデータベースにインストールされていない場合は、DBMS_JAVA パッケージに関連するエラー・メッセージが表示されます）、Oracle Files 構成プロセスを取り消し、エラーを修正した後で、次の場所から ifscs を実行することにより Oracle Files Configuration Assistant を再起動する必要があります。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/bin
```

Oracle Files Configuration Assistant はデータベース文字列を使用して SYS AS SYSDBA として接続の確立を試行するため、データベースがパスワード・ファイルを使用して構成されている必要があります。次のエラー・メッセージが表示される場合は、データベース・サーバーにパスワード・ファイルがない可能性があります。

```
Invalid password for Oracle user SYS
```

関連項目： パスワード・ファイルの管理の詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。

さらにエラーが発生する場合、検証に失敗した原因の詳細を次の場所にある FilesConfig.log ファイルで確認できます。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/log/FilesConfig.log
```

検証プロセスが完了すると、「スキーマ名」画面が表示されます。

図 12-3 「スキーマ名」画面

6. Oracle Files スキーマに使用する名前を入力します。さらに、スキーマのパスワードを指定する必要があります。確認のため 2 つのフィールドにパスワードを入力します。
7. 「次へ」をクリックします。

Oracle Files Configuration Assistant により、このスキーマ名がデータベースに存在するかどうかを確認されます。このスキーマ名が存在する場合、またはこのスキーマ名に基づく関連スキーマ名が存在する場合は、さらに明確化を要求するメッセージ・ボックスが表示されます。

8. このメッセージ・ボックスで、次のいずれかの操作を実行します。
 - 「スキーマ名」画面に戻り、スキーマの新しい名前を入力するには、「いいえ」をクリックします。
 - このスキーマ、および表やビューなどの関連するすべてのオブジェクトをデータベースから削除して新しいスキーマを作成する場合は、「はい」をクリックします。

注意： このスキーマ、および関連するすべてのオブジェクトをデータベースから削除して新しいスキーマを作成する必要がある場合以外は、「はい」をクリックしないでください。Oracle Files をアップグレードする場合は、Configuration Assistant を終了し ocsua を実行します。12-30 ページの「既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定」の手順に従います。

メッセージ・ボックスを閉じると「表領域」画面が表示されます。

図 12-4 「表領域」画面



9. 次のいずれかのオプションを選択します。

- Oracle Files のコンテンツ用に作成されたカスタム表領域が存在しない場合は、「すべての Oracle Files データに USERS 表領域を使用」を選択します。

重要： 本番システムを構成している場合は、Oracle Files のカスタム表領域を作成することをお勧めします。カスタム表領域は、構成前の手順として作成します。詳細は、12-7 ページの「[カスタム表領域の作成（推奨）](#)」を参照してください。

- Oracle Files コンテンツ専用で作成された表領域が存在する場合、「各データ・タイプの表領域を指定：」を選択し、ドロップダウン・リストから各コンテンツのタイプに使用する表領域を選択します。各データ・タイプ用に選択できる表領域が存在している必要があります。Oracle Files Configuration Assistant では表領域は作成されません。

10. 「次へ」をクリックします。「キャラクタ・セットおよび言語」画面が表示されます。

図 12-5 「キャラクタ・セットおよび言語」画面



11. Oracle Files にドキュメントを格納する際に使用するデフォルトのキャラクタ・セットおよび索引付け言語を選択します。ドキュメントのキャラクタ・セットのデフォルトは、Oracle Files に転送されるドキュメントの言語またはキャラクタ・セットを指定しないクライアント・アプリケーションにより使用されます。デフォルトのキャラクタ・セットは、FTP や WebDAV などの、Unicode 対応ではないプロトコルでも、これらのプロトコル・サーバーで使用するキャラクタ・セットを判別するために使用されます。

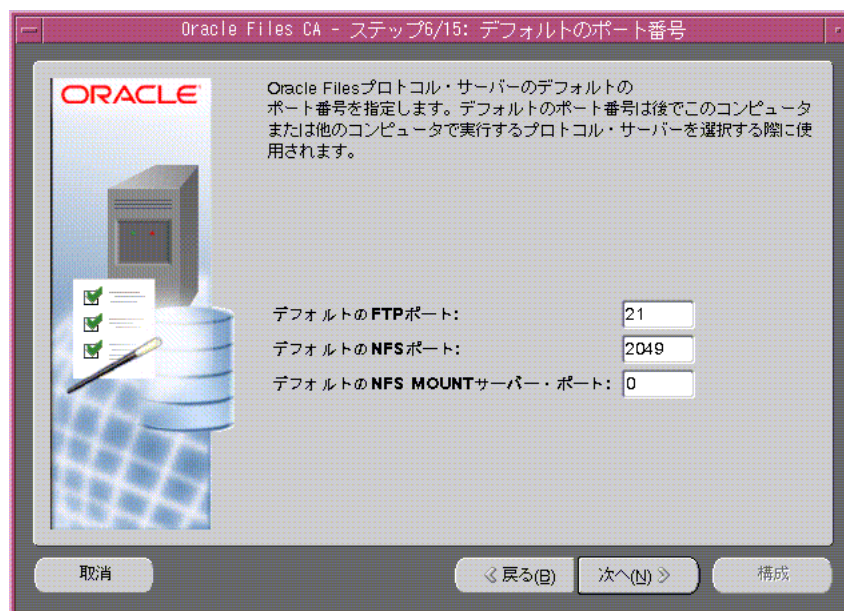
キャラクタ・セットは、Oracle Files ドメインのユーザーの大多数が使用しているキャラクタ・セットに設定することをお勧めします。

関連項目： 詳細は、『Oracle Text リファレンス』の「レクサー型」を参照してください。

12. 「次へ」をクリックします。

「デフォルトのポート番号」画面が表示されます。デフォルトのポート番号の設定は、Oracle Files スキーマを使用するすべての中間層コンピュータにより使用されるオブジェクトとして格納されます。Oracle Files の構成後に単一の中間層コンピュータ上で構成を変更するには、Enterprise Manager Web Site を使用する必要があります。

図 12-6 「デフォルトのポート番号」画面



13. 必要に応じて、ポート番号を変更します。

- このコンピュータに指定されている特定のプロトコル・サーバーのネイティブ UNIX バージョンと Oracle Files バージョンの両方を実行するには、ポート番号を変更して、競合を回避する必要があります。ポート番号を変更した場合は、ドメインのすべての中間層に新しいポート番号が使用されます。
- NFS プロトコル・サーバーのメイン・ポートを変更する場合は、MOUNT サーバー・ポートを 0 以外の番号に変更する必要があります。0 という値は、MOUNT サーバー・ポートの番号がポート・マッパーにより動的に割り当てられる必要があることを示すため、NFS プロトコル・サーバーが標準の NFS ポート番号である 2049 上に存在する場合のみに使用する必要があります。

関連項目： NFS プロトコル・サーバーの設定の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

- ネイティブ UNIX によるサービスの実装を実行しない場合、デフォルトのポート番号を使用できます。ただし、デフォルトのポート番号を受け入れる場合は、ポートの競合を回避するためにネイティブ UNIX サービスを停止する必要があります。

注意： AIX、HP-UX PA-RISC (64-bit) および Compaq Tru64 プラットフォーム上で実行している NFS クライアントに Oracle Files の NFS サポートを提供するには、Oracle Files にポート 2049 (デフォルト) を使用し、ネイティブ UNIX の NFS プロトコル・サーバーを無効にする必要があります。Linux x86 および Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) 上で実行している NFS クライアントにはこの制限が適用されないため、これらのクライアントの場合、同じコンピュータ上で UNIX の NFS プロトコル・サーバーと Oracle Files の NFS プロトコル・サーバーの両方を使用できます。

14. 「次へ」をクリックします。
- 「Web サイト情報」画面が表示されます。

図 12-7 「Web サイト情報」画面

Oracle Files CA - ステップ7/15: Webサイト情報

このドメインが提供するWebサイトに関連する情報を入力してください。このWebサイトは、このドメインへのHTTPアクセスのエントリ・ポイントです。ホスト名は完全修飾名で入力します。

ORACLE

- ☒ [Item 1]
- ☒ [Item 2]
- ☒ [Item 3]

HTTPホスト名:

HTTPポート: ☐ SSLの使用

取消 < 戻る(B) 次へ(N) > 構成

15. 次の情報を入力します。

- **HTTP ホスト名** : ドメインによる HTTP リスナー・サービスの提供に使用するコンピュータの完全修飾されたホスト名およびポート番号を入力します。この情報は、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール時に入力した値と一致している必要があります。
- **HTTP ポート** : HTTP ポートの値を入力します。使用するポート番号が不明な場合は、アプリケーション・サーバー・コントロールの「Application Server」ホーム・ページに移動し、「Ports」タブをクリックします。

次に例を示します。

- 4443: SSL を構成し、Oracle9iAS Web Cache を使用しない場合は、この値を入力します。
 - 4444: SSL を構成し、Oracle9iAS Web Cache を使用する場合は、この値を入力します。
 - 7777: SSL を構成せず、Oracle9iAS Web Cache を使用しない場合は、この値を入力します。
 - 7778: SSL を構成せず、Oracle9iAS Web Cache を使用する場合は、この値を入力します。
- **SSL の使用** : コンピュータ上に SSL が構成されている場合にのみ選択します。

注意 : 中間層の前にロード・バランサがある場合は、ホスト名とポート番号がロード・バランサのホスト名およびポート番号と一致している必要があります。

関連項目 : SSL の使用の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』および『Oracle9i Application Server セキュリティ・ガイド』を参照してください。

16. 「次へ」をクリックします。
「SMTP 情報」画面が表示されます。

図 12-8 「SMTP 情報」画面



17. 電子メール・サーバー情報を入力します。これには、任意の有効な SMTP サーバー名を使用できます。SMTP サーバーのホスト名を、`hostname.domain` の形式で入力します。または、SMTP サーバーの IP アドレスを入力します。

この情報は、サブスクライバ管理者にパスワードに関する電子メールを送信し、ユーザーに Oracle Files アカウント・プロビジョニングに関する電子メールを送信する場合に使用されます。

重要： サブスクライバ管理者がパスワードを受信し、アカウントがプロビジョニングされた際にユーザーが通知を受けるためには、この情報が適切である必要があります。情報が正しくない場合、サブスクライバ管理者は Oracle Files にログインできず、ユーザーはアカウントがプロビジョニングされたことを知るできません。

注意： Oracle Files を構成した後この情報を変更する場合は、次の処理を行う必要があります。

- Oracle Enterprise Manager を介して
FilesBaseServerConfiguration サーバー構成オブジェクトの
IFS.SERVER.APPLICATION.UIX.Smtphost プロパティを編集しま
す。OC4J_iFS_files インスタンスを再起動する必要があります。
 - 「サブスクリバ名」 ページでパスワードを再設定します（詳細は、
12-37 ページの「[Oracle Files のサブスクリバの作成](#)」を参照してく
ださい）。
-

18. 「次へ」をクリックします。

「管理者情報」画面が表示されます。

図 12-9 「管理者情報」画面



19. 通知やその他のメッセージを Oracle Files の `site_admin` ユーザーに送信するために使用する完全修飾電子メール・アドレスを入力します。
20. 「次へ」をクリックします。

「ユーザー」画面が表示されます。Oracle Files Configuration Assistant は、`system`、`guest` および `site_admin` の 3 つの新規ユーザーを作成します。サイト管理者は、Oracle Files にサブスクライバを作成するために使用されます。

図 12-10 「ユーザー」画面

Filesユーザー	パスワード
System	<input type="password"/>
パスワードの確認	<input type="password"/>
Guest	<input type="password"/>
パスワードの確認	<input type="password"/>
site_admin	<input type="password"/>
パスワードの確認	<input type="password"/>

21. それぞれのデフォルト・ユーザーにパスワードを割り当てます。

`site_admin` ユーザーは、構成後の Oracle Files サブスクライバの作成に必要です。

22. 「次へ」をクリックします。

Oracle Internet Directory の「ログイン」画面が表示されます。

図 12-11 Oracle Internet Directory の「ログイン」画面

Oracle Files CA - ステップ11/15: OIDログイン

Oracle Filesは、ディレクトリ・サービスを使用してOracle Filesユーザーのパスワードを格納し、ユーザー認証を行います。この構成の一部として、Oracle Filesディレクトリ・サービスとOracle Internet Directory(OID)が作成されます。Oracle Filesの資格証明マネージャとして構成するOIDサーバーのログイン情報を入力してください。

サーバー:

ポート: ☐ SSLの使用

スーパー・ユーザー:

スーパー・ユーザー・パスワード:

ルート Oracle コンテキスト:

取消 < 戻る(B) 次へ(N) > 構成

23. 資格証明の管理に使用する Oracle Internet Directory インスタンスに関するログイン情報を入力します。次の情報を入力します。

- **サーバー** : Oracle Internet Directory を実行するコンピュータの完全修飾**ホスト名**を入力します。
- **ポート** : Oracle Internet Directory サーバーがリスニングしているポート番号を入力します。
 - 通常、ポート番号は 389 です。インストール時にポート 389 が使用不可の場合は、ポート 4032 が使用されます。
 - Oracle Internet Directory 上で SSL を有効にしている場合は、「**SSL の使用**」を選択し、ポート番号を変更します。通常、SSL 対応の Oracle Internet Directory のポート番号は、636 または 4031 です。

関連項目 : SSL とともに使用するための Oracle Internet Directory の設定の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』および『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

- **スーパー・ユーザー** : Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー名を入力します。
Oracle Internet Directory のデフォルトのスーパー・ユーザー名は、`cn=orcladmin` です。
- **スーパー・ユーザー・パスワード** : Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー・パスワードを入力します。
このパスワードは、Oracle Internet Directory のインストール時に作成されたものです。
- **ルート Oracle コンテキスト** : ルート **Oracle コンテキスト**を入力します。
Oracle Internet Directory のデフォルトのルート Oracle コンテキストは、`cn=OracleContext` に設定されます。通常、設定を変更する必要はありません。Oracle Internet Directory の管理者がルート・コンテキストを変更している場合は、正しい値を入力する必要があります。ルート・コンテキストの概念は、LDAP ディレクトリ・サービス固有のものです。

24. 「次へ」をクリックします。

「ローカル・マシンの設定」画面が表示されます。

図 12-12 「ローカル・マシンの設定」画面



25. 次のいずれかのオプションを選択します。

- 「はい」を選択して Oracle Files スキーマを作成し、ドメイン・コントローラ、ノードまたは HTTP ノードを実行するようこのホストを構成します。
- 「いいえ」を選択し、このホストを構成せずに新規スキーマを作成します。

26. 「次へ」をクリックします。

「ドメインのコンポーネント」画面が表示されます。

図 12-13 「ドメインのコンポーネント」画面



27. Oracle Files に使用する完全修飾ホスト名を入力します。コンピュータに複数のネットワーク・インタフェース・カード (NIC) が取り付けられている場合は、ホスト・コンピュータの IP アドレスを入力します。

28. 「このコンピュータでドメイン・コントローラを実行」 およびドメインに構成する他のすべてのプロセスを選択します。デフォルトでは、次のプロセスがこの画面で選択されています。
- 「このコンピュータでドメイン・コントローラを実行」をチェックすると、Oracle Files ドメイン・コントローラ・プロセスが構成されます。このプロセスは、1 つのコンピュータのみで実行する必要があります。
 - 「このコンピュータでノードを実行」をチェックすると、このコンピュータ上で実行するよう Oracle Files ノードが構成されます。プロトコル・サーバーとエージェントはこのノードで実行されます。
 - 「このコンピュータで HTTP ノードを実行」をチェックすると、このコンピュータ上で HTTP および WebDAV アクセス用の Oracle Files DAV サーバーを実行するよう HTTP ノードが構成されます。
29. 「次へ」をクリックします。
- 「ノード構成」画面が表示されます。

図 12-14 「ノード構成」画面



この画面には、ドメイン内で実行するために選択可能なすべてのプロトコル・サーバーおよびエージェントが表示されます。

- 「**ノード名**」は、ノードを識別する名前です。たとえば、ノード名にはコンピュータの名前（ホスト名）を含めることができます。名前はこのドメイン上のすべてのノードにわたって一意である必要があります。
- 「**Oracle Files エージェントを実行**」をチェックすると、すべての Oracle Files システム・エージェントがこのコンピュータ上で実行されるように構成されます。エージェントはドメイン内の 1 つのノード上のみで実行されることに注意してください。エージェントが別のノードで実行されるように構成されている場合、このチェックボックスのチェックを外す必要があります。
- 「**プロトコル・サーバーを実行**」をチェックすると、Oracle Files プロトコル・サーバーがこのコンピュータ上で実行されるように構成されます。プロトコル・サーバーには、FTP、AFP、NFS および SMB が含まれます。

関連項目：『Oracle Files 管理者ガイド』の第 1 章「Oracle Files の概要」を参照してください。

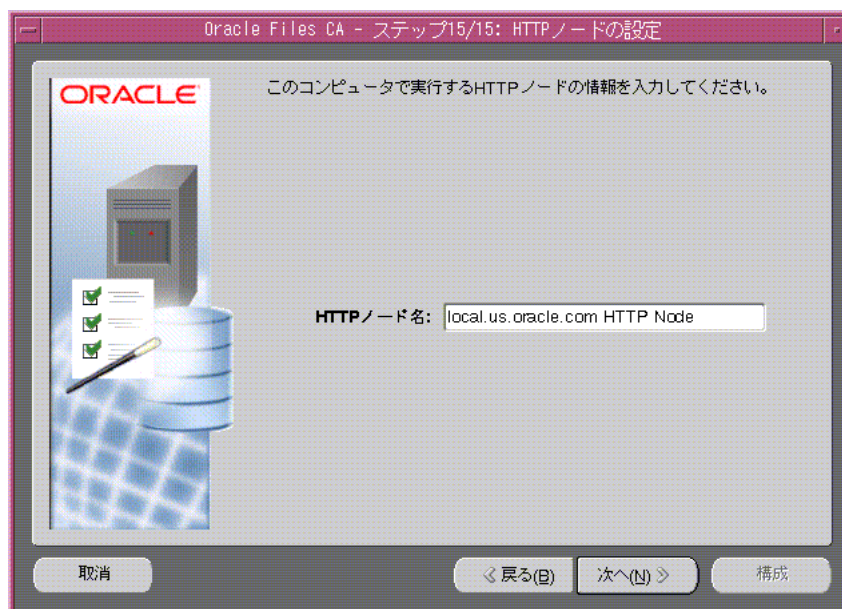
30. ノード名を入力し、プロトコル・サーバーとエージェントを必要に応じて構成します。

31. 「次へ」をクリックします。

「ドメインのコンポーネント」画面で「このコンピュータで HTTP ノードを実行」をチェックした場合、「HTTP ノードの設定」画面が表示されます。この画面では、HTTP ノードを識別する名前を指定できます。手順 32 に進みます。

それ以外の場合は、「サマリー」画面が表示されます。手順 34 に進みます。

図 12-15 「HTTP ノードの設定」画面



32. HTTP ノードの名前を入力します。

- 「HTTP ノード名」は、HTTP ノードを識別する名前です。ノード名にはコンピュータの名前（ホスト名）を含めることができますが、必須ではありません。名前はこのドメイン上のすべてのノードにわたって一意である必要があります。

33. 「次へ」をクリックします。

「サマリー」画面が表示されます。この時点で、Oracle Files Configuration Assistant は、新しい Oracle Files スキーマを作成し、ノードおよびその他のプロセスを構成するために必要なすべての情報が設定されています。ログ・ファイルの名前と場所、およびこの画面に表示されるその他の重要な情報を確認してください。

34. 「構成」をクリックして、構成プロセスを実行します。

進捗ウィンドウが表示されます。エラーが発生した場合、次のログ・ファイルで詳細を確認します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/log/FilesConfig.log
```

プロセスが完了すると、構成が正常に終了したことを示すメッセージが表示されます。「OK」をクリックしてメッセージを閉じます。Oracle Files と Oracle Enterprise Manager Web Site が自動的に統合されます。

Oracle Files Configuration Assistant が Oracle Universal Installer によって起動された場合は、他のすべての構成ツールが実行されます。

既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定

この項では、既存のドメインを使用するようにコンピュータを設定するプロセスを示します。これらの手順は、Oracle Files スキーマを Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) にアップグレードする場合、または既存の Oracle Files ドメインに Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を追加する場合に実行します。

手順は Oracle Files Configuration Assistant の「ようこそ」画面から開始します。

1. 「次へ」をクリックして、構成プロセスを開始します。

「ドメイン操作」画面が表示されます。

2. 「既存の Oracle Files ドメインを使用するように設定」オプションを選択し、「次へ」をクリックします。

「データベースの選択」画面が表示されます。

3. データベースが実行されているホストの名前（データベース・ホスト名）、リスナーのポート番号、データベース・サービス名およびデータベースの sys ユーザー・アカウントのパスワードを入力します。

注意： データベース・サービス名は、リスナー・コンピュータに登録する必要があります。登録するサービスを判断するには、データベース・サーバー上で `lsnrctl status` コマンドを使用します。

4. 「次へ」をクリックします。

「データベース・ログインの検証」メッセージ・ボックスが表示され、CLASSPATH、Oracle データベースへのデータベース接続、初期化パラメータ、Oracle JServer のインストールおよびその他の重要な要件が検証されます。

エラーが発生した場合、構成を続行するには問題を修正する必要があります。たとえば、データベースに **Oracle JVM** がインストールされていない場合、**DBMS_JAVA** パッケージに関連するエラー・メッセージが表示されます。

さらにエラーが発生する場合、検証に失敗した原因の詳細を次の場所にある **FilesConfig.log** ファイルで確認できます。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/log/FilesConfig.log
```

検証プロセスが完了すると、「スキーマ名」画面が表示されます。

5. 既存の Oracle Files ドメインのスキーマ名をリストから選択し、スキーマ・パスワードを入力します。

重要： Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の既存の Oracle Files スキーマの名前を選択し、このスキーマを Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) にアップグレードしていない場合は、ダイアログ・ボックスに次のテキストが表示されます。

「Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Files のスキーマが選択されています。このスキーマに対して Oracle Files を構成するためには、その前に Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の Files スキーマにアップグレードする必要があります。アップグレードするには、構成処理を中止して Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant を実行します。Oracle Files Configuration Assistant で新規スキーマ情報を入力して、他のスキーマを選択することもできます。」

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) への Oracle Files スキーマのアップグレード手順は、3-31 ページの「[Oracle Files アップグレード後のタスク](#)」を参照してください。

6. 「次へ」をクリックします。

データベース接続とスキーマの確認後、「ドメインのコンポーネント」画面が表示されます。

7. Oracle Files に使用するホスト名を入力します。コンピュータに複数のネットワーク・インタフェース・カード (NIC) が取り付けられている場合は、ホスト・コンピュータの IP アドレスを入力します。

8. このコンピュータ上で実行するように構成するプロセスを選択します。デフォルトでは、次のプロセスが選択されています。
 - 「このコンピュータでドメイン・コントローラを実行」をチェックすると、Oracle Files ドメイン・コントローラ・プロセスが構成されます。このプロセスは、1 つのコンピュータのみで実行する必要があります。既存のスキーマを再利用するには、このチェックボックスのチェックを外します。別のノードでドメイン・コントローラがすでに実行されている場合は、ドメイン・コントローラをこの中間層に移動する場合にのみ、このチェックボックスをチェックしたままにします。
 - 「このコンピュータでノードを実行」をチェックすると、このコンピュータ上で実行するよう Oracle Files ノードが構成されます。このオプションは、この中間層でプロトコル・サーバーまたはエージェントを実行する場合にのみ選択します。
 - 「このコンピュータで HTTP ノードを実行」をチェックすると、このコンピュータ上で HTTP および WebDAV アクセス用の Oracle Files DAV サーバーを実行するよう HTTP ノードが構成されます。
9. 「次へ」をクリックします。
 「ノード構成」画面が表示されます。
 「ノード構成」画面には、ドメイン内で実行するために選択可能なすべてのプロトコル・サーバーおよびエージェントが表示されます。
 - 「ノード名」は、ノードを識別する名前です。ノード名にはコンピュータの名前（ホスト名）を含めることができますが、必須ではありません。ユーザーが識別可能な任意の文字列を使用します。
 - 「Oracle Files エージェントを実行」をチェックすると、すべての Oracle Files システム・エージェントがこのコンピュータ上で実行されるように構成されます。エージェントはドメイン内の 1 つのノード上のみで実行されることに注意してください。エージェントが別のノードで実行されるように構成されている場合、このチェックボックスのチェックを外す必要があります。このボックスがチェックされている場合は、他のノードで実行されているエージェントが非アクティブになり、このノードで有効になります。既存の Oracle Files をアップグレードする場合は、このチェックボックスのチェックを外す必要があります。
 - 「プロトコル・サーバーを実行」をチェックすると、Oracle Files プロトコル・サーバーがこのコンピュータ上で実行されるように構成されます。プロトコル・サーバーには、FTP、AFP、NFS および SMB が含まれます。

関連項目：『Oracle Files 管理者ガイド』の第 1 章「Oracle Files の概要」を参照してください。
10. ノード名を入力し、プロトコル・サーバーとエージェントを必要に応じて構成します。

11. 「次へ」をクリックします。

「ドメインのコンポーネント」画面で「このコンピュータで HTTP ノードを実行」をチェックした場合、「HTTP ノードの設定」画面が表示されます。この画面では、HTTP ノードを識別する名前を指定できます。手順 12 に進みます。

それ以外の場合は、「サマリー」画面が表示されます。手順 14 に進みます。

12. HTTP ノードの名前を入力します。

「HTTP ノード名」は、HTTP ノードを識別する名前です。ノード名にはコンピュータの名前（ホスト名）を含めることができますが、必須ではありません。ユーザーが識別可能な任意の文字列を使用します。

13. 「次へ」をクリックします。

「サマリー」画面が表示されます。この時点で、Oracle Files Configuration Assistant には、コンピュータの構成に必要なすべての情報が含まれています。ログ・ファイルの名前と場所、およびこの画面に表示されるその他の重要な情報を確認してください。

14. 「構成」をクリックして、構成プロセスを実行します。

進捗ウィンドウが表示されます。エラーが発生した場合、次のログ・ファイルで詳細を確認します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/log/FilesConfig.log
```

15. プロセスが完了すると、初期構成が正常に終了したことを示すメッセージが表示されます。「OK」をクリックしてメッセージを閉じます。

Oracle Files Configuration Assistant が Oracle Universal Installer により起動された場合は、他の構成ツールが起動します。

注意： 以前に作成したスキーマを再利用するように Oracle Files を構成した後で、「このコンピュータでドメイン・コントローラを実行」を選択しない場合は、ドメイン・コントローラ・プロセスを実行している適切なコンピュータを指すように、Oracle Files ベース・サーバーの次の構成プロパティを編集する必要があります。

```
IFS.SERVER.APPLICATION.UIX.ApplicationHost  
IFS.SERVER.APPLICATION.UIX.ApplicationPort
```

また、サーバー固有の構成でこれらのプロパティをオーバーライドできます。

Oracle Files の非対話型構成

すべての構成の設定を含むレスポンス・ファイルをコマンドラインでパラメータとして Oracle Files Configuration Assistant に渡すことにより、Oracle Files ドメインを非対話型に構成できます。レスポンス・ファイルの場所は次のようになります。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/settings/silentconfig.properties
```

レスポンス・ファイルには、このファイルを変更および使用する方法に関する説明が含まれます。このレスポンス・ファイルを、ユーザー固有の要件を満たすように変更します。

1. テキスト・エディタで `silentconfig.properties` ファイルを開きます。
2. ファイルの設定に必要な変更を加え、変更が終了した後で、ファイルを閉じます。

ファイル自体に、このファイルを変更および使用する方法に関する説明が含まれます。このレスポンス・ファイルを、ユーザー固有の要件を満たすように変更します。たとえば、既存のインスタンスで動作するように追加の中間層マシンをインストールおよび構成する場合は、スキーマの名前を指定するか、またはドメイン・コントローラの実行オプションを無効にできます。

3. 次の 2 つのコマンドを入力することにより、変更したレスポンス・ファイルを使用して Oracle Files Configuration Assistant を実行します。

```
cd $ORACLE_HOME/ifs/files/bin
```

```
./ifscs -file $ORACLE_HOME/ifs/files/settings/silentconfig.properties -silent
```

レスポンス・ファイルに定義された仕様に従って、コンピュータ上に Oracle Files が構成されます。エラーが発生した場合、次のログ・ファイルで詳細を確認します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/log/FilesConfig.log
```

注意： レスポンス・ファイルには、パスワードなどの機密情報が含まれます。レスポンス・ファイルを使用して Oracle Files を構成した後で、ファイルからパスワード情報をすべて削除する必要があります。

Oracle Files ランタイムの設定

次のタスクを実行して、ランタイム用に Oracle Files を設定し、システムが稼働しており安全な状態であることを確認します。

- [すべての必要なプロセスの起動](#)
- [Oracle Files のサブスクリプの作成](#)
- [Oracle Internet Directory でのユーザーの作成](#)
- [プロトコル・サーバーへのアクセス](#)
- [基本操作の検証](#)

すべての必要なプロセスの起動

この項の手順は、Oracle Files がインストールおよび構成されており、データベースおよびリスナーが実行されていることを前提としています。

Oracle Files は、Oracle Collaboration Suite Infrastructure の Oracle9iAS Containers for J2EE (OC4J) コンポーネントを使用して、構成プロセス中に OC4J に自動的に配置される DAV Servlet をサポートします。

1. 次のコマンドを使用して、Oracle Enterprise Manager Web Site が稼働していることを確認します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl status
```

2. サーバー・コンピュータ上の Web ブラウザまたはネットワーク上の別のコンピュータから、Oracle Files ドメイン・コントローラが構成されているコンピュータ上の Oracle Enterprise Manager Web Site に接続する URL にアクセスします。

```
http://hostname:port
```

hostname には完全修飾ドメイン名を指定する必要があります。*port* は、通常 1810 です。

「ユーザー名とパスワードの入力」または「ネットワーク パスワードの入力」というプロンプトが表示されます。

3. ユーザー名として *ias_admin* を入力し、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の適切なパスワードを入力します。

Web ページに、指定したホスト上で実行されているすべての Oracle Collaboration Suite Infrastructure コンポーネント（ターゲット）と、すべての Oracle Collaboration Suite 関連 Middle-Tier のリストが表示されます。

4. Oracle Files ソフトウェアをホスティングしている Oracle Collaboration Suite インスタンスの名前をクリックします。Oracle Collaboration Suite インスタンスのユーザー名およびパスワードの入力を再び求められた場合は、ias_admin および適切なパスワードを入力して続行します。

「Application Server」ページに、インスタンス上で実行しているすべてのシステム・コンポーネントが表示されます。リストには Oracle Files ドメインが含まれている必要があります。このドメインは、IFS_ の後に、データベース・インスタンスのホスト名、ポート番号、サービス名および Oracle Files のスキーマの名前が連結された形式で表示されます。次に例を示します。

```
ifs_myMachineHostname.mycompany.com:1521:myDBServiceName:myFILESSchemaName
```

注意： このページの「起動」ボタンおよび「停止」ボタンはアクティブではないため、Oracle Files を制御できません。

5. Oracle Files ドメイン名のリンクをクリックします。後続のページで、「ローカル・コンポーネントの起動」をクリックします。Oracle Files ノードを起動するためにホスト資格証明の入力を求めるページが表示されます。
6. コンピュータのオペレーティング・システムのアカウント名およびパスワードを入力します。これは通常、root ユーザーの名前およびパスワードです。
7. 「OK」をクリックします。

Oracle Files ドメインが、複数のコンピュータにまたがって存在する複数のノードで構成されている場合は、各コンピュータに対してこの項の手順 1～7 を繰り返します。起動するノードが実行されている各コンピュータ上で、オペレーティング・システムのアカウント名およびパスワードを入力する必要があります。

注意： 手順 1～7 のかわりに、ifsctl start コマンドを \$ORACLE_HOME/ifs/files/bin から実行できます。ただし、手順 1～7 に従うと、ブラウザを使用して任意の場所から Oracle Files を管理できます。

8. 「Application Server」ページに戻るリンクをクリックします。
「OC4J_ifs_files」を選択し、「起動」または「再起動」をクリックします。

9. OC4J インスタンスを起動します。

OC4J インスタンスをコマンドラインから起動するには、`$ORACLE_HOME/opmn/bin` ディレクトリに移動し、次のコマンドを使用します。

```
opmnctl startproc gid=OC4J_iFS_files
```

Oracle Files ドメインが起動します。HTTP ノードが稼働しているすべての中間層コンピュータで、OC4J インスタンスを起動する必要があります。

10. Oracle Files ドメインのステータスを確認します。これを行うには、次の場所から `ifsctl status -n` コマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/bin/
```

11. ログ・ファイルをチェックして、ノードと HTTP ノードが表示されていることを確認します。ログ・ファイルは次のディレクトリにあります。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/log/
$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_iFS_files/application-deployments/files
/OC4J_iFS_files_default_island_1/
```

Oracle Files のサブスクライバの作成

注意： サブスクライバを作成する前に、SMTP サーバーが稼働していることを確認してください。サブスクライバ管理者およびユーザーが自身のパスワードに関する電子メールを受信するためには、SMTP サーバーが稼働している必要があります。

次の手順では、サイト管理者として Oracle Files にログインし、**サブスクライバ**を作成する必要があります。Oracle Internet Directory ユーザーが Oracle Files にログインできるようにするには、Oracle Files サブスクライバを作成する必要があります。

1. 次の場所に移動します。

```
http://http_host:port/files/app/AdminLogin
```

`http_host` には完全修飾ドメイン名を指定する必要があります。次に例を示します。

```
http://acme.us.oracle.com:7778/files/app/AdminLogin
```

「管理者のログイン」ページが表示されます。

2. `site_admin` としてログインし、構成中に使用したパスワードと同じ `site_admin` パスワードを使用します。

3. 「新規サブスクリイバ」をクリックします。

「サブスクリイバ名」ページが表示されます。「サブスクリイバ名」は、Oracle Internet Directory サーバーのデフォルト・サブスクリイバです。Oracle Internet Directory サーバーは、Oracle Files 構成時に 12-24 ページの「新しい Oracle Files ドメインの作成」の項の手順 23 で入力した値です。

4. デフォルト値を受け入れます。

重要： Oracle9iAS Single Sign-On の制限により、複数のサブスクリイバは現在サポートされていません。

5. 「次へ」をクリックします。

「サブスクリイバ情報」ページが表示されます。

6. クォータおよび最大ユーザー数を設定します。たとえば、合計で 1GB のクォータ、各ユーザーに 10MB のクォータおよび各ワークスペースに 10MB のクォータを設定します。

7. 「次へ」をクリックします。

「サブスクリイバ管理者アカウントの作成」ページが表示されます。

8. サブスクリイバ管理者のユーザー・ログイン ID を入力します。電子メール・アドレスは、サブスクリイバのパスワードの送信先です。「デフォルトのユーザー・アカウント設定」および「デフォルトのワークスペース設定」を指定します。

9. 「次へ」をクリックします。

「New Subscriber Confirmation」ページが表示されます。

10. 情報を確認し、「送信」をクリックします。

「サブスクリイバの参照」ページが表示されます。サブスクリイバが作成され、サブスクリイバのパスワードが電子メールで自動送信されたことが表示されます。

11. サブスクリイバ管理者としてログインするには、次の URL に移動します。

`http://http_host:port/files/app/AdminLogin`

「管理者のログイン」ページが表示されます。

12. 手順 8 でサブスクリイバの作成時に入力したサブスクリイバ用のログイン・ユーザー ID と電子メールで受信したサブスクリイバ・パスワードを使用し、`subscriberadmin_user_login_ID/password` としてログインします。

13. 「ユーザー」タブをクリックして、「ユーザー」ページを表示します。ワイルドカード値 * を検索して、すべての Oracle Files ユーザーの更新済リストを表示します。

Oracle Internet Directory でのユーザーの作成

ユーザーが Oracle Files にアクセスするには、最初に、Oracle の LDAP サーバーである Oracle Internet Directory のユーザーとして作成する必要があります。

Oracle Internet Directory でユーザーを作成するには、次のようにします。

1. OC4J_DAS インスタンスがインフラストラクチャ・ホストで開始していることを確認します。
2. インフラストラクチャ・ホストに接続します。通常は次のようになります。

`http://oidserver.us.oracle.com:7777/oiddas`

`hostname` には完全修飾ドメイン名を指定する必要があります。

3. Oracle Internet Directory 管理者（通常は `orcladmin`）としてログインします。
4. 「ディレクトリ」タブをクリックします。
5. 「作成」をクリックします。
「ユーザーの作成」画面が表示されます。
6. フィールドに入力します。電子メール・アドレスを指定する必要があります。
7. **Oracle Collaboration Suite ユーザー**を選択し、このユーザーをグループに追加します。
8. 「送信」をクリックします。

注意： ユーザー名の最後に空白を使用している場合、または `&'%?\ / + = () * ^ , ; | ~` のいずれかの文字を使用している場合、ユーザーは Oracle Internet Directory から Oracle Files にプロビジョニングされません。

ユーザーが Oracle Internet Directory に作成され、Oracle Files サイト管理者が Oracle Files サブスクリバ管理者を作成した場合は、`FilesOidUserSynchronizationAgent` により 15 分おきに（デフォルト設定）Oracle Files に自動的にプロビジョニングされます。

また、ユーザーが Oracle Internet Directory に作成された後、そのユーザーとして Oracle Files にログインすると、エージェントに対して指定された時間間隔（このリリースの新機能）に関係なく、ユーザーが Oracle Files に即時にプロビジョニングされます。

`FilesOidUserSynchronizationAgent` による自動プロビジョニングのデフォルト間隔は、15 分から選択した間隔に再設定できます。

関連項目： このデフォルト間隔の変更方法の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

注意： Oracle Files はマルチバイト・キャラクタ・セットをサポートしますが、WebDAV などの一部のプロトコルはマルチバイト・ユーザー名をサポートしません。このため、Oracle Internet Directory で Oracle Files のユーザーを作成する場合は、シングルバイト文字のみを使用して名前を作成する必要があります。マルチバイト文字を使用して作成された名前を持つユーザーは、Oracle Files プロトコル・サーバーを介してコンテンツにアクセスできません。同様に、プロトコルは ASCII パスワードのみ受け入れるため、ユーザー・パスワードは ASCII で作成する必要があります。

ASCII 以外の文字を使用して作成されたパスワードを持つユーザーは、Oracle Files プロトコル・サーバーを介してコンテンツにアクセスできません。

プロトコル・サーバーへのアクセス

Oracle Files ドメインで実行されているプロトコル・サーバーにアクセスするには、各エンド・ユーザーが次の手順を実行する必要があります。

1. 「パスワード・ユーザー設定」ページに接続します。

`http://ocs_midtier_hostmachine:port/files/app/ProtocolAccess`

`ocs_midtier_hostmachine` の値には、完全修飾ドメイン名を指定する必要があります。
`port` の値には、中間層コンピュータのポート番号を指定する必要があります。

「シングル・サインオン」ページが表示されます。

2. Oracle Internet Directory のユーザーおよびパスワードを使用してログインします。

「パスワード・ユーザー設定」ページが表示されます。

3. Oracle9iAS Single Sign-On パスワードと Oracle Files 固有のパスワード、およびパスワードの確認を入力し、ユーザーに対してこれらのパスワードを作成します。

4. 「続行」をクリックして保存します。

この時点で、「パスワード・ユーザー設定」ページを使用して Oracle Internet Directory ユーザーが構成され、Oracle Files ドメインで実行されているプロトコル・サーバーにアクセスできます。

注意： FTP および AFP にアクセスするには、Oracle Files 固有のパスワードを使用します。SMB、Oracle FileSync、Web Folders または Oracle Files Web インタフェースにアクセスするには、Oracle Internet Directory のパスワードを使用します。

関連項目： ユーザーの作成および Oracle Files ドメインで実行されている
プロトコル・サーバーへのアクセスの詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』
を参照してください。

基本操作の検証

ドメインおよびノードが起動し、Oracle Files のコア・コンポーネントが動作していることを確認するには、次の手順を実行します。

- 1. Oracle Files ドメインのステータスを確認します。次の場所から `ifsctl status -n` コマンドを実行します。
`$ORACLE_HOME/ifs/files/bin/`
- 2. 次の場所にある HTTP ログを確認します。
`$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_iFS_files/application-deployments/files`
`/OC4J_iFS_files_default_island_1/application.log`
- 3. HTTP ログに、503 サービスが一時的に使用できないことを示すメッセージが含まれている場合は、ネットワーク上の別のコンピュータからシステムへの接続を試行します。

表 12-6 予想される基本機能

プロトコル または サーバー	アクセス用のアドレスまたは方法	予想される結果
HTTP	<code>http://ocs_middle_tier_host_name:port_number/files/app</code>	Oracle Internet Directory Server で作成されたユーザーとしてログインします。
SMB	Windows のエクスプローラで、ネットワーク・ドライブを割り当てます。 <code>¥¥middle_tier_host_name¥myhome</code>	「Windows ファイル共有」が表示されます。

HTTP の Web サーバーへの接続を試行し、「503 サービスは一時的に利用できません」というメッセージを受信した場合は、HTTP ノードが完全には起動されていません。HTTP ノード (OC4J インスタンス) を起動する必要があります。

また、Oracle Files ドメインを停止し再起動する場合は、HTTP ノードのサーブレットを再初期化するために HTTP ノード (OC4J インスタンス) も再起動する必要があります。

OC4J インスタンスをコマンドラインから起動するには、`$ORACLE_HOME/opmn/bin` ディレクトリに移動し、次のコマンドを使用します。

```
opmnctl restartproc gid=OC4J_iFS_files
```

構成後の追加タスク

計画している配置に応じて、次のタスクの一部またはすべてを Oracle Files の構成後に実行する必要があります。

- ネット・サービス名の構成
- Oracle Files と Oracle Workflow の統合（オプション）
- Real Application Clusters データベースとともに Oracle Files を使用するための構成後の手順（オプション）
- Oracle Files Web UI への「Portal へ戻る」リンクの追加（必須）
- Oracle Internet Directory の問合せ返送制限の編集（オプション）
- Oracle Files および検索ポートレットの登録（必須）

ネット・サービス名の構成

管理を簡単にするために、このタスクを実行することをお勧めします。Oracle Files と Oracle Workflow を統合する場合は、このタスクを実行する必要があります。次のように Oracle Net Configuration Assistant を使用してネット・サービス名を構成します。

1. 次のスクリプトを実行して、Oracle Net Configuration Assistant を実行します。

```
$ORACLE_HOME/bin/netca
```

「ようこそ」画面が表示されます。

2. 「ネット・サービス名の構成」を選択し、「次へ」をクリックします。

「ネット・サービス名の構成」画面が表示されます。

3. 「追加」をクリックし、「次へ」をクリックします。

「ネット・サービス名の構成 - データベース・バージョン」画面が表示されます。

4. 「Oracle8i またはそれ以降のデータベースまたはサービス」を選択します。

5. 「次へ」をクリックします。

「サービス名」画面が表示されます。db1.us.acme.com などのデータベース・インスタンスの「サービス名」を入力します。

6. 「次へ」をクリックします。

「プロトコルの選択」画面が表示されます。

7. 「TCP（デフォルト）」を選択します。

8. 「次へ」をクリックします。
「TCP/IP プロトコル」画面が表示されます。「ホスト名」および「ポート番号」の値を入力します。データベース・ポートのデフォルト値は 1521 です。
9. 「次へ」をクリックします。
「テスト」画面が表示されます。
10. 「はい」をクリックしてテストを実行します。
「接続」画面がテスト接続の結果とともに表示されます。テストでは、デフォルト・ユーザー `scott` を使用して接続を試行します。データベースの作成中はユーザー `scott` がロックされるため、テスト接続に失敗することがあります。テスト接続に失敗した場合、Oracle Net Configuration Assistant は「サービス名」画面に戻ります。ユーザーを `system` に変更し、データベースの値を入力してテスト接続を再び実行します。
11. 「接続」画面が「OK」という結果を返した場合は、「次へ」をクリックします。
「ネット・サービス名」画面が表示されます。`db1` など、このデータベース接続のサービス名を「TNS エイリアス名」フィールドに入力します。
12. 「次へ」をクリックします。
「ネット・サービス名」画面が表示されます。デフォルト値の「いいえ」を受け入れます。
13. 「次へ」をクリックします。
「構成が終了しました。」画面が表示されます。
14. 「次へ」をクリックします。
「サマリー」画面が表示されます。
15. 「終了」をクリックします。

Oracle Files と Oracle Workflow の統合（オプション）

Oracle Workflow を Oracle Files と統合するには、次のタスクを実行します。

1. [Oracle Workflow の構成](#)
2. [Oracle Workflow と Oracle Files スキーマの統合](#)
3. [Oracle Workflow スキーマの追加言語の有効化（オプション）](#)

Oracle Workflow の構成

Oracle Files で使用するように Oracle Workflow を構成するには、この項で詳細に説明する手順を正しく実行する必要があります。

Oracle Workflow の構成では、主に Oracle Workflow スキーマを設定しますが、追加される中間層ではなく最初の中間層に対してのみ実行する必要があります。

注意： Oracle Workflow スクリプトは、Oracle Workflow 管理者を orcladmin ユーザーとして自動的に設定します。

1. 次のスクリプトを実行して、最初の中間層コンピュータで Oracle Workflow Configuration Assistant を実行します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/bin/ifswoffinstall
```

Oracle Workflow Configuration Assistant が表示されます。

2. [表 12-7](#) にリストされているユーザー情報を入力します。

表 12-7 Oracle Workflow Configuration Assistant のオプション

フィールド	値
Workflow アカウント	Oracle Workflow データベース・アカウントのユーザー名。デフォルトの Workflow アカウントは OWF_MGR です。複数の Oracle Workflow インスタンスを同じ Information Storage データベースに作成している場合は、このアカウントの説明的な名前を入力します。
ワークフロー・パスワード	Oracle Workflow データベース・アカウントのパスワード。
SYS パスワード	Oracle Workflow アカウントを作成しているデータベースの SYS パスワードを入力します。詳細は、Oracle DBA に確認してください。
SYSTEM パスワード	Oracle Workflow アカウントを作成しているデータベースの SYSTEM パスワードを入力します。詳細は、Oracle DBA に確認してください。
インストール・オプション	「インストール」を選択して Oracle Workflow の新規インストールを実行します。

表 12-7 Oracle Workflow Configuration Assistant のオプション（続き）

フィールド	値
言語の選択	<p>「言語の追加」インストール・オプションを選択した場合は、追加する言語の略語を選択します。それ以外の場合は、デフォルトを受け入れます。</p> <p>関連項目：標準の言語略語のリストは、表 12-9「言語コード」を参照してください。</p>
メソッドの接続	<p>Oracle SID を使用してローカル・データベースに接続するには「ローカル」、Oracle Net を介してリモート・データベースに接続するには「リモート」を選択します。</p> <p>12-42 ページの「ネット・サービス名の構成」に示す手順を実行した場合は、「リモート」を選択します。</p>
接続文字列	<p>「リモート」接続方法を選択する場合は、12-42 ページの「ネット・サービス名の構成」の手順 11 で指定したリモート・データベースのサービス名を入力します。</p> <p>重要：Oracle Files スキーマが作成されるデータベースと同じデータベースに Oracle Workflow スキーマが作成されていることを確認するには、Oracle Collaboration Suite Information Store の CONNECT_STRING を使用します。</p>

3. 「送信」をクリックして、Oracle Workflow 構成を開始します。

Oracle Workflow 構成が完了すると、確認ウィンドウが表示されます。

4. 「OK」をクリックします。

Oracle Workflow 構成が完了します。次のディレクトリにある workflow.log ログ・ファイルを調べることにより、Oracle Workflow 構成のステータスを確認できます。

`$ORACLE_HOME/wf/install/`

重要： Oracle Workflow のインストールおよび構成中に生成された workflow.log ファイルには、機密情報が含まれることがあります。この機密情報を保護するには、インストールの完了後にこのファイルを削除するか、ファイルの権限を変更して、承認された管理者のみがこのファイルにアクセスできるようにします。

Oracle Workflow と Oracle Files スキーマの統合

Oracle Workflow と Oracle Files スキーマを統合する前に、ARU パッチ 5778073 を適用する必要があります。

パッチの取得に関しては、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

Oracle Workflow を Oracle Files スキーマと統合するには、次の手順を実行します。これらの手順では、12-44 ページの手順に従って Oracle Workflow がすでに構成されていることを前提とします。

注意： Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) に含まれている Information Storage データベースではなく、外部の 9.2.0.3 データベースを使用する場合、または既存の Information Storage データベースを更新する場合は、/rdbms/admin からデータベース・ホスト・システム上のデータベース SYS ユーザーとして catldap.sql 構成スクリプトを実行する必要があります。次に、ifswfsetup スクリプトを実行して Oracle Files を Oracle Workflow と統合します。

1. 英語以外のロケールで Oracle Files と Oracle Workflow を統合する場合は、ifswfsetup スクリプトを実行する前に、LANG 環境変数を英語ロケールに変更する必要があります。コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

注意： LANG の値を変更する前に、コマンド・プロンプトで set LANG コマンドを入力し、この環境変数の現在の値を記録します。

```
set LANG = american_america.we8iso8859p1
```

2. Oracle Workflow を正常に構成した後で、表 12-8 に示されている値を使用して ifswfsetup.properties ファイルを編集します。この表では、ifswfsetup スクリプトで使用されるパラメータについて説明します。要件に基づいてこれらのパラメータを編集します。これらの編集は、Oracle Workflow を Oracle Files と統合する場合は必須です。ifswfsetup.properties ファイルは次の場所にあります。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/settings
```

重要： 変更する前に ifswfsetup.properties ファイルをバックアップします。表 12-8 にリストされているパラメータ以外のパラメータは編集しないでください。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 のパッチ・セット 1 (9.0.4.2.0) が適用されている場合、パッチのインストール・プロセスによって、ファイルは自動的にバックアップされます。

表 12-8 ifswfsetup.properties ファイルの値

フィールド番号および名前	構造	例 ¹
(1) Oracle ホーム	ORACLE_HOME= <i>ORACLE_HOME</i>	ORACLE_HOME=u01/app/oracle/ocsmid
(2) データベース・ホスト	DB_HOST_NAME= <i>dbhost.us.oracle.com</i>	DB_HOST_NAME=acme.us.oracle.com
(3) データベース・ポート	DB_LISTENER_PORT= <i>port_number</i>	DB_LISTENER_PORT=1521
(4) データベース・サービス名	DB_SERVICE_NAME= <i>db_service_name</i>	DB_SERVICE_NAME=acme9i
(5) データベース TNS エイリアス名	DB_TNS_ALIAS= <i>db_tns_aliasname</i>	DB_TNS_ALIAS=my_files_instance これは、Oracle Net Configuration Assistant で作成された Oracle Files に使用しているデータベース・サービスです。詳細は、12-42 ページの「 ネット・サービス名の構成 」を参照してください。
(6) データベース SID	DB_SID= <i>db_sid</i>	DB_SID=my_files_sid
(7) Oracle Files スキーマ名	IFS_SCHEMA_NAME= <i>ifssys</i>	IFS_SCHEMA_NAME=ifssys
(8) Oracle Workflow スキーマ名	IFS_WORKFLOW_SCHEMA_NAME= <i>workflow_schema_name</i>	IFS_WORKFLOW_SCHEMA_NAME=owf_mgr
(9) Oracle Workflow URL	WF_URL=http:// <i>midtier:port_number</i>	WF_URL=http:// mycomp.us.oracle.com:7777
(10) Oracle LDAP ホスト	OID_HOST_NAME= <i>ldaphost.us.oracle.com</i>	OID_HOST_NAME= oidserver.us.oracle.com
(11) Oracle LDAP ポート	OID_PORT= <i>port_number</i>	OID_PORT=4032
(12) Oracle LDAP 管理者ユーザー名	OID_SUPER_USER_NAME=cn=orcladmin	「構造」列に指定されている正確な値を入力します。
(13) Oracle LDAP 変更ログ	LDAP_CHANGELOG=cn=changelog	「構造」列に指定されている正確な値を入力します。
(14) Oracle LDAP ベースログ	LDAP_BASELOG= cn=Users,dc=us,dc=oracle,dc=com	値は、Oracle Internet Directory 構成時に LDAP 検索ベースに対して指定した値と一致する必要があります。

表 12-8 ifswfsetup.properties ファイルの値（続き）

フィールド番号および名前	構造	例 ¹
(15) 言語アップロード・スクリプト	LANGONLY=false	Oracle Files と Oracle Workflow を統合する場合は、この値を false に設定します。 Oracle Workflow スキーマの追加言語を有効にする場合は、この値を true に設定します。
(16) アップロードする言語ファイル 言語コードの一覧は、表 12-9「言語コード」を参照してください。複数のコードをカンマで区切って入力できます。	LANG=language_code	LANG= LANGONLY=false の場合（フィールド 15 を参照）は、この値を空のままにしておく必要があります。 LANG=es LANGONLY=true の場合（フィールド 15 を参照）は、言語コードを入力します。
(17) OID 同期間隔	INTERVAL=interval_duration	INTERVAL=10 Oracle Internet Directory ユーザーが Oracle Files でプロビジョニングされる頻度を分単位で指定します。

¹ フィールド 2 ～ 7 の値は、Oracle Files 構成時に入力した情報と同一である必要があります。
フィールド 8 ～ 9 の値は、Oracle Workflow 構成時に入力した情報と同一である必要があります。
フィールド 10 ～ 14 の値は、Oracle Files 構成時に入力した LDAP 情報と同一である必要があります。

- 3. ifswfsetup.properties ファイルを保存し終了します。
- 4. 次の 2 つのコマンドを入力して、ifswfsetup スクリプトを実行します。

```
cd $ORACLE_HOME/ifs/files/bin
./ifswfsetup
```

これにより、スクリプトが実行され、次のディレクトリに ifswfsetup.log ログ・ファイルが作成されます。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/log/
```

重要： ifswfsetup.properties および ifswfsetup.log ファイルには機密情報が含まれます。この機密情報を保護するには、インストールの完了後にこれらのファイルを削除するか、またはファイルの権限を変更して、承認された管理者のみがこれらのファイルにアクセスできるようにします。

注意： LANG の値を変更した場合は、コマンド・プロンプトで `set LANG` コマンドを使用し、環境変数の値を元に戻す必要があります。

5. 必要に応じて、Oracle Workflow スキーマの追加言語を有効にします。

Oracle Workflow スキーマの追加言語の有効化（オプション）

Oracle Workflow スキーマで追加言語を有効にするには、次の手順を実行します。

注意： チェコ語、ギリシャ語、ハンガリー語、ルーマニア語、ロシア語のサポート機能が使用できるのは、Oracle Collaboration Suite リリース 2 のパッチ・セット 1 (9.0.4.2.0) が適用されている場合のみです。

1. `ifswfsetup.properties` ファイル (`$ORACLE_HOME/ifs/files/settings` にあります) を次のように編集します。

■ **フィールド 15:** 言語アップロード・スクリプト

`LANGONLYY=true`

■ **フィールド 16:** アップロードする言語ファイル

`LANG=`[Oracle Workflow にアップロードする言語と一致する言語コードを [表 12-9](#) の列 2 から選択して入力します。複数の言語コードはカンマで区切ります。]

すべての言語を有効にする場合は、次の構文を使用します。

`LANG=all`

2. `ifswfsetup.properties` ファイルに対する編集が完了したら、次の 2 つのコマンドを入力して `ifswfsetup` スクリプトを実行します。

```
cd $ORACLE_HOME/ifs/files/bin
./ifswfsetup
```

これにより、スクリプトが実行され、次のディレクトリに `ifswfenablelang.log` ログ・ファイルが作成されます。

`$ORACLE_HOME/ifs/files/log/`

重要： `ifswfenablelang.log` ファイルには機密情報が含まれます。この機密情報を保護するには、インストールの完了後にこのファイルを削除するか、ファイルの権限を変更して、承認された管理者のみがこのファイルにアクセスできるようにします。

表 12-9 言語コード

言語	コード ¹
チェコ語	cs
デンマーク語	da
ドイツ語	de
ギリシア語	el
スペイン語	es
フィンランド語	fi
フランス語	fr
ハンガリー語	hu
イタリア語	it
日本語	ja
韓国語	ko
オランダ語	nl
ノルウェー語	no
ポルトガル語	pt
ポルトガル語（ブラジル）	pt_BR
ルーマニア語	ro
ロシア語	ru
スウェーデン語	sv
トルコ語	tr
中国語（簡体字）	zh_CN
中国語（繁体字）	zh_TW

¹ これらのコードは ifswfsetup.properties ファイルにもあります。

注意： チェコ語、ギリシャ語、ハンガリー語、ルーマニア語、ロシア語のサポート機能が使用できるのは、Oracle Collaboration Suite リリース 2 のパッチ・セット 1 (9.0.4.2.0) が適用されている場合のみです。

Real Application Clusters データベースとともに Oracle Files を使用するための構成後の手順（オプション）

Real Application Clusters データベースとともに Oracle Files を使用している場合は、Oracle Files の構成後に次のタスクを実行する必要があります。

Real Application Clusters データベースを使用するように Oracle Files を設定する構成前のタスク（12-9 ページの「[Real Applications Clusters データベースを使用するための Oracle Files の設定（オプション）](#)」を参照）に加えて、次の構成後の手順を実行する必要があります。

1. 各中間層で、registry.xml ファイル（\$ORACLE_HOME/ifs/common/ ディレクトリにあります）をバックアップします。
2. registry.xml ファイルを編集し、DatabaseUrl エントリを追加します。

DatabaseUrl エントリは、<Instance> タグの下での任意の位置に追加できます。次の例では、エントリはタグのすぐ下に追加されています。tnsentry の値は、Real Application Clusters の構成前の手順で指定した値と同じにする必要があります。

次に例を示します。

```
<Instance>
  <DatabaseUrl>jdbc:oracle:oci8:@tnsentry</DatabaseUrl>
  <Domain>ifs://DBHOME:1521:dbservice:ifssys</Domain>
  <DomainType>files</DomainType>
  <Registered>1018925008096</Registered>
  <LastStarted>1028329087966</LastStarte>d
  <LastModified>1028330926700</LastModified>
  <Ports>
</Instance>
```

Oracle Files Web UI への「Portal へ戻る」リンクの追加（必須）

Oracle9iAS Portal を構成した場合は、Oracle Files から Oracle Collaboration Suite ホーム・ページに移動できるよう Oracle Files Web UI に表示される「Portal へ戻る」リンクを追加できます。

Oracle Files Web UI に「Portal へ戻る」リンクを追加するには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザに次の URL を入力することにより、Oracle Enterprise Manager Web Site にアクセスします。

```
http://hostname:1810/
```

2. インストール中に指定したパスワードを使用して ias_admin としてログインし、「OK」をクリックします。

3. Oracle9iAS ホーム・ページから、Oracle Files ドメイン・リンクをクリックして Oracle Files の最上位レベル・ページに移動します。次に例を示します。

```
ifs_dbhost.us.oracle.com:1521:ifsdbservice.us.oracle.com:FilesSchema
```

4. 「構成」セクションで、「**サーバー構成**」をクリックします。
5. 「サーバー構成」ページで、「**FilesBaseServerConfiguration**」をクリックします。「編集」ページが表示されます。
6. 「プロパティ」セクションで、「IFS.SERVER.APPLICATION.FILES.PortalUrl」を選択し、「**編集**」をクリックします。
7. 値を変更して、Oracle Collaboration Suite ホーム・ページの URL を指定します。次に例を示します。

```
http://hostname.us.foo.com:7777/pls/portal
```

8. プロパティの編集ページで「**OK**」をクリックします。
9. サーバーの編集ページで「**OK**」をクリックします。
10. Oracle9iAS ホーム・ページに戻ります。
11. 「OC4J_ifs_files」を選択し、「**再起動**」をクリックします。
「Portal へ戻る」リンクが Oracle Files Web UI に表示されます。一括検索ページも表示されます。

Oracle Internet Directory の問合せ返送制限の編集（オプション）

Oracle Internet Directory サーバーに 1000 を超える Oracle Internet Directory ユーザー・アカウントが存在する場合、Oracle Files の OidUserSynchronizationAgent で Oracle Internet Directory サーバーからユーザーの同期を試行すると、ノード・ログに次のエラー・メッセージが記録される可能性があります。

```
8/13/02 7:39 PM Files: [oidsync-2107123 OidUserSynchronizationAgent] Exception  
oracle.ifs.common.IfsException: IFS-12988: 件数制限を超えました
```

このエラーが発生しないようにするには、Oracle Files の OidUserSynchronizationAgent を起動する前に、次の手順を実行します。

1. Oracle Directory Manager を実行します。
2. Oracle Internet Directory 管理者のユーザー名およびパスワードを使用して、インフラストラクチャの Oracle Internet Directory サーバーにログインします。

3. ログインした Oracle Internet Directory サーバーをツリーから選択します。このサーバーは、アカウント名、Oracle Internet Directory ホストおよび Oracle Internet Directory ポートでツリーに示されます。Oracle Directory Manager の画面の右側に、Oracle Internet Directory サーバーのプロパティが表示されます。
4. 「問合せエントリの返送制限」フィールドの値を検索し、Oracle Collaboration Suite のユーザー数を超える値になるように変更します。
5. 「OK」をクリックして保存します。

Oracle Files および検索ポートレットの登録（必須）

Oracle Files を構成し、ドメインを起動した後、Oracle Files および検索ポートレットを構成するために Web クライアント・インストーラを実行する必要があります。ポートレットを登録すると、Oracle Collaboration Suite Web Client のページでこれらのポートレットを使用できるようになります。

関連項目： Web クライアント・インストーラの実行方法の詳細は、[第 6 章「Oracle Collaboration Suite のインストール」](#)を参照してください。

検索機能の構成

この章では、Oracle Collaboration Suite の検索の構成プロセスについて説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- デフォルトの Oracle Ultra Search インスタンス
- Oracle Ultra Search データベース・ユーザーの作成
- デフォルトの Oracle Ultra Search インスタンス
- Oracle Ultra Search クローラの構成
- Web ソースの作成
- スケジュールの作成
- Oracle Ultra Search クローラのスケジュール
- Oracle Ultra Search プロパティの設定
- 電子メールを検索可能に設定
- OC4J_ifs_files の再起動
- Oracle Ultra Search のテスト

デフォルトの Oracle Ultra Search インスタンス

Oracle Ultra Search インストーラは、すぐに使用できるデフォルトの Oracle Ultra Search インスタンスをデフォルトの Ultra Search テスト・ユーザーに基づいて作成するため、ユーザーは、インストール後にデフォルト・インスタンスに基づいて Oracle Ultra Search 機能をテストできます。

デフォルトのインスタンス名は、WK_INST です。このインスタンスは、データベース・ユーザー WK_TEST に基づいて作成されます。つまり、WK_TEST は、WK_INST のインスタンス管理者です。デフォルトのユーザー・パスワードは、WK_TEST です。

セキュリティ上の理由で、WK_TEST はインストール後にロックされます。Oracle Collaboration Suite 管理者は、データベースに DBA ロールとしてログインし、WK_TEST ユーザーのロックを解除してからパスワードを WK_TEST に設定する必要があります。(パスワードはインストール後に失効します。) パスワードが WK_TEST 以外に変更された場合は、データベースのパスワードを変更した後に、管理ツールの「インスタンスの編集」ページを使用して、キャッシュされたスキーマ・パスワードも更新する必要があります。

デフォルトのインスタンスは、Oracle Ultra Search サンプル問合せアプリケーションでも使用されます。『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』の「Middle Tier コンポーネントの設定」の項の説明に従って、data-sources.xml ファイルを更新する必要があります。

Oracle Ultra Search データベース・ユーザーの作成

Oracle Ultra Search では、次のように独自の表領域を使用して固有のデータを格納することをお薦めします。

```
SQL> create tablespace ultra datafile 'file_location' size x_MB
```

次のコマンドを使用して、インフラストラクチャ・ホストにログインし、Oracle Ultra Search スキーマを作成します。

```
$ sqlplus system/password@iasdb
SQL> CREATE USER ocs_us IDENTIFIED BY password DEFAULT TABLESPACE ultra
TEMPORARY TABLESPACE temp QUOTA UNLIMITED ON ultra;
User created.
SQL> GRANT resource, connect, wkuser TO ocs_us;
Grant succeeded.
SQL> exit
```

WKUSER ロールによりユーザーに Oracle Ultra Search へのアクセス権が付与されます。

Oracle Ultra Search クローラの構成

この項では、Oracle Ultra Search クローラの構成方法を説明します。

注意： 新規インスタンスの作成時には次の手順に従います。手順 10 で、「キャッシュ・ディレクトリの位置」および「クローラのロギング」のパスをデフォルト・インスタンス WK_TEST に適用する必要があります。

Oracle Ultra Search クローラを構成するには、次のようにします。

1. Oracle Ultra Search がインストールされているインフラストラクチャ・マシンに、一時ファイルとログ・ファイルを格納するディレクトリを作成します。
2. 次の URL にある Oracle Ultra Search 管理ツールに移動します。
`http://middletier_host:middletier_port/ultrasearch/admin_sso/index.jsp`
3. 「シングル・サイン・オン」ページが表示されたら、Oracle Internet Directory 管理者のユーザー名とパスワードを入力し、「ログイン」をクリックして「ようこそ」ページを表示します。
4. 「作成」サブタブをクリックして、「インスタンスの作成」アイコンを表示します。
5. 「インスタンスの作成」をクリックします。
6. 「新規インスタンス名」を入力し、13-2 ページの「[Oracle Ultra Search データベース・ユーザーの作成](#)」で作成したデータベース・スキーマの名前を「Ultra Search スキーマ名」フィールドに入力します。
7. 「適用」をクリックし、ページがリフレッシュされるまで待ちます。新規インスタンスの作成を確認する確認メッセージが表示され、「ようこそ」ページが表示されます。
8. 作成したインスタンスを「管理するインスタンスの選択」ドロップダウン・リストから選択し、「適用」をクリックしてこのインスタンスを現在のインスタンスとして選択します。確認メッセージが表示されます。
9. 「クローラ」タブをクリックします。
10. 次の情報を入力します。
 - **クローラの深さ：**クローラが参照するネストしたリンクの最大数。「制限」ラジオ・ボタンを選択し、関連フィールドに数値を入力することにより、深さを制限できます。
 - **デフォルト・キャラクタ・セット：**HTML ドキュメントのデフォルトとして「標準 UTF-8」を選択します。

- **キャッシュ・ディレクトリの位置**: このタスクの手順 1 で作成した一時ディレクトリへのパスを入力します。
- **クローラのロギング**: このタスクの手順 1 で作成したログ・ディレクトリへのパスを入力します。
- **「データベース接続文字列」** フィールドの値に注意してください。この値は、13-6 ページの「[Oracle Ultra Search プロパティの設定](#)」で Oracle Ultra Search に対して Oracle Files を構成した場合に必要です。

11. 「適用」をクリックします。

Web ソースの作成

Web ソースを作成するには、次のようにします。

1. 「ソース」タブをクリックして、「Web ソースの作成: ステップ 1」ページを表示します。
2. 「Web ソースの作成」をクリックします。
3. 小さな Web サイトを選択して、Oracle Ultra Search のテスト・サイトとして索引を付け、それを「ソース名」フィールドに入力します。
4. 「ステップ 2 に進む」をクリックして、「Web ソースの作成: ステップ 2」ページを表示します。
5. 「ステップ 3 に進む」をクリックしてデフォルトを受け入れ、「Web ソースの作成: ステップ 3」ページを表示します。
6. 「開始アドレス」セクションで、索引付けの開始アドレスの URL を入力します。
7. 「追加」をクリックして「開始アドレス・リスト」に新規アドレスを追加します。
8. 「ステップ 4 に進む」をクリックして、「Web ソースの作成: ステップ 4」ページを表示します。
9. 「ステップ 5 に進む」をクリックしてデフォルトを受け入れ、「Web ソースの作成: ステップ 5」ページを表示します。
10. 「ステップ 6 に進む」をクリックしてデフォルトを受け入れ、「Web ソースの作成: ステップ 6」ページを表示します。
11. 「Finish」をクリックしてデフォルトを受け入れます。

新しい Web ソースが「Web ソース・リスト」に表示されます。

スケジュールの作成

スケジュールを作成するには、次のようにします。

1. 「スケジュール」タブをクリックして、「同期スケジュール」ページを表示します。
2. 「新規スケジュールの作成」をクリックして、「スケジュールの作成： ステップ 1/3」ページを表示します。
3. スケジュール名を「名前」フィールドに入力します。
4. 「ステップ 2 に進む」をクリックして、「スケジュールの作成： ステップ 2/3」ページを表示します。
5. 「ステップ 3 に進む」をクリックしてデフォルトのスケジュールを受け入れます。これにより、クローラが 1 か月に 1 回実行されるようスケジュールされます。
6. 次の操作を行うことにより、クローラするスケジュールのデータ・ソースを選択します。
 - a. 「次のタイプから使用可能なソースを取得します」ドロップダウン・リストから「Web」を選択し、「ソースの取得」をクリックします。
 - b. 13-4 ページの「Web ソースの作成」で作成したソースが、「使用可能なソース」リストに表示されます。
 - c. ソースを選択し、「>>」をクリックして「割り当てられたソース」リストに移動します。
 - d. 「完了」をクリックして「同期スケジュール」ページに戻ります。

新規スケジュールが「スケジュール」列に表示されます。

Oracle Ultra Search クローラのスケジュール

Oracle Ultra Search クローラをスケジュールするには、次のようにします。

1. 「ステータス」列で「スケジュール」をクリックして、「同期スケジュールのステータス」ページを表示します。
2. 「すぐに実行」をクリックしてクローラを起動します。
3. 「クローラの進行状況のサマリーおよびデータ・ソース別ログ・ファイル」セクションで、「統計」列の鉛筆アイコンをクリックして、クローラのステータスとサマリーを表示します。

鉛筆アイコンが表示されない場合は、「ステータスの更新」リンクをクリックします。
4. クローラが成功したかどうかを判断するには、「名前」列の「ドキュメントが索引付けされました」に 0 以外の値が表示されていることを確認します。

Oracle Ultra Search プロパティの設定

ドキュメントを索引付けした後で、Oracle Collaboration Suite で Oracle Ultra Search プロパティを設定する必要があります。

Oracle Ultra Search プロパティを設定するには、次のようにします。

1. Oracle Enterprise Manager を起動し、Oracle Files ドメイン・ページに移動します。
2. 「OCS Search 構成」をクリックして、「OCS Search 構成」ページを表示します。
3. 「Ultra Search の構成」に対して「はい」ラジオ・ボタンを選択します。
4. 「メールの構成」に対して「はい」ラジオ・ボタンを選択します。
5. 「Web メールベース URL」を次のように設定します。
`http://middletier_host:middletier_port/um/traffic_cop`
6. 13-3 ページの「Oracle Ultra Search クローラの構成」で作成したデータベース・スキーマの名前を「Ultra Search スキーマ名」フィールドに入力します。
7. 13-3 ページの「Oracle Ultra Search クローラの構成」でデータベース・スキーマに対して選択したパスワードを「Ultra Search スキーマ・パスワード」に入力し、「パスワードの確認」フィールドで確認します。
8. 13-3 ページの「Oracle Ultra Search クローラの構成」の手順 10 に表示された値の前に `jdb:oracle:thin:@` を追加して「Ultra Search 接続文字列」フィールドに入力します。たとえば、`jdb:oracle:thin:@infrastructure_host:1521:iasdb` と入力します。
9. 「適用」をクリックすると、「OCS Search 構成」が正常に更新されたことを示す確認メッセージが表示されます。
10. 「OCS Search 構成」を変更した後で、OC4J_iFS_files インスタンスを再起動する必要があります。Oracle Enterprise Manager から再起動するか、コマンドラインから次のコマンドを実行できます。

```
opmnctl restartproc gid=OC4J_iFS_files
```

電子メールを検索可能に設定

Oracle Ultra Search で電子メールを検索可能にするには、電子メールを索引付けし、HouseKeeping プロセスが電子メールのテキスト索引を定期的に同期するようにします。

この項の内容は次のとおりです。

- [電子メールの索引付け](#)
- [HouseKeeping プロセスの構成](#)

電子メールの索引付け

作成されたユーザーに対して電子メールを索引付けするには、ドメイン・レベルで次のようにします。

1. 管理者権限を持つユーザーとして Webmail クライアントにログインします。
2. 「管理」タブをクリックします。
3. 「ドメイン」タブをクリックします。
4. 「ドメイン設定」が選択されていることを確認します。
5. 適切な「システム」および「ドメイン」をそれぞれのドロップダウン・リストから選択し、「送信」をクリックします。
6. 「メール・ユーザー索引タイプ」を「テキスト索引」に設定し、「送信」をクリックします。

ドメイン・レベルで前述の変更を行う前に作成したユーザーに対して電子メールを索引付けするには、次のように個別に行う必要があります。

注意： 新規電子メールのみ索引付けされます。「テキストの同期化」を有効にする前に送信された電子メールは索引付けされません。

1. 管理者権限を持つ電子メール管理者として Webmail クライアントにログインします。
2. 「管理」タブをクリックします。
3. 「ユーザー」タブをクリックします。
4. 「デフォルトの新規ユーザー」をクリックします。
5. 既存のユーザーの検索基準を入力し、ドロップダウン・リストから適切な電子メール・ドメインを指定して、「実行」をクリックします。
6. ユーザー ID をクリックします。
7. 「メール・ユーザー索引タイプ」を「テキスト索引」に設定し、「変更」をクリックします。

HouseKeeping プロセスの構成

HouseKeeping プロセスを構成するには、次のようにします。

1. Oracle Enterprise Manager を使用して、「ハウスキーピング」ページに移動します。
2. 「作成」または「類似作成」をクリックして、新規 Oracle Email ハウスキーピング・インスタンスを作成します。

3. 新規ハウスキーピング・インスタンスをクリックしてパラメータ画面を表示し、「テキストの同期化」を「使用可能」に設定します。
4. 「ブルーニング」オプションと「コレクション」オプションを使用不可にします。
5. 「プロセス・スリープ継続時間」フィールドに、索引付けするメッセージを HouseKeeper がキューに入れる頻度（分単位）を入力します。たとえば、索引付けするメッセージを HouseKeeper が 3 分おきにキューに入れるようにするには、フィールドに「3」と入力します。

注意： クライアントが新規メールをチェックするのと同じ頻度（5 分など）で HouseKeeper がメッセージを索引付けするよう設定してください。

6. 「実行モード」を「デーモン」に設定します。
7. 「適用」をクリックします。
8. 「ハウスキーピング」ページに戻ります。
9. 「起動」をクリックします。

継続プロセスとして、ハウスキーピングは索引付けのために Oracle Text に新規に到着したメッセージを定期的に収集します。

OC4J_iFS_files の再起動

新しい一括検索設定は、OC4J_iFS_files システム・コンポーネントが再起動されるまで使用されません。

OC4J_iFS_files システム・コンポーネントを再起動するには、次のようにします。

1. Oracle Enterprise Manager の「OCS Search 構成」ページで、サブタブ・バーの下にあるナビゲーション・パスで最初のリンクをクリックします。
2. OC4J_iFS_files システム・コンポーネントの横にあるラジオ・ボタンを選択します。
3. 「再起動」をクリックします。
4. 「はい」をクリックして、再起動することを確認します。
5. 「OK」をクリックして再起動メッセージを確認します。

Oracle Ultra Search のテスト

Oracle Ultra Search をテストするには、次のようにします。

1. 次の URL に移動し、「Oracle Files 検索」ウィンドウを表示します。
`http://middletier_host:middletier_port/files/app/FederatedSearch`
2. テスト・ユーザーとしてログインし、「一般検索」ページを表示します。
3. 「オブジェクト名」フィールドに、検索する名前を入力します。
4. 「コンテンツ」フィールドに、検索するコンテンツを入力します。
5. 「ユーザー名」フィールドに、検索するコンテンツの所有者名を入力します。
6. 「日付」ドロップダウン・リストから比較演算子を選択し、検索する日付文字列を関連フィールドに入力します。
7. 「場所」フィールドで「ファイル」、「Web」またはその両方を選択して、検索するソースを指定します。
8. 検索基準を入力した後で、「検索」をクリックします。

Oracle Files コンテンツまたは Oracle Email を検索するには、Oracle Ultra Search でこれらをソースとして構成します。

Oracle Web Conferencing の構成

この章では、Oracle Web Conferencing のインストール後の構成タスクの概要を説明します。Oracle Web Conferencing の配置および構成の詳細は、『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』を参照してください。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Web Conferencing 配置の概要](#)
- [Web Conferencing プロセスの手動による起動および停止](#)
- [Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントの構成](#)

Oracle Web Conferencing 配置の概要

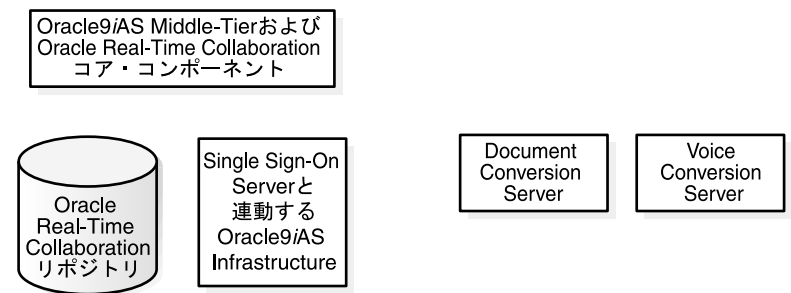
Oracle Web Conferencing システムには、次のコンポーネントが含まれています。

- Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネント : Web Conferencing の中心機能を提供します。
- Document Conversion Server: 会議中に共有する必要がある Microsoft Office ドキュメントを変換します。
- Voice Conversion Server: 会議中に音声データをストリーミングします。
- Oracle9iAS データベースに存在する Oracle Real-Time Collaboration データベース・スキーマのセット

また、Oracle Web Conferencing システムは、Oracle9iAS Infrastructure システムと連動して、ユーザー・サインオンの管理および Oracle Internet Directory とのユーザー情報の同期化を行います。

図 14-1 「Oracle Real-Time Collaboration の基本コンポーネント」に、Web Conferencing に必要なコンポーネントを示します。

図 14-1 Oracle Real-Time Collaboration の基本コンポーネント

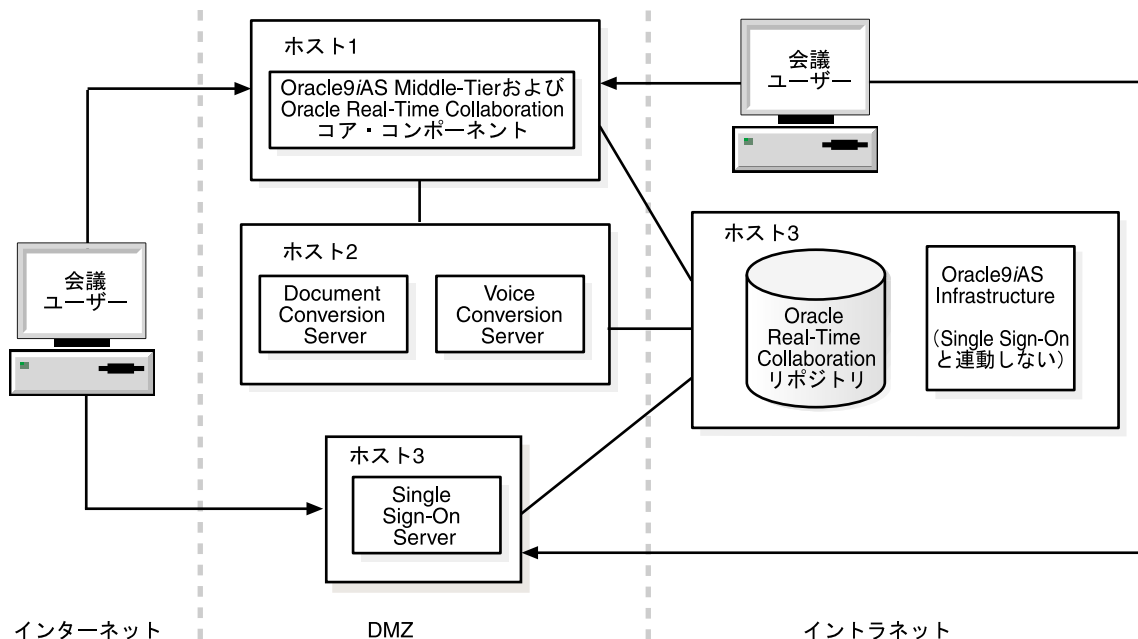


Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネント、Document Conversion Server および Voice Conversion Server は、Oracle9iAS の中間層システムにインストールされます。Document Conversion Server および Voice Conversion Server は、Microsoft Windows および Microsoft Office を実行しているコンピュータにインストールする必要がありますが、コア・コンポーネントや付属のデータベースおよびインフラストラクチャ・システムは、Solaris、HP-UX、AIX、Linux、Windows のいずれのシステムにもインストールできます。Voice Conversion Server には、第 2 章「インストールの準備」で説明したその他のハードウェア要件があります。付属のデータベースおよびインフラストラクチャ・システムは、コア・コンポーネントとともにインストールすることもできますが、ほとんどの場合、別のデータベース・ホストにインストールされます。

ただし、通常、ファイアウォールの背後のセキュアなイントラネット・エリア、ファイアウォールとパブリック・インターネット間の DMZ（非武装地帯）、イントラネット内とインターネット外の両方の、インターネット上の Web Conferencing ユーザーを含む企業のイントラネットで会議サービスをサポートする場合は、いくつかの点について注意する必要があります。

図 14-2 「Oracle Real-Time Collaboration の配置例」に、ファイアウォール外のユーザーにアクセスを許可するために、会議に必要なコンポーネント（会議に参加するユーザーの認証に使用する Single Sign-On Server など）を DMZ の中間層システムに配置した例を示します。イントラネットまたは DMZ 内のユーザーも、必要なすべての会議コンポーネントにアクセスできます。

図 14-2 Oracle Real-Time Collaboration の配置例



Single Sign-On Server と Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントは、必要に応じて同じ中間層システムに配置できます。Single Sign-On Server と Oracle9iAS Infrastructure は、両方が DMZ 内に配置されてインターネット・ユーザーにサービスを提供する場合、同じシステムに配置できます。リポジトリと Oracle9iAS Infrastructure は、別々のマシンにも同じマシンにも配置できます。Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントと同じマシンにも配置できます。

Oracle Web Conferencing の様々な機能を相互に動作するには、次の必須の関連付けを行う必要があります。これらのすべての関連付けは、インストール時に作成されます。

- **Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントから Oracle Real-Time Collaboration リポジトリ**：この関連付けは、インストール時に行います。
- **Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントから Oracle9iAS Infrastructure**：この関連付けは、インストール時に行います。
- **Document Conversion Server および Voice Conversion Server から Oracle Real-Time Collaboration リポジトリ**：この関連付けは、インストール時に行います。

Web Conferencing プロセスの手動による起動および停止

Oracle Web Conferencing で使用される Real-Time Collaboration コンポーネントおよびその他の Oracle コンポーネントは、インストール時に起動されます。この項では、なんらかの理由で、このプロセスを起動または停止する必要がある場合の手順を説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Web Conferencing 用 Oracle9iAS コンポーネントの起動および停止](#)
- [Oracle Real-Time Collaboration インスタンスの起動および停止](#)

この項では、dcmctl および imtctl ユーティリティの使用方法について説明します。これらのコマンドの詳細は、次のマニュアルを参照してください。

関連項目： dcmctl の詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

関連項目： imtctl の詳細は、『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』を参照してください。

Web Conferencing 用 Oracle9iAS コンポーネントの起動および停止

Oracle Web Conferencing システムでは、Oracle Web Conferencing の J2EE アプリケーション (OC4J_immeeting)、Oracle HTTP Server、Oracle Process Management and Notification などのいくつかの Oracle9iAS コンポーネントが使用されます。この項では、必要に応じて、これらのプロセスを起動または停止する方法について説明します。

1. プロセスのステータスを確認するには、Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントがインストールされているすべてのサーバーに対して dcmctl getState コマンドを使用します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl getState -v
```


2. OC4J_imeeting を起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl start -co OC4J_imeeting -t -v 120
```
3. Oracle HTTP Server を起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl start -ct ohs -v -t120
```
4. Oracle Process Monitor and Notification システムを起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl start -ct opmn
```
5. 前述のいずれかのプロセスを停止するには、start を stop に置き換えて前述のコマンドを入力します。

Oracle Real-Time Collaboration インスタンスの起動および停止

すべての Real-Time Collaboration プロセスは、インストール時にインストーラによって自動的に起動されます。インストール時以外の場合でも、Web Conferencing コンポーネントがインストールされている各インスタンスに対して imtctl ユーティリティを使用して、すべての Web Conferencing のコンポーネントを起動または停止できます。

1. Oracle Real-Time Collaboration コンポーネントのステータスを確認するには、imtctl getState コマンドを使用します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl getState
```
2. Real-Time Collaboration のインスタンスを起動するには、インスタンスが構成されている各マシンで、次の start コマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl start
```

会議中にドキュメントの共有および音声の配信を行うためのドキュメント変換のサポートに使用する Document Conversion Server または Voice Conversion Server は、Windows マシンにインストールされます。これらのサーバーを起動するコマンドは、次のとおりです。

```
%ORACLE_HOME%\imeeting\bin\imtctl start
```

3. Web Conferencing コンポーネントを停止するには、stop コマンドを使用します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl stop
```

Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントの構成

Oracle Web Conferencing コア・コンポーネント、Document Conversion Server、Voice Conversion Server のインスタンスなどの Oracle Web Conferencing システムをインストールする場合は、次の 2 種類の構成タスクを実行します。

- **システム・タスク**：これらのタスクは、Oracle Web Conferencing システムに対して 1 回実行する必要があります。ほとんどの場合、新規インスタンスがシステムに追加される時にこれらの手順を繰り返す必要はありません。ただし、グローバル設定を使用したり、特定のインスタンスに対してオーバーライドしたりできます。
- **インスタンス・タスク**：これらのタスクは、インスタンスごとに実行する必要があります。実行する必要がある特定のタスクのセットは、システムの配置方法（インターネット接続の許可、SSL セキュリティの有効化など）によって決定されます。

表 14-1 に、実行する必要がある様々なタスクを示します。

表 14-1 タスクのチェックリスト

タスク	必要な理由	タスクの種類
Oracle HTTP Server との統合	Oracle Web Conferencing の各インスタンスは、そのインスタンスに関連付けられている Oracle HTTP Server と統合する必要があります。これにより、リモート・ファイアウォールの背後にいるイントラネット・ユーザーにアクセスできます。	インスタンス・タスク
定期的な監視の設定	Oracle Web Conferencing の各インスタンスを定期的に監視し、結果をアラート管理システムにプラグインできます。	インスタンス・タスク
既存のプロキシ・サーバーとの統合	Oracle Web Conferencing は、Oracle Web Conferencing コンソールで使用するには既存のプロキシ設定と統合する必要があります。これには、共有ブラウズ機能およびクロス・インスタンス HTTP ベース診断が含まれます。	システム・タスク
既存の電子メールとの統合	会議の電子メール招待を送信するには、Oracle Web Conferencing を電子メール・インフラストラクチャと統合する必要があります。	システム・タスク
レポートのための Oracle Web Conferencing の構成	Oracle Web Conferencing では、レポートを自動生成して電子メールで送信できます。	システム・タスク
管理者への businessadmin ロールの割当て	管理者アカウントを割り当て、管理者が Oracle Web Conferencing アプリケーションで管理ページを表示できるようにする必要があります。	システム・タスク

これらのタスクの詳細は、『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』を参照してください。

第 IV 部

付録

第 IV 部は、次の付録で構成されています。

- 付録 A 「Java Access Bridge のインストール」
- 付録 B 「インストール・チェックリスト」
- 付録 C 「トラブルシューティング」
- 付録 D 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」
- 付録 E 「Windows サービス」
- 付録 F 「スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール」
- 付録 G 「Oracle Collaboration Suite のクライアントのインストール」

Java Access Bridge のインストール

この付録では、Java Access Bridge のインストールに必要な手順を説明します。

この付録の内容は次のとおりです。

- [Java Access Bridge の設定](#)
- [JRE 1.3.1 に対する設定](#)
- [JRE 1.1.8 に対する設定](#)

JRE 1.3.1 に対する設定

Java Access Bridge を JRE 1.3.1 で設定するには、1 枚目の Oracle Collaboration Suite の CD-ROM にあるバッチ・ファイルを実行します。バッチ・ファイルは、次の場所にあります。

```
first_install_CD-ROM¥install¥win32¥access_setup.bat
```

JRE 1.1.8 に対する設定

次の項では、Java Access Bridge を JRE 1.1.8 で使用する方法を説明します。

- [Oracle Universal Installer に対する設定](#)
- [インストール済 Oracle コンポーネントの設定](#)

Oracle Universal Installer に対する設定

Oracle コンポーネントをインストールする前に Java Access Bridge をインストールおよび構成して、補助テクノロジーが Oracle Universal Installer 画面を読み取れるようにします。

Java Access Bridge をインストールするには、次のようにします。

1. Java Access Bridge のインストールを開始する前に、実行されている補助テクノロジー・ソフトウェアを終了します。
2. 1 枚目の Oracle Collaboration Suite コンポーネントの CD-ROM を挿入します。
3. ¥AccessBridge¥accessbridge1_0_2.zip をハード・ドライブ上にコピーします。
4. ファイルをコンピュータのハード・ドライブに展開します。次に例を示します。

```
c:¥
```

5. access-bridge.jar および jaccess-1_1.jar 情報をユーザー環境変数 CLASSPATH に追加します。
 - a. Windows システムの「コントロール パネル」を開きます。Windows NT または Windows 2000 の場合は、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「システム」を選択します。
 - Windows NT では、「環境」タブをクリックします。
 - Windows 2000 では、「詳細」タブをクリックします。次に、「環境変数」をクリックします。

- b. 次のパスをユーザー環境変数 CLASSPATH に追加します。

```
c:¥AccessBridge-1_0_2fcs¥installer¥installerFiles¥access-bridge.jar
c:¥AccessBridge-1_0_2fcs¥installer¥installerFiles¥jaccess-1_1.jar
```

c:¥AccessBridge-1_0_2fcs は、コンピュータのハード・ドライブ上の Java Access Bridge の場所へのフルパスです。

6. JavaAccessBridge.dll および WindowsAccessBridge.dll を次の場所からコピーします。

```
c:¥AccessBridge-1_0_2fcs¥installer¥installerFiles¥
```

コピー先は次のようになります。

```
%SystemRoot%¥system32¥
```

インストールが成功した後、Java Access Bridge ドキュメントは次の場所にあります。

```
¥AccessBridge-1_0_2fcs¥doc
```

インストール済 Oracle コンポーネントの設定

Oracle コンポーネントをインストールした後に Java Access Bridge for Windows をインストールおよび構成して、補助テクノロジーで Oracle コンポーネント画面を読み取れるようにします。

Java Access Bridge をインストールするには、次のようにします。

1. 1 枚目の Oracle Collaboration Suite コンポーネントの CD-ROM を挿入します。
2. ¥AccessBridge¥accessbridge1_0_2.zip をハード・ドライブ上にコピーします。
3. ファイルをコンピュータのハード・ドライブに展開します。次に例を示します。

```
c:¥
```

4. Java Access Bridge を Oracle コンポーネントで使用されている JRE 1.1.8 のサブディレクトリにインストールします。デフォルトでは、Oracle で使用される JRE 1.1.8 は次の場所にインストールされます。

```
SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8
```

表 A-1 に、コンピュータのハード・ドライブにある Java Access Bridge の場所から、Oracle コンポーネントで使用される JRE の適切なサブディレクトリにコピーするファイルをリストします。

表 A-1 サブディレクトリへのファイルのコピー

コピー対象	コピー先
¥AccessBridge-1_0_2fcs¥installer¥installerFiles¥jaccess-1_1.jar	¥lib¥
¥AccessBridge-1_0_2fcs¥access-bridge.jar	¥lib¥
¥AccessBridge-1_0_2fcs¥JavaAccessBridge.dll	¥bin¥
¥AccessBridge-1_0_2fcs¥WindowsAccessBridge.dll	¥bin¥

1. インストール先フォルダにある jaccess-1_1.jar の名前を jaccess.jar に変更します。
2. テキスト・エディタを使用して、Oracle コンポーネントで使用される JRE 1.1.8 のサブディレクトリにある ¥lib¥awt.properties ファイルを開きます。
3. awt.properties ファイルに次の行を追加します。

```
AWT.EventQueueClass=com.cun.java.accessibility.util.EventQueueMonitor
AWT.assistive_technologies=com.sun.java.accessibility.AccessBridge
```

インストールが成功した後、Java Access Bridge ドキュメントは次の場所にあります。

¥AccessBridge-1_0_2fcs¥doc

Java Access Bridge を使用するように Oracle コンポーネントを構成するには、次のようにします。

インストールされている Java Access Bridge ファイルを示すようにシステム環境変数 ORACLE_OEM_CLASSPATH を設定します。

1. 「システムのプロパティ」を開きます。Windows NT または Windows 2000 の場合は、「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。
Windows NT の場合：
 - a. 「環境」タブをクリックします。
 - b. 「システム変数」リストで変数を選択します。
 - c. 「変数」フィールドに ORACLE_OEM_CLASSPATH を入力します。

- d. 「値」フィールドに `jaccess.jar` および `access-bridge.jar` のフルパスを入力します。たとえば、JRE 1.1.8 がデフォルトの場所にインストールされている場合、パスは次のようになります。

```
SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib¥jaccess.jar;
SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib¥access-bridge.jar
```

- e. 「設定」をクリックします。

- f. 「OK」をクリックします。

Windows 2000 の場合：

- a. 「詳細」タブをクリックします。

- b. 「環境変数」をクリックします。

「環境変数」ダイアログが表示されます。

- c. 「システム環境変数」リストの下にある「新規」ボタンをクリックします。

「新しいシステム変数」ダイアログが表示されます。

- d. 「変数名」フィールドに `ORACLE_OEM_CLASSPATH` を入力します。

- e. 「変数値」フィールドに `jaccess.jar` および `access-bridge.jar` のフルパスを入力します。たとえば、JRE 1.1.8 がデフォルトの場所にインストールされている場合、パスは次のようになります。

```
SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib¥jaccess.jar;
SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib¥access-bridge.jar
```

- f. 「システムのプロパティ」が終了するまで「OK」をクリックします。

Java Access Bridge の設定

この項では、画面リーダーを使用するために Oracle コンポーネントを有効にするための設定情報を示します。

Java Access Bridge は、Windows プラットフォームで実行されている Java アプリケーションを読み取るための JAWS 画面リーダーなどの補助テクノロジーを有効にします。補助テクノロジーは、Oracle Universal Installer や Oracle Enterprise Manager などの Java ベースのインタフェースを読み取ることができます。

Oracle Collaboration Suite インストールの CD-ROM には、インストール時に Oracle Universal Installer で使用される 2 つの異なるバージョンの Java Runtime Environment (JRE) が含まれています。CD-ROM には、JRE 1.3.1 および JRE 1.1.8 が含まれています。JRE は、インストール時に Java Access Bridge を使用できるようにします。

次の手順を完了して、各 JRE に対して Java Access Bridge をインストールおよび構成します。

注意： Java Access Bridge は、次のインストール CD の 1 枚目の CD-ROM にあります。

- Oracle9iAS Infrastructure
 - Oracle Collaboration Suite Information Storage
 - Oracle Collaboration Suite
-
-

インストール・チェックリスト

この付録では、Oracle Collaboration Suite および Oracle Files Configuration Assistant の 3 つのインストールのチェックリストを示します。これらのチェックリストには、各インストールおよび構成のプロンプトで入力求められる情報のタイプを示します。

この付録の内容は次のとおりです。

- [Oracle9iAS Infrastructure のインストール・チェックリスト](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール・チェックリスト](#)
- [Oracle Collaboration Suite のインストール・チェックリスト](#)
- [Oracle Files の構成チェックリスト](#)

Oracle9iAS Infrastructure のインストール・チェックリスト

表 B-1 に、Oracle9iAS Infrastructure のインストールに必要な情報を示します。操作を開始する前に、示されたインストール情報に対する値を「ユーザー固有情報」欄に記入してください。

表 B-1 Oracle9iAS Infrastructure のインストール情報

情報	値の例	ユーザー固有情報
Oracle のベース・ディレクトリ ¹	/private/oraInventory	
Oracle ホームの位置	/private/orainf	
OSDBA グループ ¹ (2-21 ページの「権限が付与されたグループの UNIX グループ名」を参照)	svrtech	
OSOPER グループ ¹ (2-21 ページの「権限が付与されたグループの UNIX グループ名」を参照)	svrtech	
インスタンス名	instance1	
ias_admin パスワード	oracle1	
Oracle9iAS Single Sign-On Server のホスト名 ²	ocs.us.oracle.com	
Oracle9iAS Single Sign-On のポート番号 ² (付録 D 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」を参照)	7777	
Oracle Internet Directory のホスト名	ocs.us.oracle.com	
Oracle Internet Directory のポート番号 (付録 D 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」を参照)	4032	
Oracle Internet Directory のユーザー名	cn=orcladmin	

表 B-1 Oracle9iAS Infrastructure のインストール情報（続き）

情報	値の例	ユーザー固有情報
Oracle Internet Directory のパスワード	oracleadmin	
データベース・キャラクタ・セット	UTF8	

¹ Oracle ソフトウェアを初めてコンピュータにインストールするときに必要です。

² Oracle Collaboration Suite のインストールに必要です。

Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール・チェックリスト

表 B-2 に、Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストールに必要な情報を示します。操作を開始する前に、示されたインストール情報に対する値を「ユーザー固有情報」欄に記入してください。

表 B-2 Information Storage のインストール情報

情報	値の例	ユーザー固有情報
Oracle のベース・ディレクトリ ¹	/private/oraInventory	
Oracle ホームの位置	/private/orastore	
OSDBA グループ ¹ (2-21 ページの「権限が付与されたグループの UNIX グループ名」を参照)	svrtech	
OSOPER グループ ¹ (2-21 ページの「権限が付与されたグループの UNIX グループ名」を参照)	svrtech	
グローバル・データベース名および SID 名	instance1	
データベース・キャラクタ・セット	UTF8	UTF8 ²

¹ Oracle ソフトウェアを初めてコンピュータにインストールするときに必要です。

² このリリースの Oracle Collaboration Suite では、Oracle Email および Oracle Files Information Store のデフォルトのキャラクタ・セットは UTF8 です。

Oracle Collaboration Suite のインストール・チェックリスト

表 B-3 に、Oracle Collaboration Suite のインストールに必要な情報を示します。操作を開始する前に、示されたインストール情報に対する値を「ユーザー固有情報」欄に記入してください。

表 B-3 Oracle Collaboration Suite のインストール情報

情報	値の例	ユーザー固有情報
Oracle のベース・ディレクトリ ¹	/private/oraInventory	
Oracle ホームの位置	/private/oraocs	
OSDBA グループ ¹ (2-21 ページの「権限が付与されたグループの UNIX グループ名」を参照)	svrtech	
OSOPER グループ ¹ (2-21 ページの「権限が付与されたグループの UNIX グループ名」を参照)	svrtech	
多言語サポート (5-12 ページの「Oracle Universal Installer の起動」を参照)	runInstaller	
インスタンス名		
ias_admin パスワード	oracle1	
Oracle9iAS Single Sign-On Server のホスト名 ²	ocs.us.oracle.com	
Oracle9iAS Single Sign-On のポート番号 ² (付録 D 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」を参照)	7777	
Oracle Internet Directory のホスト名	ocs.us.oracle.com	
Oracle Internet Directory のポート番号 (付録 D 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」を参照)	4032	

表 B-3 Oracle Collaboration Suite のインストール情報（続き）

情報	値の例	ユーザー固有情報
Oracle Internet Directory のユーザー名	cn=orcladmin	
Oracle Internet Directory のパスワード	oracledadmin	

¹ Oracle ソフトウェアを初めてコンピュータにインストールするときに必要です。

² Oracle Collaboration Suite のインストールに必要です。

Oracle Files の構成チェックリスト

表 B-4 に、Oracle Files の構成に必要な情報を示します。操作を開始する前に、示された構成情報に対する値を「ユーザー固有情報」欄に記入してください。

表 B-4 Oracle Files の構成情報

情報	値の例	ユーザー固有情報
スキーマ名	IFSSYS	
スキーマのパスワード		
Oracle Files の SYSTEM ユーザー・パスワード		
Oracle Files の site_admin ユーザー・パスワード		
データベース・ホスト名	deploy.mycompany.com	
データベース・リスナーのポート	1521	
データベース・サービス名	storage.deploy.mycompany.com	
データベースの SYS ユーザー・パスワード		
HTTP ホスト名	files.mycompany.com	
SMTP サーバー名	smtp.mycompany.com	
サイト管理者の電子メール・アドレス	admin@mycompany.com	
Oracle Internet Directory ルート Oracle コンテキスト	cn=OracleContext	
ローカル・ホスト名	local.mycompany.com	

表 B-4 Oracle Files の構成情報（続き）

情報	値の例	ユーザー固有情報
ノード名	local.mycompany.com Node	
HTTP ノード名	local.mycompany.com HTTP Node	
Oracle Files プロトコル・サーバー		<div><input type="checkbox"/> FTP</div> <div><input type="checkbox"/> NFS</div> <div><input type="checkbox"/> AFP</div> <div><input type="checkbox"/> SMB</div>

トラブルシューティング

この付録では、一般的なインストールの問題および解決策について説明します。

この付録の内容は次のとおりです。

- [Oracle Collaboration Suite Web Client 構成のトラブルシューティング](#)
- [Oracle Files のインストールのトラブルシューティング](#)
- [Real Application Clusters のトラブルシューティング](#)

Oracle Collaboration Suite Web Client 構成のトラブルシューティング

ユーザーが Oracle Collaboration Suite にログインし、Oracle Collaboration Suite ホーム・ページではなく汎用 Oracle9iAS Portal ページが表示される場合は、次のようにします。

1. 次のように、ユーザーが Oracle Collaboration Suite のメンバーであることを確認します。

- a. 次の URL で Oracle Delegated Administration Services に orcladmin としてログインします。

`http://host_name:port_number/oiddas/`

注意： 標準インストールでは、Oracle Delegated Administration Services は Infrastructure がインストールされている場所に配置されます。

- b. 「ディレクトリ」タブをクリックします。
 - c. ユーザーをユーザー ID (orclguest など) で検索します。
 - d. 検索結果からユーザーを選択し、「編集」をクリックします。
 - e. 「Public グループ割当て」セクションにスクロールし、ユーザーが Oracle Collaboration Suite ユーザー・グループのメンバーであることを確認します。
ユーザーがメンバーでない場合は、**Oracle Collaboration Suite ユーザー・ボックス**をチェックし、「適用」をクリックします。
 - f. Oracle Delegated Administration Services からログアウトします。
2. 次のように、Oracle Collaboration Suite ユーザー・グループがユーザーのデフォルト・グループであることを確認します。
 - a. Oracle9iAS Portal にそのユーザーとしてログインします。たとえば、`http://host_name:port_number/` に移動し、**エンド・ユーザーのログイン**をクリックし、orclguest としてログインします。
 - b. Oracle Collaboration Suite ホーム・ページが表示された場合は、ユーザーが正しくプロビジョニングされているため、この手順の残りの部分を実行する必要はありません。
 - c. Oracle9iAS Portal の「ようこそ」ページが表示された場合は、「アカウント情報」をクリックします。
 - d. 「アカウント情報」ページで、ユーザーのデフォルト・グループが OCS_PORTAL_USERS に設定されていることを確認します。
設定されていない場合は、ユーザーのデフォルト・グループとして OCS_PORTAL_USERS を入力し、「適用」をクリックします。

- e. ユーザーの「デフォルト・ホームページ」が空白であることを確認します。
 - f. 「ホーム」グローバル・ボタンをクリックします。Oracle Collaboration Suite ホーム・ページが表示されます。表示されない場合は、手順3に進みます。
3. Oracle Collaboration Suite ホーム・ページがまだ表示されない場合は、次のようにします。
- a. Oracle9iAS Portal にそのユーザーとしてログインします。たとえば、`http://host_name:port_number/` に移動し、**エンド・ユーザーのログイン**をクリックし、`orclguest` としてログインします。
 - b. Oracle9iAS Portal の「ようこそ」ページが表示された場合は、「**アカウント情報**」をクリックします。
 - c. 「アカウント情報」ページで、ユーザーのデフォルト・グループが `OCS_PORTAL_USERS` に設定されていることを確認します。
設定されていない場合は、ユーザーのデフォルト・グループとして `OCS_PORTAL_USERS` を入力し、「**適用**」をクリックします。
 - d. 「デフォルト・ホームページ」フィールドの横の「**参照ページ**」アイコンをクリックします。
 - e. `OCS_V2_PAGE_GROUP` ページ・グループを探し、クリックして展開します。
 - f. Oracle Collaboration Suite ホーム・ページを探し、「**オブジェクトを戻す**」をクリックします。
 - g. 「**適用**」をクリックします。
 - h. 「ホーム」グローバル・ボタンをクリックすると、正しいホーム・ページが表示されます。

Oracle Files のインストールのトラブルシューティング

ほとんどの構成エラーは、インストール前の手順を適切に実行しなかったことが原因で発生します。次の項では、いくつかの一般的なインストールの問題、その考えられる原因およびその問題の修正方法について説明します。インストールおよび構成のアクションは、次のログ・ファイルに記録されます。

- `$ORACLE_HOME/orainventory/logs/installActions.log` ファイルには、インストール中に発生したすべてのエラーが記録されます。
- `$ORACLE_HOME/ifs/files/log/FilesConfig.log` ファイルには、Oracle Files の構成中に発生したエラーが記録されます。

- `$ORACLE_HOME/ifs/files/log/DBHost_port_ServiceName_SchemaName/midtierhostName_Node.log` は Files ノード・ログ・ファイルです。このファイルを確認して、現在実行されているプロトコル・サーバーおよびエージェントを診断します。プロトコル・サーバーおよびエージェントの起動と停止での問題の診断にも役立ちます。

次に例を示します。

```
/data/mtier/ifs/files/log/ifsqa1_us_oracle_com_1521_ifsqa1service_
myschema/test2-pc_Node.log
```

- `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_iFS_files/application-deployments/files/OC4J_iFS_files_default_island_1/application.log` は、Files HTTP ノード・ログ・ファイルです。このログを確認して、Oracle Files アプリケーションおよび `OC4J_iFS_files` を診断します。このログは、Web ブラウザまたは DAV クライアント（Web フォルダおよび Oracle FileSync）で Oracle Files を使用している場合の問題の診断にも役立ちます。

次に例を示します。

```
/data/mtier/j2ee/OC4J_iFS_files/application-deployments/files/OC4J_iFS_files_
default_island_1/application.log
```

- `$ORACLE_HOME/wf/install/workflow.log` ファイルには、Oracle Workflow の構成中に発生したエラーが記録されます。
- `$ORACLE_HOME/ifs/files/log/ifswfsetup.log` ファイルには、Oracle Workflow と Oracle Files スキーマを統合中に発生したエラーが記録されます。
- `$ORACLE_HOME/ifs/files/log/ifswenablelang.log` ファイルには、Oracle Workflow スキーマで追加言語を有効化中に発生したエラーが記録されます。

この項では、次の問題について説明します。

- データベース・オブジェクトの作成エラー
- データベースに関連するインストール・エラー・メッセージ
- データベース・リソースが不十分なために発生する Oracle Files サーバー障害
- Oracle Text が正しく動作しているかどうかの判断
- `$ORACLE_HOME/ifs/files/log/domain_name/node_name.log` に書き込まれる「Out of database cursors」メッセージ
- 低速なサーバー
- プロトコル・サーバーへの接続不可
- 「503 Service Unavailable」メッセージ

- Oracle Files Configuration Assistant と RAC データベースとの Thin ドライバを使用した接続の確立不可
- Oracle Files Configuration Assistant の「session_max_open_files must be set to 50」エラー・メッセージ
- UNIX でのイメージの破損

データベース・オブジェクトの作成エラー

データベースが実行されていないか使用可能でない、またはリスナーが実行されていません。この場合は、構成前にデータベースおよびリスナーを起動します。

データベースに関連するインストール・エラー・メッセージ

データベースが実行されていないか、または Oracle Text が正しく構成されていません。この場合は、インストール前にデータベースを起動し、tnsnames.ora ファイルおよび listener.ora ファイルを確認します。

データベース・リソースが不十分のために発生する Oracle Files サーバー障害

initSID.ora に指定されている値が小さすぎます。\$ORACLE_HOME/ifs/files/log ディレクトリで、障害サーバーのログ・ファイルを確認します。initSID.ora ファイルを編集（または SPFILE を変更）し、より大きい値を指定します。

Oracle Text が正しく動作しているかどうかの判断

Oracle Files Configuration Assistant は、Oracle Text が正しく動作しているかどうかを判断するために一連の操作を実行します。これらの手順には次のものがあります。

- IFSCTXTEST0 ユーザーの作成とログイン
- Oracle Text 作業環境の作成
- BLOB 列を含む表の作成
- この BLOB 列に基づく Oracle Text 索引の作成
- 表への Word ドキュメントの配置
- Oracle Text 索引の同期化

これらのいずれかの手順に失敗した場合は、Oracle Files Configuration Assistant により、Oracle Text が正しく動作していないことが通知されます。問題の原因は、いくつかの問題に関連している場合があります。テストが失敗した手順を調べるには、次の手順に従います。

注意： スキーマ上で Oracle Text を有効にするために必要な実行可能ファイル `ctxhx` がデータベース内に存在しないため、Windows (64-bit) 用の Oracle9i データベース・サーバー リリース 2 (9.2) に対する Oracle Files の構成は失敗します。

この問題には 2 つの解決方法が考えられます。

- Oracle Files の構成中に、「Oracle Text の検証が失敗しました。」というエラー・メッセージが表示された場合は、Oracle Text を有効にしないで、「OK」をクリックしてスキーマを作成します。
- 独自の `ctxhx` 実行可能ファイルを作成します。詳細は、OTN の次の URL にある『Building a Filter Server for Oracle Text』を参照してください。

<http://otn.oracle.com/products/text/htdocs/FilterServer.htm>

次の手順を実行して、Oracle Text を手動でステップごとにチェックします。

1. DBA ユーザーとしてログインし、次のように `ifsctxtest0` というテスト・ユーザーを作成します。

```
SQL> CREATE USER IFSCCTXTEST0 IDENTIFIED BY IFSCCTXTEST0 DEFAULT TABLESPACE
USERS TEMPORARY TABLESPACE TEMP;
```

```
SQL> GRANT CONNECT,RESOURCE,CTXAPP TO IFSCCTXTEST0;
```

2. `ifsctxtest.doc` ファイルのロード元のディレクトリを作成します。

```
SQL> create or replace directory DIR_TESTCASE as '$ORACLE_
HOME/9ifs/admin/binaries';
```

3. IFSCCTXTEST0 ユーザーに、このディレクトリからの読取りを許可します。

```
SQL> grant read on directory DIR_TESTCASE to IFSCCTXTEST0;
```

4. IFSCCTXTEST0 として接続し、lexer 作業環境を作成します。

```
SQL> exec ctx_ddl.create_preference('mylexer', 'basic_lexer');
```

5. この作業環境に対してテーマ索引付けを使用不可にします。

```
SQL> exec ctx_ddl.set_attribute('mylexer', 'index_themes', 'NO');
```

6. Word ドキュメントを格納する一時表を作成します。

```
SQL> create table ifs_basic_lob_table( id NUMBER PRIMARY KEY, name
VARCHAR2(64),content BLOB );
```

7. BLOB 列に基づいて Oracle Text 索引を作成します。

```
SQL> create index content_i on ifs_basic_lob_table(content) indextype is
ctxsys.context parameters ('lexer mylexer');
```

8. LOB ロケータを含む一時表に行を挿入し、次の PL/SQL ブロックを使用してドキュメントをロードします。

```
SQL> DECLARE
    Dest_loc BLOB;
    Src_loc  BFILE := BFILENAME('DIR_TESTCASE', 'ifsctxtest.doc');
BEGIN
    INSERT INTO ifs_basic_lob_table (id,name,content)
    VALUES (1,'ifsctxtest.doc',EMPTY_BLOB())
    RETURN content INTO dest_loc;
    DBMS_LOB.FILEOPEN(Src_loc, DBMS_LOB.LOB_READONLY);
    DBMS_LOB.LOADFROMFILE(Dest_loc, Src_loc, DBMS_LOB.GETLENGTH(Src_
loc));
    DBMS_LOB.FILECLOSE(Src_loc);
    COMMIT;
END;
/
```

9. 索引を同期化します。

```
SQL> alter index content_i rebuild parameters('sync');
```

10. Word ドキュメントを含む表でコンテンツベースの間合せを実行します。

```
SQL> SELECT id, name FROM ifs_basic_lob_table WHERE CONTAINS
(content,'Protocol') > 0;
```

Oracle Text が正しく動作している場合は、これにより次の行が返されます。

```
ID NAME
-----
1 ifsctxtest.doc
```

エラー・メッセージが返された場合、そのメッセージは何が問題の原因になっているかを示しています。索引の同期化またはコンテンツの検索に失敗した場合は、CTX_USER_INDEX_ERRORS で補足情報 (ifsctxtest0 など) をチェックします。

```
SQL> select * from ctx_user_index_errors;
```

この情報は、可能な解決方法を KROWN で検索するため、またはサポート・アナリストにより適切な診断情報を提供するために使用できます。

Oracle Text の構成の詳細は、Oracle Text のドキュメントおよび『Oracle Files 管理者ガイド』のトラブルシューティングの項を参照してください。

ヒント：

- データベース・サーバーの LD_LIBRARY_PATH に次の場所があることを確認します。

\$ORACLE_HOME/lib (64 ビット・ディストリビューション用)

\$ORACLE_HOME/lib

\$ORACLE_HOME/ctx/lib

\$ORACLE_HOME/ctx/bin

- データベース・リスナーを停止して起動し、変更を適用します。

注意： これらのテストの実行後に、IFSCTXTEST0 ユーザーを忘れずに削除してください。

\$ORACLE_HOME/ifs/files/log/domain_name/node_name.log に書き込まれる「Out of database cursors」メッセージ

initssid.ora の OPEN_CURSORS 値が小さすぎます。OPEN_CURSORS により大きい値を指定して、initssid.ora ファイルを変更するか、SPFILE ファイルを変更します。

低速なサーバー

チューニングが必要です。

関連項目： 『Oracle Files 管理者ガイド』の Oracle Files のトラブルシューティングおよびパフォーマンスに関する章を参照してください。

プロトコル・サーバーへの接続不可

Oracle Files の Web インタフェースにログインできても、一部の Oracle Files プロトコル・サーバーに接続できない場合は、Oracle Files 固有のパスワードを設定する必要があります。Oracle Files 固有のパスワードに関連付けられているプロトコルは、Oracle Files 構成時に選択されています。デフォルトでは、FTP および AFP では、ユーザーが Single Sign-On パスワードではなく Oracle Files 固有のパスワードを使用してログインする必要があります。

http://host_name:port/files/app/ProtocolAccess に接続し、Oracle Files 固有のパスワードをユーザーに対して設定します。

関連項目： プロトコル・サーバーの構成の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

「503 Service Unavailable」メッセージ

このメッセージには 2 つの原因が考えられます。

- OC4J_iFS_files インスタンスが実行されていません。Oracle Files ドメインの起動後に、OC4J_iFS_files プロセスを再起動する必要があります（コマンド `ifstl start` を使用して Oracle Files ドメインを起動します）。

HTTP ログでエラーを確認し、OC4J_iFS_files インスタンスを起動します。
`http://hostname:port/files/app` に接続します。

OC4J_iFS_files プロセスを起動するには、`$ORACLE_HOME/opmn/bin` ディレクトリで次のコマンドを実行します。

```
opmnctl startproc gid=OC4J_iFS_files
```

以前に OC4J_iFS_files プロセスを起動した場合は、次のコマンドを使用してプロセスを再起動します。

```
opmnctl restartproc gid=OC4J_iFS_files
```

- OC4J_iFS_files インスタンスは実行されていますが、インタフェースがまだロード中です。OC4J_iFS_files の起動後、約 1 分待ってから接続してください。

Oracle Files Configuration Assistant と RAC データベースとの Thin ドライバを使用した接続の確立不可

この問題は、Oracle Files Configuration Assistant で Thin JDBC ドライバを使用して SYS 'AS SYSDBA' として RAC データベースとの接続を試行し、失敗した場合に発生します。

この問題を解決するには、新しい SYS ユーザーのパスワードを作成する必要があります。

1. データベース・コンピュータのコマンドラインで、次のコマンドを実行します。

```
orapwd file=$ORACLE_HOME/dba/orapw password=password entries=5
```

ここで、`password` は、SYS ユーザーのパスワードの新しい値です。

2. SQL*Plus で次の 2 つのコマンドを実行して、SYS ユーザーのパスワードを変更します。

```
connect / as sysdba
ALTER USER sys IDENTIFIED BY password
```

ここで、`password` は、手順 1 で指定したパスワードです。

3. `init.ora` ファイルに次の行を追加します。

```
REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE=EXCLUSIVE
```

Oracle Files Configuration Assistant の「session_max_open_files must be set to 50」エラー・メッセージ

initSID.ora ファイルの session_max_open_files 値が正しく設定されていません。initSID.ora ファイルを変更して、session_max_open_files パラメータの値を 50 に設定します。

ファイルを編集し、次の行を追加します。

```
session_max_open_files=50
```

ファイルの編集後に、データベースを停止し、新しい initSID.ora ファイルを使用して再起動します。SQL*Plus で次のコマンドを使用して、データベースを起動します。

```
startup pfile="$ORACLE_HOME/pfile/initSID.ora"
```

Oracle Files Configuration Assistant を実行します。

UNIX でのイメージの破損

Oracle Files では、Oracle UIX (User Interface XML) テクノロジーを使用して Web ページを生成します。UIX は、UI 全体で表示されるイメージ (ボタンやタブなど) を動的に生成します。UIX では、バージョン 1.4 以前の Java 2 Standard Edition (J2SE) の制限事項のため、UNIX プラットフォーム上で動的なイメージを生成するには X サーバー・プロセスが必要になります。

注意： この制限事項は Windows プラットフォームには影響しません。

X サーバーを検索する場合、UIX ランタイムは DISPLAY 環境変数の値に依存します。UNIX ホストで Web Client を実行中、UI のイメージの一部が破損または一貫性を欠いて表示される場合は、Web Client プロセスの DISPLAY 環境変数の値が正しく設定されていない可能性があります。

丸いベージュ色のボタンではなく、システム固有のブラウザ・ボタンで UI ページがレンダリングされるのが、このエラーの一般的な症状です。

Web Client プロセスの DISPLAY 環境変数の値を確認するには、テキスト・エディタで \$ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.conf ファイルを開き、\OC4J_Portal\ というインスタンスのエントリを探します。

```
<oc4j maxRetry="3" instanceName="OC4J_Portal" gid="OC4J_Portal" numProcs="1">
  <environment>
    <prop name="DISPLAY" value="your-host-name:0.0"/>
  </environment>
</oc4j>
```

DISPLAY プロパティの値を、実行中の X サーバー・コンピュータに変更します。

注意： インストール時、Oracle Universal Installer は、インストール・セッション中に検出された DISPLAY 環境変数の値を使用して、opmn.xml 内の DISPLAY プロパティの値を自動的に変更します。Hummingbird Exceed などの X エミュレーション・ソフトウェア搭載のデスクトップ PC などから OUI をリモートで実行すると、この自動検出される値は、使用可能であることが保証されないリモートの X サーバーを指すため、不適切な値になります。最も確実な方法は、中間層のホスト上で X サーバーを作成し、そのサーバーを指すように DISPLAY プロパティを設定する方法です。ご使用のプラットフォーム上で X サーバーを起動する方法については、該当する UNIX のドキュメントを参照してください。

Real Application Clusters のトラブルシューティング

選択したリモート・ノード上でインストールを正常に実行するには、選択したすべてのノードで同一の、書込み可能な Oracle ホームのパスを選択します。そのようなパスを選択しなかった場合は、リモート・ノードでのインストールが失敗します。この失敗を示すエラー・メッセージは表示されません。

デフォルトのポート番号およびポート範囲

この付録では、Oracle Universal Installer によって自動的に割り当てられるポート番号について説明します。

この付録の内容は次のとおりです。

- [ポート割当ての概要](#)
- [コンポーネントのポート番号](#)
- [Oracle のポート使用（コンポーネント別）](#)
- [Oracle のポート使用（ポート番号別）](#)

ポート割当ての概要

Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite は、コンポーネントの構成時に、自動的にコンポーネントにポート番号を割り当てます。ポート番号は、事前に割り当てられた一連のデフォルトのポート番号およびポート範囲内から割り当てられます。

ポート番号は、次の方法で割り当てられます。

1. デフォルトのポート番号が Oracle プロセスまたは Oracle 以外のプロセスですでに使用中であるかどうかを確認されます。
2. デフォルトのポート番号が使用中ではない場合は、そのポート番号がコンポーネントに割り当てられます。
3. デフォルトのポート番号がすでに使用中である場合は、空きポート番号が見つかるまで、ポート範囲内で最も小さい番号から昇順に番号の割当てが試行されます。

コンポーネントのポート番号

Oracle Universal Installer は、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite のインストール中に割り当てられるポートを示す `portlist.ini` というファイルを作成します。インストール・プロセスでは、自動的にすべてのポート競合が検出され、そのコンポーネントに割り当てられた範囲内で代替ポートが選択されます。このファイルは、次の場所にあります。

```
$ORACLE_HOME/install/portlist.ini
```

`portlist.ini` ファイルには、「ポート名 = ポート番号」という形式でコンポーネント・エントリが示されます。次に例を示します。

```
Oracle HTTP Server port = 7777
Oracle HTTP Server SSL port = 4443
Oracle HTTP Server listen port = 7778
Oracle HTTP Server SSL listen port = 4444
Oracle HTTP Server Jserv port = 8007
Enterprise Manager Servlet port = 1810
```

ブラウザで「Oracle Collaboration Suite Welcome」ページにアクセスし、「Ports」タブを選択して、ポート番号を表示することもできます。

```
http://hostname:port_number/
```

ここで、デフォルトの `port_number` は 7777 です。

注意： Oracle Universal Installer は、Oracle Collaboration Suite のインストール中に選択されたコンポーネントに対してポート番号を使用します。その他の Oracle Collaboration Suite インスタンスを追加する場合は、インストール済みのインスタンスが追加インストール時に実行されていることを確認してください。

Oracle9iAS Infrastructure のポート使用

Oracle9iAS Infrastructure をインストールするには、コンピュータでポート 1521 を排他的に使用する必要があります。現行システムのアプリケーションのいずれかがこのポートを使用している場合は、Oracle9iAS Infrastructure をインストールする前に、次のいずれかの操作を実行します。

- ポート 1521 を使用する既存のアプリケーションが存在する場合は、そのアプリケーションが別のポートを使用するように再構成します。
- 既存の Oracle Net Listener および Oracle9i データベースが存在する場合は、Oracle9iAS Infrastructure のインストールを続行します。Oracle9iAS Infrastructure は、既存の Oracle Net Listener を使用します。

Oracle のポート使用（コンポーネント別）

表 D-1 に、Oracle のポートをコンポーネント別に示します。

表 D-1 Oracle のポート使用（コンポーネント別）

コンポーネント	デフォルトのポート番号	ポート番号の範囲
Oracle9iAS Clickstream Intelligence		
Oracle9iAS Clickstream Collector Server	6675	固定
Oracle9iAS Clickstream Collector Agent	6666	固定
Oracle9iAS Clickstream Intelligence Collector Agent	6666	6666 ～ 6674
Oracle9iAS Clickstream Execution Engine	6676	固定
Oracle9iAS Clickstream Intelligence Viewer	Oracle HTTP Server と同じ	Oracle HTTP Server と同じ
Oracle9iAS Clickstream Runtime Administrator	Oracle HTTP Server と同じ	Oracle HTTP Server と同じ
Oracle9iAS Containers for J2EE		
Oracle9iAS Containers for J2EE AJP	3001	3001 ～ 3100

表 D-1 Oracle のポート使用（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート番号	ポート番号の範囲
Oracle9iAS Containers for J2EE RMI	3101	3101 ～ 3200
Java Message Service (JMS) for Oracle9iAS Containers for J2EE	3201	3201 ～ 3300
Oracle9iAS Containers for J2EE HTTP Listener	3301	3301 ～ 3400
Oracle9iAS Forms Services		
Oracle9iAS Forms Services	Oracle HTTP Server と同じ	Oracle HTTP Server と同じ
Oracle HTTP Server		
Oracle HTTP Server - 非 SSL	7777	7777 ～ 7877
Oracle HTTP Server - SSL	4443	4443 ～ 4543
Oracle HTTP Server Listen - 非 SSL	7777	7777 ～ 7877
Oracle HTTP Server - 非 SSL (Oracle9iAS Web Cache がインストールおよび構成されている場合)	7778	7777 ～ 7877
Oracle HTTP Server - SSL	4443	4443 ～ 4543
Oracle HTTP Server - SSL (Oracle9iAS Web Cache がインストールおよび構成されている場合)	4444	4443 ～ 4543
Oracle HTTP Server JServ Servlet Engine	8007	8007 ～ 8107
Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のリクエスト・ポート	6003	6003 ～ 6099
Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のローカル・ポート	6100	6100 ～ 6199
Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のリモート・ポート	6200	6200 ～ 6299
Oracle HTTP Server - Java Object Cache	7000	7000 ～ 7010
Oracle9iAS Portal		
Oracle9iAS Portal	Oracle HTTP Server と同じ	Oracle HTTP Server と同じ
Oracle9iAS Single Sign-On	5000	5000 ～ 5099

表 D-1 Oracle のポート使用（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート番号	ポート番号の範囲
Oracle9iAS Reports Services		
Oracle9iAS Reports Services	3000	3000 ～ 3010
SQL*Net - リリース 6i との下位互換性専用	1950	1950 ～ 1960
Visigenics CORBA - Reports 9i	14000	14000 ～ 14010
Oracle Email		
Oracle Email	5100	5100 ～ 5200
IMAP4	143	固定
IMAP4-SSL	993	固定
POP3	110	固定
POP3-SSL	995	固定
SMTP	25	固定
NNTP	119	固定
NNTP-SSL	563	固定
Oracle9iAS Web Cache		
Oracle9iAS Web Cache HTTP Listen - 非 SSL	7777	7777 ～ 7877
Oracle9iAS Web Cache HTTP Listen - SSL	4443	4443 ～ 4543
Oracle9iAS Web Cache Administration	4000	4000 ～ 4030
Oracle9iAS Wireless		
Oracle9iAS Wireless	Oracle HTTP Server と同じ	Oracle HTTP Server と同じ
Oracle9iAS Wireless PIM 通知ディスプレイ	9000	9000 ～ 9100
Oracle Enterprise Manager		
Oracle Enterprise Manager アプリケーション・サーバー管理サービス	1810、1811	1812 ～ 1820
Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent	1748、1754、1808、1809	固定

表 D-1 Oracle のポート使用（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート番号	ポート番号の範囲
Oracle Management Server	7771、7772、7773	7771 ～ 7773
Oracle Internet Directory		
Oracle Internet Directory	389、4031 ～ 4040	4031 ～ 4040
Oracle Internet Directory - 非 SSL	4032	
Oracle Internet Directory - SSL	636、4031 ～ 4040	4031 ～ 4040
Oracle Calendar		
uniengd（UNIX デーモン）	5730	
unisncd（UNIX デーモン）	5731	
unidasd（UNIX デーモン）	5732	
Oracle Calendar Server Manager	5734	
Oracle Files		
Oracle Files ドメイン・コントローラ	53000 の範囲（自動割当て）	動的
Oracle Files のメイン・ノード	53000 の範囲（自動割当て）	動的
Oracle Files の HTTP ノード	53000 の範囲（自動割当て）	動的
LDAP- 非 SSL	Oracle Internet Directory と同じ	Oracle Internet Directory と同じ
LDAP-SSL	Oracle Internet Directory と同じ	Oracle Internet Directory と同じ
AFP	548	固定
FTP	21	その他の一般的な値： 2100 または 21000
NFS	2049	4048 および 4049 (MOUNT サーバー用)
SMB	139	固定
Oracle Workflow		
TNS	1521	固定

Oracle のポート使用（ポート番号別）

表 D-2 に、Oracle のポートをポート番号の昇順で示します。

表 D-2 Oracle のポート使用（ポート番号別）

ポート番号	コンポーネント
21	Oracle Files - FTP（デフォルト値）
110	Oracle Email - POP
119	Oracle Email - NNTP
139	Oracle Files - SMB
389	LDAP（Oracle Internet Directory）
548	Oracle Files - AFP
563	Oracle Email NNTP - SSL
636	Oracle Internet Directory - SSL
995	Oracle Email POP - SSL
1521	Oracle Workflow - TNS
1748	Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent
1754	Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent
1808	Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent
1809	Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent
1810	Oracle Enterprise Manager アプリケーション・サーバー・サービス
1811	Oracle Enterprise Manager アプリケーション・サーバー・サービス
1950	Oracle9iAS Reports Services SQL*Net
2049	Oracle Files - NFS（デフォルト値）
2070	Oracle9iAS Syndication Server（OSS） - OSS へのアクセス用
3001	Oracle9iAS Containers for J2EE - AJP
3101	Oracle9iAS Containers for J2EE - RMI
3201	Oracle9iAS Containers for J2EE - JMS
3301	Oracle9iAS Containers for J2EE HTTP Listener
4000	Oracle9iAS Web Cache の管理ポート

表 D-2 Oracle のポート使用（ポート番号別）（続き）

ポート番号	コンポーネント
4001	Oracle9iAS Web Cache の無効なポート
4002	Oracle9iAS Web Cache 統計
4031	Oracle Internet Directory SSL
4032	Oracle Internet Directory 非 SSL
4443	Oracle HTTP Server - SSL、Oracle HTTP Server Listen - SSL、Oracle9iAS Web Cache Listen - SSL
4444	Oracle HTTP Server Listen - SSL（Oracle9iAS Web Cache がインストールおよび構成されている場合）
5000	Oracle9iAS Single Sign-On
5100	Oracle Email
5730	Oracle Calendar
5731	Oracle Calendar
5732	Oracle Calendar
5734	Oracle Calendar Server Manager
6003	Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のリクエスト・ポート
6100	Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のローカル・ポート
6200	Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のリモート・ポート
6666	Oracle9iAS Clickstream Collector Agent
6675	Oracle9iAS Clickstream Collector Server
6676	Oracle9iAS Clickstream Execution Engine
7000	Oracle HTTP Server Java Object Cache
7771	Oracle Management Server
7772	Oracle Management Server
7773	Oracle Management Server
7777	Oracle HTTP Server - 非 SSL、Oracle HTTP Server Listen - 非 SSL、Oracle9iAS Web Cache Listen - 非 SSL
7778	Oracle HTTP Server Listen - 非 SSL（Oracle9iAS Web Cache がインストールおよび構成されている場合）

表 D-2 Oracle のポート使用（ポート番号別）（続き）

ポート番号	コンポーネント
8007	Oracle HTTP Server JServ Servlet Engine
9000	Oracle9iAS Wireless PIM 通知ディスパッチャ
14000	Oracle9iAS Reports Services Visigenics - CORBA
16001	Internet Inter-ORB Protocol (IIOP)
53000 の範囲	Oracle Files のドメイン・コントローラおよびノード
53000 の範囲	Oracle Files のメイン・ノード
53000 の範囲	Oracle Files の HTTP ノード

Windows サービス

この付録では、Oracle Collaboration Suite for Windows のインストールでインストール時に作成されるサービスをリストします。

この付録の内容は次のとおりです。

- [Windows サービスへのアクセス](#)
- [Oracle Collaboration Suite インストール時のサービス](#)
- [Oracle Voicemail & Fax インストール時のサービス](#)

Windows サービスへのアクセス

Windows NT でサービスを開くには、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「サービス」を選択します。

Windows 2000 および Windows XP でサービスを開くには、「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。

Oracle Collaboration Suite インストール時のサービス

表 E-1 に、3 つの Oracle Collaboration Suite のインストール時に作成される Windows サービスを示します。

ORACLE_HOME は Oracle ホームの名前を表します。

表 E-1 Oracle Collaboration Suite の Windows サービス

インストール・タイプ	Windows サービス
Oracle9iAS Infrastructure	<ul style="list-style-type: none">Oracle OLAP 9.0.1.0.1 (オンライン分析処理)Oracle OLAP AgentOracleORACLE_HOMEAgentOracleORACLE_HOMEClientCacheOracleORACLE_HOMEEMWebsiteOracleORACLE_HOMEInternetDirectory_SID¹OracleORACLE_HOMEManagementServer²OracleORACLE_HOMEPagingServerOracleORACLE_HOMEProcessManager⁵OracleORACLE_HOMETNSListenerOracleORACLE_HOMEWebCacheOracleORACLE_HOMEWebCacheAdminOracleORACLE_HOMEWebCacheMonOracleServiceSID³

表 E-1 Oracle Collaboration Suite の Windows サービス (続き)

インストール・タイプ	Windows サービス
Oracle Collaboration Suite Information Storage	<ul style="list-style-type: none"> ■ OracleORACLE_HOMEAgent ■ OracleORACLE_HOMEClientCache ■ OracleORACLE_HOMESNMPPeerEncapsulator ■ OracleORACLE_HOMESNMPPeerMasterAgent ■ OracleORACLE_HOMETNSListener⁴ ■ OracleServiceSID⁴
Oracle Collaboration Suite	<ul style="list-style-type: none"> ■ Calendar Corporate-Wide Services ■ Calendar Directory Access Server ■ Calendar Engine ■ Calendar Lock Manager ■ Calendar Synchronous Network Connections ■ OracleORACLE_HOMEAgent ■ OracleORACLE_HOMEClientCache ■ OracleORACLE_HOMEEMWebsite (Enterprise Manager Web site) ■ OracleORACLE_HOMEProcessManager⁵ ■ OracleORACLE_HOMETNSListener ■ OracleORACLE_HOMEWebCache ■ OracleORACLE_HOMEWebCacheAdmin (Web Cache Administrator) ■ OracleORACLE_HOMEWebCacheMon (Web Cache Monitor)

¹ Oracle9iAS Infrastructure のインストール時に Oracle Internet Directory が選択されていない場合は作成されません。

² Oracle9iAS Infrastructure のインストール時に Oracle Management Server が選択されていない場合は作成されません。

³ Oracle9iAS Metadata Repository のインストール時に作成されます。

⁴ データベース構成タイプとして「ソフトウェアのみ」が選択された場合は作成されません。

⁵ Oracle HTTP Server のインストール時に作成されます。

Oracle Voicemail & Fax インストール時のサービス

表 E-2 に、Oracle Voicemail & Fax のインストール時に作成される Windows サービスを示します。

表 E-2 Oracle Voicemail & Fax の Windows サービス

インストール・タイプ	Windows サービス
Oracle Voicemail & Fax	<ul style="list-style-type: none">Oracle Unified Messaging-AttendantOracle Unified Messaging-FaxRecv (Fax)Oracle Unified Messaging-MWI (Message Waiting Indicator)Oracle Unified Messaging-Process ManagerOracle Unified Messaging-RecordingOracle Unified Messaging-RetrievalOracle Unified Messaging-RoutingOracle Unified Messaging-Recovery

スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール

この付録では、Oracle Calendar のコンポーネントをスタンドアロンでインストールするための次のような要件および手順を説明します。

- **Oracle Calendar Server:** Oracle Calendar の他のコンポーネントの実行に必要です。Oracle Calendar Administrator により補足されます。
- **Oracle Calendar アプリケーション・システム:** 次のコンポーネントを制御するアプリケーション・フレームワークです。
 - Oracle Calendar Web Client
 - Oracle Calendar Web Services
 - Oracle Sync Server

この章の説明は、UNIX ベースのシステムに適用されます。

Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システム (OCAS) は、同じホストまたはネットワークで接続された複数の異なるホストにインストールできます。

この付録の内容は次のとおりです。

- システム要件
- インストール前
- インストール
- アップグレード
- インストール後の構成
- Oracle Calendar Deinstallation
- 一般的な問題と対処方法

システム要件

Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムは一緒に別々にもインストールできるため、次以降の項では両方のコンポーネントに共通の要件およびそれぞれに個別の要件を示します。

この項の内容は次のとおりです。

- [共通要件](#)
- [Oracle Calendar Server の要件](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの要件](#)

共通要件

- **オペレーティング・システム** : Oracle Collaboration Suite の要件で説明したように、UNIX ベースのシステム。
- **色** : 最低でも 256 色表示
- **ディスク領域** : 最大 150MB の空きディスク領域がインストールに必要なことがあります。
- **パッチ** : Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit)、HP-UX、Linux x86 では、**Oracle Collaboration Suite** の要件でリストされているのと同じパッチが適用されます。

関連項目 : 2-7 ページの「[オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージ](#)」

Oracle Calendar Server の要件

- **権限** : インストール時に、Oracle Universal Installer ではルート権限でスクリプトを実行することが必要な場合があります。詳細は、Oracle Universal Installer に含まれているドキュメントを参照してください。
- **RAM** : 多数のユーザーまたはサービスを処理するコンピュータには、512MB 以上の RAM が必要と推定されます。厳密な要件を計算するには、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の付録 A「ディスク領域およびメモリー」を参照してください。
- **ディスク領域** : 400MB のディスク領域に加えて、Oracle Calendar データベースおよびログ・ファイル用の領域
- **メッセージ・サーバー** : メール通知用の SMTP メッセージ・サーバー

- **Web ブラウザ：** Oracle Calendar Administrator を使用するために、次のいずれかの Web ブラウザ
 - Internet Explorer 5.5 または 6.0 (Windows のみ)
 - Netscape 7.0
 - Mozilla 1.2
- **カーネル・パラメータ：** UNIX ベース・システムでの Oracle Calendar Server の実行に必要なカーネル・パラメータの詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の付録 B 「Calendar のカーネル・パラメータの調整」を参照してください。

注意： shmsys:shminfo_shmmin パラメータが 1 に設定されていることを確認します。このパラメータは、他のパラメータの値とは異なります。通常、他のパラメータの値は、ホストの既存の値と Calendar 要件の最大値またはその合計です。shmsys:shminfo_shmmin を 1 に設定しない場合、インストール後に Calendar Server を起動できません。

Oracle Calendar アプリケーション・システムの要件

- **Web サーバー：** Oracle HTTP Server または Apache Web Server。Apache Web Server では、Apache 1.3.27 と mod-fastcgi 2.2.12 が必要です。mod-fastcgi 2.2.12 は、Apache Web サイトからはまだ入手できないため、FTP アクセスを介して検索してください。Oracle Calendar スタンドアロンは、Apache 2.x と mod-fastcgi 2.4.x では動作しません。
- **RAM:** 多数のユーザーを処理するコンピュータには、256MB 以上の RAM をお薦めします。
- **ディスク領域：** インストール用の 100MB のディスク領域に加えて、操作の 200MB (linkdb および sessiondb ディスク領域。大規模な配置にはさらに領域が必要です)。
- **Oracle Calendar Web Client ブラウザ：** ユーザーが Oracle Calendar アプリケーション・システムの Oracle Calendar Web Client コンポーネントを使用するには、次のいずれかのブラウザが必要です。
 - Internet Explorer 5.x、6.x (Windows)
 - Internet Explorer 5.x (Macintosh OS 9 のみ)
 - Netscape 6.x、7.x (Linux x86、Macintosh、Windows)
 - Mozilla (Linux x86、Macintosh、Windows)
 - Safari (Macintosh OS X のみ)
 - Lynx 2.8.4 Pre5 (Accessible モード、スタンドアロンのみ)

インストール前

この項では、Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムをインストールする前に知っておく必要のある次のような重要情報を示します。

- [ディレクトリ・サーバーの設定](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムおよびサーバーの個別インストールの計画](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの考慮事項](#)

注意： 以前のバージョンの Oracle Calendar がインストールされている場合は、他のバージョンの処理について F-16 ページの「[アップグレード](#)」を参照してください。

ディレクトリ・サーバーの設定

スタンドアロン・モードでインストールされている場合、Oracle Calendar Server は、サード・パーティの外部ディレクトリ・サーバーで使用できます。LDAP のサポートは、別のコネクタを介して提供されます。

- LDAP Connector 9.0.4 for Sun ONE Directory Server
- LDAP Connector 9.0.4 for OpenLDAP
- LDAP Connector 9.0.4 for Syntegra Aphelion Directory Server
- LDAP Connector 9.0.4 for Critical Path InJoin Directory Server

Oracle Calendar Server をインストールする前に、LDAP コネクタを使用してディレクトリ・スキーマを拡張する必要があります。ディレクトリ・サーバーには、格納する情報を定義するスキーマがあります。これらのスキーマは、オブジェクトおよび属性から構成されます。ディレクトリ・サーバー・スキーマは、Calendar Server で必要なオブジェクトと属性を含むように拡張する必要があります。Oracle Calendar Server スキーマに対するの拡張のリストは、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の付録 H「Calendar のディレクトリ・サーバー・スキーマの拡張機能」を参照してください。

この項の内容は次のとおりです。

- [Sun ONE Directory Server](#)
- [OpenLDAP](#)
- [Syntegra Aphelion Directory Server](#)
- [Critical Path InJoin Directory Server](#)
- [ディレクトリ・サーバーの用語](#)

Sun ONE Directory Server

次の手順は、Sun ONE および iPlanet 5.x Directory Server に適用されます。

1. Oracle Calendar Server パッケージに含まれている tar ファイル `ldapc0904000_SunOne_unix_en_rtm1.tar` からファイルを抽出します。
2. ファイル `SunOne/calendar-schema.ldif` を検索します。
3. このファイルを `ldapmodify` ユーティリティとともに使用して、ディレクトリ・エントリを変更します。

```
% ldapmodify -h host -p port -D Directory_Manager_DN -w Directory_Manager_Password -f "calendar-schema.ldif"
```

4. エラーがレポートされていないことを確認します。

OpenLDAP

次の手順は、OpenLDAP Directory Servers バージョン 2.x 以降に適用されます。

1. Oracle Calendar Server パッケージに含まれている tar ファイル `ldapc0904000_openldap_unix_en_rtm1.tar` からファイルを抽出します。
2. ファイル `openldap/calendar.schema` を検索します。
3. OpenLDAP 構成ディレクトリを探します。UNIX では、通常は `/usr/local/etc/openldap` に設定されます。このディレクトリは、次の例で使用されます。
4. 構成ディレクトリが `/usr/local/etc/openldap` にあるとした場合、ファイル `calendar.schema` を `/usr/local/etc/openldap/schema` にコピーします。
5. ファイル `/usr/local/etc/openldap/slapd.conf` を編集します。
6. 次の内容を含む行を探します。

```
include /usr/local/etc/openldap/schema/cosine.schema
```

7. まだ追加されていない場合は、行を追加します。

```
include /usr/local/etc/openldap/schema/inetorgperson.schema
```

8. 次の行を追加します。

```
include /usr/local/etc/openldap/schema/calendar.schema
```

9. データベース・セクションに、次の行を追加します。

```
index ctcalthitemid pres,eq
```

10. slapd サーバーを再起動します。

Syntegra Aphelion Directory Server

次の手順は、Syntegra Aphelion Directory Server に適用されます。

1. Oracle Calendar Server パッケージに含まれている tar ファイル `ldapc0904000_syntegra_unix_en_rtml.tar` から一時ディレクトリにファイルを抽出します。

一時ディレクトリには、次の 3 つのファイルが含まれている必要があります。

```
syntegra/oidtable.gen_cst  
syntegra/oidtable.oc_cst  
syntegra/oidtable.at_cst
```

2. ディレクトリ・サーバーを準備するには、これらのファイルをインストールして `ctCal` ディレクトリ・オブジェクトを構成する必要があります。これらのファイルの内容（Oracle Calendar Server スキーマのオブジェクト識別子番号、オブジェクト・クラスおよび属性を含む）を、対応する Syntegra Aphelion（オブジェクト識別子）表ファイルに追加します。

```
/usr/var/osi/oidtable.gen  
/usr/var/osi/oidtable.oc  
/usr/var/osi/oidtable.at
```

3. ディレクトリ・サーバーを再起動して、構成変更を有効にします。

Critical Path InJoin Directory Server

次の手順は Critical Path InJoin Directory Server バージョン 4.x に適用され、次の処理を含みます。

- [スキーマの拡張](#)
- [ネーム・バインドの作成](#)
- [Oracle Calendar ベース DN の設定](#)
- [匿名読取りアクセス権の付与（オプション）](#)

スキーマの拡張

1. Oracle Calendar Server パッケージに含まれている tar ファイル `ldapc0904000_injoin_unix_en_rtm1.tar` からステージング・ディレクトリにファイルを抽出します。ディレクトリには、次のファイルが含まれている必要があります。

```
injoin/calendar_acsp
injoin/calendar_admin_aci
injoin/calendar_anonymous_aci
injoin/calendar-attribute.schema
injoin/calendar_local
injoin/calendar-objc.schema
```

2. 場所フィールドに `http://iCon_host:iCon_port` と入力して、iCon 管理ページに移動します。iCon_port は、デフォルトでは 1500 に設定されます。
3. 左側のタブで、「Schema」ナビゲーション・タブをクリックします。
4. 右側のウィンドウで、「Schema Import」をクリックします。
5. ファイル `calendar-attribute.schema` の内容を LDAPv3 フォーマット・テキスト領域の「New attributes」にコピーします。
6. 「Schema Import」をクリックします。
7. 左側のタブで「Schema」ナビゲーション・タブをクリックし、右側のウィンドウで「Schema Import」をクリックします。
8. ファイル `calendar-objc.schema` の内容を LDAPv3 フォーマット・テキスト領域の「New object classes」にコピーします。
9. 「Schema Import」をクリックします。

ネーム・バインドの作成

Oracle Calendar Server には、`ctCalAdmin` および `ctCalResource` という 2 種類の構造化オブジェクト・クラスが導入されています。これらのタイプのエントリが `organizationalUnit` エントリの下に存在するように、ネーム・バインド・レジストリを更新する必要があります。

`ctCalAdmin` のネーム・バインドを作成するには、次のようにします。

1. 場所フィールドに `http://iCon_host:iCon_port` と入力して、iCon 管理ページに移動します。iCon_port は、デフォルトでは 1500 に設定されます。
2. 左側のタブで、「Schema」ナビゲーション・タブをクリックします。

3. 「Create a new name binding」をクリックします。
4. 「Superior」リスト・ボックスから **organizationalUnit** を選択します。
5. 「Subordinate」リスト・ボックスから **ctCalAdmin** を選択します。
6. 「Naming attributes」リスト・ボックスから **ctCalXItemId** を選択します。
7. 「Create Name Binding」をクリックします。

ctCalResource のネーム・バインドの作成:

1. 場所フィールドに `http://iCon_host:iCon_port` と入力して、iCon 管理ページに移動します。iCon_port は、デフォルトでは 1500 に設定されます。
2. 左側のタブで、「Schema」ナビゲーション・タブをクリックします。
3. 「Create a new name binding」をクリックします。
4. 「Superior」リスト・ボックスから **organizationalUnit** を選択します。
5. 「Subordinate」リスト・ボックスから **ctCalResource** を選択します。
6. 「Naming attributes」リスト・ボックスから **commonName** を選択します。
7. 「Create Name Binding」をクリックします。

Oracle Calendar ベース DN の設定

Oracle Calendar Server がインストールされるサブツリーは、Access Control Specific Point (ACSP) サブツリーとして設定する必要があります。ほとんどのインストールでは、すでにこのように設定されています。次の手順では、この設定方法を示します。

1. ファイル `calendar_acsp`、`calendar_anonymous_aci`、`calendar_local` および `calendar_admin_aci` を `dsa` の作業ディレクトリにコピーします。
2. 配置に合わせて `calendar_local` を編集します。

マクロ `ctBaseDN` の値を、Oracle Calendar Server がインストールされる場所 (BASEDN) に設定します。次に例を示します。

```
BASEDN: o=acme,c=us
=ctBaseDN Rc("us") Ro("acme")
BASEDN: ou=School of Law, o=ABC University,c=us
=ctBaseDN Rc("us") Ro("ABC University") Rou("Shool of Law")
```

3. `dsa` 作業ディレクトリに移動します。たとえば、`/opt/ids/Icon/dsa1` などです。
4. コマンド・プロンプトで `odsadmin` を入力することにより、`odsadmin` ディレクトリ・アクセス・ツールを起動します。
5. `bman` と入力して、ディレクトリ・マネージャとしてバインドします。

```
odsadmin> bman
```

6. プロンプトが表示されたら、ディレクトリ・マネージャのパスワードを入力します。
7. Oracle Calendar BASEDN を ACSP にします（まだ設定されていない場合）。

```
odsadmin> run calendar_acsp ~
```

匿名読取りアクセス権の付与（オプション）

Oracle Calendar Server は、検索操作の実行時に匿名で、つまりバインド・ユーザーとしてバインドします。ディレクトリ・サーバーが匿名読取りアクセスを許可しない場合は、Oracle Calendar Server がインストールされるサブツリーへの読取りアクセス権を持つエントリを作成する必要があります。Oracle Calendar Server のインストール時に、このエントリの識別名（DN）とパスワードを指定する必要があります。次の手順では、匿名検索のために読取りアクセス権を付与する方法を示します。

1. `odsadmin` セッションをすでに閉じている場合は、`dsa` 作業ディレクトリから `odsadmin` と入力して再び開きます。
2. `bman` と入力して、ディレクトリ・マネージャとしてバインドします。
3. プロンプトが表示されたら、ディレクトリ・マネージャのパスワードを入力します。
4. 匿名の読取り専用アクセスを許可するように `ACI` を設定するコマンド・ファイルを実行します。これにより、ディレクトリ・サーバーのセキュリティが変更されます。

```
odsadmin> run calendar_anonymous_aci ~
```

ディレクトリ・サーバーの用語

次の表を使用して、インストール時に必要なディレクトリ・サーバー・パラメータと各製品で使用される用語の関係を判断します。

表 F-1 Calendar Server/ ディレクトリ・サーバーの用語

概念の定義	Oracle Calendar Server	Sun ONE Directory Server	Syntegra Aphelion Directory Server	Critical Path InJoin Directory Server
ディレクトリ・サーバーがインストールされるコンピュータ	LDAP ホスト	ディレクトリ・サーバー・ホスト		ディレクトリ・サーバー・ホスト
ディレクトリ・サーバー (LDAP) 接続のポート番号	LDAP ポート	ディレクトリ・サーバー・ポート番号	LDAP デーモン・ポート	ディレクトリ・サーバー・アドレス・ポート番号
検索の実行が開始されるディレクトリ階層内のポイント	ベース DN	BaseDN/ ディレクトリ接尾辞 / 検索ルート	コンテキスト接頭辞の下にある DN	エントリ開始ポイント / コンテキスト接頭辞
ディレクトリの「スーパーユーザー」(無制限のアクセス権限を持つユーザー)	SuperUserDN	RootDN または無制限ユーザー	マネージャ DN	ディレクトリ管理者の DN
無制限アクセス用のパスワード	SuperUserDN パスワード	RootDN または無制限ユーザー・パスワード	マネージャ DN パスワード	ディレクトリ管理者のパスワード
6 つの予約済 Oracle Calendar ユーザー用の、ベース DN からのオフセットの親エントリ	Oracle Calendar Server 管理者の親 DN	なし	なし	なし
6 つの予約済 Oracle Calendar ユーザー用の、ベース DN からのオフセットの新規グループ	Oracle Calendar Server 管理者のグループ DN	なし	なし	なし

Oracle Calendar アプリケーション・システムおよびサーバーの個別インストールの計画

Oracle Universal Installer では、Oracle Calendar アプリケーション・システムおよび Oracle Calendar Server を同じホストにインストールして構成できます。どちらのコンポーネントも、相互のホストおよびポートを参照するように構成されます。ただし、大規模な配置では、Server とアプリケーション・システムを別々のホストにインストールするのが最適です。これは、各ホストでインストーラを実行し、インストールするコンポーネントを選択することで行うことができます。

一般には、Server のインストールから開始する必要があります。アプリケーション・システムのホスト名とポートを求めるプロンプトが表示された場合は、一時的な値を入力する必要があります。アプリケーション・システムをインストールする際に、インストールした Server に関する情報を入力する必要があります。その後で、F-11 ページの「インストール」の説明に従って、サーバーの構成ファイルを編集してリソース承認を有効にする必要があります。

Oracle Calendar 構成ファイルの編集の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

Oracle Calendar アプリケーション・システムの考慮事項

セキュリティ上の理由から、Sync Server コンポーネントは、SSL (https) 接続を介してのみアクセス可能にすることが最適です。Oracle Sync Server は、電話からのアクセスが簡単な独立したホストにインストールすることが必要な場合もあります。ファイアウォールを介した VPN アクセスをサポートしている電話もありますが、サポートしていない電話もあることに注意してください。

また、SSL 接続を介してのみ Web Services を使用することが最適です。

インストール

この項では、Oracle Calendar スタンドアロン・コンポーネントを UNIX ベースのシステムにインストールする方法を説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール](#)
- [Oracle Calendar Server のみのインストール](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムのみのインストール](#)
- [Oracle Calendar の複数インスタンスのインストール](#)
- [Oracle Calendar Configuration Assistant の手動実行](#)

Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール

1. Oracle Calendar インストール・ファイルを一時ディレクトリに抽出またはコピーします。
2. 一時ディレクトリで、次のサブディレクトリに移動します。
./Disk1/

3. 次のコマンドを使用して Oracle Universal Installer を起動します。

```
./runInstaller
```

4. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックし、インストール手順に従います。
5. Solaris および Linux プラットフォームでは、「ファイルの場所の指定」画面で次の場所を選択します。

```
/Source_Path/Disk1/calendar_standalone/Disk1/stage/products.jar
```

この場所は、インストールする製品のパスとして選択します。Oracle Calendar のスタンドアロン・バージョンをインストールするには、このパスを選択する必要があります。

HP プラットフォームでは、手順 4 の完了後にディスク 1 をアンマウントして取り出し、ディスク 5 をマウントします。「ファイルの場所の指定」画面で、次の場所を選択します。

```
/Source_Path/calendar_standalone/stage/products.jar
```

6. 「ファイルの場所の指定」画面で、ORACLE_HOME の名前とパスも入力し、「次へ」をクリックします。74 文字までのパスを入力できます。以前のバージョンの Oracle Calendar がインストールされており、これをアップグレードする場合は、上書きしないでください。
7. インストールするコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします。「Oracle Calendar アプリケーション・システム」を選択しないと、Oracle Calendar Web Client、Sync Server および Web Services はインストールできません。Oracle Calendar は次の場所にインストールされます。

コンポーネント	場所
Oracle Calendar Server	\$ORACLE_HOME/ocal/
Oracle Calendar Administrator	\$ORACLE_HOME/ocad/
Oracle Calendar アプリケーション・システム	\$ORACLE_HOME/ocas/

8. コンピュータのカーネル・パラメータが Oracle Calendar Server の実行には十分でない場合、変更する必要があるパラメータを示す情報ダイアログ・ボックスが開きます。変更を加え、コンピュータを再起動してインストールをやり直す必要があります。必要なカーネル・パラメータの計算の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の付録 B 「Calendar のカーネル・パラメータの調整」を参照してください。

9. Oracle Calendar ユーザーが作業を行うタイム・ゾーンを選択し、「次へ」をクリックします。
10. 使用するディレクトリ・サーバーを選択します。(ディレクトリ・サーバーがない場合は、「内部」を選択します。)
「次へ」をクリックします。F-4 ページの「[ディレクトリ・サーバーの設定](#)」で説明しているように、「ホスト」、「ポート」、「ベース DN」などのディレクトリ・サーバー構成情報の入力を求められます。

注意：「クリティカル・パス InJoin Directory Server」を選択した場合は、次の点に注意してください。

- BASEDN サブツリーの入力を求められた場合は、F-8 ページの「[Oracle Calendar ベース DN の設定](#)」で説明しているように、calendar_local で設定した場所と同じ場所に設定してください。
- ディレクトリ・サーバーの匿名アクセスが無効になっている場合は、「**Anonymous binding permitted**」チェックボックスのチェックを外します。Oracle Calendar の BASEDN サブツリーに対する読取りアクセス権を持つエントリの DN およびパスワードを入力します。
- Oracle Calendar の admin グループ名のプロンプトが表示された場合は、calendar_local ファイルで値を変更していないかぎり、デフォルト値のままにします。

-
11. ディレクトリ・サーバー情報を入力した後で、「Oracle Calendar 管理パスワード」画面のフィールドにパスワードを入力します。
 12. 「Oracle Calendar のノード ID」画面で、ノード ID を入力します。これは、1 ～ 4999 の間の一意の値である必要があります。
 13. Oracle Calendar Server の最初のインストールである場合、「Oracle Calendar のマスター・ノード」画面で「はい」を選択し、現在のインストールをマスター・ノードに指定します。Web Services および Sync Server を動作させるには、ネットワーク上に 1 つのマスター・ノードが必要です。
 14. 「次へ」をクリックし、その他の手順に従って、インストールを完了します。
 15. 以前のバージョンの Oracle Calendar からデータをアップグレードする場合は、F-16 ページの「[アップグレード](#)」に進みます。それ以外の場合は、F-22 ページの「[インストール後の構成](#)」に進みます。

Oracle Calendar Server のみのインストール

Oracle Calendar Server のみのインストール手順は、F-11 ページの「[Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール](#)」の手順とほぼ同様ですが、次の点が異なります。

- 手順7で「**Oracle Calendar Server**」を選択し、「**Oracle Calendar アプリケーション・システム**」は選択しません。
- アプリケーション・システムのホストおよびポートの入力プロンプトが表示されます。これらが不明な場合、一時的に値を入力し、後で `unison.ini` ファイル・サーバーを適切な値に編集します。次に例を示します。

```
[RESOURCE_APPROVAL]
url=http://server:port/ocas-bin/ocas.fcgi
```

Oracle Calendar アプリケーション・システムのみのインストール

Oracle Calendar アプリケーション・システムおよびそのコンポーネントのみのインストール手順は、F-11 ページの「[Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール](#)」の手順とほぼ同様ですが、次の点が異なります。

- 手順7で、「**Oracle Calendar アプリケーション・システム**」およびその任意のコンポーネントを選択し、「**Oracle Calendar Server**」または「**Oracle Calendar Administrator**」は選択しません。
- 手順7の後に、Oracle Calendar Server の「**ホスト**」、「**ポート**」および「**ノードID**」の入力を求めるプロンプトのみ表示されます。これらの値が不明な場合、一時的に値を入力し、後でアプリケーション・システムの `ocas.conf` ファイルで正しい値に編集します。次に例を示します。

```
[CONNECTION]
mode=Host:Engine_Port,node
```

Oracle Calendar の複数インスタンスのインストール

同じインフラストラクチャに Oracle Calendar のインスタンスを2つインストールする場合は (Oracle Calendar Server と Oracle Calendar アプリケーション・システムにそれぞれ2つのインスタンス)、2番目のインスタンスに対して `orclquest` アカウントがプロビジョニングされない場合があります。この状況が発生した場合は、Oracle Calendar アプリケーション・システムの2番目のインスタンスで Oracle Calendar Server の最初のインスタンスを指す必要があります。

この処理を行うには、2 番目のインスタンスの Oracle Calendar アプリケーション・システム構成ファイル（`$ORACLE_HOME/ocas/conf/ocas.conf`）を次のように編集します。

```
[CONNECTION]
mode=host_name:engine_port,node
```

`host_name` は Oracle Calendar Server の最初のインスタンスであり、`node` はマスター・ノードです。

Oracle Calendar Configuration Assistant の手動実行

Oracle Collaboration Suite のインストール・プログラムでは、Oracle Calendar Server Configuration Assistant（Oracle Calendar スタンドアロンをご使用のシステムで動作するように構成するツール）が実行されます。セットアップの問題によってインストール中にエラーが発生した場合（指定したホスト URL を読み取ることができなかった場合など）は、問題を解決した後、この Configuration Assistant を手動で実行する必要があります。

Configuration Assistant を手動で実行するには、次のようにします。

1. 環境変数 `ORACLE_HOME` を、Oracle Calendar のインストール・ディレクトリに設定します。
2. ライブラリ・パスを次のように設定します。

Linux では、`LD_LIBRARY_PATH` を次のように設定します。

```
$ORACLE_HOME/lib:$ORACLE_HOME/ocal/sbin
```

HP では、`SHLIB_PATH` を次のように設定します。

```
$ORACLE_HOME/lib32:$ORACLE_HOME/ocal/sbin
```

3. 次のログ・ファイルを開きます。

```
$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolsDATE_TIME.log
```

4. Configuration Assistant のヘッダーを探します。次にヘッダーの例を示します。

```
-----
Launched configuration assistant 'Calendar Server Configuration Assistant'
-----
```

5. ヘッダーの下に、インストール時に作成されたコマンドをコピーします。このコマンドは、次のような文字列で始まり、

```
/home/myuser/oracle_home/jre...
```

次のような文字列で終わります。

```
... -epw -DSDS OID -portDAS 5736 -DSmgrdn cn=orcladmin -emgrp -mme -ePIM  
-eimt -eclient -tzkey MEZ-1MESZ -silent
```

6. コピーしたコマンドラインを実行します。この場合、次のパラメータを置換文字列に置き換えてください。

パラメータ	置換文字列
-epw	-nodepw <ias_admin_password>
-emgrp	-DSmgrp <DSMgrdn_user_password> (-DSmgrdn cn=orcladmin のように、コマンドラインに DSMgrdn ユーザーを指定します。)
-ecsm	-csmid <password_for_new_csm>

アップグレード

この項では、Oracle Calendar および Oracle Calendar アプリケーション・システムのデータのアップグレード方法を説明します。Oracle Calendar の以前のインストールを削除する前に、これらの指示を読んで従う必要があります。

この項の内容は次のとおりです。

- [Server のアップグレード](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード](#)

注意： アップグレードを実行する前に、新規ソフトウェアの要件に基づいてサイズ計算を再評価することをお薦めします。ディスク領域およびメモリー要件の計算方法の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の付録 A「ディスク領域およびメモリー」を参照してください。機能の追加により、CPU の使用量のハードウェア要件が変更されています。現在インストールされている Oracle Calendar で CPU 使用状況の通常のピークが 60% 以上になることが 1 日に複数回ある場合、新規インストールでは追加の CPU が必要な場合があります。新規 Oracle Calendar Server に対して動作している以前のバージョンの Oracle Calendar アプリケーション・システムが配置に含まれている場合も、CPU 使用率が増加することに注意してください。

Server のアップグレード

次のバージョンから Oracle Calendar Server リリース 2 (9.0.4) にアップグレードできます。

- CorporateTime Server 5.3
- CorporateTime Server 5.4 (Oracle ブランド)
- Oracle Calendar Server 5.5 (Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の一部)

5.3 より前のリリースがインストールされている場合は、リリース 2 (9.0.4) にアップグレードする前に、リリース 5.4 にアップグレードする必要があります。

インストールされているバージョンに応じて、自動アップグレードが可能な場合と手動アップグレードの実行が必要な場合があります。以前のバージョンと共存するように Oracle Calendar をインストールすることもできます。

この項の内容は次のとおりです。

- [サポートされる自動アップグレード・パス](#)
- [サポートされる手動アップグレード・パス](#)
- [共存](#)
- [サーバーのアップグレード](#)

サポートされる自動アップグレード・パス

Oracle Calendar は、次のバージョンから自動的にアップグレードできます。

- 5.4 (または 5.3) 内部からスタンドアロンの 9.0.4 内部
- 5.4 (または 5.3) 外部からスタンドアロンの 9.0.4 外部 (サポートされる 9.0.4 ディレクトリ・サーバーのみ)

サポートされる手動アップグレード・パス

スタンドアロンの 9.0.4 内部からスタンドアロンの 9.0.4 外部にアップグレードする場合は、手動アップグレードを行う必要があります。これには、サポートされるサード・パーティ製ディレクトリ・サーバーのみでの LDAP ディレクトリの手動移行が必要です。次の手順では、iPlanet Directory Server を使用してこれを行う方法を説明します。

手順 1 iPlanet Directory Server を使用した Oracle Calendar スタンドアロンのインストール

iPlanet Directory Server を使用して Oracle Calendar スタンドアロンをインストールする場合は、現行の構成と同じノード・ネットワーク構成 (ノードおよびノード ID) を使用します。

手順 2 iPlanet Directory Server へのユーザーおよびリソース・エントリの移行

ユーザーおよびリソース・エントリは、Oracle Internet Directory から LDIF (LDAP Data Interchange Format) ファイルにエクスポートし、その後 iPlanet Directory Server にインポートする必要があります。設定によっては、リソースの userPassword 属性を iPlanet Directory Server に追加する必要がある場合もあります。

手順 3 .ini ファイルの再構成

Oracle Calendar スタンドアロン外部インストール上の .ini ファイルを更新し、Oracle Calendar スタンドアロン内部インストールの設定と一致させます。

手順 4 Calendar データベースの移行

Calendar データベースの移行では、Calendar ノードを Oracle Calendar スタンドアロン内部インストールから Oracle Calendar スタンドアロン内部インストールへ移動した後、この変更が認識されるようにノード・ネットワークを再構成する必要があります。

共存

現行のインストールを新規バージョンにアップグレードする必要がある大規模な組織では、共存が役立ちます。異なるバージョンのノードとサーバーを接続して同時に実行する機能は、アップグレードの実行に必要なダウン時間の短縮に役立ちます。

異なるバージョンの Oracle Calendar Server 間の共存は、Oracle Calendar Server の統一（同じバージョンの）ネットワークを持つための移行手順としてみなされることに注意する必要があります。異なるバージョンの混在を長期間または永久に維持することはお薦めしません。異なるバージョンの 2 つのサーバーを共存させることには制限があります。たとえば、正しいバージョンのユーティリティは対応するサーバーで使用する必要があります。また、Web Services リリース 9.0.4 は、接続されているすべての Server がリリース 9.0.4 にアップグレードされた場合にのみ動作します。

サポートされる共存バージョンの組合せ

- スタンドアロン 9.0.4 と 5.3 または 5.4（すべて内部、または同じディレクトリに対してすべて外部）

サポートされない共存バージョンの組合せ

- スタンドアロン 9.0.4 と 5.3 より前のリリース
- スタンドアロン 9.0.4 と 5.5 の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3)

サポートされる共存外部 / 内部インストール

共存は、次の外部（LDAP）および内部（LDAP 以外）の組合せに対してサポートされます。

- Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) とスタンドアロン 9.0.4 (DIP を使用した内部または外部)
- スタンドアロン 9.0.4 外部とスタンドアロン 9.0.4 内部
- スタンドアロン 9.0.4 内部と Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1)

サーバーのアップグレード

注意：

- 開始する前に、以前のバージョンを後で復元する場合のためにデータをバックアップすることをお薦めします。詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の第 15 章「ノードのメンテナンス」を参照してください。
 - Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4.1) のインストール時に、デフォルトのノードが作成されます。このノードは、古いインストールのデータをアップグレードすると削除されます。このノードに重要なデータが格納されている場合は、アップグレード前にこのデータをバックアップする必要があります。
-
-

1. 以前のバージョンが 5.2 より前の場合は、リリース 5.4 にアップグレードする必要があります。このアップグレード手順は、リリース 5.4 の `readme` を参照してください。
2. F-11 ページの「インストール」の説明に従って、Oracle Calendar Server をスタンドアロンでインストールします。
3. Oracle Calendar Server 5.x と Oracle Calendar Server 9.0.4 の両方を停止します。
4. 次の例のように、環境変数を Oracle Calendar Server 9.0.4 に設定します。

```
setenv ORACLE_HOME
```

5. `$ORACLE_HOME/ocal/upgrade` から、`root` として `ocalPreUpg.sh` を実行します。これにより、Oracle Calendar リリース 5.x の所有権が変更されます。
6. Oracle Calendar 9.0.4 をインストールしたユーザー（つまり、ルートでない）としてログインしている間に、次の構文を使用して `$ORACLE_HOME/ocal/upgrade` から `ocalUpg.sh` を実行します。

```
./ocalUpg.sh -srcpath <current source location> -dstpath $ORACLE_HOME
```

項目の意味は次のとおりです。

- -srcpath: Oracle Calendar 5.x インストールの場所 (/users/unison)
 - -dstpath: 新規 Oracle Calendar インストールの場所 (ORACLE_HOME)
7. サーバーが以前のバージョンと共存している場合は、リリース 9.0.4 の Calendar Server で次のパラメータを \$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini に追加する必要があります。

Section: [ENG]

Parameter: usermailmap

Value: "o"

Section: [ENG]

Parameter: coexist_cwsbasicauth

Value: TRUE

Section: [ACE_PLUGINS_SERVER]

Parameter: cs-standard_coexistence

Value: TRUE

重要: セキュリティ上の理由から、すべての Calendar Server をリリース 9.0.4 にアップグレードした後、すぐに \$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini から前述のパラメータを削除する必要があります。

アップグレードで問題が発生した場合は、ログ・ファイル \$ORACLE_HOME/ocal/upgrade/log を参照してください。

Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード

CorporateTime/Oracle Calendar 3.x データは新規バージョンの Oracle Calendar アプリケーション・システムに自動的にアップグレードできます。

関連項目: アプリケーション・システムのアップグレードに関する既知の問題は、F-30 ページの「[一般的な問題と対処方法](#)」を参照してください。

この項の内容は次のとおりです。

- [開始する前に](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード](#)

開始する前に

- F-30 ページの「一般的な問題と対処方法」で、アップグレードに関する既知の問題を確認します。
- 次のファイルに、新規バージョンの ORACLE_HOME ユーザーに対する適切な権限があることを確認します。
 - リリース 3.x の構成ファイル webcal.ini に対する読取りアクセス権。このファイルは一般に /APACHE_ROOT/cgi-bin/lexacal-private/ini/ ディレクトリにあります。
 - Web サーバーの構成ファイル httpd.conf（または Apache.conf）に対する読取りおよび書込みアクセス権。このファイルは一般に /APACHE_ROOT/conf/ にあります。
- Oracle Calendar Web サーバーおよびリリース 3.x の FastCGI プロセスが停止していることを確認します。

Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード

1. F-11 ページの「インストール」の説明に従って、Oracle Calendar アプリケーション・システムをスタンドアロン・モードでインストールします。
2. Solaris および Linux の場合は環境変数 ORACLE_HOME および LD_LIBRARY_PATH を設定し、HP の場合は ORACLE_HOME および SHLIB_PATH を設定します。
3. CorporateTime および Oracle Calendar Web サーバーを停止します。
4. 新規インストール・ディレクトリ \$ORACLE_HOME/ocas/upgrade/ から、次のオプション構文を使用してコマンド ocasua.sh で Upgrade Assistant を実行します。

```
./ocasua.sh [ -appdir appdir ] [ -resdir resdir ] [ -confdir confdir ]
```

項目の意味は次のとおりです。

- **-appdir** は、次のような CorporateTime バイナリ・ディレクトリです。
/Apache_home/cgi-bin/owc
- **-resdir** は、次のような CorporateTime ベース・ディレクトリです。
/Apache_home/cgi-bin/lexacal-private
- **-confdir** は、次のような Web サーバー構成ディレクトリです。
/Apache_home/conf

プロセスのログは次の場所に生成されます。

```
$ORACLE_HOME/ocas/upgrade/log/
```

5. httpd.conf にある旧バージョンの FastCGI Server ディレクティブを削除します。これらは、次のファイルに挿入されているディレクティブで置換されています。

```
$ORACLE_HOME/ocas/conf/ocal.conf
```

6. 一部のセクションとキーは、webcal.ini から ocas.conf および ocwc.conf に移行されません。これらは手動で移行する必要があります。詳細は、F-33 ページの「[アップグレード](#)」を参照してください。

インストール後の構成

この項では、Oracle Calendar のスタンドアロン・インストールを構成するために必要な手順を説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Web サーバーの構成](#)
- [ディレクトリ・サーバーの構成](#)
- [Oracle Calendar Server の構成](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成](#)
- [Oracle Calendar の電子メール配信の構成](#)

Web サーバーの構成

Apache Server または Oracle HTTP Server を使用している場合は、Oracle Calendar Administrator を認識するために、Web サーバーの httpd.conf ファイルに次の行を追加する必要があります。

```
include $ORACLE_HOME/ocad/config/ocad.conf
```

(ocad.conf への読取りアクセス権があることを確認してください。)

また、httpd.conf ファイルに次の変更を加えて、Oracle Calendar アプリケーション・システムを使用できるようにします。

- \$ORACLE_HOME/ocas/conf/ocal.conf を含めます。
- Solaris および Linux では \$ORACLE_HOME/lib、HP では \$ORACLE_HOME/lib32 を含むようにシステム・ライブラリの検索パスを設定します。
- 環境変数 ORACLE_HOME が、Oracle Calendar のインストール・ディレクトリに設定されていることを確認します。

同様の方法でオリジナルをカスタマイズした場合は、競合する設定の解決が必要になる場合があることに注意してください。

変更後に Web サーバーを再起動します。

ディレクトリ・サーバーの構成

インストール時に、Oracle Calendar Server で使用するディレクトリ・サーバーを選択した場合は、Oracle Calendar Administrator に特定のアクセス権を付与する必要があります。

この項の内容は次のとおりです。

- [Sun ONE Directory Server](#)
- [OpenLDAP](#)
- [Syntegra Aphelion Directory Server](#)
- [Critical Path InJoin Directory Server](#)

Sun ONE Directory Server

Oracle Calendar Administrator にアクセス権を付与するには、`-w` オプションを指定して `unidsacissetup` ユーティリティを実行します。このユーティリティの詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の付録 E「Calendar Server のユーティリティ」を参照してください。

OpenLDAP

ベース DN（たとえば、`"dc=acme,dc=com"`）および Oracle Calendar Administrator の親 DN（たとえば、`"ou=OracleCalendarAdministrator"`）を使用します。次に例を示します。

1. ファイル `/usr/local/etc/openldap/slapd.conf` を編集します。
2. `database` セクションで、この情報を適切なベース DN および Oracle Calendar Administrator の親 DN とともに追加します。

```
access to dn="(.*,)?dc=acme,dc=com"  
by dn="(.*,)?ou=OracleCalendarAdministrator,dc=acme,dc=com" write
```

Syntegra Aphelion Directory Server

1. Syntegra Aphelion Web アプリケーションを使用し、ディレクトリ・マネージャとしてサイン・インします。
2. Oracle Calendar Server がインストールされている LDE をクリックします。
3. 「**Manage**」をクリックします。
4. 「**Access Control**」フォルダを展開します。
5. 「**Advance Access Control**」をクリックします。
6. 右側のペインで、「**Add New Access Control Policy**」をクリックします。

7. 「Modify Access Control Policy」テキスト領域で、次のように入力します。

```
to dn=.*BASEDN by dn=.*,ADMINDN,BASEDN write
```

BASEDN は [LDAP]basedn パラメータの値で、ADMINDN は \$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini 構成ファイル内の [LDAP]admin パラメータの値です。これらのパラメータの詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の付録 C「Calendar Server のパラメータ」を参照してください。

8. 「適用」をクリックして変更を有効にします。

Critical Path InJoin Directory Server

1. odsadmin セッションをすでに閉じている場合は、dsa 作業ディレクトリから odsadmin を実行して再び開きます。
2. bman と入力して、ディレクトリ・マネージャとしてバインドします。

```
odsadmin> bman
```
3. プロンプトが表示されたら、ディレクトリ・マネージャのパスワードを入力します。
4. Oracle Calendar Administrator へのアクセス権を付与するように ACI を設定するコマンド・ファイルを実行します。

```
odsadmin> run calendar_admin_aci ~
```
5. odsadmin セッションを終了します。

Oracle Calendar Server の構成

この項では、Oracle Calendar Server のインストール後、また場合によってはアップグレード後に行う必要のある構成の変更について説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Server の起動および停止](#)
- [ポート値の確認](#)
- [Oracle Calendar Administrator を開いて構成](#)
- [リソース承認の設定](#)
- [LD_LIBRARY_PATH および SHLIB_PATH の処理](#)
- [セキュリティ・メカニズムの処理](#)

Oracle Calendar Server の起動および停止

次のコマンドを入力して Oracle Calendar Server を起動します。

```
./unistart
```

次のコマンドを入力して Oracle Calendar Server を停止します。

```
./unistop -y
```

ポート値の確認

Oracle Calendar Server で使用されるデフォルト・ポートは次のとおりです。

ポート	機能
5730	Oracle Calendar Engine
5731	同期ネットワーク・コネクタ
5732	ディレクトリ・アクセス・サーバー
5734	Oracle Calendar Server Manager

これらのポートがすでに使用されている場合は、インストール時に次に使用可能なポートが使用されます。Oracle Calendar Server で使用される値は `unison.ini` で確認してください。

Oracle Calendar Administrator を開いて構成

Oracle Calendar Administrator を使用して、ユーザー、イベント、リソースおよびパブリック予定表を管理し、管理タスクを実行します。デフォルトでは、次の URL で開くことができます。

```
https://Web_server_host:https_port/ocad-bin/ocad.cgi?object=nodeadm
```

Oracle Calendar Administrator にログインするには、インストール時に選択した Oracle Calendar 管理用パスワードを入力します。このパスワードとともにユーザー名を入力しないでください。

場合によっては、Apache 以外の Web サーバーで Oracle Calendar Administrator を実行することが必要な場合があります。その場合は、Web サーバーに次の変更を加える必要があります。

- `$ORACLE_HOME/lib` (HP-UX PA-RISC (64-bit) などの他のプラットフォームでは `lib32`) および `$ORACLE_HOME>/ocad/bin` を含むようにシステム・ライブラリの検索パスを設定します。
- 環境変数 `ORACLE_HOME` が、Oracle Calendar のインストール・ディレクトリに設定されていることを確認します。

- ocad-bin などのスクリプトの別名を \$ORACLE_HOME/ocad/bin/ocad.cgi に構成します。別名には、ocad.cgi を実行するための権限が必要です。
- ocad-templates スクリプトの別名を \$ORACLE_HOME>/ocad/templates に構成します。別名には、ocad-templates という名前を付け、HTML、.js および .css ファイルを読み取る権限を付与する必要があります。

Web サーバーの ID には、次のサーバー・ディレクトリへのアクセス権が必要です。

フォルダ	権限
\$ORACLE_HOME/ocad/bin/	読取り、書込み、実行
\$ORACLE_HOME/ocad/sessions/	読取り、書込み
\$ORACLE_HOME/ocad/temp/	読取り

\$ORACLE_HOME/ocad/bin/ocad.cgi プログラムには、\$ORACLE_HOME/ocad/sessions 内のファイルを読取りまたは書込みするための権限が必要です（これは、\$ORACLE_HOME/ocad/bin/ocad.ini で構成できます）。

サーバーに必要な設定は \$ORACLE_HOME/ocad/config/ocad.conf にあります。

リソース承認の設定

(任意の Web サーバーで) リソース承認機能を使用する場合は、次のように設定する必要があります。

1. NOTIFY-APPROVER を TRUE に設定し、APPROVER-EMAIL を承認者の電子メールに設定して、リソースを作成または変更します。たとえば、ocal/bin では次のようになります。

```
uniuser -resource -add R=Resource
_Approval/NOTIFY-APPROVER=TRUE/APPROVER-EMAIL=approver.email@oracle.com
/psw=password -n 4313 -p test1
```

2. リソースに Designate 権限を与えます。たとえば、ocal/bin では次のようになります。

```
uniaccessrights -mod -designate ALL=TRUE -grantee S=Designate/NODE-ID=4313
-grantor R=Resource_Approval -n 4313 -p test1
```

3. unison.ini (ocal/misc にある) に、URL パラメータを指定した RESOURCE_APPROVAL セクションがあることも確認します。次に例を示します。

```
[RESOURCE_APPROVAL]
url=http://server:port/ocas-bin/ocas.fcgi
```

4. リソース承認 URL を変更した場合は、Oracle Calendar Server を再起動します。

LD_LIBRARY_PATH および SHLIB_PATH の処理

たとえば、セキュリティ・メカニズムを構成するために環境変数 `LD_LIBRARY_PATH` および `SHLIB_PATH` に追加されている値は、Oracle Calendar Server によりクリアされます。かわりに、`OCAL_ADDITIONAL_LIBPATH` に値を追加します。

セキュリティ・メカニズムの処理

一部のセキュリティ・メカニズムでは、そのライブラリへのパスを含むように環境変数 `OCAL_ADDITIONAL_LIBPATH` を設定する必要があります。

GSSAPI/Kerberos 5 を使用している場合は、`libaut_gssapi.so` で必要な 5 つの共有ライブラリへのパスを含める必要があります。

SASL/Kerberos 4 または SASL/GSSAPI を使用している場合は、次のライブラリへのパスを含める必要があります。

- GSSAPI/Kerberos 5 と同じライブラリ
- `libaut_sasl.so`、`libsasl.so` および SASL プラグインに必要な Kerberos および SASL 共有ライブラリ

各パスは、コロン (:) で区切る必要があります。次に例を示します。

```
setenv OCAL_ADDITIONAL_LIBPATH  
/usr/local/kerberos/krb5/lib:/usr/local/sasl/sasl-1.5.27/lib
```

Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成

一般に Oracle Calendar アプリケーション・システムは、Web サーバーを起動した際に、デフォルトのインストール設定を使用して正常に起動します。この項では、アプリケーション・システムのステータスを確認し、必要に応じて構成を変更する方法を説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar アプリケーション・システムのステータスの確認](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成](#)

Oracle Calendar アプリケーション・システムのステータスの確認

アプリケーション・システムおよびそのコンポーネントが稼働しているかどうかを確認するには、`http://server:port/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=sys` でシステム・ページを開きます。コンポーネントが稼働していない場合は、システム・ページにそのコンポーネントが表示されません。

適切なクライアントでコンポーネントに接続するには、次の URL を使用します。

コンポーネント	URL
Sync Server	http://host:port/ocst-bin/ocas.fcgi
Web Services	http://host:port/ocws-bin/ocas.fcgi
Oracle Calendar Web Client	http://host:port/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=web

Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成

Oracle Calendar アプリケーション・システムおよびそのコンポーネントは、\$ORACLE_HOME/ocas/conf の下にある次の構成ファイルで制御されます。

- ocas.conf:** Oracle Calendar アプリケーション・システム
- ocws.conf:** Web Services
- ocst.conf:** Sync Server
- ocwc.conf:** Oracle Calendar Web Client
- ocal.conf:** httpd.conf から組み込まれる Web サーバー FastCGI ディレクティブ環境に応じて、次の構成オプションを検討してください。

- `ocas.fcgi` の複数インスタンスを実行します（インスタンス数は設定と負荷に依存）。この構成オプションは、`ocal.conf` で構成できます。
- インストールまたはホスト当たり `occhecklet.fcgi` のインスタンスを 1 つ実行する必要があります。この構成オプションも、`ocal.conf` で構成します。
- カスタム URL から Web Client をリダイレクトするには、次の文を `ocal.conf` に追加します。

```
<Location /calendar>
    Redirect permanent /calendar \
        http://<host>:<port>/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=web
</Location>
```
- Sync Server を使用するには、`httpd.conf` または `apache.conf` の `KeepAlive` パラメータを 300 秒に設定するか、またはオフにします。これは、`ocal.conf` の 300 秒のアイドル・タイムアウト値に相当します。
- すべてのホストの `ocas` ファイル内の `linkdb` および `sessiondb` 変数が同じパス（たとえば、同じ NFS マウント）を指していることを確認します。
- 各コンポーネントの `conf` ファイルで、認証、圧縮および暗号化（ACE）値を設定します。すべての製品の AUTH Web 設定は、`ocas.conf` の `[ACE_PLUGINS_CLIENT]` セクションで構成する必要があります。

- 問題が発生した場合は、次の場所でエラー・メッセージを確認します。

```
$ORACLE_HOME/ocas/logs/ocas_log
```

conf ファイルに変更を加えた後は、Oracle HTTP Server または Apache を再起動してください。

Oracle Calendar の電子メール配信の構成

Oracle Calendar Server から送信された電子メールの送信元が、ドメイン名ではなくサーバーの名前になっている場合は、sendmail.cf ファイルに次の変更を加えます。このファイルは、Solaris システムでは /etc/mail ディレクトリ、Linux システムでは /etc ディレクトリにあります。

```
# who I masquerade as (null for no masquerading) (see also $=M)
DMdomainname
```

ここで、domainname は、電子メールの送信元のメール・ドメイン名です。

Oracle Calendar Deinstallation

次の手順では、Oracle Calendar Server およびアプリケーション・システムをホストから削除する方法について説明します。

1. unistop コマンドを使用して Oracle Calendar Server を停止します。
2. Web サーバーを停止します。
3. ディレクトリ・サーバーで、Oracle Calendar ユーザーから Oracle Calendar Server 属性を削除します。これは LDIF 更新コマンドを使用して行います。
4. ディレクトリ・サーバーで、このサーバーにあった Oracle Calendar Server ノードのすべての ctCal オブジェクトを削除します。ldapsearch および ldapdelete コマンドを使用します。適切な構文は、ご使用のディレクトリ・サーバーの管理者ガイドを参照してください。
5. ディレクトリ・サーバーで、データベースからすべての関連 Oracle Calendar Server 管理グループおよび ACL を削除します。手動で LDIF を編集するか LDIF 更新文を使用して、LDIF ファイルをクリーン・アップします。
6. Oracle Universal Installer を使用して Oracle Calendar コンポーネントを削除します。次のコマンドを使用して Oracle Universal Installer を起動します。

```
./runInstaller
```

7. calendar_server_path を削除します。
8. client_path を削除します。

一般的な問題と対処方法

この項では、Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムの一般的な問題とその対処方法を説明します。問題は次の項に分類されます。

- [Server の問題](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの問題](#)

Server の問題

この項の内容は次のとおりです。

- [インストール](#)
- [共存およびアップグレード](#)
- [代理](#)
- [その他](#)

インストール

- **unison.ini の空白セクション:** スタンドアロンの Oracle Calendar Server またはアップグレードしたスタンドアロン・サーバー、あるいはその両方の新規インストールの unison.ini ファイルには、空白の [LCK] および [LIC] セクションが追加されます。これらのセクションは削除しないでください。

再インストール

- Oracle Calendar のコンポーネントを再インストールする場合は、Oracle Calendar Server コンポーネントを新規ディレクトリにインストールしてください。その他のコンポーネントは、既存のパスにインストールまたは追加できます。

共存およびアップグレード

- **クライアント:** Oracle Calendar Server リリース 9.0.4 と連携する Oracle Calendar アプリケーション・システムのバージョンは次のとおりです。
 - Oracle Calendar Desktop Client for Windows リリース 6.0.5
 - Oracle Calendar Desktop Client for Mac リリース 5.2.3
 - Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86/Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) バージョン 5.0.2
 - Oracle Connector for Outlook バージョン 3.3 以上

注意： 旧クライアントのユーザーは、最新バージョンにアップグレードする必要があります。

最新版のクライアントに関する情報は、オラクル社カスタマ・サポート・センターへお問い合わせください。

以前のクライアントは、15 文字以下のパスワードのみサポートしています。15 文字より長いパスワードが管理者により割り当てられた場合、ユーザーはサイン・インできません。

新規クライアントのみサポートする場合は、`unison.ini` の `cs-standard_coexistence` を `false` に設定します。

- **サーバー：**
 - 共存により、旧 Oracle Calendar Server (5.x) で意味不明なエラー・メッセージが表示されることがあります。これは、旧サーバーが新規サーバーで導入された機能を理解できないことが原因です。
 - Oracle Calendar Server のバージョン間でイベント Oracle Calendar の共存はありません。リリース 1 (9.0.3) ユーザーはリリース 1 (9.0.3) イベント・カレンダーのみ参照し、リリース 2 (9.0.4.1) ユーザーはリリース 2 (9.0.4.1) イベント・カレンダーのみ参照します。
- **ノード・ネットワーク：**
 - ノード・ネットワークは、リリース 5.3 以上の Oracle Calendar Server でのみ作成できます。
 - ノード・ネットワークを作成する必要がある場合は、`nodes.ini` および `uninode` コマンドの使用はネットワーク内の最新リリース (9.0.4) のサーバーで行う必要があります。
- **管理ユーティリティ：**
 - リリース 5.x の Oracle Calendar Server の管理にはリリース 9.0.4 ユーティリティを使用しないでください。この例外は、ユーザーを移動する場合のみです。どちらも旧サーバー・ノード (5.x) にある 2 つのノード間でユーザーを移動する場合でも、`moveuser` ユーティリティは最新サーバーのリリース (9.0.4) から実行する必要があります。
 - リリース 9.0.4 の Oracle Calendar Server の管理にはリリース 5.x ユーティリティを使用しないでください。

- **マッピング・パラメータ：** マッピング・パラメータは、共存およびアップグレード用にリリース 9.0.4 の Server の `unison.ini` に追加されています。リリース 5.x の Server は、EMAIL には O、UID には P をマッピングします。ただし、リリース 9.0.4 の Server は、このマッピングを必要としなくなりました。リリース 9.0.4 の Server に追加されたパラメータは、マッピングにまったく影響しません。

新規パラメータは次のとおりです。

```
[ENG]
usermailmap = O
itemuidmap = P
resourcemailmap = O
usersmscprefmap = OU3
usermobiletypemap = N
usermobilemap = R
```

バージョンを共存させるには、これらのパラメータをリリース 9.0.4 の `unison.ini` ファイルに手動で追加する必要があります。これらはアップグレード時に自動的に追加されます。

代理

- **代理のリスト：** Windows クライアントは、リモート・リソースの代理をリストできません。
- **代理としてのイベントの作成：** ユーザーが代理として作業している間にイベントを作成するとエラーになることがあります。ただし、イベントは正常に作成されます。
- **リモート代理：** リモート代理機能は、Oracle Calendar Web Client および Oracle Calendar SDK でのみ使用できます。

その他

- **ユーザーの移動：** ある時点で Oracle Calendar Web Client を使用していたユーザーは移動しないでください。このようなユーザーの移動の試行は失敗し、一部のイベントが重複する原因となります。
- **UID：** 数値 UID は、既存の UID を持たないユーザーに対してシステムにより作成されます。
- **リモート・ユーザー：** リモート・ユーザーが会議に招待された場合、会議の所有者のステータスがリモート・ユーザーに対して正しく表示されません。所有者のステータスは、「参加予定」ではなく「後で決定」と表示されます。これはサーバーの問題です。(2892129)

Oracle Calendar アプリケーション・システムの問題

この項の内容は次のとおりです。

- [インストール](#)
- [アップグレード](#)

インストール

- **サーバー情報のプロンプトが非表示：** Oracle Calendar Server がすでにインストールされているコンピュータにアプリケーション・システムのスタンドアロン・パッケージをインストールした場合は、インストール時にサーバー情報を入力するプロンプトが表示されません。アプリケーション・システムがインストールされた後で、`ocas.conf` の `[connection]` セクションを開き、次の行を置換する必要があります。

```
mnode=,
```

この行を次の行で置換します。

```
mnode=host:engine_port,node
```

```
(2844399)
```

アップグレード

- **複数のアップグレード：** アプリケーション・システムの Upgrade Assistant が複数回実行されると、複数の `include` 行が `httpd.conf` に挿入され、Web サーバーが正しく起動しない原因となります (#2978880)。提案される対処方法として、重複している `include` 行を `conf` ファイルから削除します。通常は、行は次のようになります。

```
include full_path_of_install_home/ocas/conf/ocal.conf
```

- **ocas.conf および ocwc.conf での空白行：** リリース 2 (9.0.4) のインストールでの `ocas.conf` および `ocwc.conf` の空白行は、Upgrade Assistant で削除されます。これを防ぐには、Assistant を実行する前にこれらの行を `#` で置換します。
- **欠落キー：** Upgrade Assistant は、次のキーのみ移行します。インストールがまだ動作していても、新規パラメータを変更して目的のロック・アンド・フィールドを得ることが必要な場合があります。パラメータの編集の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

```
[system]
connection
```

```
[servers]
(All keys migrated to "connection" section of ocas.conf. If the old installation
was a masternode, 'mnode' will be the only entry.)
```

```
[ACE_PLUGINS_CLIENT]
(All keys into ocas.conf)

[admin]
ssn_timeout
sso_user_env_key
max_login_attempts
login_fail_timeout
secure_login
cache

[ADA]
enable
hide_toggle_link

[modules]
logout
prefs
chgpwd
accrights
userlist_login
hide_eventcal
hide_global
hide_taskview
hide_managegroups
hide_suggesttime
hide_show_unconfirmed
hide_updateall
enable_designate
hide_viewpub

[file_attachment]
download_enable
upload_enable

[taskview]
quickCreateStartTime
quickCreateEndTime
showQCCompletion

[calendar_view]
default_view
default_dayview_mode
default_weekview_mode
hide_dayview_toggle
hide_weekview_toggle
pdv_notes_top_task_bottom
```

```
default_color_mgt_by
```

```
[cookies]
```

```
domain
```

```
[sms]
```

```
enable
```

```
[sched]
```

```
userlist_login (becomes same key in "modules" section of ocwc.conf)
```

```
serverlist_login (becomes same key in "modules" section of ocwc.conf).
```

```
enable_autologin (becomes same key in "modules" section of ocwc.conf).
```

```
modify_emailadd (becomes same key in "modules" section of ocwc.conf).
```

```
showicalvcal (becomes same key in "modules" section of ocwc.conf).
```

```
[ACE]
```

```
authentication (becomes 'Authentication' of ocwc.conf).
```

Oracle Collaboration Suite のクライアントのインストール

Oracle Collaboration Suite Client CD-ROM には、クライアント製品が含まれています。
この付録の内容は次のとおりです。

- [Oracle Connector for Outlook](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Windows](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Linux](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Solaris](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Windows](#)
- [Oracle Calendar Sync for Pocket PC](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh](#)
- [Oracle FileSync](#)

Oracle Connector for Outlook

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Connector for Outlook のシステム要件](#)
- [Oracle Connector for Outlook のインストール前の要件](#)
- [Oracle Connector for Outlook のインストール](#)
- [Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール](#)
- [Microsoft Outlook のアップグレード](#)
- [Oracle Connector for Outlook の削除](#)

Oracle Connector for Outlook のシステム要件

次の表に、Oracle Connector for Outlook のシステム要件を示します。

表 G-1 Oracle Connector for Outlook のシステム要件

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none">■ Windows NT 4.0■ Windows 98■ Windows 2000■ Windows XP Professional <p>Windows NT、2000 および XP に Oracle Connector for Outlook をインストールするには、管理権限が必要です。</p>
ディスク領域	ユーザーの IMAP4 メールボックス・サイズに相当する空きディスク領域。
RAM	ご使用の Microsoft Outlook クライアントの RAM 要件を参照してください。
Outlook	<ul style="list-style-type: none">■ Outlook 98■ Outlook 2000■ Outlook 2002■ Outlook 2003（Oracle Collaboration Suite リリース 2 のパッチ・セット 1（9.0.4.2.0）でサポートされます）■ 注意：ネイティブ言語バージョンまたは Multilingual User Interface Pack（MUI）は、英語以外のバージョンのローカライズに必要です（サポートされる言語を参照してください）。

表 G-1 Oracle Connector for Outlook のシステム要件（続き）

要件	値
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Calendar Server 5.5 ■ Oracle Calendar Server 9.0.4（ほとんどの Oracle Calendar 新機能に必要）
電子メール・サーバー	<p>Oracle Collaboration Suite に付属している送信メール用の SMTP サーバー。</p> <p>Oracle IMAP4 Server 9.0.3 以上。</p> <p>実装が、SMTP、IMAP4 リファレンス実装 Cyrus およびワシントン大学のオープン標準に基づいているその他の電子メール・サーバー。</p>
PDA 同期のコンジクト	<ul style="list-style-type: none"> ■ PocketMirror 2.04 または 3.0（3.0 を推奨） ■ PocketJournal ■ Desktop To Go 2.5 ■ Desktop To Go 2.509（Outlook 2002 の場合のみ） ■ PSIWIN 2.3 または 2.31 ■ ActiveSync 3.0、3.1 または 3.5 <p>注意：Oracle Collaboration Suite リリース 2 のパッチ・セット 1（9.0.4.2.0）は、バージョン 3.7.1 までの ActiveSync をサポートします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ HotSync Manager 4.0（Windows XP の場合のみ）
デバイス	<p>Oracle Connector for Outlook で認定されているデバイスは次のとおりです。同様の他のデバイスも機能しますが、エンド・ユーザー側の操作は異なる場合があります。</p> <p>Pocket PC</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Compaq iPAQ Pocket PC 2002 3870 ■ Compaq iPAQ Pocket PC 2002 3970 ■ HP iPAQ Pocket PC 2003 h 1945 <p>Palm</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Palm III（3Com） ■ Palm V Handheld <p>Blackberry 6710 Wireless Handheld</p>

Oracle Connector for Outlook のインストール前の要件

- サポートされている Outlook バージョンが、サポートされているプラットフォームにインストールされている必要があります。
- Windows NT、2000 および XP に Oracle Connector for Outlook をインストールするには、管理権限が必要です。
- Outlook 98 および Outlook 2000 は、「企業 / ワークグループ」モードでインストールされている必要があります。「ツール」→「オプション」→「メールサービス」→「メールサポートの再設定」を選択して、Outlook の構成を確認します。
- 情報の消失を回避するために、アップグレード前にオフライン・フォルダを同期化することをお勧めします。

Oracle Connector for Outlook のインストール

1. Oracle Connector for Outlook をインストールする前に、すべての Windows アプリケーションを終了します。
2. 以前のバージョンからアップグレードし、インストールされている言語を追加または変更する場合は、スイッチ /Lang を後に指定して `con_outlook_904x.exe` を実行します。それ以外の場合は、`con_outlook_904x.exe` ファイルをダブルクリックします。画面に表示されるインストール手順に従います。

注意： POP3 プロトコルと IMAP4 プロトコルの競合を回避するには、Microsoft の Internet Mail または Exchange サービス・プロバイダを Oracle Connector for Outlook と同じプロファイルに設定しないでください。

Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール

Oracle Connector for Outlook インストーラは、サイレント・モードで実行している場合、通常はユーザーがインストール・ダイアログ・ボックスを介して指定するすべての情報を、事前に設定された構成ファイルで参照します。Oracle Connector for Outlook では、`ctoc.ini` というサンプル・ファイルを使用できます。このファイルをテンプレートとして使用し、そのパラメータ値をインストールに合せて変更します。使用可能なパラメータの詳細は、表 G-2 を参照してください。最初の起動時に、値が指定されておらず、デフォルト値を持たないすべてのパラメータに対して値を入力するためのプロンプトが表示されます。

ユーザーの操作なしにコマンドラインから Oracle Connector for Outlook をインストールするには、`-s` オプションを指定して製品の自己解凍形式の実行可能ファイルを実行し、使用する構成ファイルを `-cfg` オプションで指定します。

たとえば、インストーラ・ファイルおよび構成ファイルの両方が C: ドライブのルート・ディレクトリに存在し、インストーラ・ファイル名が `con_outlook_904.exe` である場合は、次のコマンドを実行します。

```
C:\> con_outlook_904.exe -s -cfg ctoc.ini
```

次に示す 2 つのオプションのフラグも指定できます。

- `-f`

コマンドラインで `-f` を指定すると、Oracle Connector for Outlook インストーラは、製品の現行バージョンをインストールする前に、以前のすべてのバージョンの削除を試行します。

- `-1`

コマンドラインで `-1`（数字の 1）を指定すると、Oracle Connector for Outlook のインストールの前半部分のみが実行され、必要なファイルのコピー、および使用可能なサービス・プロバイダとしての Oracle Connector for Outlook の登録が行われます。インストールの後半部分（プロファイルへの Oracle Connector for Outlook の追加）は実行されません。

注意： 一度サイレント・インストールを実行すると、`-f` オプションが指定されていない後続のサイレント・インストールでは、インストールの前半部分のみが実行され、必要なファイルのコピー、および使用可能なサービス・プロバイダとしての Oracle Connector for Outlook の登録が行われます。インストーラは、インストールの後半部分を続行しません。

Oracle Connector for Outlook の大規模な配置の詳細は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせてください。

Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成ファイル・パラメータ

次の表に、Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストールに使用できるパラメータをセクションごとにアルファベット順で示します。示されるデフォルト値は、該当するパラメータの値が空白であるか、そのパラメータが構成ファイルに存在しない場合に適用されます。

構成ファイル内のセミコロン (;) で始まるすべての行はコメントであり、インストーラでは読み込まれません。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Calendar]	AccountName	Calendar Server の有効なユーザー名	なし	このユーザーのカレンダー・アカウント名を指定します。
[Calendar]	DomainID	有効なドメイン ID	なし	組織を示すドメイン ID を指定します。 [Calendar] UseDNS パラメータおよび [Calendar] HostName パラメータも指定する必要があります。
[Calendar]	HostName	有効なホスト名、または 「host1;host2;hostN」 という形式の名前のリスト (「scooter;kermit」 など)	なし	1 つ以上の Calendar Domain Service ホストのホスト名またはネットワーク・アドレスを指定します。[Calendar] UseDNS パラメータおよび [Calendar] DomainID パラメータも指定する必要があります。
[Calendar]	NoAccount	0 ([Calendar] パラメータを使用して、Calendar Server 接続を構成します。) 1 (Calendar Server 接続の構成をスキップし、[Calendar] セクションで他のパラメータによって設定されたすべての値を無視します。)	0	このユーザーが Calendar Server アカウントを持たないことを指定し、[Calendar] セクションで他のパラメータによって設定されたすべての値を無視します。
[Calendar]	Password	このユーザーのカレンダー・アカウントの有効なパスワード	なし	このユーザーのカレンダー・パスワードを指定します。
[Calendar]	Port	0 (デフォルトを使用します。) 有効なポート	なし	[Calendar] ServerName パラメータで指定された Calendar Server への接続に使用するポートを指定します。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ（続き）

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Calendar]	ServerName	有効なホスト名、およびそれに後続するカンマと有効なノード ID (「kermit,1200」など)	なし	Calendar Server のホスト名またはネットワーク・アドレス、および接続先であるノード ID（必要な場合）を指定します。
[Calendar]	UseDNS	0 または空（「企業モード」） 1（DNS を使用します。）		Calendar Domain Service を使用します。
[E-Mail]	AccountName	有効なユーザー名	なし	IMAP4 サーバーでのこのユーザーのアカウント名を指定します。
[E-Mail]	DisplayName	任意の英数字文字列	なし	このユーザーが送信するすべての電子メールに表示する名前を設定します。
[E-Mail]	EmailAddress	有効な電子メール・アドレス	なし	現行ユーザーの電子メール・アドレスを指定します。
[E-Mail]	Imap4ServerName	有効なホスト名	なし	IMAP4 電子メール・サーバーのホスト名またはネットワーク・アドレスを指定します。
[E-Mail]	ImapNoAccount	0（[E-Mail] セクションの他の IMAP4 構成パラメータを使用して、IMAP4 サーバー接続を構成します。） 1（IMAP4 サーバー接続の構成をスキップし、[E-Mail] セクションで他の IMAP4 構成パラメータによって設定されたすべての値を無視します。）		このユーザーが IMAP4 アカウントを持たないことを指定し、[E-Mail] セクションで他の IMAP4 構成パラメータによって設定されたすべての値を無視します。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[E-Mail]	ImapPort	有効なポート	143	IMAP4 サーバー用のポートを指定します。
[E-Mail]	ImapSameAsCTime	0 (Calendar Server のアカウント名およびパスワードに対する設定値と同じ値を使用しません。) <p>1 (Calendar Server のアカウント名およびパスワードに対する設定値と同じ値を使用します。)</p>	0	インストーラに、[Calendar] AccountName パラメータおよび [Calendar] Password パラメータで指定されたユーザー名およびパスワードを IMAP4 サーバーに対しても使用するように指示します。このパラメータを 1 に設定すると、インストーラは [E-Mail] AccountName パラメータおよび [E-Mail] Password パラメータで設定されたすべての値を無視します。
[E-Mail]	ImapSSL	0 (SSL を使用しません。) <p>1 (SSL を使用します。)</p>	0	インストーラに、IMAP4 電子メール・サーバーとのすべての通信に SSL を使用するように指示します。
[E-Mail]	Organization	任意の英数字文字列	なし	送信電子メールに表示する、現行ユーザーの組織を指定します (オプション)。
[E-Mail]	Password	このユーザーの電子メール・アカウントの有効なパスワード	なし	IMAP4 サーバーでのこのユーザーのパスワードを指定します。
[E-Mail]	ReplyTo	有効な電子メール・アドレス	なし	現行ユーザーが送信したメールへの返信メールが送信される宛先電子メール・アドレスを指定します (オプション)。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ（続き）

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[E-Mail]	SmtAccount	有効なホスト名	なし	SMTP 電子メール・サーバーのホスト名またはネットワーク・アドレスを指定します。
[E-Mail]	SmtAuthentication	0（認証は要求されません。） 1（ユーザー名およびパスワードが要求されます。）	0	インストーラに、指定された SMTP 電子メール・サーバーでユーザー名およびパスワードを要求するように指示します。
[E-Mail]	SmtNoAccount	0（[E-Mail] セクションの他の SMTP 構成パラメータを使用して、SMTP サーバー接続を構成します。） 1（SMTP サーバー接続の構成をスキップし、[E-Mail] セクションで他の SMTP 構成パラメータによって設定されたすべての値を無視します。）	0	このユーザーが SMTP アカウントを持たないことを指定し、[E-Mail] セクションで他の SMTP 構成パラメータによって設定されたすべての値を無視します。
[E-Mail]	SmtPassword	現行ユーザー・アカウントの有効なパスワード	なし	[E-Mail] SMTPAuthentication パラメータが 1 に設定されている場合は、SMTP 電子メール・サーバーへの接続時に使用するパスワードを指定します。
[E-Mail]	SmtPort	有効なポート	25	SMTP サーバー用のポートを指定します。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[E-Mail]	SmtSameAsImap	0 (IMAP4 サーバーのアカウント名およびパスワードに対する設定値と同じ値を使用しません。) 1 (IMAP4 サーバーのアカウント名およびパスワードに対する設定値と同じ値を使用します。)	0	インストーラに、 [E-Mail] AccountName パラメータおよび [E-Mail] Password パラメータで指定されたユーザー名およびパスワードを SMTP サーバーに対しても使用するよう指示します。 このパラメータを 1 に設定すると、インストーラは [E-Mail] SmtAccount パラメータおよび [E-Mail] SmtPassword パラメータで設定されたすべての値を無視します。
[E-Mail]	SmtServerName	SMTP サーバーでの有効なユーザー名	なし	[E-Mail] SMTPAuthentication パラメータが 1 に設定されている場合は、SMTP 電子メール・サーバーへの接続時に使用するアカウント名を指定します。
[E-Mail]	SmtSSL	0 (SSL を使用しません。) 1 (SSL を使用します。)	0	インストーラに、SMTP 電子メール・サーバーとのすべての通信に SSL を使用するよう指示します。
[General]	CompanyName	任意の英数字文字列	なし	その登録済ユーザーを雇用する会社の名前を指定します。
[General]	InstallPath	有効なパス名	current_drive: ¥Program Files ¥Oracle ¥Connector_for _Outlook	Oracle Connector for Outlook をインストールするパスを指定します。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ（続き）

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[General]	UserName	任意の英数字文字列	なし	その登録済ユーザーの名前を指定します。 [Calendar] AccountName パラメータおよび [E-Mail] DisplayName パラメータのデフォルト値としても使用されます。
[Install]	ShowError	0（エラー・メッセージを非表示にします。） 1（エラー・メッセージを表示します。）	0	インストール中に検出されたエラー・メッセージが格納されているログ・ファイルを開くボタンを表示します。 ShowOutput が 1 の場合は、インストールの進捗ボックスにボタンが表示されます。ShowOutput が 0 の場合は、別のダイアログ・ボックスにボタンが表示されます。
[Install]	ShowOutput	0（出力を非表示にします。） 1（出力を表示します。）	0	Oracle Connector for Outlook インストーラによるサイレント・インストールの進行に伴って、インストーラの出力を表示します。
[Install]	ShowSuccess	0（通常のメッセージを非表示にします。） 1（通常のメッセージを表示します。）	0	インストールが正常に完了したときに、ステータス・メッセージを表示します。
[Install]	ShutdownOutlook	0（Outlook を自動的に停止しません。） 1（Outlook を自動的に停止します。）	0	インストーラに、Outlook が実行されている場合は Oracle Connector for Outlook をインストールする前に Outlook を自動的に終了するように指示します。インストーラが正常に機能するためには、Outlook が実行されていない必要があります。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Languages]	(なし)	次のような許容される言語 1031=d 1036=fr 1041=ja 1042=ko 数値は言語を表し、文字列はその言語の Oracle Connector for Outlook DLL およびヘルプ・ファイルに追加される文字列と同じです。	なし。値が指定されていない場合、Oracle Connector for Outlook は英語でインストールされます。	Oracle Connector for Outlook で使用される言語を設定します。
[MAPIProfile]	Name	任意の英数字文字列	Oracle Connector for Outlook	Oracle Connector for Outlook を追加するプロファイルを指定します。指定したプロファイル名が存在しない場合は、インストール中に、この名前を持つ新しいプロファイルが作成され、Oracle Connector for Outlook がそのプロファイルに追加されます。
[Off-line]	Path	有効なパス	現行のプラットフォームおよびプロファイル名により決定されたデフォルトのパス	現行ユーザーのオフライン・ストレージの位置を指定します。
[Off-line]	Use	0 (オフライン・アクセスが使用不可になります。) 1 (オフライン・アクセスが使用可能になります。)	0	インストーラに、現行ユーザーがオフラインでのアクセスおよび同期化を使用できるようにするように指示します。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ（続き）

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Settings]	DisableCfgUI	0（構成ダイアログ・ボックスを表示します。） 1（プロファイルの作成または変更機能を使用不可にします。）	0	通常は Windows の「コントロール パネル」の「メール」を介して使用できる Oracle Connector for Outlook 構成ダイアログ・ボックスを非表示にして、ユーザーがそのサインイン設定およびオフライン設定を変更できないようにします。
[Settings]	DisablePwd	0（パスワードの保存を可能にします。） 1（パスワードの保存を使用不可にします。）	0	インストーラに Calendar Server、IMAP4 サーバーおよび SMTP サーバーに対して設定されたパスワードを無視するように指示し、現行ユーザーにログインのたびにアカウント・パスワードを入力するように要求します。
[Settings]	ForceReboot	0（再起動しません。） 1（強制的に再起動します。）	0	インストーラに、インストールの前半部分（ファイルのコピー、およびサービス・プロバイダとしての Oracle Connector for Outlook のインストール）を実行した後でオペレーティング・システムを再起動するように指示します。
[Settings]	HideCTimePwdMenu	0（「パスワードの変更」オプションを表示します。） 1（「パスワードの変更」オプションを非表示にします。）	0	ユーザーが Outlook を介してその Calendar Server のパスワードを変更することを防ぐために、「ツール」メニューの「パスワードの変更」オプションを非表示にします。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Settings]	NoServerMail	0 (メール・サーバーへの接続を常に使用可能にします。) 1 (IMAP4 サーバーと SMTP サーバーの両方への接続をスキップします。) 2 (IMAP4 サーバーへの接続をスキップします。) 3 (SMTP サーバーへの接続をスキップします。)	0	IMAP4 サーバーおよび SMTP サーバーへの接続をスキップします。メールに Oracle Connector for Outlook ではなく別のサービス・プロバイダ (Microsoft の Internet Mail など) を使用する場合は、このパラメータを使用します。1、2 または 3 が指定されている場合は、Outlook の対応するサーバー・プロパティ・ページが非表示になります。
[Settings]	ShowSrvIcon	0 (サーバーが使用不可であることを示すアイコンを表示しません。) 1 (サーバーが使用不可であることを示すアイコンを表示します。)	0	Calendar Server またはメール・サーバーが使用不可の場合に、Outlook のメイン・ウィンドウの右下に小さい情報アイコンを表示します。

Microsoft Outlook のアップグレード

Outlook インストールをアップグレードする場合は、アップグレード後に Oracle Connector for Outlook を再インストールする必要があります。インストール方法は、[「Oracle Connector for Outlook のインストール」](#)を参照してください。

Oracle Connector for Outlook の削除

Oracle Connector for Outlook を削除するには、次のようにします。

- 「コントロール パネル」で「アプリケーションの追加と削除」をダブルクリックします。
- 「Oracle Connector for Outlook」を選択し、「追加と削除」をクリックします。

Oracle Calendar Desktop Client for Windows

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Desktop Client for Windows のシステム要件](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Windows のインストール](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Windows のサイレント・インストール](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Windows の削除](#)

Oracle Calendar Desktop Client for Windows のシステム要件

次の表に、Oracle Calendar Desktop Client for Windows のシステム要件を示します。

表 G-3 Oracle Calendar Desktop Client for Windows のシステム要件

要件	値
オペレーティング・システム	<div><ul style="list-style-type: none">■ Windows 98■ Windows ME■ Windows NT■ Windows 2000■ Windows XP Home■ Windows XP Professional</div> <div>Windows NT コンピュータに Oracle Calendar Desktop Client for Windows をインストールする場合は、Microsoft Windows Service Pack 6 以上をインストールする必要があります。</div> <div>Windows NT、2000 および XP に Oracle Calendar Desktop Client for Windows をインストールするには、管理権限が必要です。</div>
ディスク領域	25MB
RAM	20MB 以上
Calendar Server	<div><ul style="list-style-type: none">■ Oracle CorporateTime Server 5.4■ Oracle Calendar Server 5.5■ Oracle Calendar Server 9.0.4.x</div>

Oracle Calendar Desktop Client for Windows のインストール

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Windows をインストールする方法を説明します。

1. Windows NT、2000 または XP にインストールする場合は、管理権限でログインします。
2. 自己解凍形式の実行可能ファイル `cal_win_904x.exe` を実行し、画面に表示される手順に従います。

Oracle Calendar Desktop Client for Windows のサイレント・インストール

Oracle Calendar Desktop Client for Windows 9.0.4 には、大規模な配置を容易にするためのサイレント・インストールとカスタム・インストールがあります。Oracle Calendar for Desktop Client には、MSI インストーラのテクノロジーが組み込まれているため、構成可能なユーザー操作のレベルが提供されます。このユーザー操作には、通常の対話型インストールから、ユーザーにフィードバックやプロンプトが表示されずにバックグラウンドで実行される完全なサイレント・インストールまで、様々なレベルがあります。

サイレント・インストールの実行

自己解凍形式の実行可能ファイル `cal_win_904x.exe` を解凍すると、`setup.exe` ファイル、Oracle Calendar 9.0.4.msi ファイル、複数の CAB ファイル、および `unison.ini` ファイルが格納されているフォルダが抽出されます。Oracle Calendar 9.0.4.msi ファイルは、MSI エンジンで実行される主要インストーラ・パッケージです。このファイルは、`setup.exe` ファイルからのみ使用可能な InstallShield セットアップ・スクリプトに依存するため、直接実行することはできません。CAB ファイルには、エンド・ユーザーのマシンにインストールされる圧縮データが含まれています。圧縮されないままで存在するファイルは、`unison.ini` テンプレート・ファイルのみです。`setup.exe` ファイルは、Oracle Calendar 9.0.4.msi ファイルを使用して MSI インストーラ・エンジンを実行する InstallShield ラッパーです。ユーザーのマシンに MSI インストーラ・エンジンがインストールされていない場合、ユーザーのマシンのアップグレードも行います。

Oracle Calendar をインストールするには、インストールするマシンに対する管理者権限が必要であることに注意してください。Windows 98 および Windows ME では、これがデフォルト設定ですが、Windows NT 4.0、Windows 2000、Windows XP などのマルチ・ユーザーを対象としたオペレーティング・システムでは、デフォルト設定ではない場合があります。レジストリへの書込みおよび特定の必須ファイルのインストールを行うには、インストールするマシンに対する管理者権限が必要です。

ユーザーのマシン上の以前のバージョンの CorporateTime、OpenTime、Oracle Calendar は、インストーラによってアップグレードされます。Beta バージョンの Oracle Calendar Desktop Client for Windows 9.0.4 も、インストーラによってアップグレードされます。

ユーザー操作のレベルを構成するには、`-s` オプションを指定してコマンドラインから自己解凍形式の実行可能ファイル `cal_win_904x.exe` を実行します。また、`/v` オプションを使用して InstallShield ラッパーから Windows インストーラに渡される情報を指定します。このオプションの値は、二重引用符で囲まれた文字列です。この値には、Windows インストーラからのユーザー・フィードバックのレベルを制御するネスト・フラグを指定する必要があります。使用可能なフラグは、次のとおりです。

- `/qn`: 完全なサイレント・インストールを指定します。
- `/qb`: インストールの進捗状況を示すインジケータなどの基本的なユーザー・フィードバックを提供します。ただし、ユーザーがインストール・パラメータや情報を変更できないようにします。たとえば、ユーザーは、ファイルのコピー中に進捗状況を示すインジケータの表示はできますが、コピー先パスの指定はできません。

Windows インストーラの `/q` オプションで使用可能なユーザー操作のレベルの詳細は、Windows インストーラのドキュメントを参照してください。

`/v` オプションに指定する文字列値には、`REINSTALL` および `REINSTALLMODE` パラメータも含めることをお勧めします。これらのパラメータを指定すると、インストーラによって、システム上にすでに存在している可能性がある Alpha または Beta バージョンのソフトウェアがアップグレードされます。

したがって、完全なサイレント・インストールの基本コマンドラインは、次のように指定することをお勧めします。

```
setup.exe /s /v"/qn REINSTALL=ALL REINSTALLMODE=voums"
```

注意： `/v` オプションは、常に、コマンドラインの最後のオプションとして指定してください。

Oracle Calendar 環境設定ファイルのカスタマイズ

Calendar の環境設定およびセットアップ情報のほとんどは、クライアント側の `unison.ini` ファイルに指定できます。アプリケーションのインストール時に、様々な環境設定およびその他の情報が事前設定された `unison.ini` テンプレート・ファイルをインストーラに指定することができます。`unison.ini` テンプレート・ファイルは、個人専用の `unison.ini` ファイルが存在しない場合にのみ使用されます。特定のユーザーの個人専用ファイルが存在する場合、後続のクライアント・アップグレードによってこのファイルが削除されたり、置換されることはありません。つまり、クライアント側のインストーラを使用して `unison.ini` の環境設定を事前設定する機能は、現行のマシンでいずれのバージョンの Oracle Calendar も使用したことがないユーザーのみが使用できます。これらのユーザーの場合、Oracle Calendar では古い環境設定が使用されます。この動作には、次の 2 つの理由があります。

- Windows NT や Windows 2000 などのマルチ・ユーザーを対象としたオペレーティング・システムでは、アプリケーションのアップグレードを行っているユーザーが、個人専用の `unison.ini` ファイルが格納されている他のユーザーのプロファイル・フォルダ内のファイルを表示および変更できない場合があります。つまり、インストーラでは、現行マシン上のすべての `unison.ini` ファイルを検索して、新しいテンプレートと置換できない場合があります。
- 個人専用の `unison.ini` が置換されると、Calendar Server に直接保存されていないか、または `unison.ini` テンプレート・ファイルに指定されていないすべてのユーザー環境設定が失われます。

Oracle Calendar Desktop Client for Windows の削除

Oracle Calendar Desktop Client for Windows を削除するには、次のようにします。

1. 「コントロール パネル」で「**アプリケーションの追加と削除**」をダブルクリックします。
2. 「Oracle Calendar 9.0.4」を選択し、「**追加と削除**」をクリックします。

Oracle Calendar Desktop Client for Linux

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のシステム要件](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のインストール](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のサイレント・インストール](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 の削除](#)

Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のシステム要件

次の表に、Oracle Calendar Desktop Client for Linux のシステム要件を示します。

表 G-4 Oracle Calendar Desktop Client for Linux のシステム要件

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none">■ Red Hat Linux 7.x ~ 9.0■ SuSE Linux 7.1■ Linux X86 カーネル 2.4.x 以上
ディスク領域	33MB
RAM	15 ~ 20MB
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none">■ Oracle CorporateTime Server 5.4■ Oracle Calendar Server 5.5■ Oracle Calendar Server 9.0.4.x

Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のインストール

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Linux をインストールする方法を説明します。

1. 一時ディレクトリにディストリビューション・アーカイブを解凍します。次に示す手順では、サンプル・ディレクトリとして /tmp を使用しています。

```
cd /tmp
gtar zxvf /tmp/cal_linux_904x.tar.gz
```
2. OracleCalendar_inst ディレクトリに移動します。

```
cd OracleCalendar_inst
```
3. 完全なグラフィカル・インタフェースを使用してインストールするには、gui_install.sh を実行します。テキスト・モード・インタフェースを使用してインストールするには、text_install.sh を実行します。インストールおよびショートカット・ディレクトリを求めるプロンプトが表示されます。

Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のサイレント・インストール

Oracle Calendar Desktop Client for Linux のサイレント・インストールを実行するには、ファイル `silent_install.sh` を実行することを除いて、G-19 ページの「[Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のインストール](#)」に説明されている手順に従います。このファイルは、`ocal_conf/silent.properties` ファイルから次のパラメータを読み取ります。

- `USER_INSTALL_DIR`: アプリケーションのインストール先
 - `USER_SHORTCUTS`: Oracle Calendar の起動に使用するショートカットの配置場所
- どちらの値も、`/local/OracleCalendar` のような完全修飾パスである必要があります。相対パスは使用できません。

Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 の削除

Oracle Calendar Desktop Client for Linux を削除するには、`OracleCalendar` ディレクトリを削除します。

```
rm -rf /OracleCalendar
```

Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のシステム要件](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のインストール](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh の削除](#)

Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のシステム要件

次の表に、Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のシステム要件を示します。

表 G-5 Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のシステム要件

要件	値
オペレーティング・システム	Mac OS 9.x (CarbonLib 1.6 付き)、Mac OS X 10.1.4 ～ 10.2.6 注意: Oracle Collaboration Suite リリース 2 のパッチ・セット 1 (9.0.4.2.0) は、Mac OS 9.22 ～ OS 10.3 をサポートします。
ディスク領域	20MB 以上
RAM	12MB

表 G-5 Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のシステム要件（続き）

要件	値
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle CorporateTime Server 5.4 ■ Oracle Calendar Server 5.5 ■ Oracle Calendar Server 9.0.4.x

Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のインストール

Mac OS 9.x

この項では、Mac OS 9.x に対して Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh をインストールする方法を説明します。

1. 管理権限を所有していることを確認します。
2. インストーラを実行するために、CarbonLib ファイルがアクティブなシステム・フォルダの「Extensions」フォルダにインストールされていることを確認します。
3. cal_mac_OS9_904x.hqx をダブルクリックし、画面に表示される手順に従います。
 インストーラは、アプリケーションを抽出し、選択されたコピー先フォルダに Readme.htm ファイルをコピーします。また、インストーラは、すべての共有ライブラリを「Extensions」フォルダに抽出し、「Oracle Calendar Help」をアクティブなシステム・フォルダの「ヘルプ」フォルダに抽出します。
 CarbonLib ファイルが 1.6 より前のバージョンである場合は、それが更新されます。ファイルの新しいバージョンを有効にするには、コンピュータを再起動します。
4. インストール完了時にアプリケーションを起動する場合は、「Oracle Calendar」デスクトップ・アイコンをダブルクリックします。

Mac OS X

この項では、Mac OS X に対して Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh をインストールする方法を説明します。

1. 管理権限を所有していることを確認します。
2. cal_mac_OSX_904x.hqx をダブルクリックし、画面に表示される手順に従います。
 インストーラは、アプリケーションを抽出し、選択されたコピー先フォルダに Readme.htm ファイルをコピーします。また、インストーラは、すべての共有ライブラリを /Library/CFMSupport/ フォルダに抽出し、「Oracle Calendar Help」フォルダを /Library/Documentation/Help/ フォルダに抽出します。
3. インストール完了時にアプリケーションを起動する場合は、「Oracle Calendar」デスクトップ・アイコンをダブルクリックします。

Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh の削除

Mac OS 9.x

この項では、Mac OS 9.x で Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh を削除する方法を説明します。

1. Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh を削除するには、次のコンポーネントを削除する必要があります。
 - 共有ライブラリおよび ACE プラグイン
 - ヘルプ
 - 設定
 - Oracle Calendar Desktop Client アプリケーション
 - Oracle Calendar データ（オフライン・ファイル）
2. 共有ライブラリおよび ACE プラグインを削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「システム」フォルダを開きます。「Extensions」フォルダを開き、次のファイルを削除します。
 - OCALACipher1EncrLib
 - OCALLightEncrLib
 - OCALSimpleCompLib
 - OCALStdAuthLib
 - OCALSASLAuthLib
 - OCALGssapiAuthLib
 - Unison Library
3. ヘルプを削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「システム」フォルダを開きます。「ヘルプ」フォルダを開き、「Oracle Calendar Help」フォルダを選択して削除します。
4. 設定を削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「システム」フォルダを開きます。「初期設定」フォルダを開き、Oracle Calendar Prefs ファイルを選択して削除します。
5. Oracle Calendar データ・ファイルを削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「Applications (Macintosh OS 9)」フォルダを開きます。「Oracle Calendar」フォルダを選択し、それを削除します。

Mac OS X

この項では、Mac OS X で Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh を削除する方法を説明します。

1. Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh を削除するには、次のコンポーネントを削除する必要があります。
 - 共有ライブラリおよび ACE プラグイン
 - ヘルプ
 - 設定
 - Oracle Calendar Desktop Client アプリケーション
 - Oracle Calendar データ（オフライン・ファイル）
2. 共有ライブラリおよび ACE プラグインを削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「Library」フォルダを開きます。「CFMSupport」フォルダを開き、次のファイルを削除します。
 - OCALACipher1EncrLib
 - OCALLightEncrLib
 - OCALSImpleCompLib
 - OCALStdAuthLib
 - OCALSASLAuthLib
 - OCALGssapiAuthLib
 - Unison Library
3. ヘルプを削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「Library」フォルダを開きます。「Documentation」フォルダを開き、「ヘルプ」フォルダを開きます。「Oracle Calendar Help」フォルダを選択し、それを削除します。
4. 設定を削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「Users」フォルダを開き、「(ユーザー名)」フォルダにアクセスします。「Library」フォルダを開き、「作業環境」フォルダを開きます。次のファイルを選択し、それを削除します。
 - com.Oracle.Oracle Calendar.plist
 - Oracle Calendar Prefs
5. Oracle Calendar アプリケーションを削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「Applications」フォルダを開きます。「Oracle Calendar」フォルダを選択し、それを削除します。

Oracle Calendar Desktop Client for Solaris

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\) のシステム要件](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\) のインストール](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\) の削除](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\) のサイレント・インストール](#)

Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) のシステム要件

次の表に、Oracle Calendar Desktop Client for Solaris のシステム要件を示します。

表 G-6 Oracle Calendar Desktop Client for Solaris のシステム要件

要件	値
オペレーティング・システム	Solaris 8、9 (SPARC のみ) Oracle Calendar Desktop Client のオンライン・ヘルプを使用するには、Netscape Navigator または Netscape Communicator リリース 4.0 以上が必要です。Netscape 実行可能ファイルを含むディレクトリをパスに設定する必要があります。
ディスク領域	40MB
RAM	20 ～ 25MB
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none">■ Oracle CorporateTime Server 5.4■ Oracle Calendar Server 5.5■ Oracle Calendar Server 9.0.4.x

Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) のインストール

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Solaris をインストールする方法を説明します。

1. 一時ディレクトリにディストリビューション・アーカイブを解凍します。次に示すコマンドでは、サンプル・ディレクトリとして /tmp を使用しています。

```
cd /tmp
gtar zxvf /tmp/cal_sun_os_904x.tar.gz
```

2. OracleCalendar_inst ディレクトリに移動します。

```
cd OracleCalendar_inst
```

3. 完全なグラフィカル・インタフェースを使用してインストールするには、gui_install.sh を実行します。テキスト・モード・インタフェースを使用してインストールするには、text_install.sh を実行します。インストールおよびショートカット・ディレクトリを求めるプロンプトが表示されます。

Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) の削除

Oracle Calendar Desktop Client for Solaris を削除するには、OracleCalendar ディレクトリを削除します。

```
rm -rf /OracleCalendar
```

Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) のサイレント・インストール

Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) のサイレント・インストールを実行するには、ファイル silent_install.sh を実行することを含いて、G-25 ページの「[Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\) のインストール](#)」に説明されている手順に従います。このファイルは、ocal_conf/silent.properties ファイルから次のパラメータを読み取ります。

- USER_INSTALL_DIR: アプリケーションのインストール先
- USER_SHORTCUTS: Oracle Calendar の起動に使用するショートカットの配置場所

どちらの値も、/local/OracleCalendar のような完全修飾パスである必要があります。相対パスは使用できません。

Oracle Calendar Sync for Palm for Windows

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のシステム要件](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のインストール](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Windows の削除](#)

Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のシステム要件

次の表に、Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のシステム要件を示します。

表 G-7 Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のシステム要件

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none">■ Windows 98■ Windows 2000■ Windows ME■ Windows XP■ Windows NT 4.0
ディスク領域	75MB
RAM	64MB
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none">■ CorporateTime Server 5.4■ Oracle Calendar Server 5.5■ Oracle Calendar Server 9.0.4
Palm Desktop	Palm Desktop 3.1 ～ 4.1
デバイス	<ul style="list-style-type: none">■ Palm m100、m500、m505、III、IIIx、V、Vx、Tungsten T、Tungsten W■ Handspring Visor

Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のインストール

この項では、Oracle Calendar Sync for Palm for Windows をインストールする方法を説明します。

Oracle Calendar Sync (CorporateSync) の以前のバージョンがインストールされている場合は、Oracle Calendar Sync for Palm for Windows をインストールする前に同期化を実行することをお勧めします。

1. HotSync がコンピュータにインストールされていることを確認します。
2. ディストリビューション・パッケージに付属の cal_syncpalm_win_904x.exe セットアップ・プログラムを実行し、画面に表示される InstallShield の手順に従います。
3. インストールのタイプを選択します。「カスタム」を選択した場合、「この機能をローカルのハードディスク ドライブにインストールします。」と「この機能をローカルのハードディスク ドライブにインストールします。」の間に違いはありません。インストールするコンジットを選択します。
4. ユーザー情報（ユーザー名、パスワード、Calendar Server、ノード ID など）を入力します。
5. 画面に表示されるその他の手順に従って、インストールを完了します。
6. デバイスがクレードルにあることを確認し、同期を実行します。インストール後に初めて同期を実行する際には、完全同期が実行されます。

Oracle Calendar Sync for Palm for Windows の削除

Oracle Calendar Sync を削除するには、次のようにします。

1. 「コントロール パネル」で「アプリケーションの追加と削除」をダブルクリックします。
2. 「Oracle Calendar Sync 9.0.4 for Palm」を選択し、「追加と削除」をクリックします。

Oracle Calendar Sync for Pocket PC

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Sync for Pocket PC のシステム要件](#)
- [Oracle Calendar Sync for Pocket PC のインストール](#)
- [Oracle Calendar Sync for Pocket PC の削除](#)

Oracle Calendar Sync for Pocket PC のシステム要件

次の表に、Oracle Calendar Sync for Pocket PC のシステム要件を示します。

表 G-8 Oracle Calendar Sync for Pocket PC

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none">■ Windows 98■ Windows 2000■ Windows ME■ Windows XP■ Windows NT 4.0
ディスク領域	75MB
RAM	64MB
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none">■ CorporateTime Server 5.4■ Oracle Calendar Server 5.5■ Oracle Calendar Server 9.0.4
Pocket PC	MIPS、SH3、ARM または XScale プロセッサ搭載の Pocket PC (Windows CE 3.0)
ActiveSynch	バージョン 3.0 ～ 3.7 (ご使用のデバイスに応じて)。Microsoft ActiveSync の以前のバージョンを実行している場合は、製造元の Web サイトで更新版を入手してください。
デバイス	<ul style="list-style-type: none">■ HPC 2000■ Compaq iPAQ■ HP iPAQ H1910■ HP Jornada 500 シリーズ■ HP Jornada 700 シリーズ■ Handheld PC■ Pocket PC 2002 <p>Microsoft ActiveSync の以前のバージョンを実行している場合は、製造元の Web サイトで更新版を入手してください。</p>

Oracle Calendar Sync for Pocket PC のインストール

この項では、Oracle Calendar Sync for Pocket PC をインストールする方法を説明します。

Oracle Calendar Sync (CorporateSync) の以前のバージョンがインストールされている場合は、Oracle Calendar Sync for Pocket PC をインストールする前に同期化を実行することをお勧めします。

1. ActiveSync がコンピュータにインストールされていることを確認します。
2. ディストリビューション・パッケージに付属の cal_syncppc_win_904.exe セットアップ・プログラムを実行し、画面に表示される InstallShield の手順に従います。
3. インストールのタイプを選択します。「カスタム」を選択した場合、「この機能をローカルのハードディスク ドライブにインストールします。」と「この機能をローカルのハードディスク ドライブにインストールします。」の間に違いはありません。インストールするコンジットを選択します。
4. アプリケーションで Oracle Calendar Sync Helper ファイルをインストールするかどうかを確認するプロンプトが表示されたら、インストールすることを確認します。これらのファイルをインストールするにはデバイスが接続されている必要があります。

注意： 後で接続し、ファイルをインストールするには、「スタート」→「プログラム」→「Oracle Calendar Sync for Pocket PC」→「モバイル機器のヘルパー・ファイルをインストール」をクリックします。

5. ユーザー情報（ユーザー名、パスワード、Calendar Server、ノード ID など）を入力します。
6. 画面に表示されるその他の手順に従って、インストールを完了します。
7. クレードルからデバイスを除去します。
8. 以前のバージョンからアップグレードする場合は、「ファイル」→「パートナーシップの削除」を選択します。
9. デバイスをクレードルに戻します。ActiveSync パートナーシップ・ウィザードが起動します。
10. 画面の説明に従って、新規 ActiveSync Partnership を作成します。カレンダー、タスクおよび連絡先のプラグインとして「Oracle Calendar」を選択します。
11. Microsoft ActiveSync が自動的に開かれない場合は、これを開きます。
12. 同期が自動的に開始しない場合は、「同期」をクリックします。初めて同期を実行する際には、完全同期が実行されます。

Oracle Calendar Sync for Pocket PC の削除

Oracle Calendar Sync for Pocket PC を削除するには、次のようにします。

1. 「コントロール パネル」で「アプリケーションの追加と削除」をダブルクリックします。
2. 「Oracle Calendar Sync 9.0.4 for Pocket PC」を選択し、「追加と削除」をクリックします。

モバイル機器から Oracle Calendar Sync Helper ファイルを削除するには、次のようにします。

1. デバイスで、「スタート」→「設定」を選択します。
2. 「システム」の下で、「アプリケーションの削除」をクリックします。
3. 「Oracle Calendar Sync Helper Files」を選択し、「削除」をクリックします。

Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件](#)
- [以前のバージョンへのインストールの準備](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストール](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh の削除](#)

Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件

次の表に、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件を示します。

表 G-9 Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件

要件	値
オペレーティング・システム	Mac OS 9 または Mac OS X 10.1.4 ～ 10.2.6 注意： Oracle Collaboration Suite リリース 2 のパッチ・セット 1 (9.0.4.2.0) は、Mac OS 9.22 ～ OS 10.3 をサポートします。
ディスク領域	15MB Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh がすでにインストールされている場合は、5MB のディスク領域のみ必要です。
RAM	8MB (64MB を推奨)

表 G-9 Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件（続き）

要件	値
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle CorporateTime Server 5.4 ■ Oracle Calendar Server 5.5 ■ Oracle Calendar Server 9.0.4.x
Palm	Palm Desktop バージョン 4.0
デバイス	Palm OS 3.3 ～ 3.5x、Palm OS 4 または Palm OS 5 を実行する任意の Palm 互換デバイス。

以前のバージョンへのインストールの準備

Sync ソフトウェアがコンピュータにすでにインストールされており、データが Palm Desktop に格納されている場合は、HotSync を実行します。

Beta バージョンの Oracle Calendar Sync がインストールされている場合、またはリリース 2.1.4 以前の Oracle Corporate Sync がインストールされている場合は、データを保護するために、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh をインストールする前に次の操作を実行する必要があります。

1. Oracle Calendar Sync アプリケーション（CS Setup と呼ぶ）を Palm オーガナイザから削除します。
2. 「Date Book」および「To Do List」からすべてのアイテムをパージします。この処理を行わない場合、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストール後に初めて HotSync を実行した際に、重複するアイテムが作成されます。データをパージする際には、次の手順に注意してください。
 - 「Save archive copy on PC」が選択されていることを確認します。
 - 完了としてマークされている「To Do」アイテムは、手動で削除する必要があります。
 - 「Date Book」イベントの大多数またはすべてを削除する場合は、オーガナイザの日付を数年進めてからパージします。たとえば、オーガナイザの日付を 2015 に変更し、**1 週間より前**のすべてのイベントをパージして、2015 年までのすべてのイベントを削除します。

Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストール

この項では、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh をインストールする方法を説明します。

1. `cal_syncpalm_macOS9_904.hqx` (Mac OS X を使用している場合は `cal_syncpalm_macOSX_904.hqx`) ファイルをダブルクリックします。これにより、Oracle Calendar Sync インストーラが作成されます。
2. 「Oracle Calendar Sync Install」をダブルクリックします。インストーラは、既存の Sync ファイルをチェックし、プログラムをインストールします。設定に応じて、これには数分かかることがあります。エラー・メッセージが生成され、インストール・ログに保存されることがあります。これらのメッセージは無視してかまいません。
3. `Oracle Calendar Sync.prc` を `/Applications/Palm/Add-on/` ディレクトリから `/Users/user/Documents/Palm/Users/user/Files to Install/` ディレクトリにコピーします。`user` は、関連 Mac ユーザーの名前です。

Palm Desktop を最近インストールし、「Files to Install」フォルダが存在しない場合は、このフォルダを手動で作成します。

注意： インストーラは、「予定」および「ToDo」コンジットを「Disabled Conduits」という名前のフォルダに移動します。

4. Palm オーガナイザをオンにし、オーガナイザをそのクレードルに設置します。
5. Palm オーガナイザ・クレードルの前面にある「HotSync」ボタンを押します。Oracle Calendar Sync アプリケーションが Palm オーガナイザにインストールされます。

注意： Oracle Calendar Sync が見つからないことを示すエラー・メッセージが HotSync ログに表示される場合があります。これらのメッセージは無視してください。

6. HotSync Manager が実行されている場合、インストーラはそれを終了するかどうかを確認するプロンプトを表示します。「はい」をクリックして、HotSync Manager を終了します。
7. HotSync フォルダ内の「HotSync」アイコンをクリックし、「HotSync マネージャー」を選択します。

8. 「HotSync」メニューで、「動作設定」を選択します。同期可能な項目のリストが表示されます。Oracle Calendar のイベントおよびタスクをダブルクリックして、これらの各項目を同期化する方法を選択します。次の選択項目を含むダイアログ・ボックスが表示されます。
 - **Synchronize the files:** Palm オーガナイザおよび Oracle Calendar の両方に存在するすべての情報を同期化します。
 - **Macintosh overwrites hand-held:** Oracle Calendar Agenda 内の情報が Palm オーガナイザの「予定表」、「To Do」または「アドレス」を上書きします。
 - **何もしない:** 指定したエントリ・タイプは同期化されません。
9. 「動作設定」ダイアログ・ボックスの上部で、ユーザー名を選択します。ユーザー名が1つのみの場合は、それが自動的に選択されます。
10. Oracle Calendar Sync を Palm オーガナイザに開き、Oracle Calendar ユーザー名、パスワード、サーバーおよびノード ID を入力します。この情報が不明な場合は、ネットワーク管理者に問い合わせてください。

この時点で Oracle Calendar Sync はインストールされていますが、エントリ情報は同期化されていません。

Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストールのトラブルシューティング

Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストール後に、HotSync の実行に問題が発生することがあります。これは、Palm Desktop ファイルとの競合が原因です。問題を修正するには、次の手順を実行します。

1. `/Users/your_user_name/Documents/Palm/Users` の下の「Documents Folder」にある「Users」フォルダを削除します。
2. `com.palm.Desktop.plist` ファイルを削除します。このファイルは `/Users/your_user_name/Library/Preferences/` ディレクトリにあります。
3. `/Users/your_user_name/Library/Preferences/ByHost/` ディレクトリにある次のファイルを削除します。
 - `com.palm.HS.T.S.xxxxxxxx.plist`
 - `com.palm.HS.T.PC.xxxxxxxx.plist`
 - `com.palm.HS.T.USB.xxxxxxxx.plist`
4. HotSync Manager を起動します。前述の手順の説明に従ってファイルとフォルダを削除した場合は、ユーザー名を求めるプロンプトが表示されます。

5. ユーザー名およびその他の必要な HotSync 情報を入力します。
6. HotSync Manager を終了し、HotSync を実行します。

Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh の削除

この項では、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh を削除する方法を説明します。

1. HotSync の「Conduits」フォルダから「Oracle Calendar Tasks」および「Oracle Calendar Events」コンジットを削除します。
2. アクティブな (Mac OS 10.2.1) Library\CFM Support フォルダから「Unison Library」共有ライブラリを削除します。
3. 「Disable Conduits」フォルダの内容を「HotSync conduits」フォルダに戻します。

Oracle FileSync

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle FileSync for Windows のインストール](#)
- [Oracle FileSync for Windows の削除](#)

Oracle FileSync for Windows のインストール

Oracle FileSync は、ローカル・コンピュータと Oracle Files の間でファイルの同期を維持することを可能にする Windows クライアント・ソフトウェア・アプリケーションです。Oracle FileSync をインストールするには、次の手順に従います。

1. すべての Windows アプリケーションを保存および終了します。
2. Oracle Files にログインし、「ヘルプ」をクリックします。オンライン・ヘルプのメイン・ページで、Oracle FileSync セクションにあるリンクをクリックします。
3. 実行可能ファイルをハード・ドライブに保存します。
4. **FileSync.exe** をダブルクリックして、インストール・プログラムを実行します。
5. 指示に従い、デフォルト値を受け入れます。アプリケーションは、Windows クライアント・マシンの次のディレクトリにインストールされます。

c:\Program Files\Oracle\Oracle FileSync

6. Oracle FileSync アプリケーションを起動するには、Windows の「スタート」→「プログラム」メニューで「**Oracle FileSync**」を選択します。

Oracle FileSync for Windows の削除

Oracle FileSync for Windows を削除するには、次のようにします。

1. 「コントロール パネル」で「**アプリケーションの追加と削除**」をダブルクリックします。
2. 「Oracle FileSync」を選択し、「**追加と削除**」をクリックします。

用語集

Debian

Linux カーネル、および GNU プロジェクトの基本オペレーティング・システム・ツールを使用する無償のオペレーティング・システム。

ias_admin パスワード (ias_admin password)

Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite がインストールされたホスト上の任意のインストールの管理に使用されるパスワード。このパスワードは、追加の Oracle Collaboration Suite インスタンスをインストールするために必要である。**Oracle Internet Directory** を構成する場合、デフォルトで、デフォルトの管理ユーザー orcladmin に、ias_admin ユーザーと同じパスワードが割り当てられる。orcladmin ユーザーは、**Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー**である。

LDAP

「[Lightweight Directory Access Protocol \(LDAP\)](#)」を参照。

LDAP Data Interchange Format (LDIF)

すべての LDAP コマンドライン・ユーティリティ用の入力ファイルをフォーマットするための一連の規格。

LDIF

「[LDAP Data Interchange Format \(LDIF\)](#)」を参照。

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)

拡張可能な標準 DAP (Directory Access Protocol)。LDAP クライアントと LDAP サーバーが通信するために使用する共通の言語。業界標準のディレクトリ製品 (Oracle Internet Directory など) をサポートする設計規則のフレームワーク。

Oracle Calendar

デスクトップ・クライアント、Web およびすべてのモバイル機器を介したカレンダーリング、スケジュールリングおよび個人情報管理（PIM）機能を提供する Oracle Collaboration Suite アプリケーション。スケーラブルなカレンダー・アーキテクチャによって、企業全体での高度なグループ・カレンダーの使用およびリソース・スケジュールリングが可能になる。

Oracle Calendar Desktop Client

Oracle Calendar Desktop Client を使用すると、ユーザーは、会議、記録、イベントおよびタスクを、自分で、または他のユーザーの代理として作成および管理できる。ユーザーは、便利な結合された「グループ・ビュー」を使用して簡単にスケジュールを比較したり、他のユーザーのスケジュール空き状況を確認したりすることができ、会議を作成する前にスケジュールの不一致を確認できる。オンラインのアドレス帳を使用すると、ユーザーは、連絡先を管理して、構成可能なカテゴリに従って連絡先を分類できる。Oracle Calendar Desktop Client は、Windows、Macintosh および Motif で使用できる。

Oracle Calendar Sync

Oracle Calendar の会議、タスクおよびアドレス帳を携帯端末のエントリと同期化する。Oracle Calendar Sync を使用すると、カレンダーをどこにでも携帯し、携帯端末で必要な変更を行って、Oracle Calendar Server 上で最新の情報と同期化できる。この機能は、Palm デバイス（Windows および Macintosh）および Pocket PC デバイス（Windows のみ）で使用できる。

Oracle Calendar Web Client

単独で、または任意の Oracle Calendar Desktop Client の補助機能としても使用できる、便利でアクセスの容易なカレンダー・サービス。ユーザーは、カスタマイズ可能なユーザー・インタフェースによって組織のニーズに適応するインタフェースを使用して、複数のタイムゾーン、オペレーティング・システムおよび言語間で作業できる。また、柔軟で直観的なレイアウトおよび編成を使用して、周囲のユーザーと簡単に共同作業できる。

Oracle Cluster Setup Wizard

Oracle Cluster Setup Wizard は、すべてのノード上で次のタスクを実行する。

- Oracle9i オペレーティング・システム依存のクラスタウェアをインストールおよび起動する。
- OracleClusterFileSystem サービスをインストールおよび起動し、1 つまたは 2 つの共有ファイル・システムを作成する（オプション）。
- Object Link Manager をインストールし、すべてのノード上で Oracle Object Service を起動する（オプション）。このツールは、論理ドライブへの永続シンボリック・リンクを作成する。サービスは、シンボリック・リンクが変更されるとすべてのノードを更新し、コンピュータが停止および再起動されるたびに起動するよう「自動」に設定される。

- Oracle Object Link Manager を以前起動したときに作成された既存のシンボリック・リンク情報を保持する。
- すべてのノードに他のディスク管理ツールをインストールする。
- 既存のクラスタにノードを追加する。

Oracle Collaboration Suite Web Client

Oracle Collaboration Suite は、ブラウザを搭載したコンピュータ用の統合 Web クライアントを提供する。この Web クライアントは、基礎となる Oracle9iAS Infrastructure を使用して、メッセージ（電子メール、ボイスメールおよび FAX）、カレンダーおよびディレクトリ情報、および大規模な共同作業用に設計されたファイル・サーバーである **Oracle Files** に格納されたコンテンツにアクセスするための、安全なシングル・サインオン環境を提供する。

Oracle Connector for Outlook

Oracle Connector for Outlook は、統合された Microsoft Outlook の見慣れたインタフェースを介して、電子メールおよびリアルタイムのカレンダーを提供する。Oracle Connector for Outlook は、オンラインとオフラインの両方での情報へのアクセス機能、完全な電子メール機能および PDA 同期機能を備え、Microsoft Outlook の最もよく使用するすべての機能のメリットを最大限に活かす。さらに、ユーザーは、**Oracle Calendar** を使用した情報へのリアルタイム・アクセスおよび最新のスケジュールの空き状況の参照を介して、高度なカレンダー機能のメリットを得ることができる。

Oracle Email

ボイスメール、電子メールおよび FAX のメッセージ用に使用される単一のメッセージ・ストア。あらゆるタイプの情報を格納および管理し、それらの情報へのアクセスを提供する。このメッセージ・ストアは、配信、通話処理、ワイヤレス通知、ブラウザベースのクライアント（Web とワイヤレスの両方）および管理ユーティリティを提供する。Oracle Email は、任意のアクセス方法を使用して、すべてのタイプのメッセージにアクセスを提供する。ボイスメール、電子メール、FAX およびその他のメール・タイプは、ユーザーが選択したアクセス・チャネルおよびデバイスで使用可能になる。

Oracle Enterprise Manager Web Site

Oracle Collaboration Suite 用に特別に設計された管理ツールを提供する Web サイト。この Web サイトを使用すると、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite のコンポーネントを監視および構成できる。アプリケーションの配置、セキュリティの管理および Oracle Collaboration Suite クラスタの作成および管理を実行できる。Oracle Enterprise Manager Web Site は、Oracle9iAS Infrastructure の一部としてすべてのホストにインストールされる。

Oracle Enterprise Manager コンソール (Oracle Enterprise Manager Console)

Oracle Enterprise Manager のクライアント・インタフェース。Oracle 環境を詳細に表示する。Oracle Enterprise Manager コンソールを使用すると、ネットワーク全体で、Oracle データベース、アプリケーション・サーバーおよび Oracle アプリケーションを自動的に検出および管理できる。コンソールおよび関連ツールは、Oracle9iAS Infrastructure の一部としてインストールされる。

Oracle Files

スケーラブルで信頼性の高い統合ファイル・サーバーを介した共同作業およびファイルの共有をサポートする、コンテンツ管理アプリケーション。Oracle Files は、高度な Web ベースのユーザー・インタフェースおよび業界標準のプロトコル・サポートを提供する。これによって、ユーザーは、1 つのワークスペース内または企業全体で様々なタイプのファイルを他のユーザーと簡単に共有できる。セルフサービス管理機能によって、ユーザーはワークスペースを作成し、優先する生産性ツールおよびネットワーク・プロトコル・サーバーを使用して、コンテンツの安全性の確保、コンテンツの作成および公開を行うことができる。Oracle Files は、データ・センターとユーザーの両方のファイル・システムを管理できる。

Oracle FileSync

Oracle FileSync は、すべてのファイルの変更をローカル・コンピュータと [Oracle Files](#) の間で同期化し、古いファイルを新しいファイルで置き換え、ローカル・コンピュータと Oracle Files のコンテンツが一致するようにする。

Oracle Files ドメイン・コントローラ (Oracle Files Domain Controller)

[ドメイン](#)を作成する [ノード](#)を制御するためのプロセス。

Oracle HTTP Server

Apache Web Server テクノロジーに基づいて構築された Oracle HTTP Server は、Oracle9iAS Infrastructure をサポートし、拡張性、安定性、高速な処理を提供する。Java Servlets、JavaServer Pages (JSP)、Perl、PL/SQL および CGI アプリケーションもサポートする。

Oracle Internet Directory

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) バージョン 3 の実装。散在するユーザーおよびネットワーク・リソースに関する情報の共有を可能にする。

Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー (Oracle Internet Directory super user)

特別なディレクトリ管理者。IASAdmins グループのメンバーである必要があり、通常、ディレクトリ情報への完全なアクセス権を持つ。スーパー・ユーザーのデフォルトのユーザー名は orcladmin、デフォルトのパスワードは welcome。デフォルトのパスワードは、すぐに変更することを推奨。このユーザー名は、デフォルトで、IASAdmins のメンバーである。Oracle Internet Directory の管理者は、他のユーザーに orcladmin パスワードを付与しない場合、IASAdmins グループのメンバー用に異なるユーザー名とパスワードを作成できる。

Oracle Management Server

Oracle Enterprise Manager コンソールを使用して、システム管理タスクを処理し、ネットワーク間のこれらのタスクの分散を管理する。Oracle Enterprise Manager Console およびその3層アーキテクチャを **Oracle Enterprise Manager Web Site** と併用すると、Oracle 環境全体を管理できる。

Oracle Ultra Search

Oracle Ultra Search は、Oracle データベース、その他の ODBC 対応データベース、IMAP メール・サーバー、Web サーバーが提供する HTML ドキュメント、ディスク上のファイルなどの複数のリポジトリにわたって、均一な検索機能を提供する。Oracle データベース・サーバーおよび Oracle Text テクノロジーに基づいて構築され、クローラを使用してドキュメントを索引付けする。ドキュメントは元のリポジトリ内に残り、クロールされた情報を使用して索引が構築される。この索引は、ファイアウォールの内側の、指定された Oracle データベース内に存在する。また、Oracle Ultra Search は、コンテンツ管理ソリューションを構築するための API を提供する。

Oracle Voicemail & Fax

信頼性が高く、高スケーラブルなボイスメールおよび FAX システム。このシステムによって、ボイスメール・メッセージおよび FAX メッセージの集中管理された安全な格納および取出しが可能になる。Oracle Voicemail & Fax は、高スケーラブルで信頼性の高い **Oracle Email** メッセージ・ストアを基礎として使用し、通話処理、配信、ブラウザベースのクライアントおよび管理ユーティリティを提供する。

Oracle Web Conferencing

Oracle Web Conferencing は、企業でのリアルタイムのオンラインの共同作業を可能にし、顧客、従業員、チームおよびパートナーが、E-Business のコンテンツ、取引および総合的ビジネス・フローにより提供されるコンテキスト内でオンライン会議を行えるようにする。オンライン会議を作成し、会議への参加をさせるクライアントおよびサーバー・アプリケーションから構成される。Oracle Web Conferencing には、デスクトップ共有、ホワイトボード、チャット、アンケート、共有ブラウザなど、会議で協調するための複数の方法が用意されている。

Oracle9iAS Containers for J2EE

Oracle9iAS Infrastructure が提供する、完全に Java で作成された、Java 2 Enterprise Edition (J2EE) コンテナの完全なセット。標準 Java Development Kit (JDK) の Java Virtual Machine (JVM) 上で実行する。Oracle9iAS Containers for J2EE (OC4J) は、オペレーティング・システムに存在する標準 JDK 上で実行できる。

Oracle9iAS Metadata Repository

Oracle Collaboration Suite インスタンスの実行に必要なメタデータを含む事前作成済データベース。 **Oracle Internet Directory** および **Oracle9iAS Single Sign-On** の情報も格納できる。

Oracle9iAS Portal

Oracle9iAS Portal は、Web データベース・アプリケーションおよびコンテンツ駆動型の Web サイトを構築、配置および監視するための完全なソリューションである。Oracle9iAS Portal を使用すると、簡単に使用できる HTML ベースのインタフェースを介してデータベース・オブジェクトを作成および参照し、HTML ベースのインタフェースを作成するためのツールを使用できる。また、パフォーマンス追跡機能を使用してパフォーマンスの問題を解決したり、インタフェースを介してデータベースのセキュリティを管理したりできる。

Oracle9iAS Single Sign-On

複数のアカウントおよび Oracle Collaboration Suite アプリケーションへのアクセスを可能にする、企業規模のユーザー認証プロセス。

Oracle9iAS Web Cache

サーバーのアクセス速度を向上させるキャッシュ・サービス。Oracle9iAS Infrastructure および Oracle データベース上で実行し、頻繁に使用される E-Business Web サイトのパフォーマンス、拡張性および可用性を向上させる。Oracle9iAS Web Cache は、頻繁にアクセスされる URL を仮想メモリー内に格納することによって、これらの URL へのリクエストを Web サーバー上で繰り返し処理する必要性を排除する。また、1 つ以上の Web アプリケーションからの、静的および動的に生成された HTTP コンテンツをキャッシュする。

Oracle9iAS Wireless

情報およびアプリケーションをモバイル機器に配信するためのポータル・サービス。Oracle9iAS Wireless を使用すると、Web ページ、カスタム Java アプリケーション、XML ベースのアプリケーションなどの様々なコンテンツを使用するカスタム・ポータル・サイトを作成できる。Oracle9iAS Wireless サイトでは、各ターゲット端末のプラットフォーム用のコンテンツを再作成することなく、モバイル機器から多様な情報にアクセスできる。

Oracle コンテキスト (Oracle Context)

相対識別名 cn=OracleContext を持つディレクトリ・サブツリーのルート。すべての Oracle ソフトウェア情報が格納される。ディレクトリには、1 つ（または複数）の Oracle コンテキストが存在する。Oracle コンテキストは、ディレクトリ・ネーミング・コンテキストに関連付けることができる。

Oracle コンテキストには、次の Oracle エントリを含めることができる。

- データベース接続のために Oracle Net Services ディレクトリ・ネーミングで使用する接続識別子
- Oracle Advanced Security で使用するエンタープライズ・ユーザー・セキュリティ

インスタンス名 (instance name)

単一のホスト上の Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite のインストール・インスタンスを識別する名前。

サブスクライバ (Subscriber)

Oracle Files では、サブスクライバはユーザーが共同作業を行う組織エンティティを示す。Oracle Files サブスクライバは、Oracle Internet Directory LDAP サーバー上のサブスクライバにマップされる。Oracle Internet Directory サーバーは Oracle Files で設定される。

各サブスクライバには、それぞれ固有のサブスクライバ管理者が存在する。拡張ユーザーであるサブスクライバ管理者は、クォータの管理、サブスクライバ設定の指定、ユーザーの管理、ファイル、フォルダおよびワークスペースのリストア、カテゴリの管理を担当する。

サブスクライバは、サイト管理者が管理する。サイト管理者は、サブスクライバを作成、変更および削除する。

スキーマ (schema)

データベース・オブジェクトの集合。表、ビュー、シーケンス、ストアド・プロシージャ、シノニム、索引、クラスタ、データベース・リンクなどの論理構造を含む。スキーマの名前は、そのスキーマを制御するユーザーの名前になる。

ドメイン (domain)

ドメイン・ネーム・システム・ネームスペース内の任意のツリーまたはサブツリー。ドメインは、一般的に、同じ接尾辞（ドメイン名）を含むホスト名を持つコンピュータのグループを意味する。

Oracle Files では、ドメインは Oracle Files **ノード**と HTTP ノード、**Oracle Files ドメイン・コントローラ**およびすべての Oracle Files データを含む Oracle9i データベース・インスタンスの論理グループである。

ドメイン・ネーム・システム (Domain Name System: DNS)

ドメインの階層に編成されたコンピュータおよびネットワーク・サービスのネーミング・システム。DNS は、TCP/IP ネットワークで使用され、ユーザーが簡単に識別できる名前によってコンピュータの位置を示す。DNS は、ユーザーが識別できる名前を、コンピュータが理解する IP アドレスに解決する。

ノード (node)

Oracle Files ノードは、ホスト・コンピュータで実行される一連のプロセスである。1 つ以上のノード・プロセスを 1 台のホスト・コンピュータで実行できる。Oracle Files ノードは、基本的に、Java 仮想マシン (Java Virtual Machine: JVM) など、製品および基礎となるプロセスを構成するアプリケーション・ソフトウェアであり、実行時にソフトウェアをサポートする。

ポート (port)

送信データを特定のプログラムに、または特定のプログラムからルーティングするために使用される番号。

ホスト名 (host name)

ドメイン内の各コンピュータを一意に識別する名前。

索引

A

Advanced Queue Message Waiting Indicator, 7-8
AJP
 ポート番号, D-3
AQMWI
 「Advanced Queue Message Waiting Indicator」を
 参照

B

Bourne/Korn シェル
 環境変数 DISPLAY, 2-18

C

CD-ROM のマウント
 HP, 5-5
 Linux, 5-6
 Solaris, 5-2
Client
 Oracle Collaboration Suite, 1-6
Cluster Membership Monitor, 2-26
Configuration Assistant
 Oracle Files Configuration Assistant, 12-10
CPU 要件, 2-2
C シェル
 環境変数 DISPLAY, 2-18

D

Database Configuration Assistant, 11-3
 実行, 11-4

E

eject コマンド
 Linux, 5-7
 Solaris, 5-3
emtab ファイルの作成, 8-4
ESTERSTORE 表領域, 11-5

G

gui_install.sh
 Oracle Calendar Desktop Client のインストール,
 G-25

H

HMP
 「Hyper Messaging Protocol」を参照
HP
 カーネル・パラメータ, 2-30, 2-37, 2-44
 サポートされるオペレーティング・システム, 2-6
 必須パッチ, 2-10, 2-11
 マウント・コマンド, 5-5
HP-UX
 シンボリック・リンク
 作成, 2-18
Hyper Messaging Protocol (HMP), 2-3

I

ias_admin パスワード, B-2, B-4
ifsConfigOut.log, C-3
init.ora パラメータ, 11-4
install_umconfig.sh, 11-15

J

J2EE and Web Cache

概要, 1-3

カスタマ・アプリケーションの配置の制限, 1-3

Java Message Service (JMS)

ポート番号, D-4

Java Object Cache

ポート番号, D-4

Java Runtime Environment

パッチ, 2-12

必要なバージョン, 5-12

JMS

「Java Message Service (JMS)」を参照

JRE

「Java Runtime Environment」を参照

L

LDAP, 12-24

Linux

カーネル・パラメータ, 2-32, 2-39, 2-46

サポートされるオペレーティング・システム, 2-6

シングルボックス・インストール, 2-49

マウント・コマンド, 5-6

LOB データ, 12-8

N

NFS

プロトコル・サーバー・ポート, 12-18

O

OC4J

ポート番号, D-3

oinstall グループ

UNIX グループ名, 2-20

Oracle Calendar

Administrator, 10-4

Configuration Assistant, 10-2, F-15

Desktop Client

Linux, G-18

Macintosh, G-20

Solaris, G-24

Windows, G-15

インストール, G-25

Desktop Client for Windows

cal_win_904x.exe, G-16

HTTPS および mod_osso の設定, 6-16

ocad.conf ファイル, F-22

ocas.conf ファイル, F-14, F-22

ocasua.sh スクリプト, F-21

ocwc.conf ファイル, F-22

Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh

cal_mac_OS9_904x.hqx, G-21

Server およびアプリケーション・システム

インストール, 6-12

slapd.conf ファイル, F-23

unison.ini ファイル, F-14

webcal.ini ファイル, F-21, F-22

Windows サービス, E-3

アップグレード, 3-26

アップグレード前のタスク, 3-13

アプリケーション・システム

アップグレード, 3-29

インストール

複数インスタンス, 10-8

インストール・ガイド, 1-9

概要, 1-4

共存, 3-26

構成, 10-1

スタンドアロン, F-1

Web サーバー構成, F-22

アップグレード, F-16

削除, F-29

セキュリティ・メカニズムの構成, F-27

ディレクトリ・サーバー, F-4, F-23

問題と対処方法, F-30

多言語サポートの制限, 2-14

電子メール

Suite の構成, 10-8

スタンドアロンの構成, F-29

配置, 4-4

ポート番号, 10-4, D-6

Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86

silent.properties, G-25

Oracle Calendar Sync

Palm for Macintosh, G-30

インストール, G-32

削除, G-34

システム要件, G-30

トラブルシューティング, G-33

- Palm for Windows, G-26
 - インストール, G-27
 - 削除, G-27
 - システム要件, G-26
- Pocket PC, G-27
 - インストール, G-29
 - 削除, G-30
 - システム要件, G-28
- Oracle Cluster Manager
 - インストール, 2-27
- Oracle Collaboration Suite
 - Client, 1-6
 - Information Storage, 1-3
 - 概要, 1-3
 - 配置, 4-2
 - パッチ 2761332, 3-11
 - Information Storage データベース
 - root.sh, 6-5
 - Middle-Tier
 - Oracle Calendar, 6-12
 - Oracle Web Conferencing, 6-12
 - アップグレード, 3-12
 - インストール, 6-8, 6-10
 - Middle-Tier コンポーネント, 1-3
 - Middle-Tier の配置, 4-3
 - Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのインストール, 6-4
 - Web Client, 1-5
 - アップグレード, 3-36
 - インストール, 6-14
 - トラブルシューティング, C-2
 - アプリケーションのリスト, 1-4
 - インストールの順序, 1-3
 - 概要, 1-3
 - ドキュメント, 1-7
 - ハードウェア要件, 2-2
 - リリース 1 (9.0.3) のインスタンスの削除, 3-39
- Oracle Connector for Outlook
 - con_outlook_904x.exe, G-4
 - インストール, G-4
 - インストール前の要件, G-4
 - サイレント・インストール, G-4
 - 削除, G-14
 - システム要件, G-2
- Oracle Delegated Administration Services
 - Oracle Internet Directory でのユーザーの作成, 11-14
- Oracle Email
 - IMAP4-SSL のポート番号, D-5
 - IMAP4 のポート番号, D-5
 - Information Storage
 - アップグレード, 3-30
 - Information Storage データベース
 - Oracle Internet Directory での登録, 11-3
 - Information Store 構成, 11-15
 - Information Store 構成スクリプト
 - 変数値, 11-16
 - install_backend_es_mail.sql スクリプト, 11-9
 - install_backend_sys.sql スクリプト, 11-9
 - NNTP-SSL のポート番号, D-5
 - NNTP のポート番号, D-5
 - POP3-SSL のポート番号, D-5
 - POP3 のポート番号, D-5
 - SMTP のポート番号, D-5
 - umconfig.bat スクリプト, 11-9
 - umconfig.sh スクリプト, 11-9
 - アップグレード後のタスク, 3-30
 - アップグレード前のタスク, 3-14
 - 概要, 1-4
 - 削除手順, 9-2
 - 配置, 4-6
 - ポート番号, D-5
- Oracle Enterprise Manager
 - ポート番号, D-5
- Oracle Files
 - ifswfsetup.properties, 12-49
 - ifswfsetup スクリプト, 12-49
 - ifswfuploadlang.log, 12-49
 - アップグレード後のタスク, 3-31
 - 概要, 1-4
 - 構成, 12-10
 - 構成情報, B-5
 - トラブルシューティング, C-3
 - 配置, 4-6
 - 非対話型モードでの Oracle Files Configuration Assistant の実行, 12-34
 - 表領域, 12-16
 - プロトコル・サーバー, B-6
 - ポート番号, D-6
 - ランタイムの設定, 12-35
- Oracle FileSync
 - Windows
 - インストール, G-34
 - 削除, G-35

- Oracle HTTP Server
 - ポート番号, D-4
- Oracle Internet Directory
 - Oracle Delegated Administration Services, 11-14
 - 概要, 1-2
 - スーパー・ユーザーのパスワード, B-3, B-5
 - スーパー・ユーザー名, B-2, B-5
 - 問合せ返送制限
 - 編集, 12-52
 - ポート番号, B-2, B-4, D-6
 - ホスト名, B-2, B-4
- Oracle Management Server
 - 概要, 1-3
 - ポート番号, D-6
- Oracle Net
 - 非対話型インストール, 8-10
- Oracle Net Configuration Assistant, 6-6, 11-3
 - 実行, 11-3
- Oracle Text
 - 確認, C-5
- Oracle Ultra Search
 - アップグレード, 3-32
 - アップグレード前のタスク, 3-14
 - 概要, 1-4
 - 配置, 4-7
 - 表領域の作成, 13-2
- Oracle Universal Installer, 5-10
 - UNIX グループ名, 2-20
 - 概要, 5-9
 - 起動, 5-12
 - 前提条件の確認, 5-9
 - 追加インストール, 5-11
- Oracle Voicemail & Fax
 - sc_vsto.cfg ファイル, 7-8
 - sc_vsto.cfg ファイルの更新, 7-8
 - UM スキーマ, 7-8
 - アップグレード, 3-34
 - アップグレード前のタスク, 3-15
 - インストール, 1-7
 - 概要, 1-7
 - 配置, 4-10
- Oracle Web Conferencing
 - Document Conversion Server および Voice Conversion Server
 - インストール, 6-14
 - インスタンスの開始, 14-5
 - インスタンスの停止, 14-5
- インストール, 6-12
- インストール後のタスク
 - インスタンス・タスク, 14-6
 - システム・タスク, 14-6
- 概要, 1-4
- ソフトウェア要件, 2-13
- 配置, 4-11
- Oracle Wireless & Voice
 - 配置, 4-12
 - ポート番号, D-5
- Oracle Workflow
 - catldap.sql スクリプト, 12-46
 - ポート番号, D-6
- Oracle9i *interMedia* メディア表領域, 12-8
- Oracle9i Text キー・マップ索引表領域, 12-8
- Oracle9i Text 索引表領域, 12-8
- Oracle9i Text データ, 12-8
- Oracle9i Text データ表領域, 12-8
- Oracle9iAS Clickstream
 - Collector Agent のポート番号, D-3
 - Collector Server のポート番号, D-3
 - Execution Engine のポート番号, D-3
 - Intelligence Viewer のポート番号, D-3
 - Intelligence のポート番号, D-3
 - Runtime Administrator のポート番号, D-3
- Oracle9iAS Forms Services
 - ポート番号, D-4
- Oracle9iAS Infrastructure
 - 9.0.2.0.1 のアップグレード, 3-6
 - インストールの順序, 1-2
 - 概要, 1-2
 - コンポーネントのポート番号, D-2
 - パッチ 3038037, 3-6
- Oracle9iAS Metadata Repository
 - 概要, 1-2
- Oracle9iAS Portal
 - 概要, 1-5
 - パッチ 2513540, 3-7
 - ポート番号, D-4
- Oracle9iAS Reports Services
 - ポート番号, D-5
- Oracle9iAS Single Sign-On
 - 概要, 1-3
 - サーバーのホスト名, B-2, B-4
 - ポート番号, B-2, B-4, D-4
- Oracle9iAS Web Cache
 - ポート番号, D-5

Oracle9iAS Wireless
 アップグレード前のタスク, 3-15
 概要, 1-5
 高可用性, 4-12
Oracle9i データ, 12-8
Oracle9i データベース・サーバー
 パッチ 2761332, 3-11
OracleContext, 11-4
oracle アカウント
 UNIX アカウント, 2-21
Oracle のインベントリ・ディレクトリ, B-2, B-3, B-4
Oracle ホームの位置, B-2, B-3, B-4
oraInst.loc ファイルの作成, 8-4
oraInventory ディレクトリ
 UNIX グループ名, 2-20
 インストール・ログ・ファイル, 5-10
 場所, 5-10, 5-11, B-2, B-3, B-4
oratab ファイルの作成, 8-4
orclguest ユーザー
 作成, 3-8
OSDBA および OSOPER グループ, 2-21

P

portlist.ini ファイル, D-2

R

Real Application Clusters
 Oracle Cluster Manager, 2-27
 インストール
 Information Storage, 2-22
 インストール前のタスク, 2-22
 インストール前のタスク (Linux), 2-27
 インストール前の追加タスク (HP), 2-24
 インストール前の追加タスク (Linux), 2-25
 インストール前の追加タスク (Solaris), 2-24
 トラブルシューティング, C-11
 必須パッチ, 2-11

RMI

 ポート番号, D-4

S

silentInstall.log ファイル, 8-7, 8-9
Solaris
 カーネル・パラメータ, 2-28, 2-35, 2-42

 サポートされるオペレーティング・システム, 2-6
 必須パッチ, 2-9
 マウント・コマンド, 5-2

Solaris 用のフォント・パッケージ, 2-12

SQL*Net

 ポート番号, D-5

SSL

 Oracle Internet Directory での使用, 12-24

Sun Java Access Bridge

 インストールおよび構成, A-1

T

TertiaryStore パラメータ, 11-5

text_install.sh

 Oracle Calendar Desktop Client のインストール,
 G-25

U

UMADMIN, 11-7

umbackend.tar, 11-8

UM スキーマ, 7-8

UNIX のアカウントおよびグループ, 2-20

 admintool ユーティリティ, 2-20

 groupadd ユーティリティ, 2-20

 oinstall グループ, 2-20

 oracle アカウント, 2-21

 oraInventory ディレクトリ, 2-20

 権限が付与されたグループ, 2-21

 作成, 2-21

V

/var/tmp の要件, 2-2

Virtual Network Computing (VNC), 2-17

Visigenics CORBA

 ポート番号, D-5

W

Web Client

 アップグレード, 3-36

Windows

 シングルボックス・インストール, 2-49

X

X サーバー, 2-17

あ

アカウントおよびグループ

UNIX, 2-20

アップグレード

Oracle Calendar, 3-26

アプリケーション・システム, 3-29

Oracle Collaboration Suite

Middle-Tier, 3-12

Oracle Email

Information Storage, 3-30

Oracle Ultra Search, 3-32

Oracle Voicemail & Fax, 3-34

Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1, 3-6

アップグレード前のタスク

Oracle Calendar, 3-13

Oracle Email, 3-14

Oracle Ultra Search, 3-14

Oracle Voicemail & Fax, 3-15

Oracle9iAS Wireless, 3-15

アップグレード後のタスク

Oracle Email, 3-30

Oracle Files, 3-31

アップグレード前のタスク

Oracle Calendar, 3-13

Oracle Email, 3-14

Oracle Ultra Search, 3-14

Oracle Voicemail & Fax, 3-15

Oracle9iAS Wireless, 3-15

アンマウント・コマンド

HP, 5-6

Linux, 5-8

Solaris, 5-4

必要な権限, 5-2

い

インスタンス名, B-2, B-4

インストール

CD-ROM, 5-2

Oracle Calendar

Desktop Client for Linux, G-19

Desktop Client for Macintosh, G-21

Desktop Client for Solaris, G-25

Desktop Client for Windows, G-16

Oracle Calendar Sync

Palm for Macintosh, G-32

Palm for Windows, G-27

Pocket PC, G-29

Oracle Collaboration Suite

Middle-Tier, 6-8

Oracle Collaboration Suite Information Storage データベース, 6-4

Oracle Connector for Outlook, G-4

Oracle FileSync

Windows, G-34

Oracle Voicemail & Fax, 1-7

Oracle Web Conferencing, 6-12

Oracle9iAS Infrastructure, 6-2

Sun Java Access Bridge, A-1

シングルボックス

Linux, 2-49

Windows, 2-49

ハード・ドライブ, 5-8

非対話型インストールおよび Oracle Net, 8-10

非対話型のエラー処理, 8-10

非対話型ログ・ファイル, 8-7, 8-9

マウント・オプション, 5-2

リモート・コンピュータ, 2-18

ログ・ファイルの場所, 5-10

インストール・エラー, C-3

インストール後のタスク

その他のドキュメント, 6-4, 6-19

インストール・チェックリスト

Oracle Collaboration Suite, B-4

Oracle Collaboration Suite Information Storage, B-3

Oracle9iAS Infrastructure, B-2

インストールの順序

Oracle Collaboration Suite, 1-3

Oracle9iAS Infrastructure, 1-2

インストール前

Real Application Clusters タスク (Linux), 2-27

UNIX グループの作成, 2-20

環境変数 DISPLAY, 2-17

インストール前のタスク

Oracle Connector for Outlook, G-4

Real Application Clusters, 2-22

え

エラー

- インストール, C-3

お

オブジェクト・データ, 12-8

オペレーティング・システム

- 追加の要件, 2-13

- パッチ, 2-7, 2-8

- 要件, 2-6

オンライン・ドキュメント

- オンライン・フォーマット, 2-15

- ディスク領域, 2-15

- 要件, 2-15

か

カーネル・パラメータ

- HP, 2-30, 2-37, 2-44

- Linux, 2-32, 2-39, 2-46

- Solaris, 2-28, 2-35, 2-42

概要

- Oracle Universal Installer, 5-9

確認

- Cluster Membership Monitor, 2-26

- データベース接続, 12-13, 12-30

環境変数 DISPLAY, 2-17

- Bourne/Korn シェル, 2-18

- C シェル, 2-18

- 設定, 2-17

き

起動

- Oracle Universal Installer, 5-12

共存

- Oracle Calendar, 3-26

く

グループ情報, 12-8

け

権限が付与されたグループ, 2-21

言語サポート, 2-14

こ

高可用性

- Oracle9iAS Wireless, 4-12

構成

- Oracle Internet Directory, 6-4

- Oracle9iAS Infrastructure, 6-4

- Oracle9iAS Single Sign-On, 6-4

- Sun Java Access Bridge, A-1

構成チェックリスト

- Oracle Files, B-5

構成前

- チェックリスト, 11-2

構成ログ・ファイル

- Oracle Files, 12-10

コンポーネントのポート番号, D-2

さ

サーバー

- 障害, C-5

サイレント・インストール, 8-2

- Oracle Calendar

- Desktop Client for Linux, G-20

- Desktop Client for Solaris, G-25

- Desktop Client for Windows, G-16

- Oracle Calendar desktop client for Linux, G-20

- Oracle Connector for Outlook, G-4

索引, 12-8

索引付けされたメディア表領域, 12-8

索引付けされていないメディア表領域, 12-8

削除

- Oracle Calendar

- Desktop Client for Linux, G-20

- Desktop Client for Macintosh, G-22

- Desktop Client for Solaris, G-25

- Desktop Client for Windows, G-18

- Oracle Calendar Sync

- Palm for Macintosh, G-34

- Palm for Windows, G-27

- Pocket PC, G-30

- Oracle Collaboration Suite, 9-3

- Oracle Connector for Outlook, G-14
- Oracle Email, 9-2
- Oracle FileSync
 - Windows, G-35
- 作成
 - UNIX グループ名, 2-21
 - UNIX のアカウントおよびグループ, 2-20
 - 新規の Oracle Files ドメイン, 12-11
- サポート
 - オペレーティング・システム, 2-6
 - 言語, 2-14

し

- システム要件
 - Oracle Calendar
 - Desktop Client for Linux, G-19
 - Desktop Client for Macintosh, G-20
 - Desktop Client for Solaris, G-24
 - Desktop Client for Windows, G-15
 - Oracle Calendar Sync
 - Palm for Macintosh, G-30
 - Palm for Windows, G-26
 - Pocket PC, G-28
 - Oracle Collaboration Suite, 2-2
 - Oracle Connector for Outlook, G-2
- 実行
 - Database Configuration Assistant, 6-7
 - Oracle Net Configuration Assistant, 6-6
- 指定
 - レスポンス・ファイル, 8-6
- 情報
 - グループ, 12-8
 - ユーザー, 12-8
- シングルボックス
 - インストール, 2-49
- シンボリック・リンク
 - HP-UX, 2-18

す

- スクリプト
 - cal_mac_OS9_904x.hqx, G-21
 - catalog.sh, 3-10
 - catldap.sql, 12-46
 - gui_install.sh, G-25
 - ifswfsetup, 12-49

- install_backend_es_mail.sql, 11-9
- install_backend_sys.sql, 11-9
- ocasua.sh, F-21
- ocsua.sh, 3-20
- ptlasst.csh, 3-3
- root.sh, 6-5, 8-3, 8-7
- ssl_osso.sh
 - 作成, 6-18
 - 実行, 6-19
- text_install.sh, G-25
- umconfig.bat, 11-9
- umconfig.sh, 11-9
- uminfra_install.sh, 7-6
- スワップ領域, 2-2

せ

- 設定
 - 環境変数 (Bourne/Korn シェル), 2-17
 - 環境変数 (C シェル), 2-17

た

- 多言語サポート, 2-14
 - Oracle Calendar, 2-14

て

- ディスク領域
 - オンライン・ドキュメント, 2-15
 - 要件, 2-3
- データ
 - LOB, 12-8
 - Oracle9i, 12-8
 - Oracle9i Text, 12-8
 - オブジェクト, 12-8
 - テキスト, 12-8
 - メディア, 12-8
- データベース
 - Configuration Assistant, 6-7
 - オペレータ・グループ, 2-21
 - カーソル, C-8
 - 管理者グループ, 2-21
 - キャラクタ・セット, B-3
 - 実行していない, C-5
 - 接続, 12-13, 12-30
 - テキスト・データ, 12-8

と

問合せ返送制限

編集, 12-52

登録

Oracle Email を Oracle Internet Directory へ, 6-6

ドキュメント

Oracle Collaboration Suite ライブラリ, 1-7

その他, 6-4, 6-19

トラブルシューティング

Oracle Calendar Sync

Palm for Macintosh, G-33

Oracle Collaboration Suite

Web Client, C-2

Oracle Files, C-3

Real Application Clusters, C-11

インストール・エラー, C-3

実行していないデータベース, C-5

実行していないリスナー, C-5

レスポンス・ファイル, 8-9

に

認証ソフトウェア要件, 2-15

は

ハードウェア要件

CPU, 2-2

ディスク領域, 2-3

配置

Oracle Calendar, 4-4

Oracle Collaboration Suite Information Storage, 4-2

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier, 4-3

Oracle Email, 4-6

Oracle Files, 4-6

Oracle Ultra Search, 4-7

Oracle Voicemail & Fax, 4-10

Oracle Web Conferencing, 4-11

Oracle Wireless & Voice, 4-12

配置についての推奨事項, 4-15

パッチ

2513540, 3-7

2761332, 3-11

Real Application Clusters, 2-11

ダウンロード・サイト, 2-8

ひ

非対話型インストール

Oracle Files Configuration Assistant, 12-34

エラー処理, 8-9

概要, 8-2, 8-3

要件, 8-3

必須

HP パッチ, 2-10, 2-11

Solaris パッチ, 2-9

表領域

Oracle9i *interMedia* メディア, 12-8

Oracle9i Text キー・マップ, 12-8

Oracle9i Text 索引, 12-8

Oracle9i Text データ, 12-8

索引付けされたメディア, 12-8

索引付けされていないメディア, 12-8

ブライマリ, 12-8

ふ

ファイル

cal_win_904x.exe, G-16

con_outlook_904x.exe, G-4

data-sources.xml, 3-32, 13-2

emailaci.ldif, 3-10

emtab, 8-4

httpd.conf, 6-19, 10-6

ifsConfigOut.log, C-3

ifswfsetup.properties, 12-49

ifswfuploadlang.log, 12-49

modDirectiveMS.xsd, 3-6

mod_fastcgi.so, 3-6

mod_osso.conf, 6-19

mod_osso_https.conf, 6-19

mod_osso.so, 3-6

ocad.conf, F-22

ocas.conf, F-14, F-22

ocsua.properties, 3-17

ocsua.sh, 3-20

ocsua.xml, 3-17

ocwc.conf, F-22

opca.jar, 3-6

Oracle9iAS Portal patch

recompile.sql, 3-7

secapi.pkb, 3-7

secapi.pks, 3-7

- secapip.pkb, 3-7
- secapip.pks, 3-7
- secoid.pkb, 3-7
- secoid.pks, 3-7
- secrmoid.sql, 3-7
- ssooidd.sql, 3-7
- oraInst.loc, 8-4
- oratab, 8-4
- portalSML.jar, 3-6
- portlist.ini, 2-15
- ptlasst.csh, 3-3
- repository.jar, 3-6
- sc_vsto.cfg, 7-8
 - 更新, 7-8
- silent.properties, G-20, G-25
- slapd.conf, F-23
- targets.xml, 3-15
- unison.ini, F-14
- webcal.ini, F-21, F-22
- webclient.properties, 6-15
- インストール・ログ, 8-7
- 非対話型インストール・ログ, 8-9
- プライマリ表領域, 12-8

ほ

ポートの割当て, 2-15

ポート番号

OC4J, D-3

AJP, D-3

HTTP Listener, D-4

RMI, D-4

Oracle Calendar, D-6

Oracle Email, D-5

IMAP4, D-5

IMAP4-SSL, D-5

NNTP, D-5

NNTP-SSL, D-5

POP3, D-5

POP3-SSL, D-5

SMTP, D-5

Oracle Enterprise Manager, D-5

Intelligent Agent, D-5

管理, D-5

Oracle Files, D-6

AFP, D-6

FTP, D-6

HTTP ノード, D-6

LDAP-SSL, D-6

LDAP-非 SSL, D-6

NFS, D-6

SMB, D-6

ドメイン・コントローラ, D-6

メイン・ノード, D-6

Oracle HTTP Server, D-4

Java Object Cache, D-4

JServ Servlet, D-4

Oracle Notification Service のリクエスト・ポート, D-4

Oracle Notification Service のリモート・ポート, D-4

Oracle Notification Service のレポート・ポート, D-4

Oracle Notification Service のローカル・ポート, D-4

SSL, D-4

非 SSL, D-4

Oracle Internet Directory, D-6

SSL, D-6

非 SSL, D-6

Oracle Management Server, D-6

Oracle Wireless & Voice, D-5

Oracle Workflow, D-6

TNS, D-6

Oracle9iAS Clickstream

Collector Agent, D-3

Collector Server, D-3

Execution Engine, D-3

Intelligence, D-3

Intelligence Viewer, D-3

Runtime Administrator, D-3

Oracle9iAS Containers for J2EE

Java Message Service (JMS), D-4

Oracle9iAS Forms Services, D-4

Oracle9iAS Portal, D-4

Oracle9iAS Reports Services, D-5

Visigenics CORBA, D-5

Oracle9iAS Single Sign-On, D-4

Oracle9iAS Web Cache, D-5

HTTP Listen - SSL, D-5

HTTP Listen - 非 SSL, D-5

管理, D-5

SQL*Net, D-5

コンポーネントの番号, D-2

- コンポーネント別, D-3
- デフォルトの番号, 12-18
- デフォルトの変更, 12-18
- ポート番号別, D-7
- ポート番号ファイル, 2-15, D-2
- ホスト名ファイルの構成, 2-19

ま

- マウント・オプション
 - インストール, 5-2
- マウント・コマンド
 - HP, 5-5
 - Linux, 5-6
 - Solaris, 5-2, 5-4
 - 必要な権限, 5-2
- マウント・ポイント
 - 各インストール, 5-13
 - サーバー, 12-18

め

- メタデータ, 12-8
- メディア・データ, 12-8
- メモリー要件, 2-2

も

- 問題
 - インストール, C-3

ゆ

- ユーザー情報, 12-8

よ

- 要件
 - CPU, 2-2
 - Oracle Calendar
 - Desktop Client for Linux, G-19
 - Desktop Client for Macintosh, G-20
 - Desktop Client for Solaris, G-24
 - Desktop Client for Windows, G-15
 - Oracle Calendar Sync
 - Palm for Macintosh, G-30
 - Palm for Windows, G-26

- Pocket PC, G-28
- Oracle Connector for Outlook, G-2
- Oracle Web Conferencing, 2-13
 - /var/tmp, 2-2
- オペレーティング・システム, 2-6
- オンライン・ドキュメント, 2-15
- クラスタの相互接続, 2-3
- スワップ領域, 2-2
- 追加, 2-13
- ディスク領域, 2-3
- 認証ソフトウェア, 2-15
- メモリー, 2-2

り

- リスナー
 - Information Store
 - 確認, 11-12
 - 起動, 11-12
 - Middle-Tier
 - 確認, 11-12
 - 起動, 11-12
 - 実行していない, C-5
- 領域要件
 - /var/tmp, 2-2
 - スワップ, 2-2
- リリース・ノート, 2-16

れ

- レスポンス・ファイル, 8-2, 8-5
 - 指定, 8-6

ろ

- ログ・ファイル
 - Oracle Files, 12-10

